
CGノベル
人妻洗脳
アナル拡張記
～彼女の肛門が閉じなくなるまで～


俺は３０代独身のフリーター。
社会の底辺で必死にもがきながら生活している。
安めのアパートで一人暮らし。孤独に飯を食う。
彼女も当然いない。
「ふわぁ～…もう昼か…
せっかくの休日が…
あー腹減ったな…」
冷蔵庫の扉を開くが中身は空っぽ。
レンチン食品も品切れだ。
俺はため息を吐きながら
キッチン奥の棚を覗き込んだ。
「あ、カップ麺も切らしてるわ。
はぁ～まじかよ…
買いに行くかーダリー」
最後の望みだったカップ麺も切らしていたので、
買出しに行くことにした。
俺は中身のほとんど無い財布を手に取り、
近くのスーパーへ向かった。


スーパーに入ると
俺に気づいたひとりの女性が
声をかけてきた。
「あ、こんにちは！」
「え、あ、こんにちは」
女性は俺に一言挨拶すると
買い物に戻っていった。
俺はその後ろ姿をしばらく眺めていた。
（……）
COOL FRESH


同じアパートに住む新婚夫婦の奥さんだ。
名前はたしか…郁美さんだったか。
将来の子育て費用を考えて
安いアパートに引っ越してきたんだそうだ。
(しっかし、あの奥さん…
エロい身体してるよな)
(服の上からでもわかる巨乳だし…
あの身体を良いようにできる
旦那が羨ましいぜ)
俺はカップ麺と缶ビールをカゴに突っ込み、
会計を済ませ帰路についた。


帰り道。
ふと帰路の途中にある
神社の前で足を止めた。
いつもは気にも留めずに
通り過ぎるのだが、
今日は不思議と立ち寄りたくなった。
井浚神社（いざらいじんじゃ）。
尻神様を祀った神社らしく、
痔や便秘を治したい人が
参拝に来るようだ。
「なんか気になるんだよな。
ま、たまにはいいか」



パンパン！
俺は賽銭箱に小銭を投げ入れ手を叩くと
小声で尻神様に願望を伝えた。
「郁美さんのようなエロエロボディの彼女ができて、
夜通しアナルセックスできますように！」
我ながらセンスのある祈願だ。
誰かに聞かれたらドン引きものだろう。
俺は満足してそのまま帰宅した。


翌日、目を覚ますと
身体に違和感を覚えた。
(ん？なんだ、なにか変だ)
身体が熱い気がする。
風邪でもひいたか？
いや…でも頭は冴えている。
調子がすこぶる良い。
「昨日食ったカップ麺のせいか？
いや…んなわけないか。
まぁ調子良いからいいけど…」
どこか身体に違和感を感じながらも
俺は朝のゴミ出しのために部屋を出た。


「おはようございます」
「あ、おはよう…ございます」
郁美さんだ。二日連続で会えるなんてラッキーだな。今日も朝から妄想が捗るぜ。
「あー郁美さんのでか尻に顔埋めてぇ」
「…え？今なんて…？」
「え…あ！い、いえ！な、なんでもないです！」


やべぇぇ！願望が口に出ちまった！
絶対聞かれたよな…？
あー終わったわ…
人生終了だ。
俺は恐る恐る
郁美さんの顔色を伺った。
しかし、そこには想定外の光景があった。
「あの…
埋めたいんですよね…」
「…？」
郁美さんの様子がおかしい。
額に汗をかき、
どこか蕩けた表情をしている。


「どうかされたんですか？」
「え…だってあなたが…お尻に顔を埋めたいと言うから…」
「…え？」
「いますぐ…ですよね？」
「いますぐ…
……は？」
郁美さんは
何を言っているんだ？
俺が言ったことを本気にしてる？
いやいやいやいや…まさか。
「私の部屋でも良いですか？
さすがに路上の真ん中では…」
「……は、はぁ…」
俺は混乱したまま
郁美さんについていった。


俺は郁美さんの部屋にあがった。絶賛混乱中だ。一体どうなってるんだ。
「あの……旦那さんは？」
「夫はさきほど仕事へ行きました…今は私だけです」
「あの…さっき言ってたのって…マジで言ってます？俺の言ったこと…」
「え？…だって…あなたの言ったことは…絶対ですから……」
「俺の言ったことが…絶対……？それって…俺の言うこと…なんでも聞くってことですか？」
「はい……」


俺はなんとなく状況が掴めてきた。
なんだか知らないが…
郁美さんは俺の命令を聞いてくれるらしい。
ならば…。
「本当に俺の言うこと
なんでも聞いてくれますか?」
「え、はい…」
「じゃあ…まずは服を脱いで
俺におっぱい見せてくれます?」
「え、おっぱいですか…
は…はい……」


郁美さんは服を脱ぎ、ブラジャーを外して
たわわに実ったおっぱいを曝け出した。
『…はい…』
「…おいおい…
まじかよ……」
半信半疑だったことが事実に変わった。
これはマジだ。マジもんのサプライズだ。
人妻が他所の男の前で
おっぱい丸出しにしやがった。
「想像以上の爆乳っすね。
乳首もビンビンじゃないか…
やべぇ…見てるだけで勃起しちまう」
「うう…恥ずかしいです…
じろじろ見ないでください…」


「寝室に案内しろ……」
「え……はい……
こちらです」
新婚夫妻の寝室。
俺の妄想が掻き立てられる。
「郁美さんは旦那と
どのくらいエッチしてるの？」
「え……それは……」
「……月に一回くらい……です……」
郁美さんはもぞもぞと
恥ずかしそうに腰を振りながら
小声で答えた。



「え～こんなエロエロボディを
月1でしか楽しまないの？
何考えてんだ」
「うう……」
「俺なら毎日
郁美さんとエッチできるよ。
見てよ、郁美さん」
俺は服を脱いで
郁美さんに裸体を見せつけた。
「あ…あ…おちんちん…おっきい…」
「今から郁美さんを…いや郁美を…
俺のちんぽで犯してやるよ」
俺は我慢できずに郁美を押し倒した。


俺は郁美の腰を掴むとぐるんと上に持ち上げた。
「ひゃっ…！」
「良い眺めだぞぉ。ストッキングの肌ざわりも最高だな…笑」
「は、恥ずかしいです…離してください…」
「くんくん…おお…蒸れた汗の匂いだ…濃いメスの匂いがするぞ」
ぷる



「くんくんしないで…汗かいてるんです…」
「だから良いんだよ？ストッキングに染みついた熟れた匂い！」
俺は鼻を鳴らしながら郁美の股間を遠慮なく嗅ぎ続ける。
モワ
「はぁ…んんぁ…太ももスリスリだめぇ…」
「この感触が好きなんでね。す～くんくん…あぁ～エロすぎだろ…」



「お尻に顔埋めていいって言ってたよね？」
「え…は、はい……でも恥ずかしいですぅ…」
命令には従うが羞恥心は残るのか。なかなかセンスあるサプライズだな。
「んんぁ…はぁ…鼻ぐりぐりだめぇ…」
「夢みたいだよ。郁美の股間を遠慮なく嗅げるなんて。あぁ～すぅ～はぁ～」


「眼福とはこのことだな。でか尻最高すぎる」
「はぁん…んんぁ」
「すう～はぁ～すううううう」
俺は郁美の太ももをすりすりしながら尻に鼻の先を押し当て息を吸い続けた。
モワ
ぷる
「さーて、生パンティーも見せてもらおうかな…」
「ふえ…？」
ぐい


俺はストッキングを両手で掴むと
左右にビリビリと引き裂いた。
「んんあっ…！破っちゃやだめ…」
「おおお…生パンティーのお目見えだぞお〜」
ぐいっ
あっ
「パンツ見ないでぇ…」
「白パンティーか！俺の大好物だよ。汚しがいがあるよな〜」
ぶる


「んんぁ…うう…」
「太ももマッサージいいだろう？
そろそろ
来るんじゃないか？笑」
郁美が腰を
もぞもぞし始めた。
モミ
ぷる
「マッサージ…止めて…
お願い…出ちゃいます……」
「何が出るか言ってよ」
「…うう…お、おならですぅ…」


「そのためのマッサージだよ。
おら！おならしてみろ！」
「いやっだめぇ…
出ちゃううう…っ」
郁美のお尻から
ぷすぅ～と音が出た。
そして、俺の鼻孔を
強烈な匂いが襲う。
ぐぐぃ
モミ
プスーッ
「だめぇ…聞かないで…」
「うお…これが郁美の
おならの匂いか～
くんくん…ああ～臭いぞお！」
ぶる



「嗅がないでぇ…うう…」
「郁美のおならは臭いな〜
あぁ〜くんくん…あぁ〜
やべぇ…興奮する」
女の屁の匂いを
自由に嗅げるなんて
臭いフェチの俺には
夢のようだ。
モワ
ぷる
「素晴らしいな…笑」
「マッサージ…だめ…
力抜けちゃううう…」


「くんくん…ん？なんだかツンとした匂いもするぞ」
「えっ…うう…」
郁美の白パンティーに黄色い染みが薄っすらでき始めた。
「おいおい…マッサージ気持ちよくておしっこ漏れたのか？笑」
「ち、違います…これは…その…」


「しょうがねぇな〜
汚ったないパンティー
脱がしてやるよ笑」
俺は郁美から
ストッキングと
白パンティーを剥いだ。
「あっ…いやぁ…
恥ずかしいい…」
モワ
ぶる
「おぉ…これが…
夢にまで見た…郁美さんの
…生まんこと生アナル!!」


「おお…そしてこれが生おなら…おっおお」
郁美のお尻から俺の顔に熱風が飛んでくる。
「う…だめぇ…恥ずかしいですぅ…」
ぐぃ
「あ〜なんて卑猥なんだ。前戯だけでちんぽイッちまいそうだよ笑」
ぷる


「あぁ〜すぅ〜くんくん。
いつまでも嗅いでられるな」
「んんっ…はぁ…」
俺は郁美のケツ穴に
鼻を擦り付けながら
漏れ出たおならを
吸い切った。
「次は郁美のおっぱいを
楽しませてもらおうか」
「…おっぱい…ですか…?」



郁美は俺の言ったとおりに
俺の足元にしゃがんだ。
「うひょお〜！
やっぱ乳でかすぎだろ」
「そんな…
で、でかい…
のでしょうか…」
「…いやいや
規格外でしょ…
巨乳てか超乳レベル笑」
「うう……」


「さてと…感触は…っと♪」
俺はたわわに実った郁美の乳房を
両の手で鷲掴んだ。
「ひやっ……!?急につ……い」
「やっぱ!超柔らけぇえ笑
それにすげぇ弾力」
「いやっ…んぁ」



俺の手が喜んでいる。
まさに天国のような感覚。
「乳輪もでけぇ…
俺の手くらいあるよ」
「う、強いです…
んんっ…」
はー
「…うはは
こんな胸揉んだことないからさ。
加減がわかんねぇわ笑」
「乱暴にしないで……」


「じゃあそろそろ楽しませてもらおうか」
郁美の巨大な胸の谷間に俺の勃起ちんぽが狙いを定めた。
「え…何するんですか？」
「そりゃ～パイズリでしょ」
「パイ…ズリ…？それなんですか…？」
ぶる


「パイズリはこうするんだよっ！」
俺は郁美の肩を掴むとちんぽを谷間に突っ込んだ。
「ひやっ！？」
あっ♡
はーーー
「うおおおおおおお！やべぇぇ…なんだこの感触！」
「おっぱい…あぁぁあああ」


「あ〜勝手に腰が動いちまうぜ」
俺はあまりの気持ちよさに腰を動かしはじめた。
「んんっ…！擦れて…熱いです…」
「まさに乳まんこだ…ちんぽ包み込まれて最高お」
「乳…まん…？あの…よくわからないです…」



「郁美のおっぱいがまんこみたいってことさ笑」
俺はさらに腰を振った。
「…っ！激しっ…あっ！」
はー
「すっげぇえ…遠慮なくおっぱいを楽しめるなんて夢みたいだぜ」
「あっ…あぁあぁ…ひぃ」


「汗で蒸れた谷間がぬるぬるして最高だ」
「あっ…熱い…い…もう…止まってぇ…」
「んん…っ！」
「こんな気持ちいいの途中でやめられねぇよ」
俺は腰をパンパンと郁美の胸に打ち付けていく。



「あ～そろそろ出るっ」
「…え？え？」
俺のちんぽが郁美の谷間で膨れていく。
はーー
「乳まんこに中出しだ笑
うおおおおおお！」
「え？え？…ふえ！？」


「あああ射精るっ！」
「おっぱい…んんっあああああ」
郁美のおっぱいに俺の精液が吐き出されていく。


「ふぅ〜出ちまった」
「…熱いっ…これって……精液？」
「そうだよ。郁美のおっぱいが気持ちよすぎて射精しちゃったんだ〜♪」
「おっぱいに…射精…？」


モワ
「あれっ？もしかしてパイズリ初めてなの？」
「こ、こんなの初めてです…夫はこんなことしません！」
ぷる
あっ
「え～もったいねぇ！俺ならいつでも突っ込んでたいのに笑」
「おっぱいがどろどろして…気持ち悪い…」
たぷっ
!!


俺は郁美の乳まんこから
ちんぽを引き抜いた。
「……うう……」
「すっげぇ…郁美のおっぱいが
俺の精液でどろどろだ」
はー…
「べたべたして…いやぁ…」
「やべぇ…こんなの見たら
まじで勃起おさまんねぇわ」


「さてと…そろそろ本番といくか」
「本…番？」
「セックスだ！郁美のまんこを俺のちんぽで犯す！」
その言葉に郁美はそわそわし始めた。
「え…あの…私には夫がいるんです…」
「知ってるよ。でも俺の言うことならなんでも聞いてくれるんでしょ？ほら、ベッドの上で自分でまんこを拡げろ」
「……えと……は、はい」



郁美は俺の指示通り、自ら股間を曝け出した。
「いいぞお～郁美のまんこもケツ穴も丸見えだ」
「恥ずかしいから……見ないでぇ…」
ぶる
「あ～ポーズエロっ…オスを待つ発情したメスって感じ笑」
「んんっぅぅ…」


「あ～わくわくするぜ」
俺はちんぽを
郁美のまんこにロックオンした。
「あの…えと…
ゴムはつけてください…」
「ゴム？
持ってないよ？」
「付けないと…妊娠しちゃう…」
ぐい
ぬる
モワ



俺は躊躇いもせず一気に腰を下ろした。
「やっぱ！生っしょっ！」
ズポッ
「だめぇぇぇ！」


「うおおお…これが…郁美のまんこ…！」
「だめっ…！生はいやぁ…抜いて…っ！」
ぐい
「俺は生ちんぽで郁美を犯したいんだ！いいよね？いくぞ！」
「うう…でもお…あぁああ！」
俺は本能のままに腰を振りはじめた。


「うおお…おらおら！すげぇ…ちんぽ溶けちまいそうだ」
「だめぇええ…深っ…んんんあああああ！」
あっ
「この体位すげぇな…まんこの奥までちんぽが挿るぜ」
「動かない…でぇえ…」


「はぁ！はぁ！郁美いいい！郁美いいいい！」
「あぁんっ！だめぇえ…激しっ…！」
「ちんぽにヒダヒダが絡みついて腰止まんねぇええ！」
「あぁあっ…あぁああ！」
夫婦の寝室に卑猥な音と喘ぎ声が響く。



俺はさらにピストンを加速させた。
「うりゃうりゃ！うおおお…気持ち～」
「あぁんんぁ！そんなっ…激しすぎるぅう」
あっ
「旦那はこんな激しいセックスしてくれないだろう？」
「夫とは…こんなのしません…っ…」


「あ～そろそろ限界かも…
中に出すぞ～郁美！」
「ふぇっ…な、中！
え、でも、中って…え…」
あぁ
「俺の子種汁を
郁美の子宮に注いであげるよ」
「ま、待って…あぁぁ…あぁぁぁ！」
俺のちんぽは限界に達した。

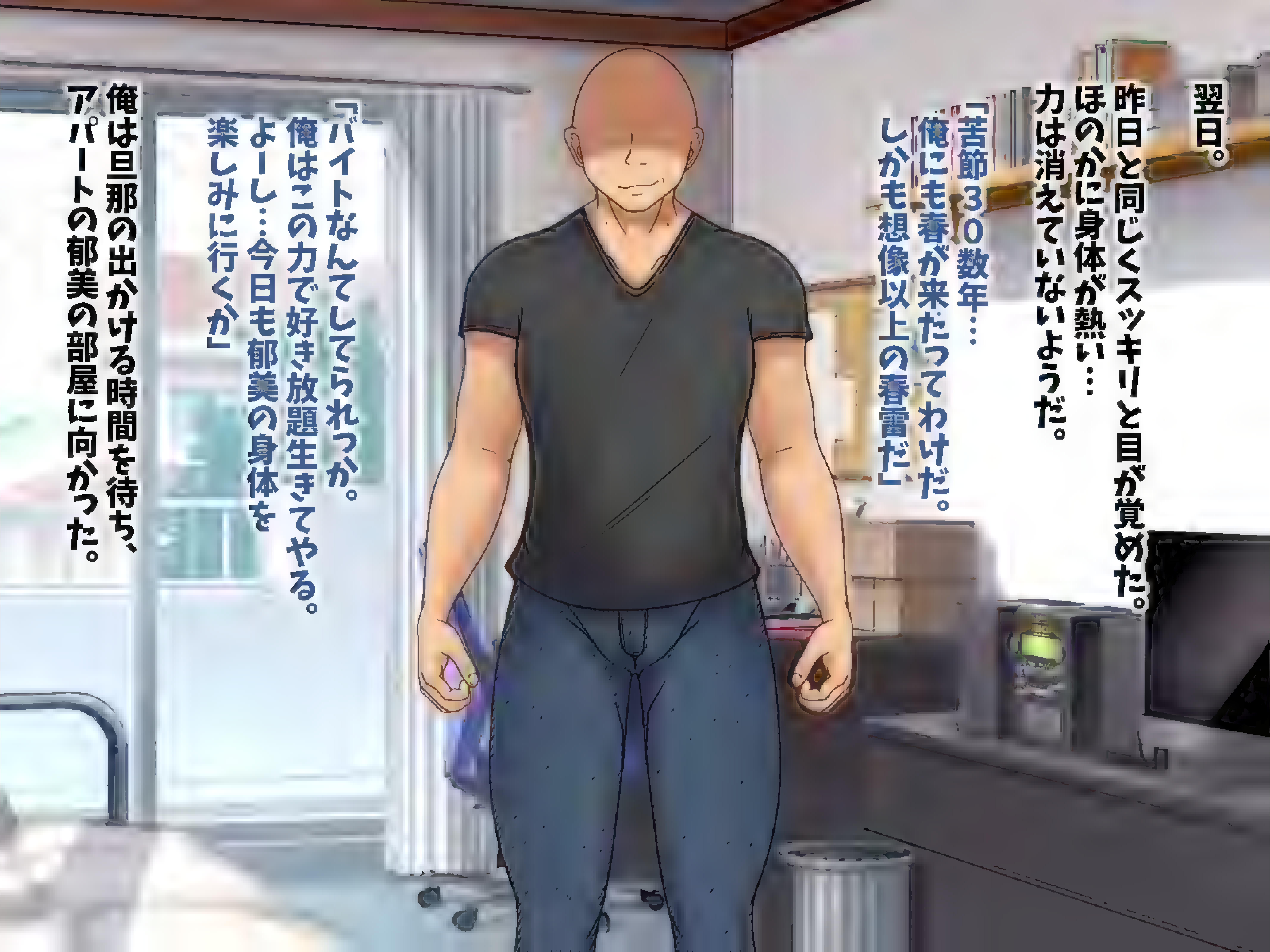

「射精るぞお！」
「んぐあああああ！」


「ふぅ～奥にいっぱい出た」
「あっ…あぁ…お腹が熱いぃ…」
「中出しなんて初めてだ…マジで気持ちいいんだな笑」
「あぁあ…うう…」
俺は精液で満たされたまんこからちんぽをゆっくりと引き抜いた。
たぷ


ちんぽの引き抜かれたまんこから
ぶぼっと精液が逆流した。
「うは～我ながらすげぇ出たな。
まんこからめっちゃ逆流してる笑」
「はぁ…はぁ…垂れちゃうう…」
「すっげぇ…ほら、
もっとまんこに力入れてみてよ」
「え…は、はい…ふんぐううう」
ドロ


郁美のケツ穴からぶぶっと音がした。
「やっ…やだぁ…力むと…おならが…」
「やべぇ…下品すぎだろ笑
この絵面だけで
１０発はイケそうだわ」
「もう…だめ……
力…入らないよぉ…」
「くくく…
こりゃあ…良いぜぇ」


「ふぅ～旦那はいつもいつ帰ってくるの？」
「え…夫ですか？いつも夕方には帰宅します」
「夕方？早いな～これから毎日朝から夜まで郁美を犯したかったのに」
「ま、毎日……！？」
「まぁいっか。とりあえず今日は夕方までセックスするよ？いいよね？」
「……え…は、はい」
そうして俺は夕方まで郁美を犯し続けた。


翌日。
昨日と同じくスッキリと目が覚めた。
ほのかに身体が熱い…
力は消えていないようだ。
「苦節30数年…
俺にも春が来たってわけだ。
しかも想像以上の春雷だ」
「バイトなんてしてられっか。
俺はこの力で好き放題生きてやる。
よーし…今日も郁美の身体を
楽しみに行くか」
俺は旦那の出かける時間を待ち、
アパートの郁美の部屋に向かった。


インターホンを押すと郁美が出てきた。
「お、いたいた」
「こんにちは…何かご用でしょうか？」
「旦那はもう仕事行ったか？じゃあ上がらせてもらうわ」
「はい？あの…失礼ですけど何言ってるんですか？」
「え…？いや…昨日のこと忘れたの？」
「……昨日？何のことですか？」


「はぁ？俺とセックスしたじゃん」
「セッ…！？な…あなた何なんですか！」
（どういうことだ？まさか…記憶がないのか？）
「出てってください…出ていかないと通報しますよ」
「そんな…郁美…」
「ひっ…なんで…呼び捨てなのよ…近づかないで…いやっ…」
俺は動揺しつつも、脳に浮かんだ言葉を発した。


「郁美とセックスがしたい！」
「え…したい…？
セックスが…したいんですか…」
俺が願望を言葉にすると
郁美の様子が変化した。
「…そうだ…俺のちんぽで
郁美を犯しまくりたいんだ」
「いま…ですよね？」
「そうだ、いいだろ？」
「…は、はい…
したいと言うなら……」
「…よーし…ふぅ…」
洗脳が成功したようだ。
俺は安堵のため息を吐いた。


寝室に入ると俺と郁美は裸になった。
「ビビったぜぇ…まさか洗脳中の記憶が無くなっているとは」
「今日も…中出しですか…？」
「ん？なんだ…覚えてんじゃん」
(洗脳中とは意識が違うのか？よくわかんねぇな…でも…これって遊べそうじゃね？)
「俺は中出しの気持ちよさを知っちまったからな。郁美のまんこには俺の精液を注ぎまくってやるよ」
「……うう…そ、そんな…」


あっ♡
俺は郁美の尻にちんぽを押し付けた。
はーっ
ぐいっ
「まずはバックから犯してやるよ！おら、腋も見せろ！」
「やっ…恥ずかしい…っ」
はーっ
ぷる
「腋からメスの匂いがぷんぷん漂ってくるな笑」
「嗅がないで…え…」
モワ


「挿れるぞ！後ろから突っ込むぞ！」
「あぁ…んんっ…！」
俺は尻に押し付けたちんぽをするりと下に下ろし、そのまままんこへ挿入した。
「あぁ～入口良い～」
「はぁんぐぅう…きて…るぅう…」


俺は亀頭がまんこに包まれると一気に竿を奥まで突っ込んだ。
「おおらっ！」
「きゃっっ…！んああ…深いいいい！」
ズボッ
「ああ〜一気に奥まで挿れるのまじで癖になる気持ちよさ」
「ああ…あああ…」


「おらおら！まんこ締めろ！」
「ひゃい…あぁっ…熱いよぉ…」
「デカケツと腋を拝みながらセックスするのは最高だな」
「恥ずかしいこと…言わないでぇ…あぁんあぁ」



郁美の尻に
俺の腰が当たり
パンパンと
卑猥な音を立てる。
あっ♡
はーっ
ぐぃ
「奥まで挿れると
亀頭が子宮に当たるな～
この刺激たまんねぇ」
「それだめぇぇぇ」
はーっ
ズボッ
「気を抜くと
すぐイっちまいそうだ」
「はぁ…はぁ……」


「よーし…もっと激しくだ！」
「…あっ！あぁあ…早いっ…よお」
「すっげぇ…俺のピストンで郁美のデカ乳がぶるんぶるん揺れてるわ笑」
「んぁあっ はぁ…あぁあ！」
ぶる



あっ♡
「はぁ…はぁ…そろそろ限界だ」
はーっ
はーっ
ぐいっ
「んんぁ…はぁ…あんっ…あぁぁ！」
「郁美もイキそうか？」
ズポッ
パンッ
ぶる
「えと…な、なんかきそうです…」


「じゃあ一緒にイくぞ！」
「…一緒に…イく……は、はい…っ」
「子宮にたっぷり精液注いでやるからな！俺の子種をしっかり感じろ！」
「あぁあんっ！はいっ…んんんっ！」



「イくっ！」
ぐい
「ああっ♡」
射精と同時に郁美の身体がびくんと跳ねた。


「ふぅ～まずは一発目」
「…はぁ…はぁ……お腹いっぱい……」
「やっぱ中出しは最高だな！よーし…今日はどんどんいくぞ！」
「そ、そんな……は、はい……」



俺は郁美を立たせると片足を掴み持ち上げた。
「やっ……なにするの……」
「夢にまで見た立ちかなえだ。こんな体位はスケベな女しかしてくれねぇからな」
「は、恥ずかしいです……片足上げるんですか……」
「キスしながら挿入するんだよ！舌出せ」


「旦那以外の男とのキスの味はどうだぁ?」
「こんなの…だめです…」
「ぷはぁ～郁美の唾液うめぇ笑 おら、もっと舌出せ」
「はぁ…はぁ…はい…」
ぶる


俺は郁美とキスをしながらまんこにちんぽをぶち込んだ。
「あぁぁん…っ…！」
「うおお！また違った感覚だな～笑」
「ひゃっ……倒れちゃう…」
「しっかり俺に抱きつけ！密着するほど気持ちいいぜ～」


「おらおら！腰動かすぜぇ！」
「んんあっ…！あっ…んん…♥」
「気持ちいいだろう？この体位はちんぽがクリトリスを擦って刺激するんだ」
「んんぁあ…っあああ！」


「おちんちん…っ
深い…っああ…！」
「いいぞお～
もっと感じろ！
キスも休むなよ～」
ぶる
「うちゅ…あ…
…ぷはぁ…
あんっ…ああ…」
「レロレロレロぉ
ぶちゅちゅゆううう～
ぷはぁ～こういう下品なキス
してみたかったんだよな～笑」


「あ〜イきそう！」
「はぁ…はぁ…また…出すんですか…」
「もちろん♪ほら、キスしながら中に出してあげるよ。舌出せ」
「ひゃいっ…っちゅゆぢゅんんんっ…あぁ」


「うおおおっ〜」
「んんぐっうん…っ！」
郁美のまんこからどばどばと精液が零れ落ちた。


「すっげ笑 出した瞬間 舌がびくびくして 気持ちよかったぜぇ」
「あ…ああ…熱いぃ…」
「どうだぁ？ 中出しの感覚は！」
「あ…はぁ…… こんなに…出したら 妊娠きちゃう…よぉ…」


「ひゃっ…！」
「おっと…！」
郁美と俺はベッドの上に抱き合いながら倒れ込んだ。
「はぁ…はぁ…あの…今日はこのくらいで…」
「だめだめ～旦那が帰ってくるまでセックスする予定だからね」
（…そうだ…試してみるか…）


「ほら、挿るよ！今度は郁美が上になる番だぞ」
「んぁあっ！や、休ませて…」
あっ
ぐい
「ほら、休んでないで郁美が腰を振らなきゃ笑」
「私が…腰を振る……」
ぷる


「んんぐっ…あぁあん！」
郁美は俺の命令通り
自分から腰を下ろし、
ちんぽを呑み込んだ。
「いいぞ～郁美い♪
気持ちいいぜぇ」
「はぁ…はぁ…
深い…よぉお…」
「そのまま腰を振るんだ。
ちんぽをシゴくようにな」


「んんぐ…はっ…んんぁ！」
郁美が腰を上下に動かし始めた。
「おぉおお！これは良い♪」
あっ
「気持ちいいぞ～郁美。緩急を付けて動くんだ」
「…ひゃい…あぁあ…腰が…抜けちゃう…う…」


郁美は吐息を漏らしながらピストンを続けた。
「…あぁあ…！んんあぁあ」
（よーし…アレを試してみるか）
ぷる
「郁美…催眠を解いてくれ」
「…え？…」
「催眠を解いてくれ」
（どうだ…？）
ぐいっ


「……解いて……ほしい……」
俺の命令を聞いて
郁美の様子が変わった。
（さて……どうなる？）
「……え…………え……」
「どうだ～郁美い笑」


「へ……？なに……え？……？」
郁美の動きが止まった。辺りを見回してはてなマークを浮かべている。
「おはよ、郁美…笑」
「……あなた…同じアパートの……え……」
「腰を下ろしてみてください」
「腰を…下ろす…？」


混乱している郁美はなんだかわからず腰を下ろした。
「…え…きゃっ！？なに…え？嘘…！？なによこれぇぇえ！」
「なにって…セックスだよ？」
ぶる
「…どういうこと…？ここどこ…え…私の家…？」
「郁美の家の寝室だよ～旦那との愛の巣さ…笑」


「ほら、腰止まってるよ？しょうがないな～俺が動かしてあげるよ…笑」
「んぐっ…！？やめ…動かない…で…警察…警察呼ぶわよ！」
あっ
「あぁ～気持ちいいな～郁美の穴は何度挿れても最高だなぁ～」
「…何度…挿れ…何言ってるのあなた…」


「あ〜興奮する…こんなの出るって笑」
「…出るって…やめて…離して…出さないで！」
俺は郁美の腰を激しく上下させた。
「イくよ…郁美い〜♪中に出すぞおおお」
「…いやぁあああああ！」


抵抗する郁美の膣内へ
大量の精液が注がれていく。
『うおおお！射精るぅ』
あっ
『あああ…いやあああ！』


「よーし…中出し3発目♪」
「…3…発目……？
そんな…こんなの…
意味わかんない……」
（なかなか楽しめたな。
よーし…元に戻すか）
ぶる
「…あ…ああ……」
俺は放心状態の郁美に
再度暗示をかけた。
ぐちゃ


「郁美……催眠状態に戻れ」
「戻る……はい……」
郁美は抵抗をやめ
従順な状態に戻った。
（俺の想定通り……やはり……
洗脳時とは記憶を共有していないようだ……
そして……簡単に切り替えが可能っ……！）
「こんな簡単に
寝取りレイプが体験できるとは……
マジで興奮したぜぇ……笑」
「あの……そろそろ……
夫が帰ってきます……」


「もうそんな時間か〜
あ、夫も洗脳すれば関係無いのか？
いや…でもそれはつまんないな〜」
「あの……」
「しょうがない…
じゃあ郁美…
最後にお掃除フェラしてよ」
「お掃除…フェラ……？」
「郁美のまん汁と
俺の精液でちんぽどろどろなの笑
郁美のお口で綺麗にして」
俺はベッドに座り、
郁美を足元に誘導した。


郁美はまんこから精液を垂らしながら俺のちんぽに顔を近づけた。
「郁美はフェラってしたことあるの？」
「え…あまり…詳しくはないです…」
「じゃあ俺が教えてやるよ。まずは亀頭に顔を近づけて」
「…え…は、はい…」


郁美は俺の言う通り、顔を亀頭に近づけた。
「まずは匂いを楽しむんだ。亀頭の先を嗅いでよ」
「は、はい……くんくん……げほっ……！」
「どうだい？亀頭の匂いは」
「あの……生臭いです……あと……精液の匂いがします……」


「今度はタマタマに顔を埋めて息をするんだ」
「タマタマ…ですか…はい…ふんぐぅ…」
あっ♡
「そこそこ…そこの匂いをしっかり嗅ぐんだ」
「…すぅーげほっ…酸っぱい匂いがします…ぅ」


「いいぞ～そのまま
タマタマをマッサージしながら
裏筋を舐めるんだ」
「はい…こ、こうですか……？」
「あ～良い…
そうそう…これこれ…
すっげえ良いな」
「…っぢゅ…れろ…う
はぁ…んんぁ…はぁ…」


「えらいぞ、郁美。俺のタマタマの匂いを覚えるんだぞ」
「…ひゃい…れろ…げほっ…んんっ」
俺は郁美にオスの匂いが一番濃いであろう場所を念入りに嗅がせた。
「よーし…それじゃあ郁美のお口まんこでちんぽを掃除してもらおうか」
「…お口…まんこ…？」


「まずは口の中にたっぷりと唾液を貯めるんだ」
「は、はい…っじゅる…んんぁ…はぁ…」
「そのまま亀頭を咥えろ」
「おちんちん……咥える……」
「そうだ……」


「はむっ…っぢゅぶうぶぶうんんんっ…！」
「うおお…亀頭が包み込まれて気持ちい〜」
「いいぞお…そのまま奥まで咥えていくんだ」
「…ひゃい……っんぐぅ…っぢゅりゅ」
あっ♡



おっ♡
「うおおお…やべぇ…口まんこやべぇわ…腰抜けそ…笑」
「うぢゅぶぶぶじゅるううう！」
「こっち向いて！そうそう、いやぁ～最高の眺めだわ」
「うぢゅるっちゅぱ…レロレ…っぢゅううう」
んぷっ
ぶる
ぐぃ


「一気に奥まで入れろ!」
「んぐううう!」
郁美は俺のちんぽを一気に喉奥まで呑み込んだ。
あっ♡
「うおお…っ…喉奥やばぁあ…こんなのまんこじゃん笑」
「…げほっ…うげぇ…っぢゅぼ」


おっ♡
「いいぞ～郁美。気持ちいいぞ～♪」
「ひゃい…っじゅぶ…れろれろ…っぢゅるる」
「あ～良い…その苦しそうな表情…まじでそそるわ…可愛いいぞ、郁美～」
「げほっ…っぢゅるっちゅっぢゅっぢゅる…」
んぷっ
ずる
ぐいっ


モク
「あぁ～そろそろ出ちまいそうだ…」
「うじゅぶぶ…じゅるるるうぅう」
あっ♡
「亀頭の先とかタマタマとかもっと弄ってくれ！」
「…んぐ…ひゃい…」
ぐぽぽ
ずる
ズポッ


モワ
「んんぁ…はぁ…つじゅぶぶつぢゅうつううる」
「あぁ～脳が蕩けるぜぇ…亀頭舐めまじで良いな。上手いぞお郁美！」
あっ♡
「…んんぁ…はぁ…れろ…つじゅぶるるる」
「あぁ～イきそう…喉奥に出すぞ！」


おっ♡
「奥に出すぞぉ…一気に咥えろよ」
「んんぐ…うう…っじゅっぢゅぼぼ」
ずる
「あ～出る…口まんこに出すぞ！しっかり飲めよぉ！」
んぷっ
「げほっ…んんんんぐ！」
ぐい



「うおおおおお！」
郁美の口内に
俺の精液が充満していく。
ぶる
「…ぐほおおはあっ！
げほおっ…！」
ぶしゃっ！


郁美の鼻からは
口内の精液が逆流している。
「あぁ〜すげぇ出たわ」
「げほっ…うっぷぅ…」
あっ
「逆流するほど
出ちまったか笑
全部飲んでね、郁美」
「…飲むんですか…ごほっ…」

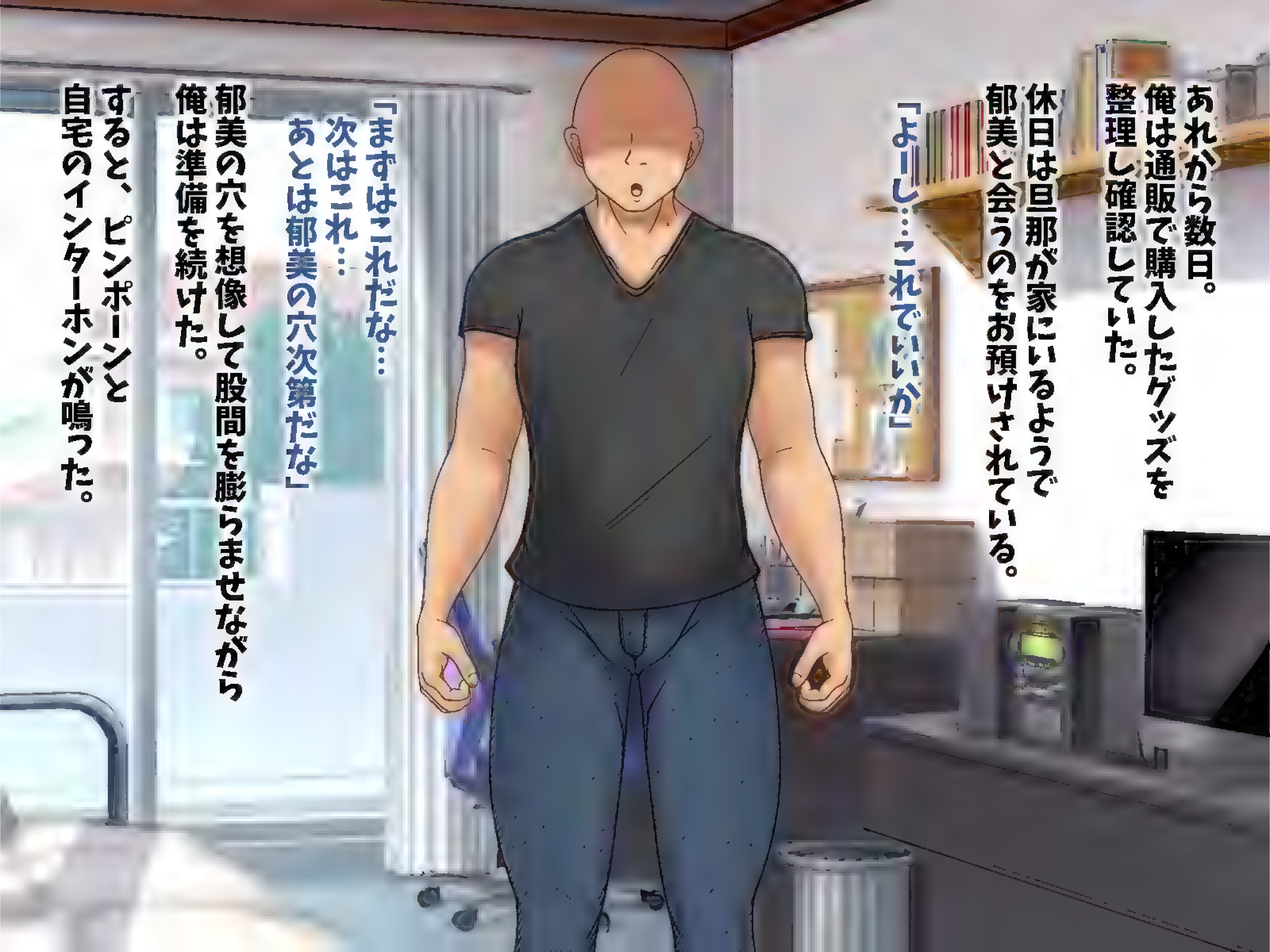

モク
「うじゅ…じゅるるるぅ…ん…ごく…ごほっ…んんぁ」
「可愛いな～郁美は。お掃除フェラなんだからちゃんと綺麗にしてね」
あっ♡
「…んん…ぺろ…つぢゅっちゅ…ごく…ごくごく…」
ぶる
「早くしないと旦那帰ってきちゃうよ～笑」


郁美に精液を舐めとらせながら
俺は思索に耽っていた。
（この能力を使えば
諦めていた願望も…
すべて思うがままか）
（俺のやりたいこと…
そうだ…俺が一番…
やりたかったこと…）
「…そうだ…
俺が一番やりたかったこと…
『アナル開発』……！」
「……？
どうしたんですか？」


「郁美…これから俺は
郁美のアナルを
素晴らしい名器へ開発する」
「…ア…アナル？」
郁美は何のことか
わかっていないようだ。
「それから
これからは俺のことは
『ご主人様』と呼ぶんだ。
わかったかい？」
「…え…？」


「わかったらおしっこをしろ」
「…おしっこ…？」
「はやく！」
「わかりました…ご、ご主人様…あ」
郁美はじょろじょろとおしっこをしながら俺の命令に従った。
（この女を…郁美のケツ穴を…俺好みのガバ穴になるまで調教してやるぞ…！）
そうして…俺と郁美のド下品アナルライフが始まった。


アナル開発
1週目


あれから数日。
俺は通販で購入したグッズを
整理し確認していた。
休日は旦那が家にいるようで
郁美と会うのをお預けされている。
「よーし…これでいいか」
「まずはこれだな…
次はこれ…
あとは郁美の穴次第だな」
郁美の穴を想像して股間を膨らませながら
俺は準備を続けた。
すると、ピンポーンと
自宅のインターホンが鳴った。


ドアを開けると郁美が立っていた。
「きたか」
「ご、ご主人様…あの…はやく中に…」
「ん？あ〜言いつけ通りノーパンできたか。偉いぞ、郁美」
「誰かに見られたら…っ、通報されちゃいます…」
「馬鹿、郁美の生まんこなら喜んで視姦するだろうぜ？ま、いいや、あがれ」
「…は、はい…」


「…洗脳は解けていないようだな。
俺の思った通りだ…」
「は、はぁ…」
どうやら郁美と俺が
一定距離離れてしまうと
洗脳が解けてしまうようだ。
俺はこの数日間、家から出ずに
郁美にも外出をしないように命令していた。
「なかなか癖のある能力みたいだが、
まぁ仕様がわかれば
こっちのもんだな…！
郁美、服を脱いでこっちへこい！」
「…うう…はい……」


郁美は俺の部屋で服を脱ぎ、全裸になった。
「よーし…」
「これから俺が郁美に何をするかわかるか？」
「お尻の…穴…を…何かするんですよね…」
「……そうだ…郁美のケツ穴を…立派なケツまんこにするために今から開発を始める」
「あの…なんだか怖いです…」


俺は郁美を
ベッドに押し倒した。
「きゃっ……」
「尻を突き出せ。
まずは…
味見をしてやろう」
あっ♡
「味見…あの……」
「あ〜いつ見ても
素晴らしいデカ尻だな」


「くんくん…すーはー…
あ～メスの匂いだ。
嗅いでるだけで
ちんぽが反応しちまう」
「そんな…
嗅がないで…」
郁美は恥ずかしそうに
腰を左右に振った。
「ケツの穴も
よーく見えるぞ…
とても…美味そうだ」
「ご主人…様…？」


俺は郁美のケツの穴に
口を近づけ、舐め始めた。
「ふぇぇえ！？
な、なにしてるんですか！？」
「味見だよ。
郁美のケツ穴の。
つじゅるるるる」
「あの…そんな……
き、汚いです…！」
「あ〜じゅるるる
うめぇ…最高だ…！」


「ケツのしわを舌でなぞるの楽しいぜぇ」
「…恥ずかし…いです…お尻舐めちゃだめ…ぇ」
あっ
「腸内はどうかな？郁美のケツ穴の味…全部味わうぞ～」
「そんな…あぁぁあ…」


俺は舌を伸ばすと、郁美のアナルの中へ突っ込んだ。
「きゃっ…！お尻の中に…何かきてますぅう！」
「うぉおお…これが郁美のケツの味か笑」
「だめぇ…！変な感覚…ぅ…」
「すげぇ…興奮する味だ…」
んぷっ
あっ


ケツ穴から舌を引き抜くと、その勢いでおならが漏れ出た。
「…ひやっ……！嘘……だめ……んんっ……」
「おっとぉ…すーはー…あ～良い…郁美のおなら最高だ」
ぷる
モワ
あっ
「もっと舐めまわしてやるからな～」
「お尻……ふやけちゃう…ぅ」


「あ〜臭いぞお郁美！
メスの匂いと
腸内ガスの匂いで
頭がバカになりそうだ笑」
「んんっ…あ！
お尻…舐めちゃ…
だめ…ぇ…え」
んぷっ
モワ
あっ♡
「こりゃ…
たまんねぇな…
あ〜最高お」
「んんぁあ…！」


「…んんあぅ……！ひぎっ…」
郁美はケツから舌が引き抜かれると同時に身体をびくんとさせた。
「どうだ〜郁美。ケツ穴を舐められて気持ちいいだろう」
「あぁ…あぁぁぁ…」
「くくく…ケツ穴の新感覚に戸惑ってるようだな笑」


モワ
「今度は俺のを舐めてもらおうか」
俺は郁美の上に跨った。
「ご主人様の…お尻を…？」
ぷる
「いいか…しっかり舌で綺麗にするんだぞ」
あぁ♡


俺は腰を下ろし
郁美の口もとに
ケツ穴を押し付けた。
「んんんぐ…！？」
「うぉおおぉ！
女にケツ穴を
舐めさせる日が
くるとは…笑」
「んんぐぅう……
げほっ…あぁ…あ」


「ほら、郁美。舌で舐めるんだよ」
「は…はい……っちゅう…れろ」
郁美はゆっくりと舌を動かし始めた。
「あ〜いいぞ！気持ちいいぜぇ」


「よーし…そのまま舌でケツ穴の中も舐めてみろ！」
「な…中も…ひやい…っぢゅ！」
郁美の舌が俺のケツ穴をこじ開けて入ってくる。
ずる
「げほっ…んぐっはぁ…はぁ…っぢゅる」


郁美は舌を動かし
俺の腸内を刺激する。
「うぉおおっ！こりやすすげぇ…」
「げほっ…うう…じゅる…るう！」
「ウォシュレット以上の気持ちよさ笑」
あ♡


「…おっと…屁こいちまったぜ笑」
「んんんん！？げほっ…けほ…げほっ…」
顔面に屁をぶっかけられて郁美は噎せた。
「おなら…だめぇ…息が…できないですぅ…」


「どうだ～？俺のケツ穴は…臭いかぁ？笑」
「はい……げほっ……く、臭いです…男の人の匂いが…口に拡がります…」
「この匂いもしっかり覚えろよ～笑」


ぶる
「…よーし…良かったぜ〜郁美♪」
「ぷはぁ…げほっ……ひやい…あ…くらくらします…ぅ」
ケツ舐めをした郁美の口には俺のケツ毛がこびり付いていた。
「うへぇ〜美人の口元が便器みたいになってんな笑ぞくぞくするぜ…〜」


「郁美のアナルは未開拓か…
この様子じゃアナルオナニーも
してないようだな」
「そ、そんなの
してないです……」
「ま、その方が
開発のしがいがあるぜ…
わくわくするな」
「…いきなりぶっ壊すのも一興だが…
まぁゆっくりほぐしてやるさ。
よし…ベッドの上で四つん這いになれ」
「…は、はい……」



郁美はベッドにのぼり
四つん這いでお尻を突き出した。
「よーし…いい子だ」
「……うう…緊張します…」
ぷる
「緊張してると入るもんも入らねぇぞ！力抜けよ～」
「…は、はい…」


「まずは小ぶりなもんでほぐしてやるよ」
「は、はぁ…」
「くくく…」
俺は左手で郁美の腰を掴み、右手の人差し指をアナルに伸ばした。



「…ひゃっ…!?」
俺の指が郁美のアナルにずるると挿っていく。
「おおお…いい締め付けだ」
ずる
ズポッ
「…んんあぁっ…!」
「舐めただけじゃまだまだほぐしきれてねぇな笑
締め付けすげぇ」


「俺の指の感触はどうだぁ？」
「んんっ…なんだか…変な感覚…です…」
「力が入ってるぞ、郁美。俺の指を締め付け過ぎだ笑もっと力を抜け！」
「ご、ごめんなさい…」


「いい具合だぞぉ…
さーて…次は…」
俺は準備していたローターを手に取った。
ぞく
「…な…なんですか…それ……」
ぶる
ビクッ♥
「あ？ ピンクローターも知らないのか？本来はまんこに入れて自慰するもんだが…笑」


「今日はこっちだ笑」
「きゃっ!?」
郁美のケツ穴にローターがするりと呑み込まれた。
「おお、すんなりだな。どうだ？指より異物感が増しただろう笑」
「…うう…はい…」


「どんどん挿れるぜ」
俺は色の違うローターを手に取った。
「…え…まだ挿れ…る…んですか…」
「1個じゃ楽しめないっしょ～まだまだあるぞお笑」
「…んんっ…ぐ！」


「おらよっと！丸いからつるっと入るな」
「んあっ…！」
「楽しくなってきたぞ！どんどん挿れてやるぜ！」
「…待っ…あぁああ！」


郁美のアナルからローターのケーブルがたらんと垂れさがっていく。
「…はぁ……はぁ…んんっ」
「カラフルで可愛いぞお～笑」
ぶる
「…お尻…く、苦しいです…」
「しょうがねぇな～ラスト１個だ」


「4つ目っと！
おお…挿ったぜ～」
「はぐぅっ…！
はぁ…はぁ…」
「どうだぁ郁美～
ローターの感触は」
「…その…えっと…」
「はっきり言え！」


「…う、うんちが残ってるみたいな感覚です……」
「くはは笑 アナルからローターの配線が伸びてる光景はめちゃエロいな」
ぶる
「…ご主人様…苦しいです…抜いてください…」
「だめだ、ローターを挿れたまま俺のちんぽを奉仕してもらう」


俺は郁美をベッドに仰向けに押し倒すと、ちんぽを口に突っ込んだ。
「んぐううう…う！？」
「あ～数日ぶりの郁美の口は最高だぜぇ」
「ごほっ……ご主人様ぁ…お尻…苦し…い…です」
「ローターを挿れながら口で奉仕するんだぞ」


「おらっ！」
「うごおおっ！？
げほっ…じゅぶっ！」
俺は腰を落とし、
ちんぽを郁美の喉奥に
突っ込んだ。
「つぶぼおお！
…げほっ…奥…は…
だめぇ…っぢゅぶ」
「あ～…気持ちいい～」


「ちんぽを舐めながら尻のローターも意識するんだぞ！」
「ひやい…うぶお…じゅるう…ぢゅぢゅ」
「おっとそうだった！電源を入れるのを忘れてたぜ～」
「つぢゅぶ……ふえ？」
俺は４つのローターの電源をすべてオンにした。


ぶるるるる…っ！
と、大きな振動音が響いた。
「ひゃっ…なに…
んぁあああああ！」
「すげぇ音してんな笑」
郁美のアナルの中で
振動するローター同士が
ぶつかり合っている。
「振動…んんぁあ強いいいい
あぁんんぁ…あああ！」


あっ♡
「どうだぁ？振動が癖になるだろう」
「んんぐごほっ…だめ…あああああ」
「おら、口も休むな！ちんぽもしっかり舐めろ」
「うげぇ…っぢゅぼぼ」


俺は激しく腰を上下に振った。
「あ～口まんこいいぜぇ…もう出ちまいそうだ」
「うぢゅぶぶおおぼぉ ああ…つじゅぶるるる」
ぶる
「ケツと口に集中しろよ～」
「おひりぃ…つじゅぼぼ おかしくなるぅ…ぅ！」


「あぁ～気持ちよすぎて屁が出ちまうぜ～郁美も気持ちいいかぁ？」
「んぐぅっ…げほっ…んんあっ…はぁあん…」
「気持ちいいなら屁をこいてみろ！笑」
「んぐぅっ…んんんん！」
ぷす～


郁美はローターのつまった
ケツの穴から屁を漏らした。
「あははっ郁美も
気持ちいいか〜いいぞお！」
「ちがっ…んんぐぅ
勝手に漏れちゃ…んん！」
「あぁ〜もう出るぞお！
口まんこで受け止めろよお！」
「あぁ…じゅぼっぢゅぶぶぶっ！」


「あぁ〜出る出る！」
お♡
「っぢゅぼぼおっほ！」


「いいぞぉ…郁美。どんどん飲めよぉ～今日は口にたくさん飲ませてやるからな」
「げほっ…精液…ぃ逆流うぇ…しちゃう…」
郁美のアナルからは振動音に混ざっておならがぶぶぶっと漏れ続けている。
「くくく…ケツ穴ローターも気に入ったようだな笑アナルは正直…ってな」


「ひや…ご主人様…
な、なにを…」
俺は郁美の身体を
１８０度回転させ、
顔を仰け反らせた。
「これこれ…一度
やってみたかったんだよな」
「何を…するんですか…？」
「郁美の喉を犯すのさ。
ケツのローター抜くなよ～」
「…そ…そんなぁ…」



俺は郁美の口に
ちんぽをロックオンした。
「口を開けろ！
そのまま動くなよ～」
「ご主人様…あの……
この体勢キツいです…」
「この体勢で
お口を犯して
やるからな～」
「…ああ……ああ」


「おらっ！」
「んぐっ！？」
俺は郁美の喉奥に一気にちんぽを挿入した。
ぷる
びく
モワ
「あ～…すっげ！新感覚だわ笑」
「んんぐっぐるじいい…っ！」


「コリコリした喉に亀頭が当たって超気持ちいいぜ～笑」
「ごほっ…うぅっげぇ…吐いちゃ…うぅ…っぢゅぶ」
「我慢しろ、郁美。俺のちんぽで喉でイケるようにしてやるからな！」
「…っげほっ…んんん！」


「おらおらおら！仰け反りイラマピストンだ！」
俺は郁美の口元に腰を打ち付けるように激しくピストンした。
「うごっ…ごぼお……げほじゅぶぼおお」
「こきゅこきゅ音がして奥に突っ込むの楽しいぜ～」
「…んんっ…息っ…ぐるじい…ぢんじゃ…うぁあ！」


ぐぽっ
郁美の限界を見定めてちんぽを喉奥から一気に引き抜いた。
「ぷはぁ…はぁはぁ……はぁ…げほっ……あ…」
「どうだ～喉奥の性感帯にガツンとくるだろ」
ビクッ
ビくっ
「あがっ…頭…おかしくなる…う…」
「ちゃんとケツのローターも意識しろよ～？おら、続けるぞ」
あっ♡


「キンタマの匂いも嗅がせてやるぜ～どうだ～？…」
郁美の鼻の上にタマタマを覆いかぶせた。
「…んん…んんぅ臭い…ですぅ…」
「ちんぽの匂いがとれなくなるまで擦りつけてやるよ笑」
「んんげほっ…くらくら…しますぅ…」
モワ
ぷる


「おら、口開けろ！
また奥に挿れるぞ」
「うう…んんっ
ひや…ひやい…っ」
「一気に挿れて
やるからな～」
モミ
はぁ
ぶる
はぁ
はぁ
どく
「んぐっ…
あぁ…はぁ…はぁ…」


俺のちんぽが
郁美の口内をこじ開けて
一気に奥に突っ込まれた。
「…んんぐっ!?がはっ…じゅぼ」
「あ～最高お」
「じゅぼお……んんぅ
そこ…だめぇえ…っ」
「お？ ここが
郁美の弱点か笑」


「パラタイン喉腺だな。念入りにゴリゴリ刺激してやるよ！」
「んんぶぼぉ…んんんっあぁ！」
郁美の喉を掴み喉腺でちんぽをシゴき始めた。
モワ
ぶる
「…だめっぇ…んんじゅぶぢゅ！」


「…ごほっ…んん！深っ…だめ…ああ」
「おらおらおら！ああ〜温っけぇ〜」
「ぶほっ…っぢゅぶっじゅぶぶぶぶ！」
喉を突くたびに郁美の口から唾液がどばどばと飛び出してくる。
モワ
ぶる


「舌も伸ばせ！
ちんぽを舐め回すように
迎え入れろ！」
「…ひゃいぃ…あぁ
おおっおおぐぉ！」
郁美の口から
ジュバジュババと
天然ローションが
噴き出す。
モワ
ぶる
「すっげぇ…
まじでまんこじゃん笑」


「うんがぁ…うじゅぼ喉お…おぇぇ…おお」
「コリコリやばすぎ…ちんぽ溶けるわ～」
「うじゅぶ…んぐっ…うんぐぁ…ごほっ!」
「やっべ…もう出そう」


「郁美もイくんだぞ！喉腺とケツ穴ローターで絶頂するんだ」
「ふぇ…！？んんっつじゅぶおお！？」
「ケツでも口でもどこでも感じるように改造してやるからな！」
「…あぁ…うんぐぅ！」
どく
あっ♡


「はぁ…はぁ…おらおらおら！唾液噴き出せ！」
「…ぶほっ…！うげぇ…っ！」
「喉の奥に種付けしてやる！」
「あがっっぢゅぼ！」


「あぁ～イくっ…脳イキさせてやるからな～郁美ぃ！」
「…あがっじゅぼんぐぅっっ！」
俺はピストンを加速させていく。
「いくぞ～出るぞぉ！喉でイけ！うおおお！」



「喉奥出るっ！」
俺と郁美の身体がびくんと跳ねた。
ぶる
どく
「んぐじゅぼぉ！」


射精と同時に郁美のまんこから
ぷしゃーと愛液が漏れ出た。
「おぉ…郁美もイったか笑
脳に響いただろう～」
ぐぽ
プシャ～～～
ブブッ♡
そしてアナルからは
ローターの振動音に負けないほどの
イキ屁がブブっと噴き出した。
「ああ……んんぐう…
おお…つおおお…お」
ぷす～～
ぶる


「最高だぜ～郁美。ほら、精液は全部飲み込むんだぞ！」
「ごほっ…がはぁ…ひゃい……っんじゅ！」
「あ～射精したらなんか催してきたな」
「…うごく……ふえ…？」
あっ♡


『んんんんん！？』
「あぁ～出る出る…
…あぁ～気持ち～」
「…おぢうごおお！？」
ぶる
じょろろろ
びく
俺は郁美の口内に
ちんぽを挿れたまま
小便をし始めた。


「ごほっっ！？」
許容量を超えた郁美の口から
俺の出したものが
どばっと吐き出された。
「うおっお！おいおい！
郁美！ちゃんと飲め！」
プシャ〜〜
「…げほっ…げほ…
ご…ごめんなひゃい…い…」
「うへぇ〜笑
まるで便器だな笑」
あっ♡
じょろろ


「ほら、まだ出してる途中だ。全部飲むんだぞ〜笑」
「…ひゃい…がらがらがらがら
つじゅっぢゅごく…んんごっ…！」
郁美は喉を鳴らしながら俺の小便をごくごく飲んだ。
じょろろ
プシャ〜〜
「えらいぞお郁美い…笑」
「ごほっ…っ！」
俺はその後も郁美のケツにローターを挿入させたままプレイを続けた。


アナル開発
2週目


郁美のアナルを
ほじり始めてから数日。
俺は新たなグッズを調達していた。
「専門店に出向いたかいがあったぜ。
俺の知らない下品なアイテムが
わんさか売ってたな笑
ぼったくり価格で売りやがって」
もちろんグッズはすべてタダだ。
店員を洗脳すれば何の問題もない。
「さーて…今日は
何をしてやろうか」
妄想と股間を膨らませながら
俺はアパートへ戻っていった。


郁美の部屋に向かい、インターホンを押した。
「はい……あ……こんにちは…」
「ん？こんにちは…？」
ドアを開け、俺の顔を見た郁美は何やらそわそわし始めた。
「あの……な、なにか…？」
（……あ！そうか…また洗脳が解けたのか。それにしても…なんか…いつもと様子が違うような？）
「……あのぉ……」


（…そうだ…）
「あの～俺の部屋のトイレが今使えなくて、貸していただけないかと」
「あ…そ、それは大変ですね…ど、どうぞ～」
適当な嘘をついてみたが、郁美は俺を部屋の中へ招き入れてくれた。
「あの……この前私に……いえ…なんでもないです…」
「……？」
（この前……？）


「いやぁ…漏れそうだったんで助かります」
（嘘だけど…笑）
「そ、そうなんですね…」
「えと…お手洗いはそこのドアです」
「ありがとうございます…」
（……よーし……）
俺は郁美に一言告げ、こっそりと寝室を見に行った。


寝室に入るとすぐに
ベッドの上に散乱したものが
目に入った。
「なるほどな……笑」
俺が郁美に命令して
常にアナルに挿入させていた
小型ローターが散乱していた。
(俺の洗脳が解けて違和感に気付き、
自分のケツ穴に入ったローターを
頑張って引っこ抜いてたってわけか)
「想像しただけ興奮するぜぇ…
す〜は〜…おぉ…
まだ郁美のケツ穴の匂いが残ってんな笑」
俺はローターを手に取ると、
郁美のいる部屋に戻った。


「奥さん、すみません。こんなの見つけたんですが笑」
俺は郁美にローターを見せつけた。
「…っ！？ちょ…ちょっと…あなた何勝手に…」
「いや～部屋間違っちゃって笑すみません」
「いやぁ～これ奥さんのですか？」
「し、知らないですよ！夫のだと思います！も、もういいでしょ…用は済みましたよね！」


俺は郁美に見せつけるように
ローターを鼻に押し当てた。
「くんくん…あぁ～
なんか変な匂いが
するんですよね～笑」
「…ちょ…
あなた…
何してるの…？」
「これって～なんか…
うんこの匂いみたい
じゃないですか？
それに…
まだ人肌が…」
「い、いい加減に
してください！
そんなわけないでしょ!!」
「そんなわけあるんだよな～
服を脱げ、郁美」


「……！？
はい…
…ご主人様…」
俺が命令すると
郁美は態度を変え、
躊躇うことなく
服を脱いで裸になった。
「楽しくなってきたなぁ～郁美。
やりがいが出てきたぜ」
「…？」
（洗脳してない時でも…
常時アナルでイけるように
開発してやるぜ…笑）


俺は郁美を連れて便所に向かった。
「郁美、便器の上に乗れ」
「え…は、はい……」
「そうだ、ケツをこっちに向けてしゃがむんだ」


「言いつけ通りローターを挿れたまま過ごしたかぁ？」
「は、はい……お尻にずっと挿れてましたぁ……」
「おいおい…嘘はだめだぞ？抜けてるじゃないか！笑」
「え……そんな……ご主人様…ご、ごめんなさい…」


「お仕置きが必要だな！」
俺は持ってきた
バルーンプラグを
郁美のアナルに突っ込んだ。
ズポッ
「んぐっ…っ！？」
「おぉ～入るもんだな」


「デフォルトでもまぁまぁ拡がるな」
「ご主人様ぁ…ふ…太いですぅ…」
「シリコンの感触がいいだろ～？ゆっくり膨らませてやるぜ」
「ふ、膨らむんですか…!?」


俺は手に持ったポンプ部をじゅぽじゅぽと押し始めた。
「ほ〜ら、空気がどんどん入っていくぞぉ〜」
「ひやっ…あああ！」
プス〜
プス〜
「膨らんでいくのがわかるだろう」
「わ、わかります…う…」


「この様子だと
まだまだ行けるな」
「んんぐっ…
く、苦しいですう…」
プス～～
「アナルは案外
拡がるもんだぜ～
よーし一気に行くぞ！」
「い、一気は…だめですう…！？」



俺はポンプで一気に空気を送り込んだ。
「うおおおっ笑」
『んぐうううお！』
プス～
プス～
「すっげぇえ…こんなでかくなるのか笑」
「…ご主人…様ぁ…お尻裂けちゃう…ぅ」
ぶる


「すっげぇ…うへ～
これがMAXか」
「お尻…が…
すごい拡がってますぅ…」
プス～～
「空気抜くのも面倒だな。
よーし、このまま
抜いてやろう」
「ふぇ…!?　このまま!?」


俺はポンピングされたアナルプラグを掴み、そのまま引っ張った。
「おおおらっ！……結構キツいな！」
ずる
「おっおっんごっんんんんああ！」
「おら！　力抜かねぇとケツ穴壊れちまうぜ～？」


「おらょっと！」
「ひぎゃああ！？」
アナルプラグがずぽっと抜け
郁美のケツ穴から空気が漏れ出た。
ズポッ
「おおおおお！
いい具合に拡がったな笑」
「んんはぁ…はぁ…
で、出たぁ…あ……」
ぷすぅ〜


「あぁ…おしっこ…出ちゃうぅ…ぅ…」
「くくく…人妻の小便シーンも拝めるとは最高だな」
「み、見ないでぇ…」
「エロい光景だぜ…え…よーし…次だ…」


場所を寝室に移し、
郁美を四つん這いの体勢にした。
「はぁ…はぁ……」
「おいおい、もうケツ穴閉じてるぞぉ？やっぱすぐに閉じちまうか」
「ううう……ご、ごめんなさい…」


「じゃーん！今日のメインはこれだぜ～」
俺は持ってきた浣腸器を手に持った。
「……注射……器……？」
「これは浣腸器だ。……ケツ穴の中のもんを排泄するために使うのさ」

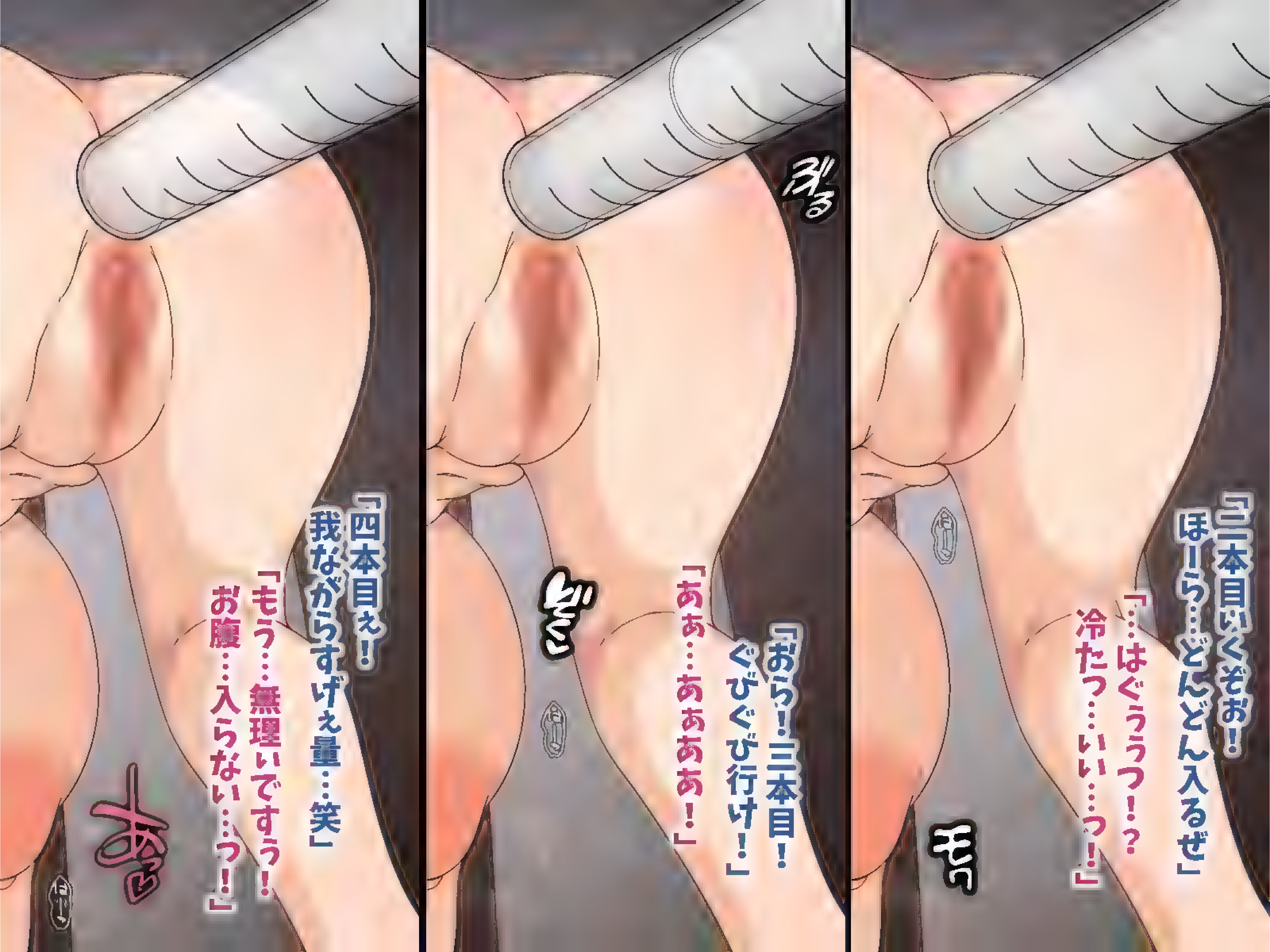

「…浣腸…！？
いやですぅ…！」
「ま、ただの浣腸だと
おもしろくねぇからよ。
浣腸液と俺の精液が混ざった
特製カクテルを用意したぜ笑」
「浣腸液と…
せ、精液…！？」
「おら！郁美！ケツ上げろ！
たっぷり用意したからな！」
ぷる
モワ


「おらっ！」
浣腸器の先が郁美のアナルに挿っていく。
ズポッ
ぷる
あっ
「…ひやっ…！？」
「特製カクテルだぞ～郁美のために作ったたんだ、しっかり味わえよぉ！」


「おおお…入っていくぞお！」
「…ひやうう……！
あぁあ…ぁあぁ！」
「冷たくて気持ちいいだろぉ？」
「お腹に…入って…きますぅ…んんっ！」
ぶる



浣腸器に入れたカクテルを
郁美のアナルは
どんどん飲み込んでいく。
「よーし……！
良い飲みっぷりだぞ～」
ズポッ
「……んんっ……あ！
お腹……苦し……い……です……」
「おいおい、特製カクテルは
まだまだあるからな～」
あっ

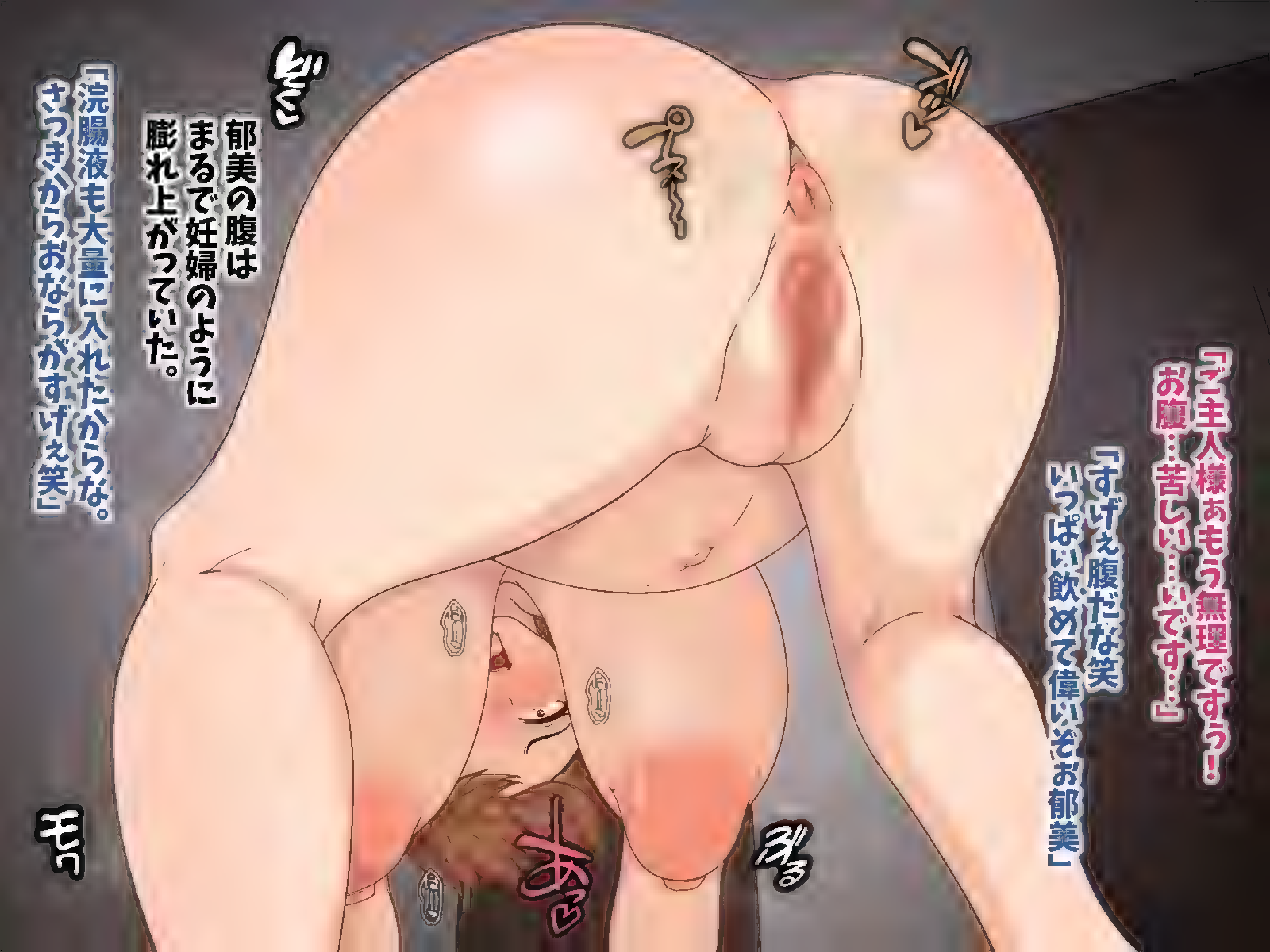

「二本目いくぞぉ！ほーら…どんどん入るぜ」
「…はぐぅう!? 冷たっ…いい…っ！」
「おら！三本目！ぐびぐび行け！」
「あぁ…あぁあぁあ！」
「四本目ぇ！我ながらすげぇ量…笑」
「もう…無理いですぅ！お腹…入らない…っ！」


「いやいや…まだまだ入るだろ。次はこれだ」
俺は浣腸器に黄色く濁った液体を入れた。
「な…なんですか…それぇ…んんっ…」
「なんだかわかるか、郁美～さっき郁美が出したもんだ」



「…お…おしっこ!?」
「正解だぞお郁美！お前の小便だ！笑」
ズポッ
「そんな…いやっぁあ お尻におしっこやだぁ！」
「出したてのおしっこだからな！人肌でいいだろお？笑」
ぷる
あっ


「どうだぁ～さつきとは違う感覚だろぉ！」
「…んぐぅう…っ…これ…っだめぇえ！」
モワ
ぶる
「ついでに俺の小便も追加してやるぜぇ！」
「あがっ…もぉ…無理です！お腹…いっぱ…あああ！」
ビクン
「おぉお…腹がどんどん膨れていくな笑」
「もう出ちゃいますぅ！お腹…痛い…ううぐ…！」
あぁ


「ご主人様ぁもう無理ですぅ！お腹…苦しい…いです…」
「すげぇ腹だな笑 いっぱい飲めて偉いぞお郁美」
郁美の腹はまるで妊婦のように膨れ上がっていた。
「浣腸液も大量に入れたからな。さっきからおならがすげぇ笑」
モワ


「お手洗いに行かせてください……」
「いいやだめだ。
これを付けてやろう」
俺は手作りの蛇口プラグを
郁美のアナルにずぼっとはめた。
ズポッ
「……んんっ……！
出したいよぉ…
お腹苦じいです……」
「蛇口をひねらねぇと
排泄できないぞお笑」
ぶる
「…そんなっ…
もう…限界ですぅ……！」
ビクッ



「おらよっと！」
俺は郁美を抱き寄せるとまんこにちんぽを突っ込んだ。
「待って…今…は…あ」
あっ
「浣腸我慢しながらのセックスは最高だぞお～郁美い笑」
「待って…だめですっ！」


『んんあああ！』
俺は一気にちんぽをまんこの奥まで挿入した。
「うぉおお…たぷたぷ音がするぜぇ笑」
「ぎゃあぁ…っ…お腹…だめぇええ！」
「あはは！この体勢だと腹が押されるな笑」


「あ゛ぁあぁぁ！
あぐっぁあ！
おおおおお！」
郁美は今までに聞いたことのない声で喘ぎだした。
「すっげ笑 苦しいか、郁美！」
あっ
「…ぐるじいいですぅ… んんぐぅう…っうう！」
「それが気持ちよくなってくるんだぞ～」
ぐぃ
ぶる
モミ
パーン
パーン


俺は郁美の腰を激しく上下に動かした。
「うりゃうりゃ！いつもよりまんこの締まりがいいぜぇ」
「んがぁああぁ！激しっいいいいいい！」
モミ
「蛇口の隙間から屁が漏れてるぜ～」
「…お腹…痛いよぉ…んぐっ…出したいよぉ！」
ぷすー
ブポッ


「くくく…さすがに限界か？排泄したいか、郁美」
「ひゃ…ひゃい！出したい…ですぅ！」
「何が出したいかちゃんと言うんだ！」
「…え…お腹…んんぐ お腹のもの全部ですぅ…」
「ご主人様の精液と自分のおしっこだろ！ぶりぶり排泄したいんだろ！ちゃんと言え！」


「…ご、ご主人…様の…
せ、精液とお…おお
私の…おしっこおおお
ぶ…ぶりぶり…
出したいですううう！」
その言葉に
俺のちんぽが
びくんと反応した。
あっ
ぶる
モミ
「エロすぎ…
郁美…俺も出るぞお！」
「…んぐぅあああああ！」
プス～
ググ
ブポッ


「あぁ～射精る！」
俺は射精と同時に郁美を強く抱きしめた。
「イぐっう！うぐおおおっ！」
あっ
ぶる
プシャ～



郁美のお腹が
ぎゅるぎゅると
大きな音を立てた。
「…お願い…します…
もう…限界…ですぅ…」
「わかったわかった」
「……お手洗いに……
行かせてぇ……」
「おいおい、何言ってるんだ。
ここで出すんだよ笑」
ぐちゃ



俺はジョッキを手に取ると
蛇口の下に掲げた。
「…な、なんですか…
それ……え……」
「せっかく蛇口があるんだからさ。
ジョッキに注いでやるぜぇ！
排泄したものをよーく見てやるよ」
「…そんなぁ…
は、恥ずかしいですぅ……！」


「出したいんだろ？
俺が出させてやるよ。
よーし…笑」
俺は蛇口に手をかけた。
「…んんぁ…っ！
あぁっ…もうぉ…
出ちゃいますぅ！」
「思いっきり出せよ～
いくぞぉ…！」


蛇口をひねると
どばどばと黄色い液体が
零れだした。
プシャ～～
「うおおっ笑」
「んぐっおお!?」
「おいおいおい笑
すげえ勢いだな!」
ぶる
あへ


「ケツから小便してるよ笑
うへぇ…小便臭ぇ笑」
「あぁ…あぁあ…」
ぐぃ
「どんどん出るなぁ笑
ジョッキが追い付かないぜ」
「…はぁ…はぁ…
出ちゃうう…はぁ…ぁ!」
ぶる
あっ
どく
モワ


「おお…イカ臭っさ！特製カクテルも出てきたな笑」
「…おっおっんぐぅ！」
「うわぁ…げほっ…！やべぇ匂いだな笑」
「おひぃ…ぬるぬる…んんぁ止まらないよぉお…お！」
ぶる


俺の足元には満たされたジョッキがどんどん貯まっていく。
「排泄気持ちいいかぁ～郁美ぃ！」
「…んぁ…まだ…お腹苦しいですぅ……」


持っているジョッキが
いっぱいになると
俺は蛇口を捻り排泄を止めた。
ギュッ
プス～
「とりあえず
こんなもんか」
「え…ご主人…様ぁ…
まだお腹痛いですっ！」
「もうジョッキねぇよ笑
空のジョッキ作らねぇとな～」


「…お腹がぎゅるぎゅるして…
う、うんちが…
出ちゃうんですぅ！」
「くくく…笑
あれだけ下剤を
混ぜたからな笑」
「ジョッキ…の…中身…
…流してきますから……
出させてくださいぃ…！」
「流す？
何言ってんだ」
ぶる
あっ
びくっ
モワ



俺は郁美に浣腸汁で満たされたジョッキを持たせた。
「……え……？」
「美味しそうだろ？……一気に飲むんだぞぉ」
「……の、飲む！？こ、これを…ですか……！？」


「す、すごい匂いが…してます…うっ…げほっ…」
「飲んでも問題ないぜ。まぁ下剤だから腹は痛くなるがな笑」
モワ
あっ♡
ビくっ
「…おしっこも飲むんですかぁ……?」
「当たり前だろ。俺と郁美の小便ブレンドだ。ごくごく行け!!」
ぶる



「…はぁ…はぁ…
げほっ……
…う…うう…」
「どうした郁美。
おいおい…まさか
飲めないのかぁ？」
「…い、いえ……
飲み…ますう……！」
郁美は手を震わせながら
浣腸汁のジョッキを
口元に近づけた。
ぷる


「ごく…うげっ…ごく…んんげぇ…っごく…ん」
「おぉ～えらいぞ郁美。いい飲みっぷりだな」
モワ
郁美はどろどろした精液カクテルをごくごくと飲んでいく。
「…げほっ……口の中が…うぇ…っぷ…精液の匂いで…充満してますぅ……!」


精液カクテルを飲み干した郁美は
小便ジョッキも続けて飲んでいく。
「……んぐっ……！
おしっこの匂いっ……
がほっ……濃いよぉ……」
「おおお…笑
しっかり口の中で
味わってから
ごっくんするんだぞ」
「…ふぇえ…味わう……！？」



「どうだ～どろどろしておいしいかぁ～～？笑」
「んんっ…んっ！吐…きそお…おぉ…」
モワ
「吐くなよ～ちゃんとごうくんしろ！」
「…ひや…ひやい……ごうくん…んんんぐっ」
ぶる


「…ぷはぁ……飲みましたぁ…ぁ」
「よーし…おかわりだ笑」
俺は郁美の空ジョッキに精液と小便を追加した。
モワ
「…え……ぜ、全部…飲むんですか…？」
「当たり前だろ」
ぶる


あっ♡
ビクン
「は…はいぃ……ごく…ごくっ…うぐ」
「いいぞ～そうだ！一気だ！一気飲みだ！」
「うぐっ…喉を……通らないですぅ…」
「郁美の大好きな飲み物にしてやるからな～ほら！どんどん飲め！」
モワ
ぶる



「……ごく……ん！
ぬるぬるして…
喉に…絡まりますぅ…！」
「うへぇ……
それにしても
匂いが強烈だ笑
鼻が曲がるわ」
モワ
「…つごつくん……
ぢゅぢゅるる…うぇ…」
「ほら、郁美！
もうちょっとだぞ～
残さず飲めよ！」
ぷる


モワ
「んんはぁ……んんぷ…うう…」
「くはは！えらいぞ郁美。下品な飲みっぷりだ」
ビク
「…うぐうう…ごく…うごくうう！」
「最後まで全部飲めよ～」
ぶる


「んげぇえ…っ！」
郁美は女性が出したとは思えない
特大のザーメンゲップを放った。
んぷ…!!
「うおお！
すげぇゲップだな笑
おいしかったか〜郁美」
モワ
ぶる



「ごめんな…さいぃ……ゲップ…でちゃいました…恥ずかしい…よお…」
「エッチだぞ〜郁美。俺は郁美のはしたない音が大好きだからな！」
モワ
あっ♡
郁美のお腹からぎゅるぎゅるぎゅると音が聞こえてきた。
「…んんっ…お腹が…もう…限界ですぅう！」
「あんだけ下剤飲んだからな笑」


「しっかり飲めたからな。
排泄を許可してやろう」
俺は蛇口に手をかけた。
ぷる
「…はぁ…はぁ…
ご、ご主人様ぁ…
もう出ちゃう！」
「気張れよぉ～
腹のもん全部出してみろ！」
びくっ



「んぎおおう！」
「うおおっ笑」
プシャ～～
プス～～
蛇口プラグから
どばどばと勢いよく
郁美の下痢便が噴出した。
「うっひええ～下剤の効果やば笑
すげえ量の下痢便だな笑」
モワ～～ン



「郁美、見てみろ！
すげぇ出てるぞ～笑」
「ふぇ…！？
い、いやぁあ！」
「うへぇ～さすがに臭せぇな笑
これが郁美の糞の匂いか～」
「…か、嗅いじゃやだめぇえ！
お願いですっ…！
見ないでくださいっ…！」



「よーし…出し切ったか」
「あぁ…あ…あ…あぁあ…」
ぶる
プス～
モワ～～ン
郁美は腰をがくがく震わせながらその場に倒れ込んだ。
ビク
「さすがに今日は限界か笑
浣腸が癖になるまで
何回も挿れてやるからなぁ～郁美♪」
プシャ～～
あぁ
モワ


アナル開発
3週目


アナルを開発し始めて数週間。少しずつ郁美のアナルは拡がっていた。
「…今日はアレやるぞ」
「…アレ…ですか…？なんでしょうか……」
「郁美もアナルに挿入されるのに慣れてきたからな。今日はエグいやつだ笑」
「エグい…やつ……あの…ご主人様ぁ…お尻…もう…拡がらないですぅ…」
「それは俺が決めるんだよ。さーて…作るの大変だったんだぜ～」


俺はずっしりとした極太のディルドを手に持った。
「……よいしょっと……高級ディルドだからな。重量感あるぜぇ……」
「ひぃっ……!?ななな…なんですか…それ…」
「郁美のために作った特注アナルディルドさ笑わくわくするだろう?郁美」
俺はアナルディルドを床に設置した。


「ほら、腰を落とすんだ」
「……はい……」
「両手は頭の後ろだ。腋が見えるようにしろ」
郁美は両手を上げ腋を見せながら腰を落とした。
「うう……この格好……恥ずかしい……い……」


郁美は足をがくがく震わせた。
「……こ、怖いです……ご主人様……」
「だめだ。自分で腰を下ろして挿入するんだ」
「……うう……で、でかすぎるよお……」
「しょうがねぇな。俺が手伝ってやるよ笑」
俺は郁美の肩を掴むと後ろに軽く押した。


郁美はバランスを崩すと、そのまま腰を落とし、ディルドをアナルで呑み込んだ。
『きゃっ！？…んぐっ！？』
あっ♡
「くはは！なんだ、入るじゃないか笑」
「え…え……あ」
ぐぃ
ぶる



「…あぁ……太すぎ…るぅ…ぅ」
「まさかこんなすんなりとはな。よーし…腰を振ってみろ」
「…ごごご…ご主人様…動け…ないですぅ……」
「しっかりと足を踏ん張れ！ケツの力を抜いてゆーっくり引き抜くんだ」
「…ひゃ…ひゃい……」
郁美は下半身をぷるぷるさせながらゆっくりと腰を上げていく。


「おっ…おお゛ーっ…!?」
郁美は雄たけびを上げながら
ディルドをアナルから引き抜いていく。
「おお…笑
すげぇ声だな」
「お腹…えぐれ…
ちゃう…ううう!」
ブポッ
ぐい
ぶる


郁美はアナルとディルドの隙間からぷすぷすと空気を漏らした。
「……はぁ……はぁ……腰が抜けちゃうぅ……」
「大丈夫そうだな。よし、郁美。ディルドオナニーをしろ」
「……ディルド……オナニー……んんっ」
「腰を激しく上下させるんだ。ほら、早くするんだ！」
「……は……はいい……や、やりますぅ！」


「…はぐうう…！」
『…んぎゃああ！？』
「いいぞぉ～郁美。
そのまま動き続けろ」
「…ぐるじいいですうう…
お腹押されるうう…」
「ハメ応えが
あるだろうぉ？笑
もっと激しく
腰を振るんだ！」
「…ひゃいいい…！」
郁美は徐々に
腰を動かす速度を上げていく。


「おっ…んぐおおおお♥」
「すごいぞお郁美！こんなの普通の女はできないぞ笑」
「あんんっ…あがっ…はぁ…はぁ…はぁ…お尻いいいい…あぁ深…んぐ…おおおおお！」
「腸壁をゴリゴリ刺激して気持ちいいだろぉ！」
モワ
ぶる
ぐい



『…あああ♥おぢりいい…うぐぅ！』
「郁美はアナルで感じる変態だ！変態女なんだぞ！」
「…アナ…ルぅ…あ感じる…変態…い…私は…変態…いい」
「そうだ！お前はアナルを犯されて感じる変態女だ！」
「…あぁああ…♥おかしく…なりゅうう！バカになっちゃううう！」


「だめ…ああ…きちゃう…きちゃううう！」
「ついにケツイキがくるか。よーし…郁美、ケツイキしろ！」
「ケツイキ…い…ああ…きちゃう…頭溶けちゃう…！」
郁美は腰をさらに激しく振った。
「おら、郁美！アナルディルドでケツイキしろ！」
ブポッ
ぐい
ぶる


『イぐぅぅ♥』
郁美はディルドを奥まで咥え込むと身体を大きくびくんとさせた。
「うぉおお笑
ケツから腸汁が噴き出したな笑」
「あぁ…あぁ♥」


「…おぢっごお…漏れちゃううう…♥」
「ケツイキは気持ちがいいだろう？」
「…は…い……♥」
「おら！立て郁美！もっとケツイキさせてやるよ！」
俺は郁美の身体を持ち上げ抱き合うた。
「…ふえ……？んぐおおおお！おひり抜けりゅううう♥」


「ご主人様ぁ…これ以上やったら…お尻おかしくなりますう…」
「あ？おかしくなっていいんだよ。郁美はアナル狂いになるんだからな」
「そ、そんな…あ」
「今のでアナルもだいぶ拡がったな。今度はこいつで楽しませてやるよ」


俺は電マを手に取ると郁美のアナルに当てがった。
「ひや…!?…それ…って…」
「電マだよ、電マ。これを挿れてやるぜ」
「ふ、太いですぅ…!」
「何言ってんだ笑 さっきのディルドより小ぶりだろうが笑 挿れるぞ!」
ぶる



俺は郁美のアナルへ電マをずぼっと突っ込んだ。
「ひゃああ…！」
「どんどん入るぜ～奥まで挿れてやるからな！」
「ああ…ああ♥太い…いい！」
ズボッ


「よーし…奥まで入ったな」
「あぁあ…ゴツゴツしたの…入ってますう…♥」
「うへぇ～めっちゃエロ…ただ挿れただけじゃ満足できないだろぉ？笑」
「……ふぇ？」
俺は電マのスイッチをオンにした。


郁美の腸内から
激しい振動音が鳴りだした。
「んぎゃあっ♥」
あっ♥
「おぉっ……！振動すげ！」
「んぎゃっ！おぢりいいい！振動ぉ…だめぇ！」
ぶる
「うおおっ！刺激されて小便漏れてるぜぇ」
じょろろろ
郁美の漏らした小便が
俺のちんぽにぶっかかる。


「振動音に混じって
おならも出てるぞお」
「イってますう…！
お尻イってるんですぅ！」
郁美は身体を
びくんとさせた。
「やっべぇ…郁美
お前エロすぎ…
俺ももう我慢できねぇ
このままちんぽ突っ込むぞ！」
「…待っ……！
今挿れちゃやだめぇえ！」



俺はとろとろになった郁美のまんこにちんぽを挿入した。
「あ～ぬるぬるまんこ良い～」
「あああああ♥」
ぶる
「おぉおぉお！こりゃすげぇえ…！アナルの肉越しに電マの振動が伝わるぜ！」
「あぁあ…あぁあぁあ！」


「すっげ…こりゃ電動オナホールだな」
「あひゃぁ…♥おまん…こお…おじりぃいい…♥」
「いいぞお郁美！もっと感じろ！もっと喘げ！もっとイキ狂え！」
「……あぁ♥あぁ…はぁ…はぁ…おちんちん…ああ気持ち…いいですぅう！」
俺は激しくまんこを突いていく。


「あぁ～やっべぇぇ
こんなのすぐ
イっちまうって…笑」
「おちんちん…っ
あぁ…イぐ…！」
「よーし…
中にたっぷりと
注いでやるからなぁ！」
「あぁんんぁ…
激し…っ…ああ
中…きちゃう…うう！」


「絶頂と同時に電マを引き抜いてやるからな〜」
「あぁあ…だめぇえ…今…抜いちゃ…あっ♥」
「あ〜イク…！郁美のエロエロ電動オナホまんこにたっぷり出すぜぇ！」
「おっ…おっ…んんぁんおおおぉおおお♥」


「んぐおおおお♥」
「あぁ〜…イくっ!」
射精と同時に電マを引く抜くと
郁美のケツ穴から
イキ屁がぶぶぶっと漏れ出た。


「おお…すっげ笑 郁美〜アナルがぱっくり開いてるぜぇ」
「んんぇ…お尻ぃ…すうすうしますうう…♥」
「はぁ…はぁ…」
「俺好みのガバ穴になってきたなぁ笑」
「よし、郁美ぃ！壁に手をつけ！」


郁美は壁に手をつき、お尻をこちらに向けた。
「だいぶほぐれてきたなぁー。よーし、俺のちんぽで味見してやろう」
「お、おちんちん…挿れるんですか？」
「何言ってるんだ？そのために開発してるんだぞ？」


「え……そ、そうですよね……」
「ほかほかしてて美味そうなアナルだな～笑」
「うう…んんっ…」
あ♡
モワ
ぶる
「じゃあ、郁美。おねだりしてごらん」


「え…えと……
お尻に……
挿れてください…」
「おいおい、心が
こもってないぞお笑」
あっ♡
「まずはちんぽに
おならをかけて挨拶しろ！」
「お…おなら…！？」


郁美のおならが俺のちんぽを刺激した。
「うおおおお笑
あ〜ちんぽが喜んでるぜぇ」
モワ
「んんっ…はぁ…
おちんちんが…
どんどん大きくなってるぅ…」
ぶる


俺は郁美の耳元でそっと囁いた。
「え……恥ずかしいですぅ……」
「さぁはやく言うんだ！」
ぷる
ズポッ
あっ♡
「は、はい……！郁美のがばがばアナルにご主人様の極太ちんぽぶち込んでください♡」


俺は郁美のアナルへ
一気にちんぽを突っ込んだ。
「うひょおおお！」
ズポッ
あっ♡
「んんああ♡」
モミ



「あぁ～とろとろだ～
郁美のアナル…最高だぞぉ！」
「あぁ…熱い…
おちんちん熱いですぅう！」
ぶる
あぁ♡
ズポッ
モミ
俺は本能のままに
腰を振り始めた。
「う、
動いちゃ…だめぇえ♡」


「あ～締め付けいいぞお！
おらおらおらおら！
腰止まんねぇ！」
「あぁん…ああ♥
おひりぃい…擦れっ…
ああああ♥」
あっ♥
ぶる
「もっとこねくり回して
ガバガバにしてやるからなぁ！」


「お…そうだ…いいこと思いついたぜ〜
郁美……催眠を解け！」
「え……はい……」
ズポッ
ぷる
郁美の目が虚ろになり、
いつもの人格に戻っていく。
「最高だぜぇ郁美ぃ…っ笑」


「……え……なに……なんなの？」
「おっはよ～郁美い♪」
ぷる
ズポッ
「え……は……？」
モミ
洗脳を解かれ混乱状態の郁美を尻目に
俺は容赦なくケツにちんぽをぶち込んだ。


「きゃああ！？」
郁美はアナルの刺激で
身体をびくんと飛び跳ねさせた。
ズポッ
「なになになに！？
お尻…なにか…
え…なに…え？」
「混乱してんねぇ笑
郁美のお尻は～
ケツまんこになったのさ」
あっ♡



「郁美のケツ最高お笑
あ〜ほじるの楽し〜♪」
「ちょ…ちょっと…んん！
あなたいったい何して…っ！」
お♡
ズポッ
ぷる
モコ
「郁美も気持ちいいだろぉ？
ほら、素直になりなよ」
「ふざけない…で…あぁあああ！」



「なんで…どうして…
私のお尻…ひゃん…
どうなって…！」
「郁美はお尻で
イけるように
なったんだよ～」
「俺が毎日解してあげたからね」
「ま、毎日…あぁあんんっ！
嘘…何を言ってるの…！？」


「あぁ〜もう出そう！郁美のケツまんこに中出しするよ〜」
「なっ…は、離して！やめて…っ！」
ズポッ
ずる
「あぁ〜イく…郁美い…！イくぞおお！」
「だめ…っ…やめっ…！」



俺はちんぽを奥まで一気に押し込み、ケツ穴の奥の奥で射精した。
「んぐぅう♥」
「ああ出る出る！出るぞおお！」


「うぉお…アナルの中がびくびく痙攣してるぜぇ…めっちゃイってんな～気持ちぃいい～笑」
「あぁんあっ…あっ♥どう…してぇえ…あああ♥」
「郁美はケツ穴を掘られて絶頂しちゃう変態だからさ」


アナルからちんぽを抜くと、ぶぽっと卑猥な音を立ててザーメンが逆流してきた。
「うへぇ～エロお笑」
「あ…あぁあ……」
「やっぱアナルは最高だな。もっともっとハメてやるぜぇ」


郁美のアナルからは
俺の出した精液が
泡を立てながら漏れ出ていく。
「あっ…んんっ♥
いやぁ…聞かないで！
見ないでぇえ！」
「アナル中出し記念に
一枚写真撮っとこ笑」
たぷ
「ま、待って…嘘お！？」
ぶる
俺はスマホで郁美のアナルを
ばっちりと写真におさめた。


（反抗的な女を犯すのも楽しいな笑 洗脳して従順なだけじゃ味わえない感覚だぜぇ）
「…これは…夢よ…」
「夢だと思うか？お前がそう思うなら思っとけばいいさ笑」
「さっきの写真…消して…お願い…っ」
「消してほしいか？……なら今夜また俺とここでセックスするんだ」
「夜…ここで！？無理です！お、夫にバレます…！」


「じゃあ旦那に教えてやろうかな～
郁美が俺と毎日アナルで遊んでること笑」
「…デタラメ言わないで…
何が毎日よ…！」
「ま、さっきの写真を
見せてやるのが早いな。
いいのか？」
「いいわけないでしょ…っ！」
「夫には睡眠薬でも盛るんだな。
このことがバレたくなかったらな笑
じゃあな、夜にまたくるぜ～」
「……最っ低……」
俺は郁美にそう告げると部屋を後にした。


その日の夜。
「洗脳を解いたまま
郁美を部屋に置いてきちまったが…
大丈夫だったかな？」
(旦那や警察にチクったりしてたら
面倒なことになるからなぁ～)
「ま、その時はそいつらも全員
洗脳すればいいわけだけど笑
さーて…楽しい楽しい夜の時間だ♪」
俺はわくわくしながら
郁美の部屋のドアにてをかけた。


「おーい…郁美いるか～？」
俺が玄関で声を発すると郁美が冷や汗を垂らしながら走ってきた。
「…ば、馬鹿なの！？夫に気付かれちゃうでしょ！」
「旦那はどうした？寝たのか？」
「……え…ええ…」
「まさか、ほんとに睡眠薬盛ったのか？ひでぇ女だな笑」
「も、盛ってないわよ…！夫にそんなことするわけないでしょ……」


「……でも…どうやって入ってきて…」
「ここの合鍵を頼んだらお前が用意してくれたんだよ笑」
「……もう…わけがわからないわ……」
「さーて…寝室に行こうぜ～」
「…写真は…消してくれるんでしょ?」
「……あーもちろん。今夜郁美が俺とセックスしたらこの写真は消してやるよ」
戸惑いが隠しきれていない郁美を横目に俺はずかずかと部屋に押し入った。


寝室に入ると電気の消えた部屋の中に
小さな寝息が響いていた。
ベッドの上で男が寝ている。
「いつも見る旦那だぜ。
すやすや寝ちまってよぉ」
「…し、静かに…
してよ……」
「さーて…
セックスだ」
「…あの…せめて…
リビングで……」
「…あ？
チッ…めんどうだな…
郁美…服を脱げ！」
「…え…っ」


郁美はパジャマを脱ぐと
ぷるんとした肌を曝け出した。
「……うぅう……ご主人様ぁ……」
「命令するとすぐに
こーなっちまうな笑
めんどうな能力だぜ」
「……あの………
夫が起きる前に……
お、お願いしますぅ……」
「よーし郁美。
ベッドの上でまんぐりポーズだ。
ケツ穴をこっちへ向けろ！」
「……は、はい……」



郁美は寝ている旦那の横で
股間が丸見えになるポーズで
寝転がった。
「くくく…全部丸見えだぞお笑」
「恥ずかしい…よぉ…」
「アナルもぷっくりしてて
昼間の拡張の成果だな笑」
「うう……ちょっと
ヒリヒリしますぅ…」


「じゃ～ん♪
今日はまだだったからな。
浣腸が恋しいだろう」
「え……!?
あの…でも……」
「毎日毎日挿れてたからな。
浣腸無しでは1日が
終われないよなぁ…郁美」
「えと…あの……
は、はい……うう…」


俺は浣腸器の先を郁美のアナルにぶっ挿した。
「俺の小便だぞ〜気持ちいいか〜？」
「ご主人様のお…おしっこ…っ！」
「温かいだろ〜さっき出したばかりの新鮮なおしっこだぞお笑」
「ひや…ひやいい……お腹…入ってきますぅ…」


「旦那の寝ている横で最愛の妻のケツ穴に他人の男の小便が注がれてるとはな…笑」
「ううう……！」
「どうだ郁美い！気持ちいいだろう！」
「…浣腸お…良いですぅ…苦しいけど…気持ち…いい…♥」


郁美は浣腸で感じるようになっていた。
俺の浣腸調教の成果だ。
「よーし…いい飲みっぷりだ」
「んん…はぁ…はぁ……はぁ…」
「そうだ、空気も入れてやるからな」
「んぐっ……！そ、それだめぇ…っ…おなら出ちゃうんですぅ…」


「ほら、おかわりだ。まだまだ挿いるぞお！」
「んぐっ…！はぁ…はぁあ…」
「寝ている旦那にも郁美の下品な音を聞かせてやらないとな笑」
「…そ…そんなぁ…んんっ…はぁ…あぁ…」


「どんどん挿るぞぉ！2本目！3本目！」
郁美のアナルにどんどん浣腸汁が注ぎ込まれていく。
「お腹…んんぐいっぱい…い…！」
「浣腸は飽きねぇな笑最高に興奮するぜ」
「お腹痛いですぅ……もう…出したいよぉ…」


「よーし…これで全部だぞ」
「ご、ご主人様ぁ…は…はやく…あの…出したいですぅ…」
「……だめだ。郁美、我慢しろ」
「…が、我慢…!?うう…お腹…痛いよお…」


郁美はアナルからおならを漏らしながら
お腹をぎゅるぎゅると鳴らしている。
「はぁ…はぁ……
漏れちゃい…ますぅ…」
「我慢だ、郁美。
このままお前と
浮気セックス
してやるからな笑」
「……ふぇ…？」
「そのまま股を
開いておけよ〜」


俺はちんぽを勃起させ
郁美の股に
ちんぽを当てがった。
「ご主人様ぁ…
こんなの…
バレちゃいますぅ…」
「郁美が喘がなきゃ
バレねぇよ笑」
「そ…そんなぁ…
うう…ゆっくり…
お願いしますぅ…」
「……ふっ笑」


「よーし…一気に奥まで挿れてやるぜ」
「だめっ…そんな…あぁ…」
俺のちんぽが郁美のまんこにずるっと入っていく。
「あぁ～…やべぇいつもと違うこの感覚。すっげぇ興奮する」


ちんぽがずぼっと挿入され
その刺激で郁美は
びくんと身体を反応させた。
「あんっ……んんん！」
「おらおらおら！
まんこ締めろ！
郁美いい！」
ズポッ
あっ♡
「いきなり…
は…激しいい…ん！」
「…うおおお…！」


「浣腸のカエル腹がそそるぜぇ…エロすぎっ笑」
「んんぁ…だめぇ…ぇ…お腹…揺らさないでぇ…」
俺がピストンする度に郁美の腹がたぷたぷ音を立てる。
「はぁ…声でちゃ…ぅ…気づかれちゃうぅ…」


「あぁ～気持ちぃ～
浮気セックス
最高お～笑」
「あぁんっ…
んぐっ…あぁ…！」
ズポッ
あっ♡
「…郁美の弱いところ
責めてやるぞお！」
「だめぇ…え！
今は…だ…めぇぇ…！」


「ここをカリ首で擦ってやると…おらっ！」
「ひにゃぁあ♥だめぇえぇ…気持ちいところ責めないでぇえ！」
「きもぢ……いいっ……ご主人様ぁ…だめぇえ！」
すると…隣でごそごそと物音がした。


「…んん…郁美……?」
「え…!?」
(おっと…!?びっくりしてちんぽが抜けちまったよ)
旦那が郁美の声で起きてしまったようだ。
「あ、あなた……ど、どうしたの……?」


「…もう…朝…か…？」
「ま、まだよ…起こしてごめんなさい…」
「…んん…わかった…むにゃむにゃ…」
ぷる
俺はそんなやり取りにさらに興奮を覚えた。
「……笑」
「え…待……って」



俺はさっきよりも激しく郁美のまんこをピストンし始めた。
「んんんっ…!?」
「ドキドキしたか？郁美ぃぃぃ！」
ズボッ
あっ♡
「やめっ……また起きちゃう…っ」
「…次起きたらさすがにバレるかもな笑」


「あぁ〜やべ…射精そう…！」
「はぁ…はぁ…バレちゃう…う…バレちゃうよぉ…！」
「郁美の大好きな中出ししてやるぞぉ！おらおらおらおら！」
「だめ…だめぇ…あああ…あああああ！…」


「おらっ！種付けだっ！」
郁美のおまんこに精液が注がれていく。
『んぐっ♥』


「あぁ〜出る出る」
「あぁ…♥
はぁ…はぁ…
起きないでぇ…」
「寝ちまったか笑
良かったな〜郁美」
「あぁ…はぁ…
…んぐぅ…ぅ…」


俺はまんこから
ちんぽを引き抜くと
郁美の口元へ
ちんぽを押し付けた。
「んんんぐ…！？」
「ほら、郁美。
ちんぽ舐めろ」
「んんんっ！？
はむぅ…ううう！」


「んん…はむぅ…ぺろ…ぶっちゅぅ」
「射精後のタマ舐めは気持ちいいな～」
郁美は舌を動かし俺のタマタマを舐めていく。
「いいぞお郁美。亀頭の先もくんくんしろ」


「げほっ…っじゅる…
タマタマの匂い…
くらくらしますぅ…」
「あぁ～気持ちぃ～
ぞくぞくする」
郁美はお腹を押さえ、
苦しそうな顔で
舌を動かした。
「ご主人様ぁ…
お腹…が…
限界ですぅ……!」


モワ
「仕方ねぇな～ほら、最後に亀頭の先もちゃんと舐めろ」
「ひゃい…んんぐ…れろ…っぢゅっちゅ♥」
「あぁ～亀頭ペロペロ気持ち～ふ～」
「んんっぢゅ…はぁ…はぁ…おぉぉ…んんっ…げほっ…」
ぶる



郁美は足をがくがくさせながらベッドの上でうんこ座りになった。
「はぁ…はぁ……お腹…苦しい…いですう…」
はーっ
ぶる
はーっ
「すげぇ屁の量だな笑」
はーっ
「ご主人様ぁ…はやく…トイレに…行かせてください…い」
「……いいや…ここでするんだ」
モリ


「こ…ここで…！？でも…夫が……」
「あ？じゃぁ夫の顔に浣腸かけてもいいんだぜ？笑」
はー
「…うう…わかりましたぁ…出しますぅ…う！」
「おお……ケツの穴がヒクヒクしてきたぞぉ」


郁美は身体をびくっとさせながら
尿道からおしっこを漏らし始めた。
「あぁぁ…だめぇ…っ…
おしっこも漏れちゃううぅ…♥」
はーっ
ぶる
はーっ
はーっ
「あ～あ笑
ベッドが小便塗れ笑
郁美の小便臭が
染みついちまうなぁ」
「あぁ…んぐ
きちゃ…うう…あぁ…
出ちゃううう…う♥」
びくっ


『うぐううう…♥』
郁美のアナルから水鉄砲のように小便浣腸汁が噴出した。
「がはは…すげぇ勢い笑」
「…あぁ…出ちゃううう♥」
モワ
ぶる


「うぅ…お腹ぎゅるぎゅる…おさまんないよぉ…んんっ」
「うへぇ~すげぇ屁の匂い…こりゃ奥のもんが出てきそうだな笑」
はーっ
はーっ
はーっ
「…やだ…ぁ うんち…だめぇ…いやなのお…お！」
「うんちしたいんだろお？ぶりぶりうんちしてみろ！郁美！」
じょろろろ
モリ
プシャ〜〜


郁美のアナルがめくれ上がり、そこから太いうんちが飛び出した。
『……あぐうぅっ！』
「うおおっ～！郁美ぃ！うんちが出てるぞお！」
「……だめぇ……え……み、見ないでぇえ……え」


お゛っ
はーっ
「あぁあ…うんち…ぁしちゃ…てるぅ…!」
「おしっこにおならにうんちでひっでぇ匂いだな笑」
はーっ
はーっ
「あぁあ…うんち…太いの…出ちゃううう…う!」
「あ~あ笑 まーた小便漏らして。ベッドがびちょびちょだ笑」
モワ
プシャ～～


ベッドの上にぼたっと音を立て
太いうんちが山になった。
『…ひぐぅ♥』
「うへぇ~
ベッドの上が
糞尿まみれだわ笑」
「…あぁぁ……
もう…だめぇぇ…」
郁美は排泄し終えると
ベッドの上に倒れ込んだ。


郁美はそのまま失禁してしまった。
（せっかくの新婚ベッドが糞塗れ…笑
こりゃひでぇぜ）
（にしても…
羞恥プレイは興奮するな。
もっとおもしろいことが
できないもんか…）
（…お、そうだ…
映像制作会社のやつを洗脳して……
アレを借りてくるか…笑
くくく……わくわくしてきたぜ）
俺は思いついたプレイを妄想し
ちんぽを勃起させながら
糞尿まみれの寝室を後にした。


アナル開発
4週目


翌日。
俺は朝からあるものを調達して
アパートの前に戻ってきた。
（案外簡単にゲットできたな笑
まぁどんな理由だろうが洗脳すれば
ほいほい貸してくれるのは
ありがたいこうた）
「……行ってくる。
……ちゃんと片しておけよ」
「ぐす……はい……」
「……ん？」
（郁美と旦那の声だ）
アパートからしかめ顔の旦那が出てきて
仕事へと向かっていった。


「……あ……」
郁美は俺の姿を見つけると
鬼の形相で向かってきた。
(なんだ……?)
「……あなた……
昨日私に何をしたの？
あなたが訪問してきてから
記憶がないし……
それに……目が覚めたら……」
(しらばっくれとくか笑)
「あの～……
なんのことでしょうか？」
「……はあ？……
と、とぼけないで！
あなたのせいで……その……」



「俺何かしましたか？」
「……え…あの……何も覚えてないんですか？」
「……えー……？」
「……夢？……いいえ……だって実際ベッドが……」
「ベッドがどうかしたんですか？」
「……え……いや……ど、どうなってるの……？」
郁美の戸惑った顔を楽しんだ俺は郁美に命令を告げた。
「ほら、郁美。こっちへこい！」
「……！？……はい……」


郁美は虚ろな目になり
俺のそばに寄ってきた。
「よーし郁美。
今日は俺と
ドライブだぞぉ」
「…ご主人様ぁ…
今日はその…
掃除の予定が…」
「掃除？ あぁ笑
旦那が寝ている横で
大便ひり出すのは
気持ちよかったかぁ？」
「…うう……」
「盛大にぶちまけたからな。
ベッドが小便と糞まみれで
ベットベトだろうなぁー
あははは！」

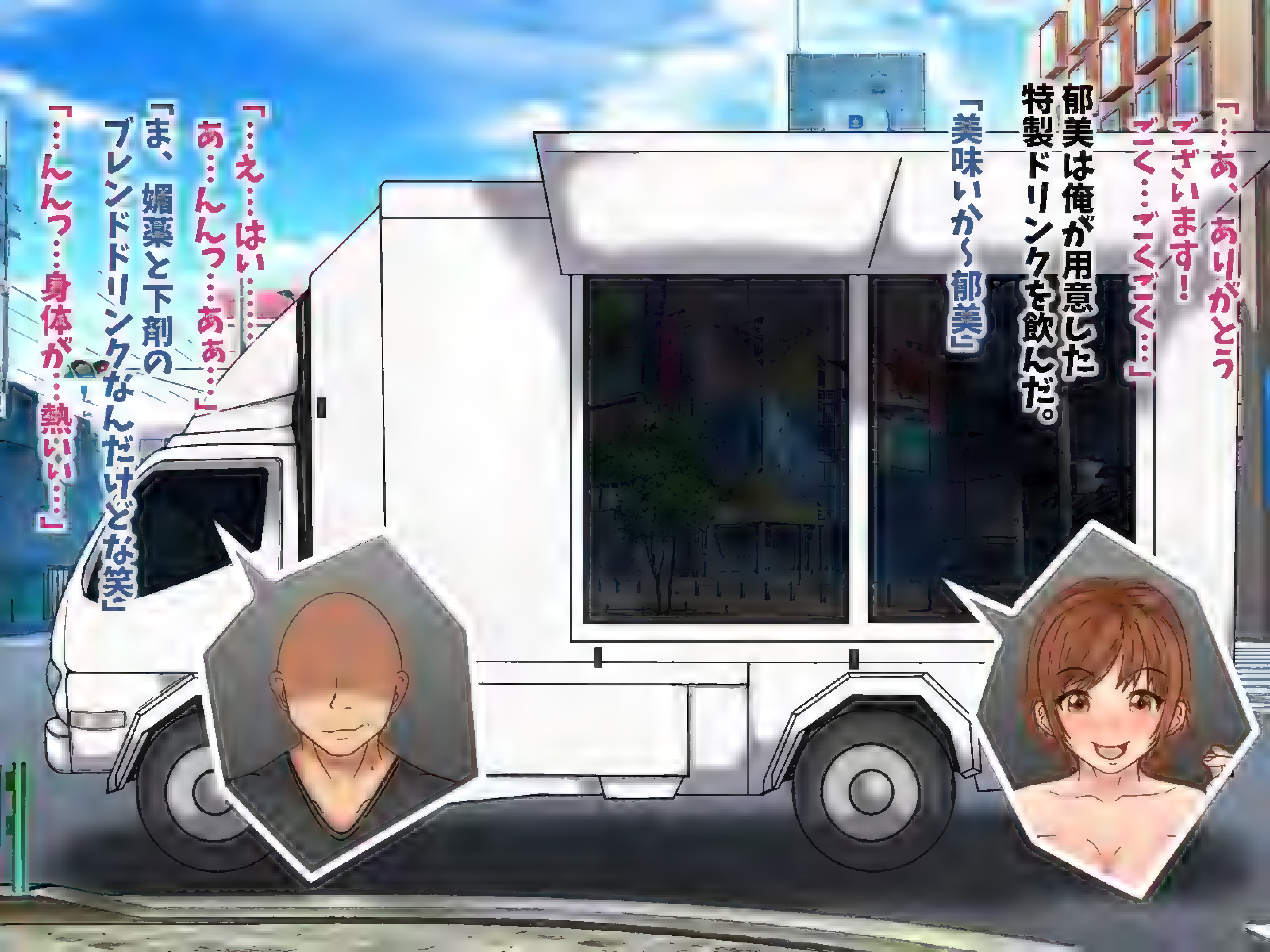

「夫に叱られてしまいました…
いい歳しておもらし…
しかも寝小便ならまだしも
寝糞はちょっとって…
引いてました…」
「懐の狭い男だな～。
俺は郁美のおもらし姿が大好きだから、
何度でもゆるしてあげるよ。
今日もたっぷり可愛がってやるからな笑」
「…は…はい……」
「さーて、掃除なんかより
俺とのドライブを楽しもうぜ。
郁美のために調達してきたんだからな」
「あの…なんでしょう…？
トラック…？」


「郁美、お前は裸になって後ろに乗れ」
「…は、裸……!?」
「トラックの荷台が部屋みたいになってるんだぜ」
「……そ…そうなんですか…?」
郁美は階段を登り荷台の入口から中へ入った。
「中もなかなか広いだろう笑」


中に入った郁美は
すぐにトラックの仕様に気が付いた。
「…え…あの…ご主人様ぁ…
そ、外が見えます…！」
「そうだぞ～
さぁ服を脱げ」
「…でも…
みんなに見えちゃいます…ぅ…」
「安心しろ、郁美。
これはマジックミラーだ。
お前の姿は俺からは見えていない。
中で裸になってても
他の奴らには見えないぜ」
「…マジック…ミラー……
な、なるほど…です……
でも恥ずかしいよぉ…」
「ほら、はやく脱げ。
出発するぞ」


俺も車に乗り込み、エンジンをかけた。
「…うぅ……お外で裸になってる…みたいですぅ……」
「解放感あるだろぉ？笑」
「よーし…出発だ。このまま街中をぐるぐる回っていくぞ〜」
「…えぇぇ…ま、街中…！？は、恥ずかしい…ぃ…」
「マジックミラーだから問題ないだろ笑」


俺は車を走らせ、街中を進んでいく。
住宅街、交差点、商店街…
そして駅のロータリーで
車を停めた。
「…うう…なんか……
じろじろ見られてる…
感じがします…うう」
「なんだ、郁美。
興奮してるのか?笑」
「…うう…ん…
恥ずかしいです……」
「まぁ落ち着けよ。
そこに置いてあるドリンクで
気分でも落ち着かせろ」


「…あ、ありがとうございます！ごく…ごくごく…」
郁美は俺が用意した特製ドリンクを飲んだ。
「美味いか〜郁美」
「…え…はい……あ…んんっ…あぁ…」
「ま、媚薬と下剤のブレンドドリンクなんだけどな笑」
「…んんっ…身体が…熱いぃ…」



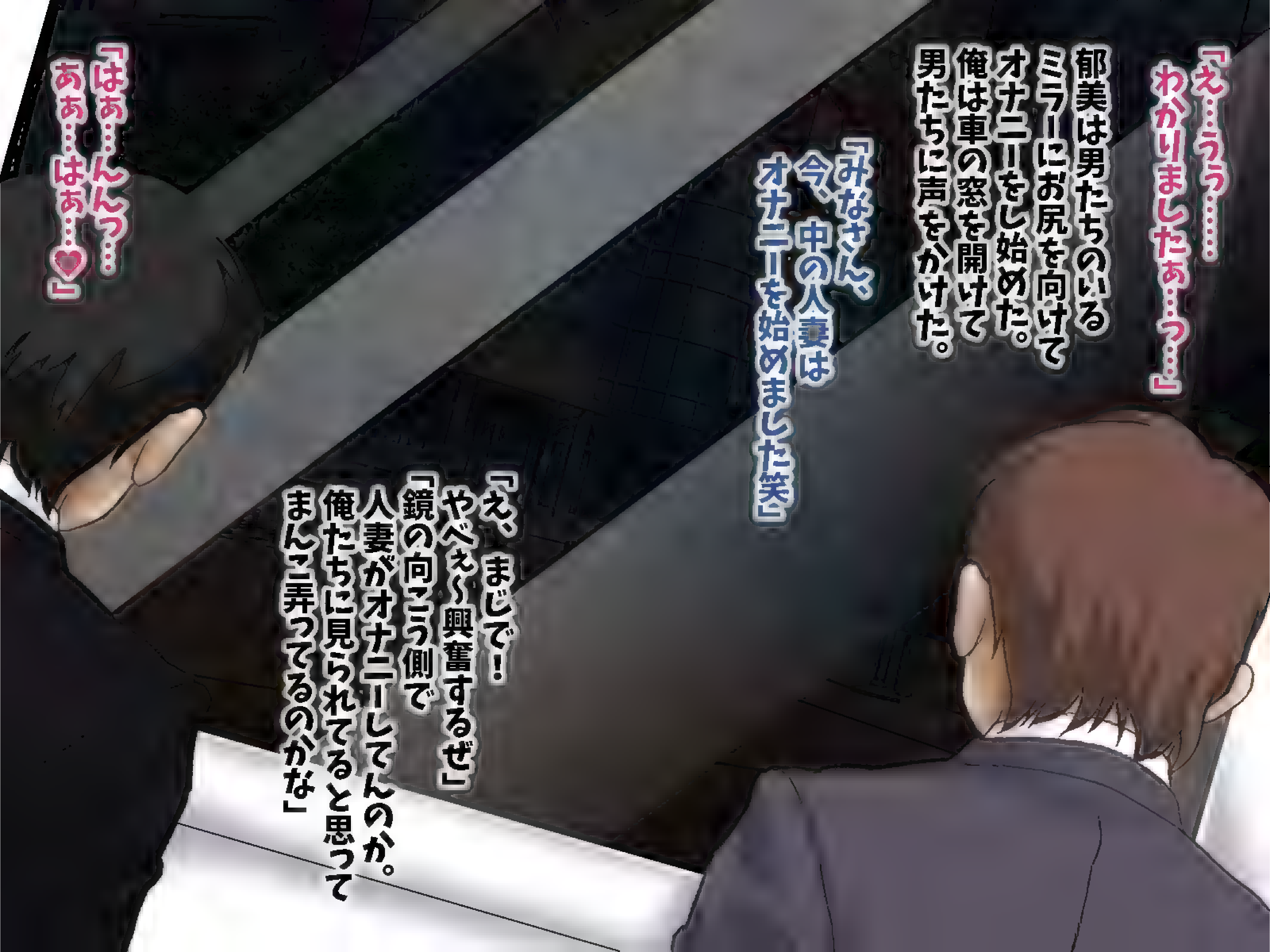
俺は車を降りると、トラックの車体に紙を張り付けた。
「…ご主人様ぁ…お腹…痛いですぅ…」
「まだ我慢しろ。これからお前の脱糞をみんなに見てもらうんだ」
「…ふぇ…！？…」
人妻・Iさん
アナル開発中
夫には内緒
おなら絶頂
脱糞大好き
「ご通行中の男性諸君～男の夢が詰まった車が来てるぞ～」
俺はロータリーにいる男共に大声で通知した。



俺の声掛けで男共がぞろぞろと車の前に群がってきた。
「…ご主人様…！人がいっぱい…近寄ってきてますぅ！」
「この車は珍しいからな笑」
男共は車を見ると、興奮した声で話始めた。
「これってあのAVでよく見るやつだよな！？」
「おおお！すげぇ！」
「この中にこの写真の子がいるの？」
「やべ…想像しただけで勃起してきたわ」
人妻・Iさん
おなら絶頂♪



「…うぅ……みなさん中の様子を張り付くように見てきてますぅ…本当に…み、見えてないんですよね…？」
「あぁ…見えてねぇよ。見られてると思ってるのはお前だけだ」
「脱糞大好き、だとよ笑」
「変態女じゃん」
「あ～この子が脱糞するとこ生で見てぇえ～」
「よーし…郁美。身体が火照るだろう？ミラーにケツを向けてオナニーしろ」
人妻・Iさん
アナル開発中
夫には内緒
おなら絶頂♪
脱糞大好き


「え…うう……わかりましたぁ…っ…」
郁美は男たちのいるミラーにお尻を向けてオナニーをし始めた。俺は車の窓を開けて男たちに声をかけた。
「みなさん、今、中の人妻はオナニーを始めました笑」
「え、まじで！やべぇ～興奮するぜ」
「鏡の向こう側で人妻がオナニーしてんのか。俺たちに見られてると思ってまんこ弄ってるのかな」
「はぁ…んんっ…あぁ…はぁ…♡」


「…視線を感じますぅ…
心臓がドキドキして
…身体が熱いぃ…♥」
「郁美には露出狂の
才能がありそうだな笑
そのままオナニーを続けろ！」
「…ひゃいぃ…♥」
人妻・Iさん
アナル開発中
おなら絶頂♪
「あぁ〜見てぇ」
「人妻の調教アナル
拝んでみたいぜ〜」
「さてと…そろそろ…」
俺は頃合いを見定めると、
運転席にあるスイッチを
ぽちっと押した。


マジックミラーが下の方から
徐々に薄くなっていく。
「きたきた笑」
「……？」
「おい…これって…」
人妻・Iさん
アナル開発中
夫には内緒
おなら絶頂♪
脱糞大好き
「…んんぁ……♥
あぁ…はぁ…んん♥」
郁美はその変化に気付かず
俺の指示通り
オナニーを続けている。
「…くはは笑」



マジックミラーが消え、男たちの目の前には郁美のデカケツがどどんと姿を現した。
「うおおお！すげぇえ…生まんこー！」
「てかケツでけぇ笑
うっわ、丸見えじゃん」
「んあっ…はあ……♡」
びくっ
「マジでオナニーしてるよ」
「こりゃ本物だな。
変態人妻エロお笑」


「はぁ…うぅ……
お腹ぎゅるぎゅる…
きてるぅ…はぁ…」
「お腹苦しいか？
苦しくて気持ちいいだろ？
そのままオナニーを
続けるんだ」
「そんなぁ…んんっ♥」
「あ、ケツ穴が
ヒクヒクしたっ！」
「やべ…勃起してきた」
男たちは涎を垂らしながら
郁美のケツを眺めている。


「お腹…痛いよぉ…お…おなら出ちゃううう♥」
郁美は下剤の効果でアナルから放屁を漏らしていく。
「みなさん、中の人妻はおならを連発しています」
「え…おなら！」
「この女…俺たちの方に向かって屁こいてるのか笑」
「まじかよ…あぁ～嗅いでみてぇ」
ぶる


「ぐぅぅ…んんっ！聞かれて…ないよね…？おなら止まんないよぉ…」
「でも気持ちいいだろう？みんなに見られながらの放屁オナニーは笑」
「んんぁ…っ♥もうお腹が…限界い…ですぅ…」
「あ〜このデカケツにちんぽ押し付けてぇ〜」
「柔らかそお〜」
男たちは己の股間をズボンの上から弄りながら郁美のケツ穴を視姦していく。



「あぁ…だめっ…おしっこ…んんっ♥」
男たちは郁美の尿道から小便が零れる瞬間をしっかりと目撃した。
「おい、見たか！」
「女のおしっことかはじめて生で見たわ」
「飲みてぇえ！」
「スケベな女だな笑」
(よーし…そろそろフィニッシュか)
はー
ぶる



「もぉ……はぁ……お腹よじれちゃうぅ……」
「しょうがねぇな～いいぞ、郁美。ぶりぶり排泄しろ。ちゃんとイくんだぞ」
「ひや…ひやぃぃ…♥」
「みなさん、脱糞ショーが始まりますよぉ！」
「おおおお！」
「人妻の生脱糞だと！」


男たちはさらにミラーに顔を寄せていく。
「あぁ…うんち…うんち出ちゃううう…うみんなが見てるところにぶちまけちゃうよおお」
「うおおおお！」
「脱糞しろ！」
「変態女ぁ！」
「屁コキ女！」
「露出狂！」
「糞見せろ！」
「おら！イけ！郁美！」
「はううう…！」


「出りゅぅぅ…♥」
「うぉぉお！」
「すげぇえ！」
郁美のケツ穴から大量の下痢便が噴出し、ミラーを汚していく。


あぁ
はーっ
はーっ
ビクッ
はーっ
「すげぇ量の糞汁だな笑」
「こうちにまで臭ってきそう」
「あぁ…はぁてんんっ…うんち…出ちゃ…ん♥」
「身体ビクビクさせてんな」
「脱糞でイったのか？」
「下品すぎて最高…笑」
モワ
ぶる
「こりゃまた…盛大にぶちまけたな笑」
「はぁ…はぁ…♥」


「実はな～郁美。マジックミラーは上半分だけなんだ」
「え……何……言ってるんですか…？」
「男共のにやけ顔を見てみろ。お前の下痢便絶頂は丸見えだったのさ笑」
「嘘……！？
いやあああああ！」
郁美は下痢便を漏らしながらその場に倒れ込んだ。



俺はその後、車を発進させ、
失禁した郁美を乗せたまま
アパートへと戻ってきた。
「着いたぜ」
「ご主人様ぁ…
…ひ、ひどいですぅ…
みんなに見えてたなんて…」
「顔は見せてねぇから安心しろよ。
公開脱糞は興奮しただろ？」
「うう……
…心臓に悪いですぅ……」
「今日のドライブ楽しかったな〜
明日はデートに行くぞ。
さてと…糞塗れの車を返しに行くか笑」


俺と別れた郁美は
自室に戻ると
寝室から匂う悪臭に顔をしかめた。
「うう……げほっ……
臭っさ……げほ……」
寝室のベッドの上には
自分の小便と糞便が溢れ、
鼻の曲がるような
匂いを発していた。
「……あれ……
私……今日1日何して……
た、大変……もうこんな時間！
げほっ……そ、掃除しなきゃ」
郁美は正気に戻ると
すぐに掃除を始めた。
「……ん……何……また
お尻がひりひりしてる……
ここのところずっと……
私……どうしちゃったの……？」


翌日。
俺と郁美は2人でデートにでかけた。
「ご主人様ぁ…」
「どうした郁美？俺とのデートは楽しいか～？」
「パ、パンツ…返してくださいぃ…」
「ノーパンデートはドキドキするな～笑
郁美のスカートが短いせいだぞ～」
「…お尻も…苦しいですぅ……」


郁美のアナルには極太アナルプラグが挿入されていた。
「極太だからな笑」
「はぁ……お尻に力…入れないとぉ…抜けちゃう…」
「デート中に抜け落とすなよ～ノーパンアナル中毒女なのが近所にバレちまうぜ？笑」
「…ひぃ……そんな…ふんぐぅ…！」
「そうそうアナル締めろよ～その方がプラグの感触も楽しめるだろ？笑」


郁美は腰をぷるぷるさせながら
俺と一緒に歩き続けた。
「んんはぁ…はぁ…♥」
「吐息が漏れてるぞ郁美い～笑」
「…はぁ……お尻が…苦しいですぅ…」
「お前はそれが気持ちいいんだろ？笑」
「…お尻が……閉じなくなっちゃいますぅ…」
「そうするつもりだから安心していいぞ笑」


郁美はケツから腸汁を垂らし
股を閉じながら歩いている。
「はぁはぁ…♥
んあぁ…」
「どうした郁美。
もう限界か？」
「…はぁ……いい……
お尻…から…おならが
漏れちゃうんですぅ…」
「うたく…せっかくのデートで
屁ばっかりしやがって」
「…ご、ごめんなさいぃ……」
「くくっ笑
ま、俺にはそっちの方が
楽しいけどな」
プス～


「あぁあぁあぁ♥」
ブッブリリッ♥ブッブッブスゥウ♥
郁美はアナルプラグの隙間から
卑猥な音を立てながら中腰になった。
「…もお限界ぃ…
太すぎて…
刺激耐えられないぃ…」
「しょうがねぇな～
デートの途中だってのに
ケツイキか～？笑」
「…ご、ごめん…なさい…
ご主人様…お…お願いします…
抜いてくださいぃ…」
「……郁美。
自分で抜いてみろ」


「じ、自分で…ですか…」
「手を使うなよ。ケツだけで出すんだ」
郁美はその場にしゃがみこんだ。
「…ふんぐぅう…ふ、太すぎて…抜けないですぅ…!」
「じゃあ…ずっとそのままだな笑」
「…そ、そんなぁ…!」


「……ふんぐぅぅぅ……♡
はぁ…はぁ…んんっ」
「おら、もっと気張れ！
ぶっ太いうんちを
出す時みたいにな！笑」
「……はぁ……
太すぎますぅ…ぅ
お尻…めくれちゃうぅ！」
「はやくしないと
誰か来ちまうぞ～笑」


郁美は下半身に力をいれ気張った声でプラグを押し出していく。
「あぁあ…ふんぐっ…♥おじりぃ…拡がるぅぅう！」
ぶる
「小便も漏らしてるぜ～おいおい…もっと踏ん張れ！」
「ふんぐぅう♥ふんっふんっんんん！おおおおおっおお！」
じょろろろ



「ほにゃあ…♥」
郁美のアナルからプラグが飛び出し、気の抜けた声を発した。
「お、出てきた出てきた笑
可愛い声が出てたぞ～郁美」
「…太いの…出るぅぅ
あぁあ…出てるぅ♥」



「ほら、もうすぐだぞ～一気に出しきれ！」
「ひやぃぃ…ふんぐぅうっ♥はぐぅううう♥」
「ケツの穴がすっげぇ開いてるな笑」
「……ふんぐ♥で、出る…っ…う！」


郁美のアナルからアナルプラグがごろんと飛び出した。
『…んぐうあ♥』
「えらいぞ郁美～こんな太いの普通踏ん張っても出せないぜ～」
「…おひりぃ…スースーするぅ…♥」


「綺麗なアナルローズだぞ笑
ケツ穴がバカになっちまうな～笑」
「はぁ…はぁ……んんぐぅ…っ…んん♥」
「よーし…すっきりしたか？
ほらデートの続きだ」
「はぁ…い……んん…あぁ…ん」


俺は郁美にパンツを渡した。
「おらよ、郁美。パンツ返してやるよ笑」
「え…はい……」
「……どうした？嬉しくないのか？」
「…いえ…あの…ちょっとトイレに行ってきてもいいですか？」
「あ？今たくさん小便しただろ？」
「……いえ……う、うんちですぅ……踏ん張ったせいで…おりてきちゃったんですぅ…」
「うんちか……そうだな……」


「うんちもここでしろ」
「ふぇ……！？
こ、ここで…あの…
野糞ですか…？」
「…いいや…
パンツを履いたまま
うんちするんだ」
「…履いたまま…！？
そ、そんなことしたら
うんちまみれに
なっちゃいますぅ…」
「そうだぜ？
郁美の純白パンティーの中に
ぶりぶり排泄するんだ」
「…そ…そんなぁ…」
「ほら、はやくしろ！」


「うんちしたいんだろ？我慢せずにぶりぶりしていいぞ笑」
「……うう……っお漏らしみたいですう……」
「今更何言ってんだ笑郁美は何度もお漏らししてるだろ笑」
「……うう……出しますう……」






「あぁ…ぬるぬるして…気持ち悪いよぉ…んんぐぅ♥」
「すげぇ量だな。パンティーがうんちでずり落ちてやがる笑」
「……ふんぐ♥まだ…出ちゃう…うんちきちゃうぅぅ♥」
郁美のパンティーの中で大便が吐き出る音がぶちぶちぶちと聞こえてくる。


郁美のパンティーの隙間から
収まりきらない糞が漏れ出ていく。
「…出ちゃうぅぅ♥
いっぱい…いい♥」
モリ
「うぉおお！
うんちがいっぱい
零れ落ちてるぞお笑」
「…漏れちゃう…♥
あぁあ…うんち…
出ちゃう…んんうう♥」
ぶる



「盛大に出したなぁ笑」
「…んん…♡お尻…重いぃ…はぁ…はぁ…」
ぶる
「くはは…郁美はうんこたれオナニーの上級者だな笑」
「うう…うんこたれなんて…ひどいですぅ……」
モリ



郁美は立ち上がり
うんちまみれのパンツを脱ごうとした。
「おい、郁美。
勝手に脱ぐな」
「え……
でも…お尻が
気持ち悪いですぅ…」
「…デートは
まだ終わってないだろ。
履いたまま我慢しろ」
「…そ…そんな…
こんなの…バレちゃうぅ…」
「糞垂らすなよ～笑」
俺と郁美はその後もデートを続けた。
郁美のパンティーから汚物臭をまき散らしながら。
モワ～ン
モワ


アナル開発
5週目



調教をはじめて数週間。郁美もだんだんとアナル弄り無しでは満足できない身体になっていた。
「あ…ご主人様ぁ…待ってましたぁ…」
「パンツ一丁でお出迎えかよ笑まさかオナニーしてたのか？」
「うう…はい…い…お尻を…指で弄ってましたぁ…♥弄ってないと…落ち着かないんですぅ…」
「郁美は変態さんだな～でも自分の指じゃ満足できないだろ？俺が弄ってやるよ、嬉しいか？」
「は、はい…♥ご主人様に弄って欲しいですぅ！」


俺は郁美からパンツをはぎ取ると
ベッドの上に押し倒した。
「あぁんっ…♥」
「ケツをこっちに
突き出すんだ！」
「はいぃ……♥」
「おいおい笑
おならが漏れてるぞ？
まったく郁美のケツ穴は
ガバガバだな～」


「くんくん…すーはー
…げほっ！臭っさ笑
言いつけ通り…
たっぷり溜めているな笑」
郁美のアナルからは
エぐい匂いが放出されていた。
「…嗅いじゃだめぇ…♥」
「排泄を我慢してから
何日だ？」
「もう…5日ですぅ……」


「便秘5日目のケツ穴か〜
あ〜美味そ…いただくとしよう笑
ぺろ…っぢゅぢゅぢゅぢゅ！」
「んぎゃああぁ♥
おひりぃ…あぁあ」
「あ〜じゅるるるる
臭くて下品な味だぞぉ」
んぷっ
あっ♥
「あぁあぁ…んんっ…
き、気持ちいですぅう♥」


「じゅるるるるぅ！あ～郁美の味だぁ！れろれろれろ」
「んんぅ…うぅ…♥お腹に…響いちゃうぅぅ♥」
ぶる
あっ
「臭い…臭いぞお郁美！臭くてたまらねぇ…笑っぢゅるるる！」
「あぁぁ…あぁあん…♥」
モゾ
ぐい
ぺロ
どく


郁美の腸内では肛門を刺激され
ぜんどう運動が活発化していく。
「んにゃぁあぁ♥
うんちおりて
きてますぅ…♥」
「うぉ…さっきよりも
おならの匂いが
強烈だ笑」
「おひり…いい…♥
おかしくなるぅう♥」
「郁美のうんちと
キスできそうだな笑」


「…んん…あぁ…あれ…ご主人様ぁ…うんちが固くて止まっちゃいましたぁ…」
「あぁ？5日分の糞だからな。量もすげぇだろ」
「お腹…苦しいぃ……」
「しょうがねぇな～俺がうんち出すの手伝ってやるよ笑」


俺は郁美を四つん這いにさせた。
「ご主人様ぁ…浣腸ですかぁ？」
「なんだ郁美。浣腸がいいのか？」
「浣腸…好きですぅ…♥」
「くく…だが残念だな。今日は浣腸じゃない」



俺は指を伸ばすと
郁美のアナルに
ずぼっと挿入した。
「…んんぅ♥」
「ほかほかだぞ～
もわんとした
空気が当たるぜ」
ぶる
ズポッ
「…指入れちゃ…
だめぇ…ぇ…♥」
「あぁ～臭っせぇ笑
たまんねぇな」


「今の郁美なら腕もすんなり入っちまいそうだな」
「え…！？」
俺は握り拳を作ると郁美の肛門に押し当てた。
「前々からアナルフィストがしたかったんだよな〜」
「アナル…フィスト……！？」



「郁美のケツの中に俺の腕を突っ込むのさ」
「ご主人様の腕が…んんっ…」
ぶる
ビクッ♥
「ご主人様ぁ…こ、怖いですぅ…」
「けつまんこの力抜けよ〜郁美。挿れるぜぇぇぇ！」


「おらっ！」
俺の腕が郁美のアナルへ
ずぼっと入っていく。
ずぽっ
「…んぎいいいいい♥」


「あ～すげぇ締め付け笑
これが郁美の
アナルの中か～笑」
「…あぁ…あ♡
ご主人様の腕ぇ
太すぎますぅ…！」
ぶる
「腕の先に
大便が当たってるのが
わかるぞ～」
「…いやぁあ…あ♡」


「もっとだ！」
俺は右腕をぐぐっと肩まで突っ込んだ。
「…はがぎゃああ♥」
「すっげえ…郁美のケツの中あったけええ～笑」


「あ～ぬるぬるして最高だぞ～郁美」
「ふ…深いいいい…♥おしりぃ…壊れちゃうう…」
「よーし…郁美のうんち発見♪掴み取ったぞ～」
「…ひゃぁん♥…な、なにして…」


「俺が郁美の便秘うんちを掻きだしてやるからな〜」
俺は腸内に溜まったうんちを掴むとそのまま腕をゆっくり引き抜いていく。
「…おっ…おっ…♥んおおおっ♥」
「すげぇ声だな笑気持ちいいのか〜郁美ぃ！」
モリ



次の瞬間、郁美のアナルから俺の腕が引き抜かれた。
「…あぎゃ♥」
「うっへ～笑 郁美～出たぞ～ ほかほかのうんち笑」
「…おじりぃ… …あぁ…あぁあ♥」
郁美は足をガクガクさせ小便を漏らした。



郁美のアナルはぱっくりと開き、もわんとした空気をまき散らしている。
「ははは笑 郁美の腸内が丸見えだぞ～」
「…恥ずかしいですぅ… 見ないでくださいい…♥」
「郁美ぃ… うんちを掴み出されてお前イったな？」
「…うう…ごめんなさいいい… イっちゃいましたぁ…♥」


あぁ
「…まだまだ奥に溜まってそうだな」
「…んんっ…♥」
「もっといっぱいぶりぶりしたいだろ？今出したうんちも戻してやろう笑」
ぞくっ
ぶる
「…も…戻す？」
俺は手に持った大便を握ると郁美のアナルへ腕を突っ込んだ。



「おおらっ!」
俺は郁美のアナルに
再度腕を突っ込んだ。
「…はんっ♥」
ズボッ
「どうだぁ～?笑
大便がアナルに
戻される感覚はぁ!」


「おおお…んんごぉ♥
頭…真っ白に…
なりゅううう…う♥」
「さーて…郁美の
臭っさい便秘うんちは
どこかな～？笑」
「…掻きまわしちゃぁ
だめぇ…イくっ…♥
お尻イっちゃううう♥」
「さっきより奥まで
探してやるからな～」


「おっ…すごいのあるぞ！こりゃ掴み出しがいがある大きさだぞ笑」
腸内に詰まったうんちを俺は鷲掴みした。
「…あぁぁあ…♥お腹あ…ぎもぢいい♥あぁ…いい…い♥」
「郁美ぃ！肛門緩めろ！でかいの出るぞ〜…おら！」


郁美のアナルから
ずっしりとした大量の大便が
俺の腕で掴み出された。
「…イぐう♥」
「うおおおおお笑
うんち重っ笑」
俺の右手には
郁美の糞が山のように
握られていた。


「奥のうんちまで掻き出したからな。便色が薄いのも混じってるな笑」
「…うんち見ないでぇ恥ずかしいですぅ…あぁんん…んん♥」
「こんな大きな塊を一気にひり出したんだぞ～気持ちよかったろ～？笑」
「…はぁ…はぁ…うんちで…んんっ♥感じちゃいましたぁ…♥」


俺は郁美の腸内を覗き込んだ。
「…なんだ、これで5日分全部か～案外少ないな」
「…うう…多いですう…お腹苦しかったです…」
じょろろろ
「これじゃあまだまだ満足できないだろ？笑しょうがねぇ…使い回すか」


「おらっ!」
俺は手に持った大便を一気に郁美のアナルへ詰め戻した。
「んぎいいっ♥もうだめぇえ♥」
「一気にひり出して一気に詰め戻す笑こりゃ爽快だな」



郁美のアナルへ大便を戻すと俺は腕を引き抜いた。
「…んぎゃっ♥」
「あはは笑 郁美のアナルにうんち戻っちゃったな～」
「…ひどいですぅ…♥ お腹…苦しい…っ♥」
「よーし…このままハメてやるぜ」


「郁美、まんぐりポーズだ」
「んんっ…ひゃいぃ…♥お腹…苦しいですぅ…」
「ガバガバアナルから戻したうんちが丸見えだな笑」
「だめぇ…うんち……見ないでぇ…んん♥」


「おらっ…！ 郁美のまんこにちんぽが入るぞぉ！」
「ご主人様のおちんちん…きちゃう…う…♥」
「愛液と小便でびしょびしょだな笑 一気に突っ込んでやるよ」



俺のちんぽが郁美のまんこに
ずぼっと挿入され、
郁美はアナルからぶぶっと屁をこいた。
「あああんんん♥」
ズポッ
「おら！ちんぽだぞ！」
ブッ♥
プッ


「おらおらおら！郁美ぃ！まんこ締めろよぉ！」
「あぁんあ♥激しっ…あぁ♥」
「子宮にちんぽでキスしてやるからなぁ！」
「奥…だめぇえ♥気持ち…いいよおおおお♥」


俺は激しくピストンする。
「おらっおらっおらっ！
まんこ突くたびに
おならが漏れてるぞお～」
「お腹に…い…響いちゃううう♥」
「あぁ～臭っせ～笑
こんな下品なセックス
郁美以外できねぇぞ～笑」
「あぁんぁ♥
ご主人…様ぁ…ああ♥」
ズポッ
プッ


「あぁ…だめ……イく…う、うんちきちゃうう…♥」
「俺もそろそろ限界だ。郁美のまんこにたーっぷり出してやるからな！」
「中出しされながら脱糞アクメしろ！おらおらおらおら！」
「おまんこイっちゃう♥おじりぃ…出ちゃううううう♥」


「おら！イケ！」
「うんごおおお♥」


「うおお…膣内がビクビク痙攣して
ちんぽ気持ちいいぞ〜郁美」
「おっ…んんおおお♥
イぐ…ああ…んん♥」
「脱糞アクメ顔見せろ！
おお〜エッチな顔だ」
「恥ずかしい…ですぅ…♥」
郁美のアナルからぶりぶりぶりと
悪臭うんちが放出されていく。


「あぁ〜郁美のうんち
とっても臭いぞぉ!
うおお…ちんぽおさまんねぇ」
「はぁ…んはぁ…♥
嗅いじゃ…だめぇぇ…♥」
「郁美〜 腹の中の
大便は全部出たか?」
「うぅ…まだですぅ…♥」


「奥に詰め込みすぎたか？笑
もっと踏ん張れ」
「うぅ…んんっ…
ふんぐうぅう…♥
はぁ…はぁ…」
「おしりぃに…力が
入らないですぅ…ぅ…♥」
「うたく…笑
じゃあ俺が掻き出してやるよ」


「おら！立ってケツを向けろ！」
「も…もう…お尻…だめぇ…」
「まだまだ糞便が詰まってそうだな笑」
「はぁ…んんぁ……♥お腹痛いですぅ…」


「俺のちんぽで糞の詰まったアナルをほぐしてやるかな～」
「え…挿れるんですか…！？」
ずる
モリ
「糞塗れのアナルにちんぽぶちこむぞお！」
「んぁぁあああ♥」


俺のちんぽが郁美のうんちを
アナルの奥へ押し戻していく。
「あ～亀頭にうんちが
当たるぜ～気持ちいぃ～」
ぷる
ズポッ
あっ♡
「うんちがぁ…あぁ…
お腹に…戻って…ぇ♥
あぁあぁ…奥だめぇ♥」


「あぁ～最高お笑」
「奥ぅぅ♥」
郁美は下半身をびくんと揺らした。


「あ～郁美の糞が亀頭をシゴいてるぞお」
「そんなっ…あぁん♡だめですぅ…んんん♡」
今までにないアナルの感触に俺は腰を動かし続ける。


「あぁ～たまんねぇ…最高のアナルだぜぇ」
ズポッ
「おじりぃぃぃ♥気持ぢ…いぃぃ♥あぁあぁあぁ♥」
「奥がイイだろぉ？もっとぐりぐり責めてやるぜ」
あぁ♥
モミ


「おらおら！ケツ穴踏ん張れ！うんちとちんぽの押し合いっこだ笑」
ぶる
ブポッ
「ひぎゃぁあ♥あぁんんあ♥お尻い…壊れ…るぅう♥」
「あぁ～やば…出るわ笑」

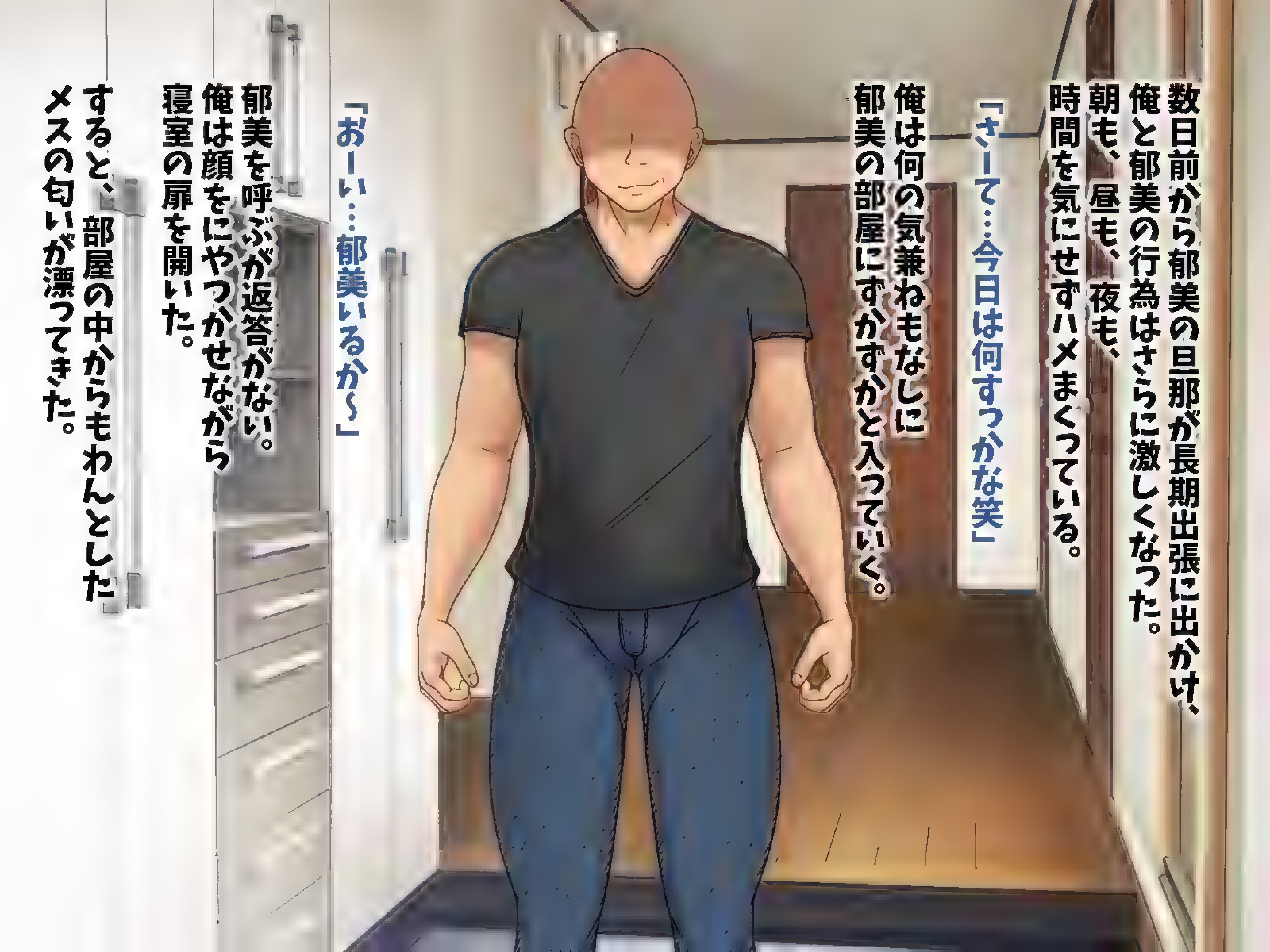

「郁美のうんちに着床だぜ！」
俺は郁美のけつまんこの奥に精液をぶちまけた。
「あぎゃあ♥」


郁美のうんちの匂いと
俺の精液の匂いが混ざり
部屋の中に悪臭が漂う。
「うはぁ…すげぇっ…たっぷり出たぜ」
「熱いぃ…♥……もうだめぇ♥」
「ケツの穴で精液とうんちがミックスされてんな笑」

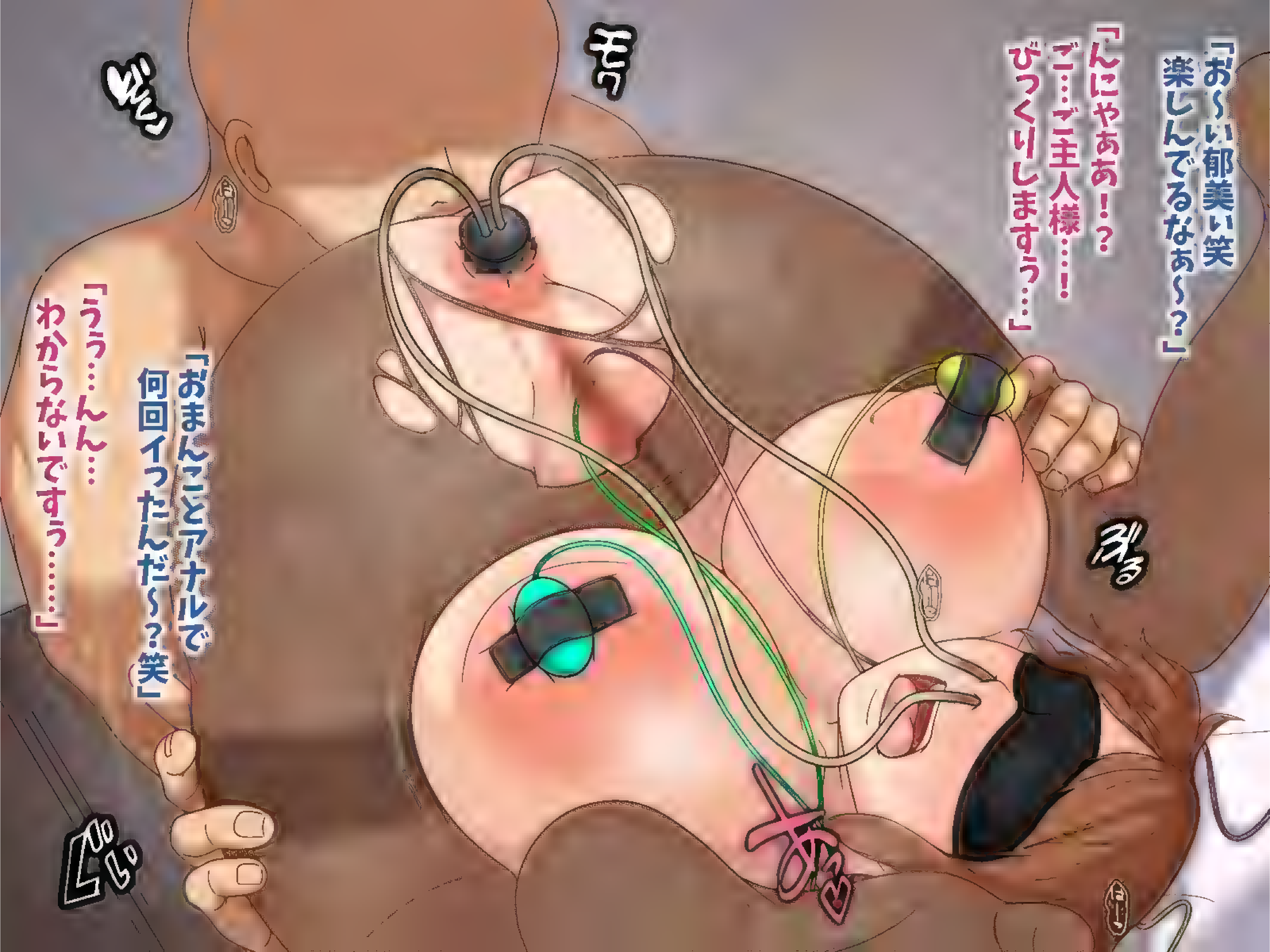

「うんちっ…出ちゃうう♥」
「うおおお！」
「あぁ…だめ…勝手に…漏れちゃううう♥」
モリ
郁美のアナルからどぼどぼと糞が零れ落ちていく。


「うんち止まんないぃ…♥
…あぁんんぁ♥」
「こりゃあ括約筋が
バカになっちまったか？笑
うんこ垂れ流しに
なっちまうな〜」
「垂れ流し…
いやぁあ…♥」
あっ♥
「つくはは笑
あとでおむつを
付けような、郁美…笑」
郁美は糞を垂れ流しながら
力尽きて気を失った。

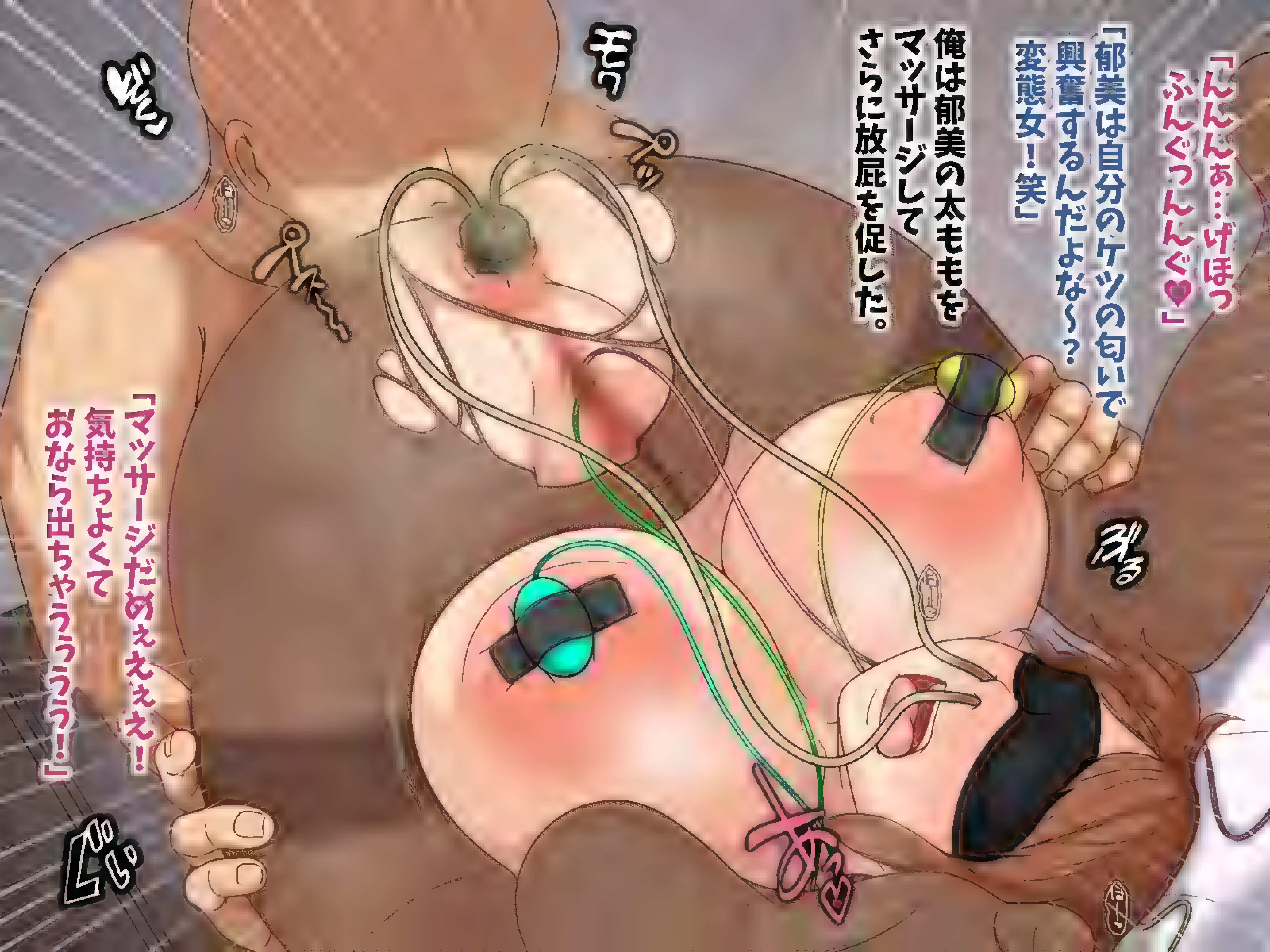

アナル開発
6週目

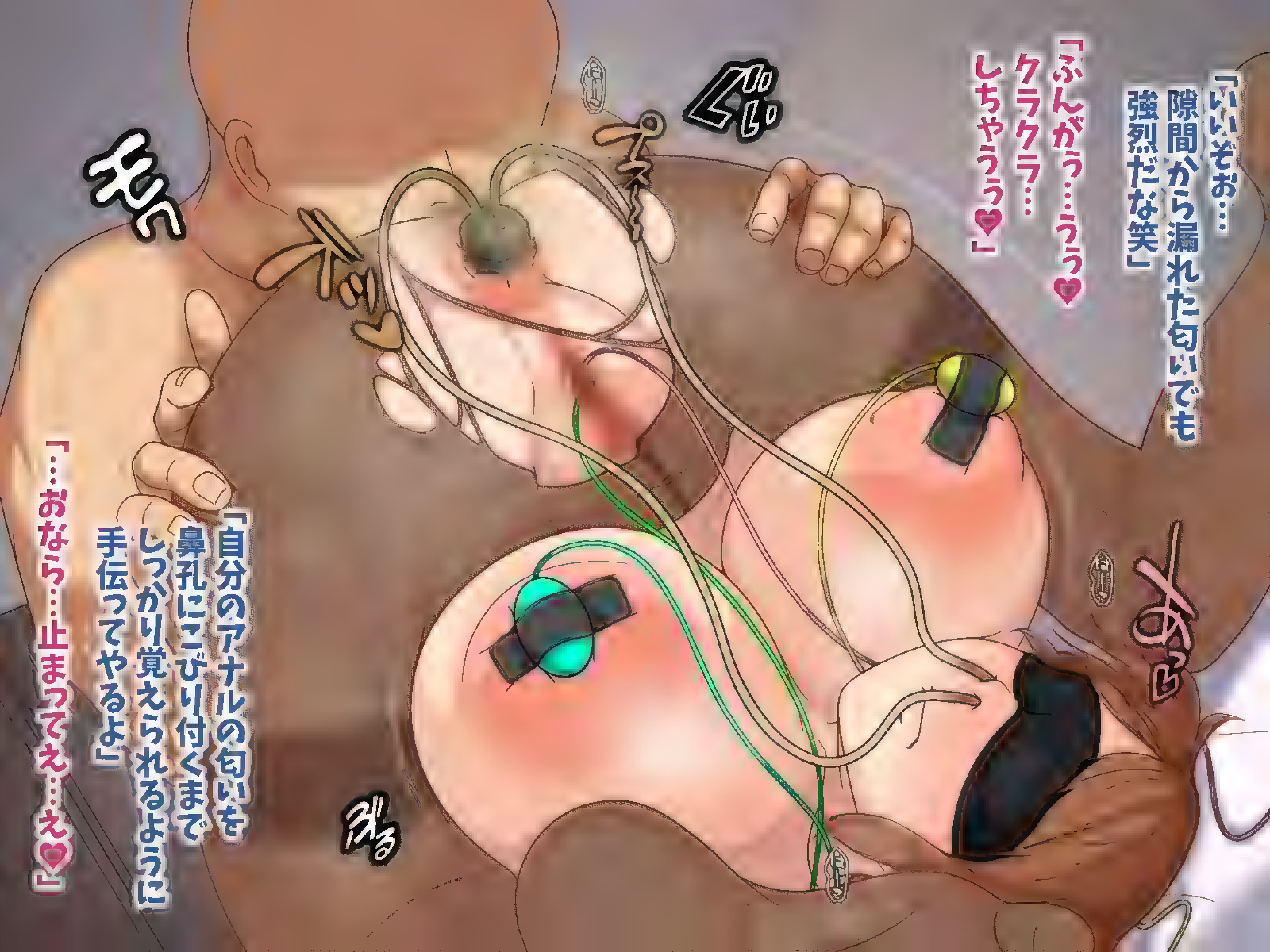

数日前から郁美の旦那が長期出張に出かけ、
俺と郁美の行為はさらに激しくなった。
朝も、昼も、夜も、
時間を気にせずハメまくっている。
「さーて…今日は何すっかな笑」
俺は何の気兼ねもなしに
郁美の部屋にずかずかと入っていく。
「おーい…郁美いるか～」
郁美を呼ぶが返答がない。
俺は顔をにやつかせながら
寝室の扉を開いた。
すると、部屋の中からもわんとした
メスの匂いが漂ってきた。

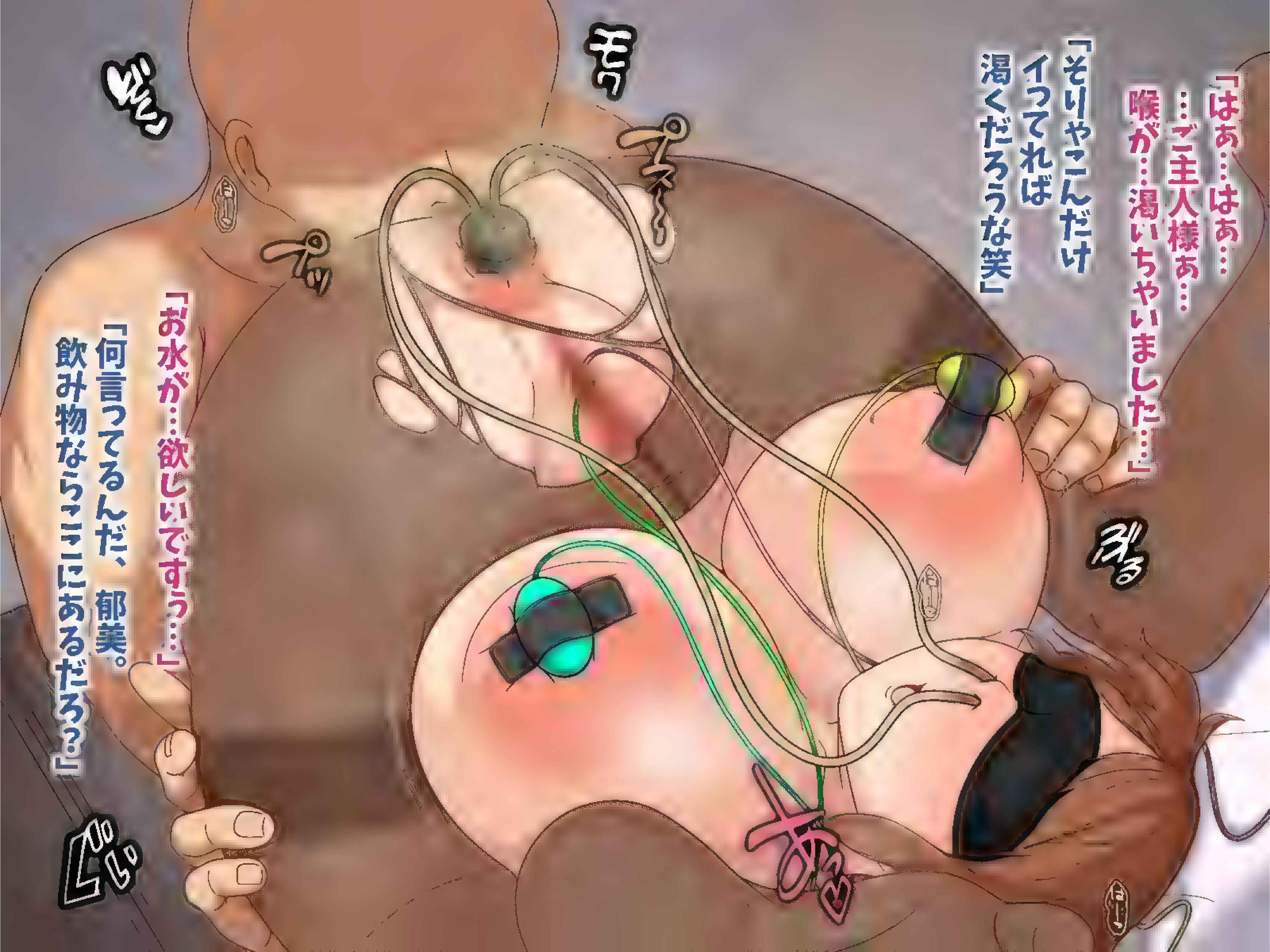

「ふんごう…んんごー♥
イくう…んんあ♥」
ローターまみれの郁美が
目隠しされベッドの上で
身体をびくびくと
痙攣させていた。
（うっわ…
すげぇメス臭せぇ笑）
「んんぁ…♥
ローターでまた…
イっちゃう…うう♥」
ぶる


「お〜い郁美ぃ笑
楽しんでるなぁ〜？」
「んにゃあぁ！？
ご…ご主人様…！
びっくりしますぅ…」
「おまんことアナルで
何回イったんだ〜？笑」
「うぅ…んん…
わからないですぅ……」


「濃いメス臭まき散らしやがって。ローター責めで放置されてずっとイってたんだろう？笑」
「ううう…はいぃ…♥」
アナルから延びた管は郁美の鼻の穴に繋がれていた。
「自分のケツの匂いもしっかり味わってるかぁ？おら！屁をこいてみろ！」


「んんんぁ…げほっ
ふんぐっんんぐ♡」
「郁美は自分のケツの匂いで
興奮するんだよな〜?
変態女!笑」
俺は郁美の太ももを
マッサージして
さらに放屁を促した。
「マッサージだめぇえぇぇえ!
気持ちよくて
おなら出ちゃううううう!」

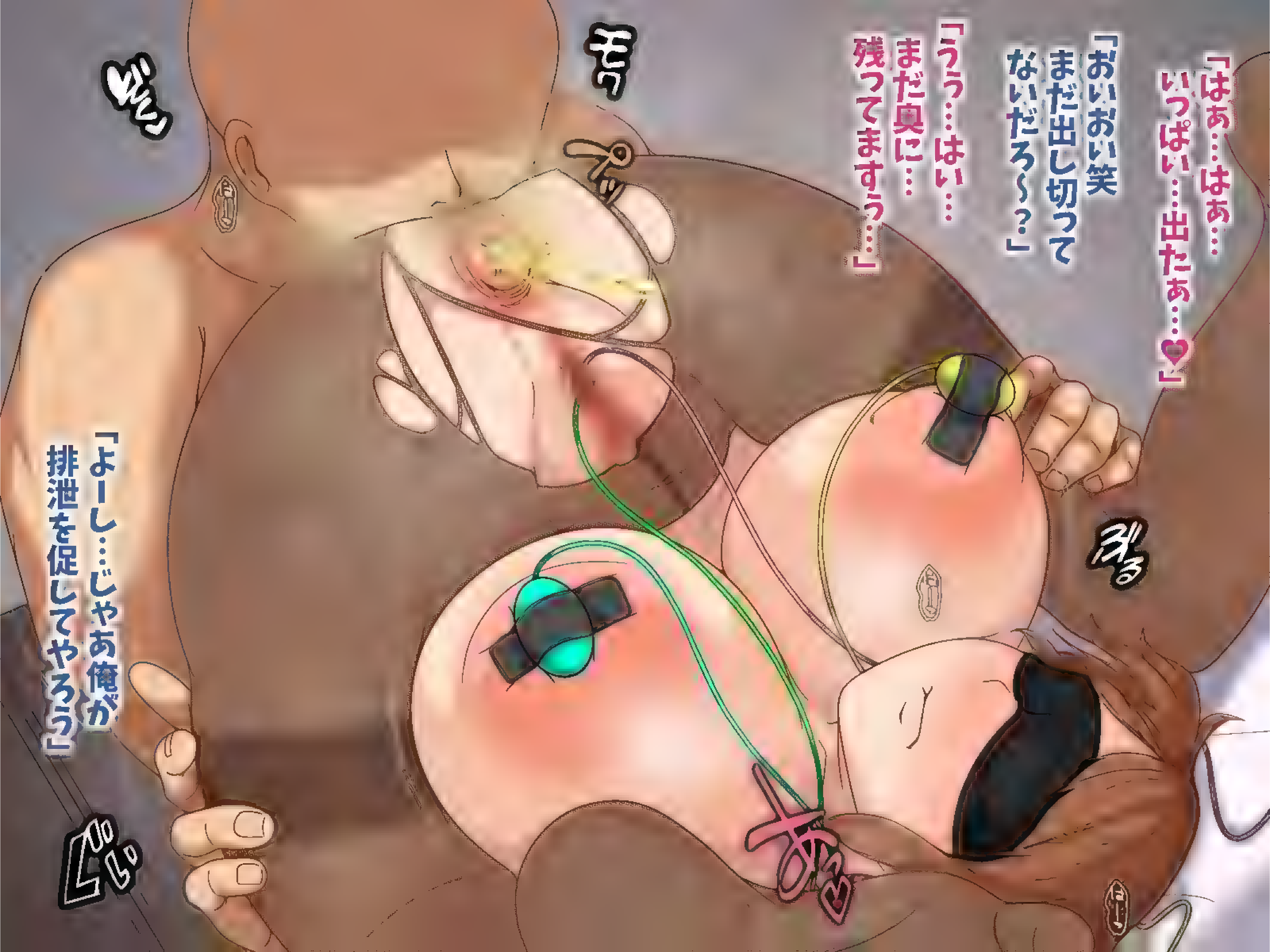

「いいぞぉ…隙間から漏れた匂いでも強烈だな笑」
「ふんがぅ…うぅ♥クラクラ…しちゃうぅぅ♥」
「自分のアナルの匂いを鼻孔にこびり付くまでしっかり覚えられるように手伝ってやるよ」
「…おなら…止まってぇ…え♥」


「はぁ…はぁ…
…ご主人様ぁ…
喉が…渇いちゃいました…」
「そりゃこんだけ
イってれば
渇くだろうな笑」
ぷる
「お水が…欲しいですぅ…」
「何言ってるんだ、郁美。
飲み物ならここにあるだろ？」

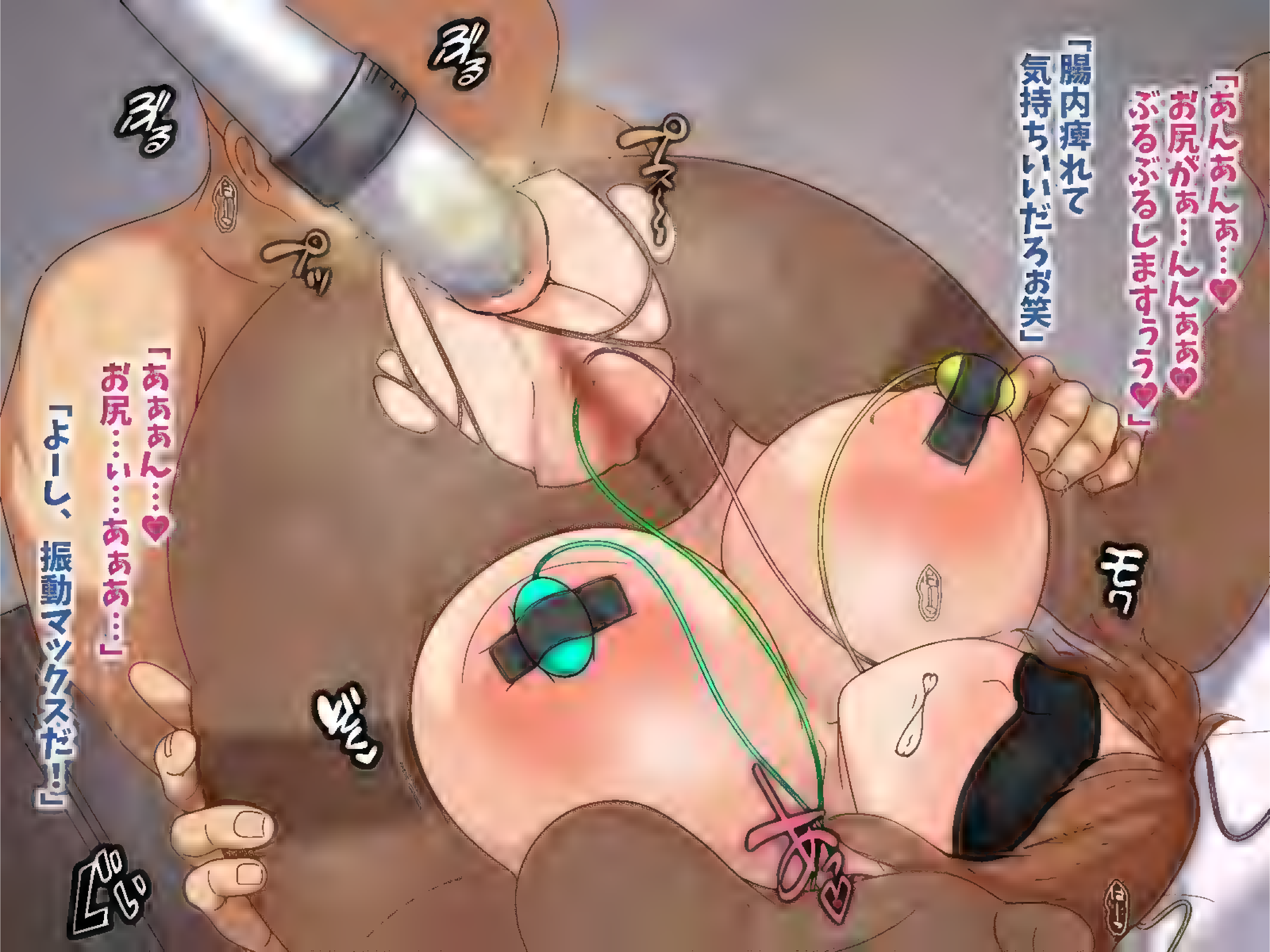

俺は郁美のアナルに嵌っていたプラグを引き抜いた。
「あぁんっ♥」
「ほら、郁美。喉渇いたんだろ？自分で出して飲むんだよ笑」
ぐぃ
モミ
あっ
「はいぃ…渇きましたぁ…うう…の、飲みますぅ…♥」
「郁美のアナルで熟成された特製ドリンクを排泄しろ！」
ぷる


「お尻い…！
出ちゃううう♥」
「うおお…！
出てきたぞ～郁美」
ぷしゃ～～
郁美のアナルから
勢いよく黄色い液体が
排泄されていく。
「あ～臭いぞお！
鼻が馬鹿になりそうだ笑」
ぷる
モワ


「おい、勢いが強い過ぎるぜ～ケツ穴締めて調整しないと飲めないぞ！」
「ひや…ひやぃぃ…♥…あぶぶぶぼぼ♥」
噴出した液体は綺麗な弧を描き、郁美の口元へ向かっていく。
じょろろ
「すっげぇ笑 アナルで熟成された小便は美味いか～郁美ぃ」
「あぶびぼおお…ごく…♥濃いでうぅ…うっぷうっごく♥」


「はぁ…はぁ…いっぱい…出たぁ…♥」
「おいおい笑 まだ出し切ってないだろ～？」
「うう…はい…まだ奥に…残ってますう…」
「よーし…じゃあ俺が排泄を促してやろう」
ぷる


俺は置いてあった電マを手に取ると郁美のアナルに突っ込んだ。
「はにゃああ♥お尻に…太いのきたあああ♥」
「郁美の大好きな電マちんぽだぞ～」
ぐぃ
「…電マぁ…んんぁ♥太いよおお…んんおお♥」
「ほら、スイッチ入れてやるよ」
ぶる

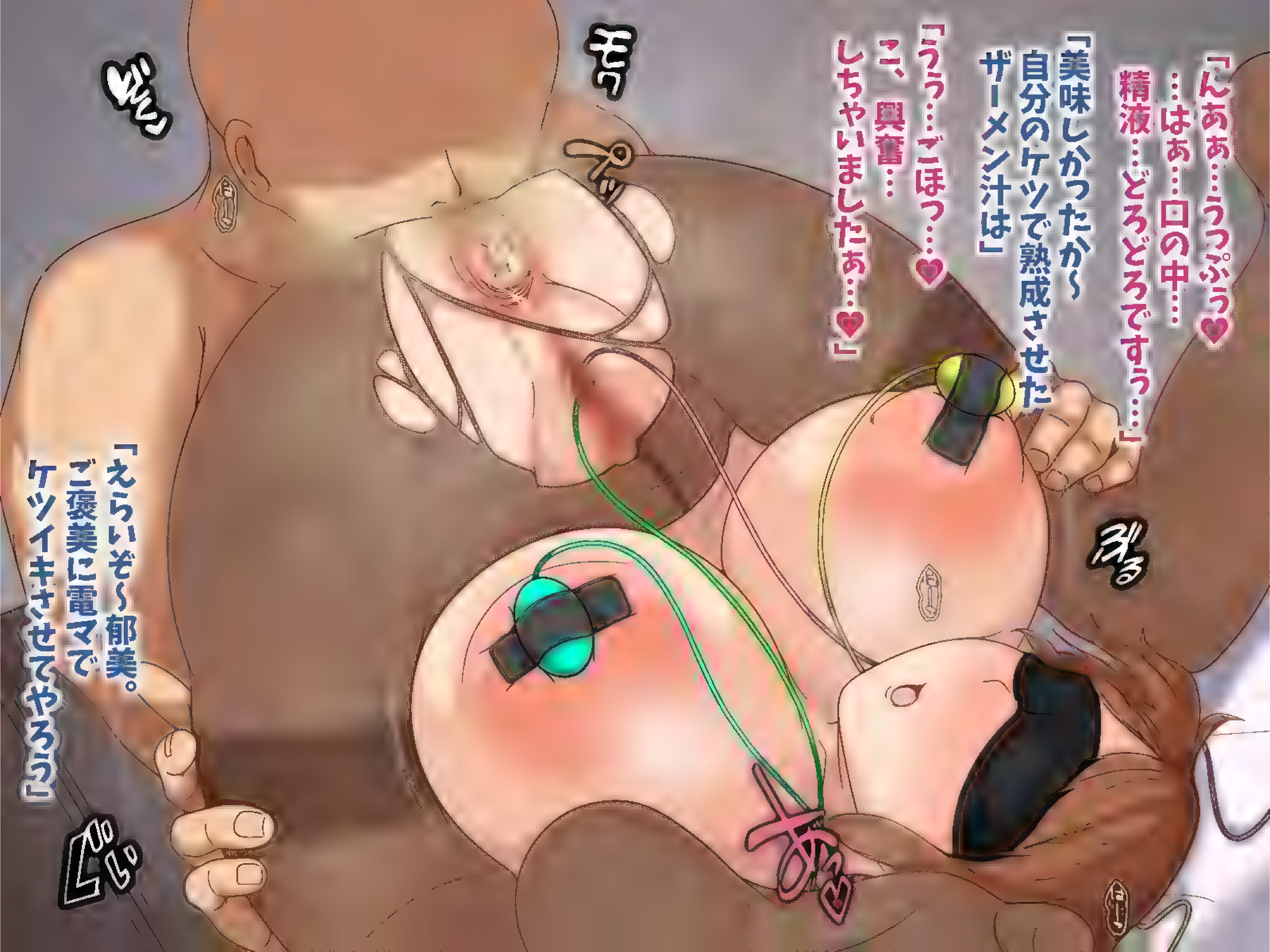

「あんあんぁ…♥
お尻がぁ…んんぁぁ♥
ぶるぶるしますぅう♥」
「腸内痺れて
気持ちいいだろぉ笑」
ぶる
ぶる
「あぁぁん…♥
お尻…い…あぁぁ…」
「よーし、振動マックスだ!!」

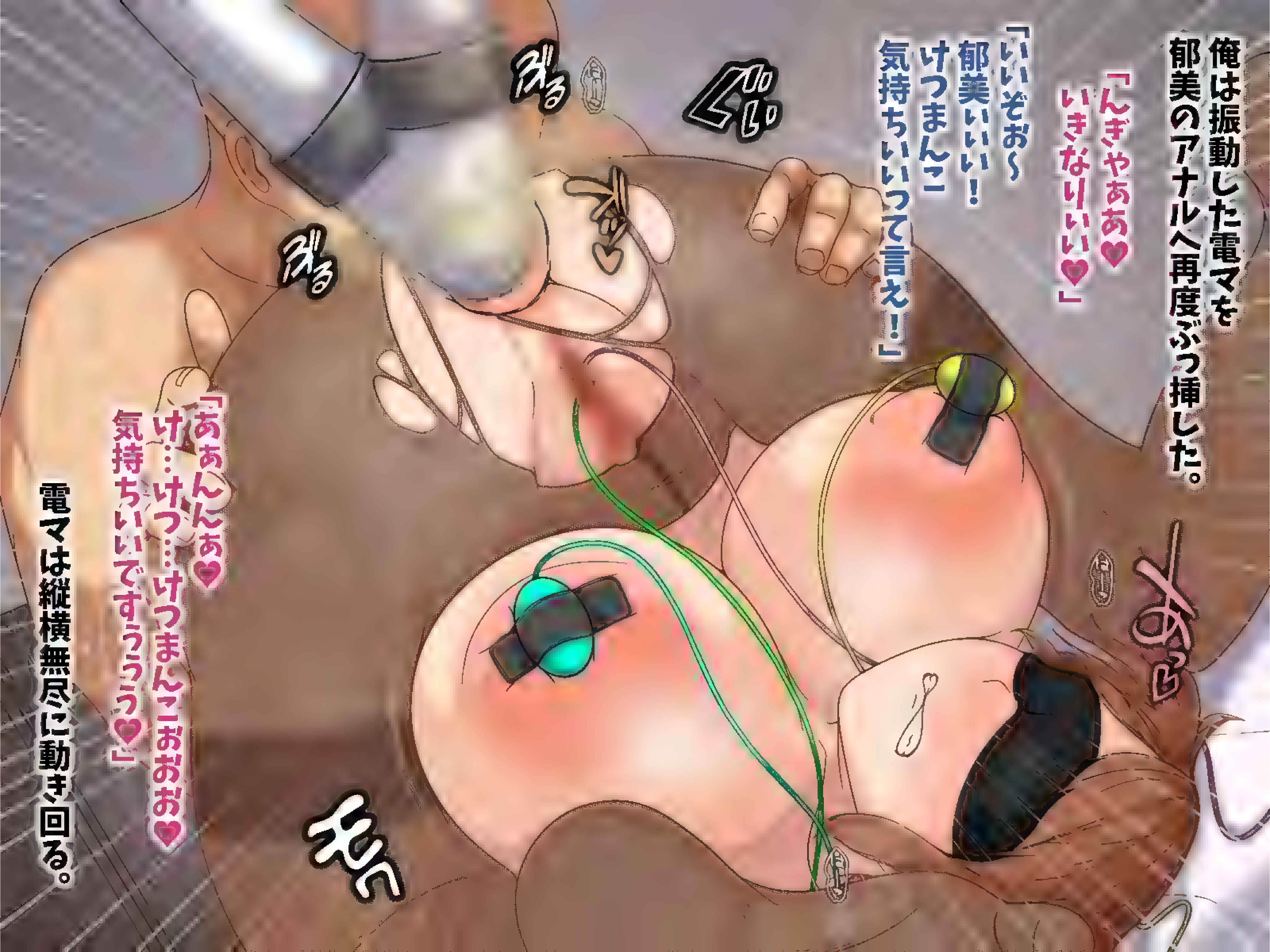


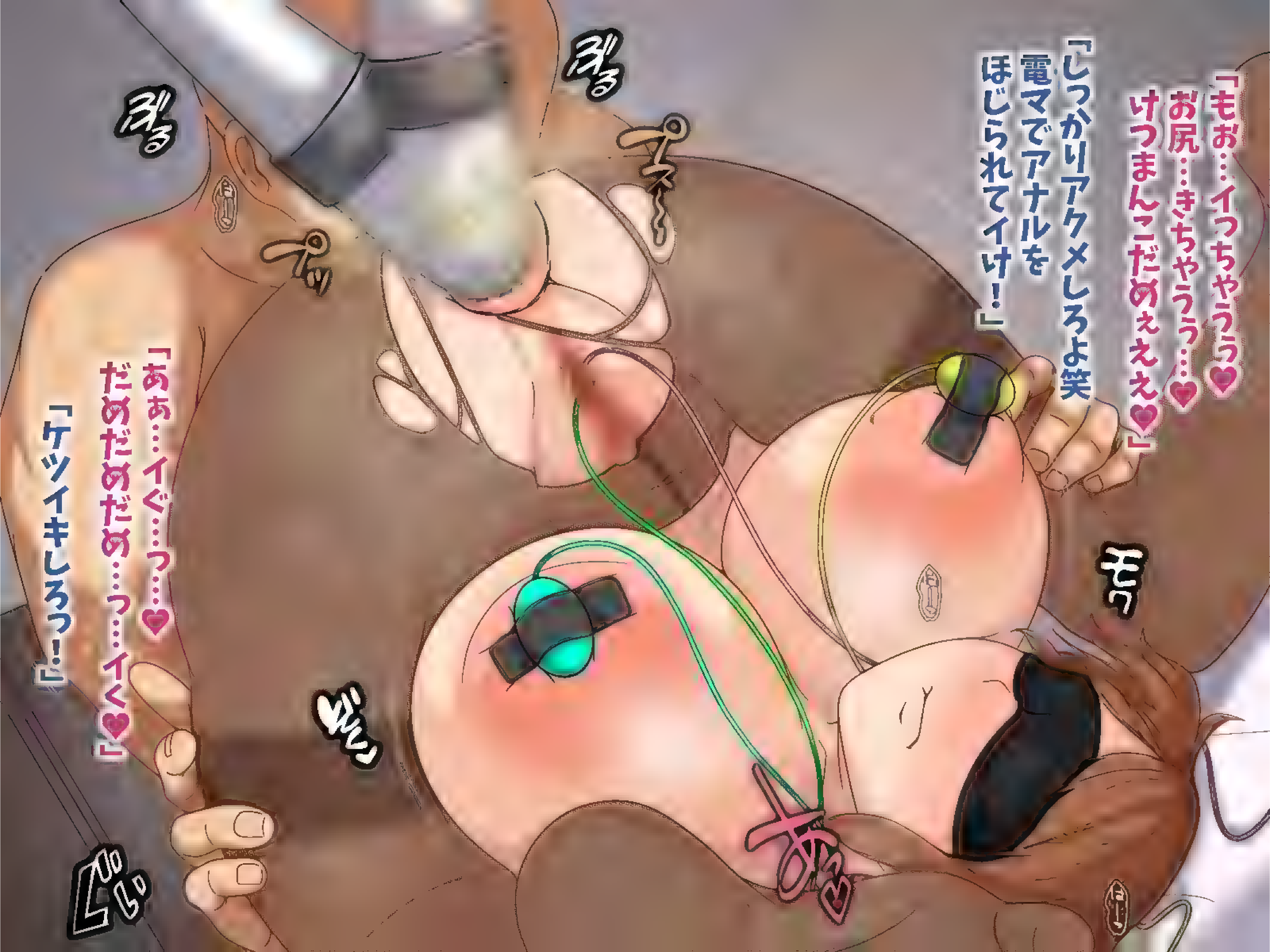
大きな音を立てて電マが激しく振動し始める。
「おお…笑
電マが踊ってるぞ笑」
「振動お♥
激しっ…いい♥
んんあああぁ♥」
「おらおらおら！
頭ん中アナルで満たせ!!」
「ああ…イぎぃ…あああ♥」
俺は電マを掴むと一気に引き抜いた。


「今抜いちゃだめぇええええ♥」
「ほ～ら郁美。どろどろザーメンが出てきたぞ～」
プシャ～～
ぷる
プッ
郁美のアナルからぶぶっと卑猥な音を立てザーメン浣腸が噴き出した。
「おい、郁美。これも零さず飲むんだ」


「ご主人様のぉ…ごほ…精液ぃ…濃くてぇ…飲みきれないぃぃ…ですぅ…♥」
「あぁ〜イカ臭せ笑 喉鳴らしながらごくごく飲め！」
「あぶぴっ♥じゅぼぼぼ♥ごく…っごくごく…んぐぅ♥」
「あぁ…スケベだぞ〜郁美。見てるだけでイっちまいそうだ笑」

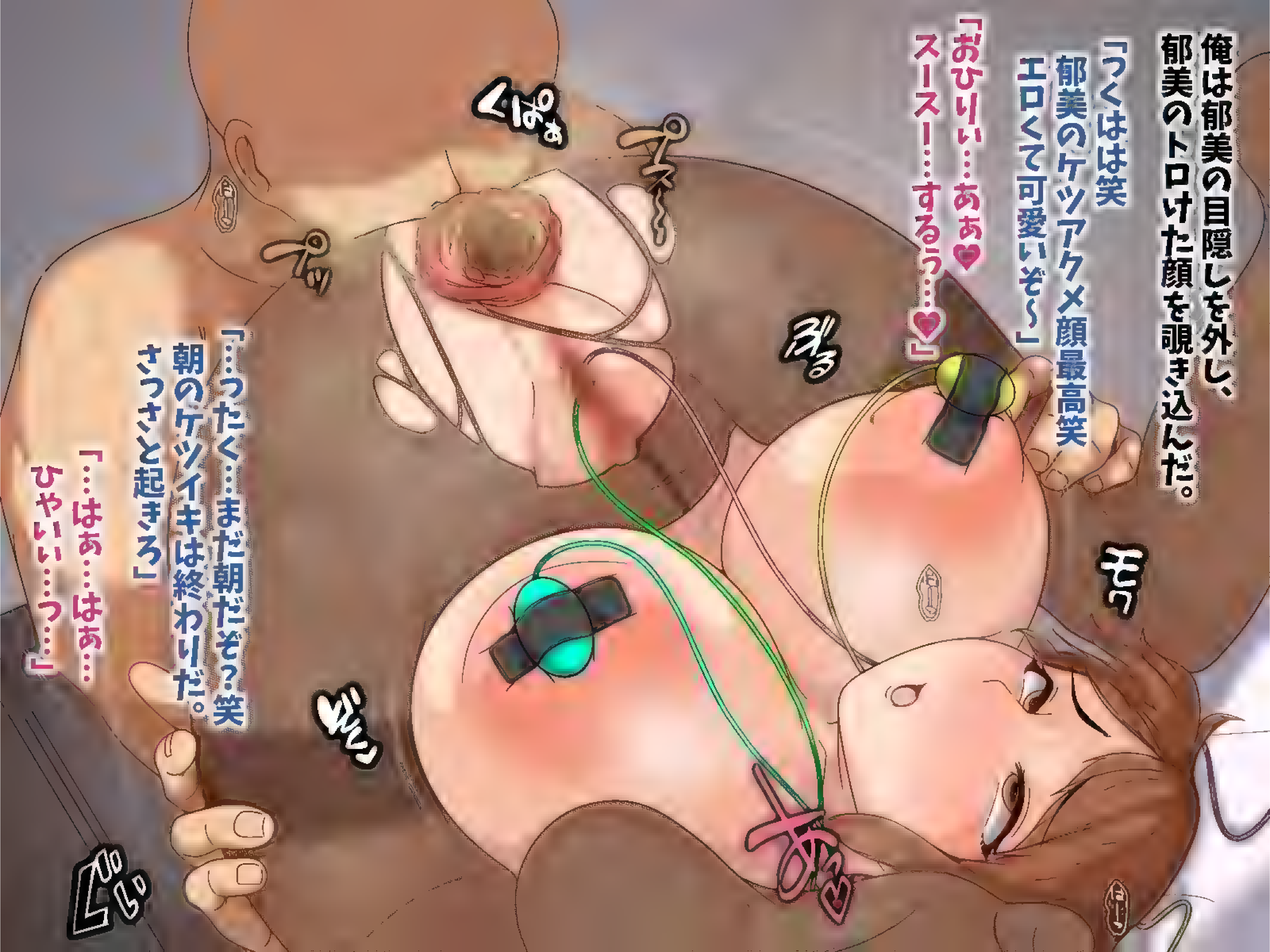

「んあぁ…うっぷぅ♥…はぁ…口の中…精液…どろどろですぅ…」
「美味しかったか～自分のケツで熟成させたザーメン汁は」
「うぅ…ごほっ…♥こ、興奮しちゃいましたぁ…♥」
「えらいぞ～郁美。ご褒美に電マでケツイキさせてやろう」


俺は振動した電マを郁美のアナルへ再度ぶっ挿した。
「んぎゃぁあぁ♥いきなりぃいい♥」
「いいぞお～郁美ぃいい！けつまんこ気持ちいいって言えー！」
「あぁんんあ♥け…けつ…けつまんこおおお♥気持ちいいですぅううう♥」
電マは縦横無尽に動き回る。



「もぉ…イっちゃうぅ♥
お尻…きちゃうぅ…♥
けつまんこだめぇええ♥」
「しっかりアクメしろよ笑
電マでアナルを
ほじられてイけ！」
ぶる
ぶる
「あぁ…イぐ…っ…♥
だめだめだめ…っ…イく♥」
「ケツイキしろっ！」


「イぐううう♥」
郁美のアナルから電マがずぼっと抜け、見事なアナルローズが咲いた。
「うおお…！
こりゃすげえ…笑」


俺は郁美の目隠しを外し、郁美のトロけた顔を覗き込んだ。
「つくはは笑 郁美のケツアクメ顔最高笑 エロくて可愛いぞ～」
「おひりぃ…あぁ♥ スースー…するぅ…♥」
くぱぁ
ぷる
モワ
「…ったく…まだ朝だぞ？笑 朝のケツイキは終わりだ。さっさと起きろ」
「…はぁ…はぁ… ひやいぃ…っ…」


郁美と俺はしばらく休憩すると
キッチンへと向かった。
「腹減ったな～」
「…そ、そうですね」
「あ、そうだ♪
郁美の手作りが食べたいな」
「ご飯ですか？ いいですよ。
あ、でも、買出ししてこなくちゃ」
「ま、買出しに行く暇もないほど
毎日ハメまくってるもんな笑」
「す、すぐに材料買ってきますね」
「待て…俺も一緒に行こう」


「ありがとうございます♪えーっと…パンツ履かなきゃ」
「何言ってるんだ。ノーパンで行くんだよ」
「ま、またですかぁ…恥ずかしいですぅ…うう…あとは…エコバッグと…」
「バッグもいらないぞ。郁美がいれば問題無しだ笑」
「は、はぁ……そうなんです…か？」
「よーし…お買い物デートだ笑」


俺と郁美は近くのスーパーに足を運んだ。
郁美はまんこが見えないように
俺の後ろに隠れながらついてきている。
「う…うう…」
「これと…これ…
あとこれも買うか」
「野菜が…多いですね…？」
「郁美の好きそうな
野菜を選んでるんだぞ」
「え…そうなんですか？
あ、ありがとうございますう…♥」
「あとはゆで卵と…うはは笑
まぁこんなところか」


俺は手から零れるほどの野菜を抱えてレジに並んだ。
「あの…やっぱり…バッグ持ってきた方が良かったですね」
「あん？…郁美が持てる量を計算して選んでるんだぞ笑」
「え…こ、こんなにたくさんひとりじゃ手で持てないですぅ…」
「手で持つだなんて誰が言った」
俺は郁美の耳元で命令を囁いた。
「…そ、そんな…！？む、無理ですぅ！」
「おら、レジの番だぞ。ちゃんと自分で言え」


レジのバイト店員はすぐに郁美の生まんこに目がいった。
（うっわ…この女まんこ見えてる！？
…っていつも来る人妻じゃん！）
（身体だけじゃなくて
マジもんの痴女かよ。
あれ…でも隣にいる男
…旦那じゃないな？）
「あのぉ…お会計いいですか…？」
「え、あぁ…はい。
大根２本とニンジン２本…
キュウリ３本、ナス１本ですね…」


「すごい量…」
「……？
こちらは袋に
お入れしてもよろしいでしょうか？」
「えっと…その
…入れるのは…
袋じゃなくて……」
「…？」
「おい、郁美。
バイトの子が困ってるだろ。
ちゃんとお願いするんだ」
「はい……この野菜全部…」



「ここに……挿れてください♥」
「……は？」
郁美は店員に手でケツを拡げ突き出した。
ぐい
あっ♥
ぶる
「バ…バッグ…忘れちゃったんですう…こ、この穴なら…全部入る…のでぇ…んん♥」


「……え？これってドッキリですか？何かの撮影とか……？」
「ドッキリじゃないですぅ……あの…他のお客さんが来る前に…はやく…お願いしますぅ…」
「…いや…でも…えぇ…？」
「この女のアナルは何度もフィストを経験したガバ穴だから心配すんな笑」



「あぁんんんあ♥
おなら出ちゃうぅ♥」
「は？……うぇ臭っさ！」
（なんだよ、この女！
清楚だと思ってたのに
変態女じゃねぇか！）
ぐぃ
プス～
ブぴ♥
ぶる
「ご、ごめんなさいぃ……
勝手におならが…
漏れちゃうんですぅ…うぅ……」
「あーもうよくかんねぇけど
ぶち込めばいいんすよね？」


「ほんとに挿れますから…ねっ！」
「ふんぐううっ…❤」
店員は大根を手に持つと
ヤケクソ気味に
郁美のアナルへ
その大根を突っ込んだ。
「いきなり太いのいったな～笑」


「え…マジで入った？こんなすんなり？」
「大根んんっ…太くて…長くて…お尻…苦しいよぉ…♥」
あっ
ぐぃ
ずる
「おい、坊主！遠慮なくぶち込んでやれ」
「いいんすね！？」
（やべ…勃起してきた）


「二本目！」
「んぎやあ♥」
2本目の大根が挿入され、郁美のアナルが左右に大きく拡がった。
「うぉおお…ん♥お尻…い…拡がるぅう」


「マジかよ…AVでもこんな拡がってんの見たことねぇ…」
「はぁ…んんぁ……♥」
ぐぃ
「まだまだ挿いるよなぁ？郁美」
「うぅ…たぶん入ると思いますぅ……」
「マジかよ…すっげぇ……」
あっ
ぶる


店員はニンジンを2本掴むと同時にアナルの隙間に押し込んだ。
「ここ…かなっ！」
ぶる
「はにゃああ♥」
「いいぞ〜坊主…笑
なかなかセンスあるな」


あっ♥
「楽しくなってきた…笑」
「はぁはぁ…もぉ…限界かもぉ…♥」
「限界って言ってますけど?」
「んなわけねぇだろ笑
ったく、俺も手伝ってやる笑」
「待って…んぎゃあ♥」


「こうやんだよ笑」
「はいっ！」
俺と店員は郁美のアナルにキュウリをぶすぶすと突きさしていく。
「あああああ♥」


「…ほんとに全部入った…すっげぇ……」
「あぁあ……おじりぃ…苦し…いい♥」
「よーし…ちゃんと抜けないようにしろよ、郁美。帰るぞ笑」
「…ひゃ…ひゃい……♥」


「ほら、郁美。ちゃんとバイトの子にお礼しろ」
「えっと…あの…野菜詰めていただき……ありが…んんっ…とう…ございましたぁ…♥」
「は…はい……」
（…早く帰ってオナニーして…え…）
「行くぞ、郁美」
郁美は下半身をガクガクと揺らし俺に抱きつきながら、スーパーを後にした。


俺は郁美に抱きつかれながら
どうにか部屋のキッチンまでたどり着いた。
「ったく…郁美ぃ
足ガクガクさせすぎだぞ？笑」
「はぁ…はぁ……
腰が…抜けて…
歩けないんですぅ…♥」
「スカートのお尻から
野菜が飛び出してるからな。
歩行者みんなドン引きしてたな笑」
「うぅ…ぐすっ…
もうあのスーパー行けないよぉ…」
「なぁに…俺が付いてってやるさ。
ほら、野菜抜いてやるから
服を脱いでケツ向けろ」



郁美は生まれたての小鹿のように
足をぶるぶるさせながら
全裸になりケツを向けた。
「おいおい…笑
もうすでに野菜が
屁と腸汁まみれだな」
「…うう…
ごめんなさい…♥」
「よーし…全部一気に
抜いてやろう」



俺は詰め込まれた野菜の
外側をしっかり掴むと
力を入れて一気に引っ張った。
「おらっ！」
ズポッ
ぶる
『んぎぃぃ♡』
「ケツの力抜けよ～笑」


「腸汁が噴出してるぞ〜郁美のエキスが野菜に染み込んでいくな〜笑」
「…あがっ…ごうごうあ…刺激…だめぇ…んんあ♥」
「おら…っ!」
あっ



ずぼぼ！と大きな音を出し、郁美のアナルから野菜が抜け出た。
「イぐううう♥」
くぱぁ
じょろろ
「おお、抜けたな〜一気に笑」
「あああ…んあああ♥」



「うへぇ～笑
腸内が丸見えだぞ、郁美」
「あぁあ…お尻ぃ…
閉じないよぉ…んん♥」
「でも一気に引き抜かれて
気持ちよかっただろぉ？笑」
「うう…ぐすっ…
はい…お尻で…
イきましたぁ…♥」


俺は引き抜いた野菜をキッチンのトレイに置いた。
「野菜はこれでよしっとあとはゆで卵だな」
「え…ゆで卵はそのままでも良いと思います」
「何言ってんだ。俺は郁美のエキスの染み込んだ下品な料理が食いたいんだよ」
「ええ…ど…どうすれば…いいんですか…？」
「キッチン台の上にうんこ座りするんだ。ケツをこっちに向けてな」


郁美はキッチンの台に上り、ケツをこちらに向けた。
「よーし、えらいぞお」
「うう…ん…♥」
「ゆで卵を郁美のアナルの中にたーっぷり漬けてやるからな笑」
ぶる


「そ…そんな……♥
だめですぅ…今…
お尻敏感なんですぅ…」
「そうだぞぉ？
だから挿れるんだ笑」
「あっぁあ…入口に…
当たってますぅぅ…♥」
「肛門緩めろよ～
ぐぐっと挿れるぞぉ！」


「ほら、入った笑」
「んんあっ❤」
ズポッ
ずる
郁美のアナルはゆで卵を吸い込むようにつるんと呑み込んだ。
「まずは1つ」


「おら！どんどん挿れていくぞぉ！」
「はぐぅぅぅ…♥ゴロゴロしたのがぁ…入ってきてますぅぅぅ♥」
「ケツに力を入れて中のゆで卵を潰すんじゃねぇぞ～笑」
「ひぃ…ひぃ…ふぅ…ぅ…あ♥」


「肛門から中のゆで卵も丸見えだな笑」
「あぁあ…お腹…んんっ…中で動いて…刺激…がぁ♥」
「郁美のおならがまるで硫黄の香りに感じるぜ～温泉卵ならぬアナル卵か笑」
「あぁあ…うう…♥」


「よーし…どんどん追加するぜ」
「く、苦しいですぅ…あぁ…お腹がぁ……♥」
「ちゃんとゆで卵に郁美のエキスを染み込ませるんだぞ〜」
「んぐぅ…ひゃい…ぃ♥」


俺は郁美の右尻を叩いた。
「はぐぅう♥」
パーン
「なんだ、郁美。
ケツ叩かれて嬉しいのかぁ？笑」
「…ご主人…様ぁ…
お尻…感じちゃうんですぅ…ぅ♥」



「よーし…ご褒美に
ゆで卵を追加だ」
「はぅう…♥
もぉ…お腹…
いっぱいですぅ…ぅ」
「とか言いながら
郁美のアナルは
どんどん呑み込んでいくぞ～笑」
「あぁんんぁ♥
お腹の中でゴロゴロしてますぅ…」


俺はゆで卵を入れ終わると
郁美のケツを
スパンキングし始めた。
「よーし…あとはケツイキで
郁美のアクメ汁をトッピングだ！」
パン
ぶる
「んぎゃああ♥おひりぃ…
叩いちゃやらめぇええ♥」
「おらおら！叩かれて気持ちいいんだろ！
郁美の変態アナル産卵見せてみろ！」



「卵出りゅう♥」
郁美のアナルから
ゆで卵が次々に飛び出してきた。
「うおお…
すげえ勢いだな笑」
モリ


ぶぽぶぽっとリズミカルに
ゆで卵がアナルから
産まれるように排泄されていく。
「んごっ…んほぉ…♥
あぁあ…でりゅ…♥」
「まじで産卵みたいだな笑
アナル開きっぱなしだぜ」
「止まんにゃいいいい…♥」


大量のゆで卵を排泄し
郁美のケツ穴からは
ネバっとした腸汁が垂れ落ちた。
「うおお…見事な
とろとろアナルだぞお郁美！」
くぱぁ
「あ…あああ……イく…ッ♥」
「おいおい…失禁か？笑
飯どうすんだよ笑」
郁美はアナルを
くぱくぱさせながら気絶した。


それから数日後。
今夜旦那が主張から
戻ってくる日だ。
なんだか少し
寂しい気分だ。
郁美の部屋の
扉を開くと
廊下を駆けてくる
音が聞こえた。
「あ、ご主人様…♥
おはようございますぅ…」
郁美は俺がプレゼントしたおむつを
赤ちゃんのように履いていた。
「似合ってるぞ、郁美♪
郁美のおむつ姿は
かわいいな～笑」
「うぅ…おむつが無いと…
お尻からいろんなものが
垂れちゃうんですぅ…」


「ちゃんと言いつけ通り我慢してるのか～？」
「は…はいぃ…ご主人様の前以外ではう…うんちしてません…♥」
「よーし…笑」
「ご主人様のこと待ってたんだすう…も…もう…うんちしたいですう…お腹がゴロゴロしてるんですう…」
「おいおい、来て早々排泄懇願かよ笑」


「だが…そうだな…郁美が惨めにお漏らしする姿が見てぇな〜笑」
「…たまには洗脳を解いてやるか…笑」
「え…えと…」
「郁美…催眠を解け」
「…っ…！…は、はい…い……」
郁美の瞳が虚ろになる。


郁美の人格がハッと切り替わった。
「…へ……？
あれ…私…」
「おっひさ～郁美」
「あれ…え……
私…夫を見送って
それで…あれ…」
「あー…そういえば
旦那がでかけてから
ずっと洗脳してたわ笑
わりぃわりぃ」
「ひぃ……あなた…
また私に何か変なことして…」


「何のことだろうな？笑」
「と、とぼけないで…！きっとひどいことしてるんでしょ！」
「ひどいな～毎日毎日ケツイキアクメで気持ちよくしてやってんのになぁ笑」
「……って…これ…何……え…おむつ履いてる…？」
「俺がプレゼントしたおむつだ。とっても似合ってるぜ？笑」
「…なんで私……おむつなんて…履いて…んんんぐっ…！」


郁美のお腹がぎゅるぎゅるぎゅると鳴り始めた。
「はんぐぅ…！お…お腹…痛い…い…」
「くくく笑」
「なんで…！？こんなお腹張ってる…のぉ…お…」
「お前には3日以上排泄を我慢させてるからな」
「はぁ！？わ、私が…そんなのに従うわけ……んんっ！ど、どいて…トイレ行かなきゃ」
「おっと…トイレなんて行く必要ないだろ笑」


俺は部屋から出ようとする郁美を
ベッドの上に押し倒した。
「きゃっ…！？」
「お前の便所はここだろ笑」
モワ
俺は郁美のおむつを
指さした。
「は…はぁ？
何言ってるの…やめてよ…！」


「郁美はおむつが無いと糞垂れ流す変態さんだもんな」
「変なこと言わないで…お願い…はやくトイレに…」
「赤ん坊みたいで可愛いぞ～さーて郁美の脱糞姿をばっちり観察してやろう笑」
「いやぁ…だめ…漏らしたくないの！お願い！はやく！ねぇえ！」


郁美のお尻からおならの音が漏れ始める。
「おっおならが出たぞ〜笑
臭っせ〜すげぇ匂い」
「…嗅がないで…！
も、もうほんとに…
限界なの…！」
俺は抵抗する郁美を
しっかりと押さえつける。
「我慢は良くないぜ〜
ぶりぶりしてすっきり
したいんだろ？笑」


びく
「漏らすのいやぁあ…！
トイレに…はやくぅ…！」
「あ〜臭いぞお！
たまらん匂いだ笑」
プス〜
ぶる
郁美のお尻から
さらに濃い臭気が
放出されていく。
「だめぇ…お尻に力が…
入らない…い…あぁ
もう…でちゃうう！」
モワ


ぶりぶりりりぃ！
おむつの向こうで大きな音が鳴った。
「いやあああああ！」
「おお～きたきた笑」
おむつがどんどん膨らんでいく。


「いやぁ…だめぇえ！出ちゃう…気持ち悪い…」
「うっわ…外から見てもすっげぇ量だな笑 それに匂いも強烈だわ」
「…はぁ…はぁ… あなた…最低…っ」
「さーてお楽しみの排泄物チェックだ」
「…は!? ま、待って…嘘でしょ！うんち見ちゃやだめぇえ！」
モリ


おむつのテープを外すと郁美の股間が丸見えになった。
「いやあああ！」
「あはは…糞塗れだ笑」
「おっきなうんちが出たな～郁美～笑げほっ…臭っせ笑」
「お願い…見ないでぇ…げほっ…けほぉ」



「ずっしりしてるな～
おっ…これ一昨日食べたやつかな」
「や…やめてっ！
な、なに観察して…」
プッ
ぶる
「おならも止まんねぇな笑
こりゃまだ出るだろ」
俺は郁美の腹をぐいぐい押した。
「…ちょっ…今だめぇ…！」
モリ


「脱糞ちゃうう！」
郁美のアナルから
ぶりゅりゅりゅっと糞が
飛び出した。
モリ
「おお出た出た笑
可愛いぞ～郁美」
「だ…だめぇええ！
…出したくないのにいい！」


「どんどん出るぞ〜」
「なんでぇ…お尻がうまく閉じないぃ…止まらない…」
「郁美のアナルは毎日拡げてるからなぁ〜閉じなくなってきたな笑」
「…な…何言ってるの…？そんなわけ…んんっ」
モリ



飛び出した糞はおむつの上の糞に重なり
大きなうんちの山を築いた。
「はぁ…はぁ……全部…出ちゃった…んっ♥」
モワ
郁美の腰がびくんと跳ねた。
「お、郁美～もしかして脱糞でイッたのか？笑」
「……っ!？ そ…そんなわけないでしょ!」


「素直じゃねぇな〜笑
じゃあプレゼントだ」
俺は浣腸器の先を
郁美のアナルにぶっ挿した。
「ひゃあ…っ
な、なに!?」
「郁美の大好きな浣腸だぞ笑」
「か、浣腸…!?」


「ほーら…どんどん入ってくぞ～
気持ちいいだろぉ？笑」
「やめ…んんん！
お尻…もういやぁ！」
「ちなみにこれは
俺とお前のおしっこだぞ？」
「…おしっこ…！？
嘘…やめて…汚い…
入れないで…抜いてよ！」


俺は郁美の抵抗を無視して
どんどん浣腸を入れていく。
「楽しいぜ～郁美」
「んん…はぁ…はぁ……はぁ…」
「よーし…全部飲み込んだな」
「お腹…苦しい……い…」
郁美の腹は大量の浣腸で
カエル腹になっていた。


「あぁあ…も、漏れちゃう…
もう満足でしょ！
はやくトイレに…」
「あん？笑」
「浣腸も我慢できないのか？笑」
「…お尻が閉じないのよ！
あ、あなたのせいなんでしょ！」
モリ


俺はおむつをどけると
郁美の身体を横に倒した。
「きゃっ…！」
「すげぇ腹だな笑
まるで妊婦だ」
「う…動けない…
お腹…限界…い……！」


「ちょ…な、なにして…」
「よいしょっと」
俺は郁美の隣に寝転ぶとちんぽをケツに近づけた。
「妊婦みたいで興奮してきたぜぇ」
「な、なによ…」



「俺は妊婦も大好物なんでな」
「こ、知らないわよ！は、離れて！触らないで！」
「あぁ勃起してきた。あぁ～まんこがぬるぬるしてんぜ」
「待っ…！？嘘…やめて！」


「きゃああ！」
郁美のまんこへ俺のちんぽが捻じ込まれた。
「やめてぇぇ…！セックスやだぁ！抜いてぇぇ！！」
「あぁ～気持ちぃ！ぬるぬるしてて最高だぞ～郁美」


俺は腰を激しく動かし始める。
「郁美の弱いところは全部知ってるぜ！」
「そこ…だめぇえ！突かないでぇ！」
「ここだろ〜ここも！亀頭でゴリゴリされるのが大好きだよなぁ！笑」
「いやっあぁ♥な、なんでっ…そんな…んんっ♥」


「おらおらっ！」
「やめっ…んん♥」
（どうして…
なんでこんな
気持ちいいの…）
「吐息が漏れてるぜぇ！
毎日毎日
浮気セックス
したもんなぁ!!」
「…んぐっ……♥
変なこと…言わないで!」


「まんこもいいが…」
俺はまんこからちんぽを引き抜いた。郁美のアナルからは屁が漏れ出している。
ぶる
モワ
「んんぁ…っ…! はぁ…はぁ… も…もう… 終わりよね…?」
「んなわけねぇだろ…笑」


「やっぱ…ケツだな！」
ちんぽをズラすとアナルにずぼっと突き刺した。
「ああっ！」
「あぁ～これこれ笑
やっぱ郁美のケツは最高だな！」
「やめ…って…ぁ
いやぁぁあ！」


「腹の中が小便でタプタプだ笑
まんこ以上にびちょびちょ笑」
「ひやっ…！」
ぐい
「んぐうお♥」
（お尻…い…なんで…苦しいのにいいい！）
「気持ちいいだろう？笑
郁美はこうやって激しく
突かれるの好きだよなぁ！」


「そんなわけ…っ…
んんあぁぁ♥
あなたみたいな
変態じゃ…ない…っ」
「じゃあ…
ここはどうだ…
おおらっ！」
ちんぽが腸の奥まで
一気に挿入され、
ポルチオに刺激が
ガツンと送られる。
「んぎやぁあ…♥」
「アナル越しの
感覚は最高だろ？笑
郁美はこれで
何回もアクメしてるからな」


「もう…やめ…てぇ♥お尻が…壊れちゃう！」
「もうとっくに壊れてるだろ笑」
「あぁ～イきそ…！郁美のけつまんこに射精…くるぞおお！」
「いやぁ…だめぇ…♥イきたくないいいい！」


「ケツで孕めっ！」
「イっくぅ♥」
俺のちんぽがどくどくと躍動し郁美のアナルの奥へ女を孕ませる子種汁を注ぎ込んでいく。


「あぁ…あぁぁ…」
「ふぅ〜出た出た。
ん？これは…
うんちがまだ
残ってたようだな」
俺のちんぽが
郁美の糞便に
押し返されていく。
「もう…だめ…
何も考えられない…
はぁ…はぁ…♡」
「あぁ〜この感触…
これ最高だよな〜笑」



ちんぽが抜けたアナルは
精液と糞カス塗れで
下品に呼吸していた。
「お尻ぃ…あ…
熱いぃ…んん」
(だめ…こんな…
こんなの…)
「おしっこも漏らして…
こりゃ盛大に
ケツイキしちまったな
郁美〜笑」
「お尻…力…
入らにゃいぃ…い♥」


「あぁぁあ♥」
郁美は身体をびくびく痙攣させながらうんちをどばどばと漏らしだした。
「うおお笑
まだこんなに
溜まってたのか笑」
「あぁっ♥…あぁ♥」
（うんち…出るの…あぁ…
気持ち…いい…あぁ
…こんなのだめぇ…）


「否定しても無駄だぜ？笑
郁美は立派な変態だ」
「いやぁ…もう…
イきたくないのに…♥
あ…あぁ…あ」
郁美は糞と腸汁を
漏らしながら気を失った。
「気絶しちまったか。
今日はこんなもんか笑
今夜旦那が帰ってきて
この光景を見たら
どう思うんだろうな笑」


アナル開発
7週目


郁美の調教をはじめて数週間。今日も俺と郁美は変態セックスの最中だ。
「じゅぼじゅぼぼお♥」
「あぁちんぽ気持ちぃ～郁美のフェラチオはちんぽを熟知してるなぁ笑」
「…ご主人様ぁ…にい…教えていただき…んましたぁ…♥」
「舌のザラザラが裏筋を刺激するぜぇ…」



「っおら！郁美の大好きな
喉奥ピストンだぞ！」
「んんぐお♥
深いいいいん…っあぁ♥」
郁美は唾液を垂らしながら
アナルから屁をこいた。
プス～～
「あぁんんあ♥
おならでちゃうう♥」
「おいおい笑
ケツのディルドは
まだ出すんじゃねぇぞ～」


「おら！舌を使って
全体を舐めまわせ」
「ひゃいい…ぢゅぢゅ♥
じゅぶぼぼっぢゅ♥」
「あぁ～気持ちいいぜぇ！
尿道もペロペロしろ」
「んんっぢゅぶぶぶ♥
ひゃい…んんぁ…♥」


「郁美の口まんこを犯すのは楽しいなぁ～っおおら！」
「つぢゅぼぼっぷぅう♥んうぇ…つぢゅぶ♥」
「タマタマも舐めろ！うひょ～最高お」
「んんっぢゅぶぼ♥おちんちん…お汁がいっぱい出てますぅ♥」


「あぁ～腰が止まらねぇぜ。そろそろ出ちまいそうだ」
「んぢゅ…激しっ…おなら出ちゃうう…ん♥お口もお尻も気持ちいい♥」
郁美のお尻からおならがどんどん漏れていく。
「よーし…郁美も一緒に絶頂するんだぞ～」
「ひゃあい…あぁ…イきますぅ♥」


「あぁ～イクイく♪」
「いぐぅぅぅ♥」
郁美のアナルから
ずるるると超長ディルドが飛び出した。


ぷる
ぴく
「精液ぃ…いっぱいぃぁ♥
おじりぃ…気持ちいい♥」
「ぴくぴく痙攣して
気持ちいいぞ〜郁美。
小便も漏らして
エッチだな〜」
モワ
じょろろろ
「おじりぃ…長いいい♥
イくの止まらにゃいいい♥」
「ディルドが腸液で
ベトベトになってんな笑」


「んぐっ…はぐぅ♥」
ディルドが抜けきったアナルは
腸内が丸見えになるほど
ぱっくりと開いていた。
「ふぅ～出した出した笑
ちゃんと全部飲めよ～」
「ごく…ぢゅるん♥
おいひい…れすぅ…♥」


郁美にアフターフェラをさせ
満足した俺はベッドの上から降りた。
「よーし…今日は
こんなもんか」
「え……」
「もう夕方だぜ？
旦那が出張から帰ってきてから
セックスする時間が
短くなっちまったな～笑」
「…そうですね……」
「どうした郁美。
何か言いたいことでもあるのか？」
「…えと…その……」
郁美は腰をふりふりしながら
恥ずかしそうに答えた。


「私…満足できないんですぅ…♥
もっと…もっとご主人様に
お尻を弄って欲しいんです…っ!」
「ほぉ…笑」
「…そのためなら……
私…なんでもしますぅ♥」
「つふはは笑
郁美が頼んでくるなら
俺が断る理由は無いな笑」
「…お願いします、ご主人様ぁ♥」
「旦那はいいのか?」
「夫はアナルセックスには
全然興味ないみたいなんですぅ…」
「てか、もうすぐ帰ってくるだろ?」


「夫は最近すぐ寝ちゃうんです。
だから…そのあとは
いつでも行けます♥」
「まったく…笑
悪い女だぜ」
「…オナニーじゃ
もう満足が…
できないんですぅ…♥」
「仕方ねぇな。
じゃあ後で俺の部屋に来い。
とびっきりのやつを
用意しといてやるよ」
「あ…ありがとうございますぅ♥
ご主人様…あ…♥」
「くくく…笑」
俺は自宅に戻り、準備を始めた。


その日の夜。
俺は浴室で
ある用意をしていた。
「今夜は俺が…
一番やりたかったことを
実行してやるぜぇ…笑」
「あぁ…臭っせ…笑
我ながら
エぐい光景だな」
準備をしていると
ピンポーンと
インターホンの音がした。


ドアを開けると郁美が笑顔で入ってきた。
「ご、ご主人様ぁ…お、お待たせ…しましたぁ♥」
「おいおい笑なんだよその格好」
「あ…す、すみません…!あの…わくわくして…その…いろいろ着てくるの忘れちゃいました…ぁ」
「焦りすぎだろ笑可愛いぞ〜郁美。今日はとびっきりの調教をしてやるからな」
「……は、はい……♥」


俺は郁美を裸にすると浴室へと招き入れた。
「よーし…こっちへこい」
「お邪魔しま…んん…げほっ♥」
「そこに座れ。これからお前に浣腸をしてやるからな」
「……は、はい……♥」
「今までのより強烈だからな。覚悟しろよ笑」
「い…いままで以上…ですか…んん…それって…この…器具を使うんですか…？」



郁美の周りには大量のイリゲーターが設置されていた。
「これはイリゲーターだ。浣腸を大量に注ぎ込める器具だぜ」
「…た、大量……！？なんだか…ちょっと怖くなってきましたぁ…」
「なぁに…今の郁美ならすんなりだろうよ」
ぷる



俺は郁美のアナルにカテーテルを繋ぎイリゲーターに液体を注ぎ込んでいく。
「んん！？あぁ…なんか…すごい勢いで…入ってきてますぅ…」
モワ
「シリンダーと違ってするする止めどなく入っていくからな」
「あの…んんあ♥すごいペースで…アナルに…入ってきますぅ！」
たぷん



「郁美の大好きな精液浣腸液と小便カクテルだぞ〜どんどん飲め」
「んぁあ…♥はぁ…はぁ…♥」
イリゲーターの液体がカテーテルを通り郁美のアナルの中へ注ぎ込まれていく。
「よーし…もっと追加してやろう」



俺は周りのイリゲーターにも液体を注ぎ込んでいく。
「はにゃあ…！？さっきより…あぁ♥勢いが…あああ♥」
「どんどん入ってくな笑すげぇ光景だ笑」
「んあぁあああ♥はぁ…はぁ…んん♥」
たぷん


郁美のお腹が
だんだんと膨らんでいく。
「はぁ…はぁ…♥
どんどんお腹に
入ってきますう♥」
「くく笑
まだまだ入るだろ。
今日はこいつを
注いでやるぜぇ笑」
俺は悪臭のする液体を
イリゲーターへ投入した。
ぶる


「ぺ…げほっ♥
く、臭い…ですぅ…
なんですか…それぇ…」
「何ってわかるだろ？
郁美の下痢便だよ笑」
『えええええ！？』
俺はイリゲーターにどんどんと
郁美の下痢便を注ぎ込んでいく。
びくっ
たぷん



「あぁ…あぁあ♥
下痢うんちがぁあ
戻ってきますぅう♥」
「今日、郁美が出した
新鮮な下痢便だから
安心しろ笑」
浴室は悪臭に包まれ
鼻の曲がるような空間に変貌した。
「んぁああ♥
これ…っ…苦し…
あぁあ…お腹…ぁ♥」


空になったイリゲーターに俺は液体を追加していく。
「どんどん味わえ笑まだまだおかわりがあるからなぁ～」
「あぁぁぁぁ♥」
「気持ちいだろぉ～郁美ぃ～笑」
「んぐぅう♥」
たぷん


郁美の腹はさらに膨れ、
妊婦のようなボテ腹になった。
「お腹あ…!?
限界い♥」
「すげぇ腹だな笑
今ある分は
残さず飲みなさい」
「あっ…あぁあ♥
お尻…あぁ苦しいけど…
感じちゃううう♥」


「イッぐう♥」
郁美は浣腸されながら
身体をガタガタと
痙攣させた。
「んぐぅう♥」
「浣腸でケツイキか笑
郁美は本当に
変態さんだな～」
たぷん


イリゲーターの中身が
郁美のアナルへすべて注がれた。
「ほんとに全部
入ったな～笑
えらいぞ～郁美」
「はぁ…はぁ…♥
はやくぶりぶり
排泄したいですぅ…」
「よーし…準備もできたし。
散歩にでかけるぞ」
「へ…？」


「前から郁美とお散歩に行きたいと思ってたんだ」
「えと…♥デートじゃなくて…お散歩ですか…？」
「そうだ…郁美がワンちゃんみたいで可愛くてな～ペットにしたいんだ」
「ううう…ご主人様ぁ…♥」
「そうそう笑
俺は郁美のご主人様だからな。
お前には良いものを付けてやろう」


俺は郁美の首に
首輪とリードを装着させた。
「きゃっ♥」
「おおお！
似合うぞ郁美。
さらにエッチで下品に
見えるぞお笑」
「そ、そうですかぁ…♥
ありがとうございますぅ…」
「よーし…
準備もできたし、
出かけるぞお」
俺は郁美のリードを引っ張り
玄関へと向かっていった。


「ご、ご主人様ぁ…♥
裸で…外に行くんですかぁ！？」
「そうだが？」
「だ、誰かに見られたら…
通報されちゃいますぅ…！
せめて…ローブを…」
「だめだ…
全裸でいくぞ」
「うう…♥」
「ま、お前だけってのもあれだし
俺も全裸で行ってやるよ。
興奮するぜぇ笑」


「でも…お腹が…苦しくて…ぇ♥
これじゃあ歩けないですぅう…
漏れちゃう…」
「これを付けて
やるよ…！」
俺は郁美のケツに
器具を取りつけ、
極太のディルドを
一気に挿入した。
「んんぐあああ♥
深いいいいい♥」
「可愛いだろう？
尻尾が付いてるんだぜ？」
「…はぁ…はぁ…♥
このディルド…あぁ…
ゴツゴツしてますぅ…♥」


俺はドアを開けると
郁美のリードを引っ張った。
「きゃん…♥」
「おら行くぞ！
あぁ～すっげ
わくわくするぜ」
「…はぁ…はぁ…♥
ご主人様ぁ…
足が震えますぅ…」
「気持ちがいいな～郁美。
まるで生まれたてのような
清々しい気分だろう？笑」
「…心臓がドキドキして…
身体が熱いですぅ…♥」


郁美は俺にリードを引かれながら
身体を縮こませて歩いている。
「うぅ…♥ 恥ずかしくて 死んじゃいそうぉ…」
「つくく笑 股間を隠すな 全部曝け出して 歩くんだ、郁美〜」
「…うぅ……はい…い…♥ んんっ♥」
「あぁ…やっぱ 郁美のカエル腹エロすぎ… 下品すぎて勃起してきた…」
「…お腹…たぷたぷして… 辛いんですぅ…んんぁ♥」


俺と郁美は近くの公園にたどり着いた。
「誰もいねぇな。つまんねぇがまぁいいか」
「はぁ…はぁ…♥ご主人様ぁ…もう限界です…ぅ」
「さっきからお尻をふりふりしやがってよぉ…可愛いやつだ笑」
「…ディルドが…お尻の中で擦れて…ずっと…イってるんですぅ…♥」
「最高だな笑」
「…あぁ…もうだめぇ…♥」


郁美はお腹を押さえながら
その場にしゃがみこんだ。
「もぉお腹痛いよぉ…
ぎゅるぎゅるって
鳴ってますぅ…♥」
「俺にも聞こえるぜぇ笑
たっぷりと注ぎ込んだからな」
「んあっ…はあ……♥」
ぶる


はーっ
はーっ
ぶる
「出したいよぉ…ふんぐぅう♥抜けにゃいいい♥」
「器具で固定してるからな。どんなに踏ん張っても抜けない仕組みだぜ？笑」
「そんなぁ…んんっ♥」
郁美のお腹はぎゅるぎゅると音を大きくする。



「ふんぐぅうううう♥
あぁ…おしっこ出りゅぅ♥」
郁美の尿道から
おしっこが漏れていく。
「公園でおしっことは…
郁美は本当に
ワンちゃんみたいだなぁ笑」
あぁ
はーっ
はーっ
はーっ
ぶる
「あぁ…んはぁ…
お尻…出ないぃぃ…
出したいのに…ぃ♥」
「どうした？抜いてほしいか？
ならちゃんとお願いするんだ」


「い…郁美はぁ…んん…♥
公園でワンちゃんみたいに
ぶりぶりうんちを…
排泄したいですぅう♥」
「郁美は本当に
スケベなメス犬だなぁ笑
俺にうんち見られたいのか！」
ぶる
「ひゃあいい…♥
ご主人様ぁあ！
郁美のうんち…
見てくだしゃいいいいい♥」
俺はしっぽを掴むと
一気にディルドを引き抜いた。



あぁ
ぶる
『ひぐぅう♥』
郁美のアナルからネジ型スクリューディルドがずぼっと抜けていく。
「うっわ笑すっげぇえ笑」


「イグ…あぁあ…おじりぃ…イぐう…♥」
「スクリューだからな。腸壁をゴリゴリえぐって快感が止まらねえだろ笑」
「しゅごいぃぃ…♥だめ…あぁあぁ♥」
ぶる
「腸汁でびちゃびちゃびちゃ笑 すげえ匂いだわ」
「あぁあ…出る♥お尻…い…いくるう♥」


ディルドが引き抜かれると
ダムが決壊したかのように
勢いよく小便浣腸が噴出した。
「んぐあああ♥」
「うははは笑
やべぇ勢いだな」
「勝手に…い
出ちゃうう♥」


『あぁあ…♥』
排泄の勢いはさらに増し
精液カクテルが零れていく。
「排泄気持ちいいか、郁美ぃ！」
「んんがぁ♥
イくのがぁ
止まらにゃい♥」


そして郁美のアナルからは茶色く濁った液体が飛び散っていく。
「あぁぁあ♥んんぁ♥臭いですぅう♥あぁあ！臭いの出てますぅううう♥」
「下痢便すげぇ音だな笑
ドスケベすぎるぜ」
「はぁ…はぁ♥
おじりいい壊れるぅう♥」


「んはぁ…はぁ…全部ぅ…出たぁ…♥」
浣腸を一気に吐き出し郁美のアナルはひくひくと卑猥に痙攣した。
「アクメ中のアナルがウネウネ動いてエッチだぞ~郁美」
「いやぁ…♥イってる時のアナル見ちゃやだめぇ…」


「おお？笑
奥から何かきたぞお？」
「ひやぁっ♥
おっきいうんちが…
おりてきましたぁ…」
郁美はアナルに
力を込めるが…。
「あぁあ…！
肛門閉じないいい♥
勝手に…出ちゃううう♥」


「太いの脱糞るぅ♥」
器具で開かれたアナルから
ぶっ太いうんちが飛び出した。
「野糞しちゃったな～郁美
とっても臭いぞお！」
「ひや…あ♥
うんち…あぁ
うんち気持ちいい♥」


「うんちぶりぶりぃ♥ 公園でうんちするのぉお 気持ちいいですぅう♥」
「えらいぞ郁美ぃ笑 もっと下品に もっとスケベに、脱糞アクメしろ!」
「うんちぃい…♥ 排泄イぐっ…んあ 頭真っ白になりゅう♥」



郁美のアナルから見事な一本糞がぼたっと抜け落ちた。
「んにゃぁ…♥ふ、太いのぉ…お…出ましたぁ♥」
「すっきりしたか？郁美ぃ…笑」
ぶる
「うう…♥…はい…♥」
「今度は俺のちんぽをすっきりさせてもらおうか」


俺は郁美のケツの器具を外すと
ベンチにどさっと腰を下ろした。
ぶる
「アナルがぱっくりでエッチだぞ～郁美。
ほら、ちんぽをご奉仕するんだ」
「は…はい……♥
ご主人様ぁ…」
郁美のアナルが腸内丸出しでひくひく動いている。
「じゅるうう♥
あぁ…ぢゅぶる♥」


「公園で全裸でフェラされるとかすげぇ興奮するぜ笑」
「んん…れろ…んんぁご主人様のお亀頭…ペロ…ペロペロお♥」
「あぁそこ良い。尿道の入口舐めるの最高だぞ～」
「ひやぃぃ……♥」



あっ♥
「カリにこびり付いたチンカスも
舌で舐めとるんだぞ」
「…ひゃいぃ…つぢゅぶる♥
つぢゅつぢゅつぢゅるぅ♥」
ずる
んぷっ
「すげぇしゃぶりつき笑
郁美はちんぽが
大好きだなぁ笑」
「…ご主人様のお…じゅぼ♥
おちんちん大好きですぅ♥」
ぐい


「舌だけじゃなくて喉奥でもちんぽをシゴけ！」
「ひゃい…んぐぅう♥」
郁美は口をすぼめると一気に喉の奥までちんぽを咥え込んだ。
あっ♥
『んぐうううっ♥』
「おお～気持ちいいぞお」
ズポッ


郁美の喉奥がぶるっと震え、同時にアナルからおならが漏れた。
「おいおい笑 喉の奥でイっちまったのか？」
「…ひやい…れろ… 喉奥がぁ…んんぁ♥ 気持ちいいんですう…」
「最高の口まんこだな笑 ほら、もっと舐めなさい」
「…はいい…れろれろ♥」


「ご主人様のタマタマもぉいっぱい舐めますぅ…れろ…♥」
「おぉ…いいぞぉ郁美。鼻を押し付けてくんくんしながら舐めろ」
モク
あっ♥
「…すぅ〜はぁ〜…ん♥汗臭くて…男の人のぉ♥濃い匂いがしますぅ…♥」
「マッサージもするんだ」
ずる


ぷる
「…つぢゅぶぶ…れろ♥
ご主人様の…匂い…
大好きですぅ…うんぐ♥」
「たっぷり嗅がせたからな笑」
あむ
モフ
「…つぢゅ…♥
くんくん…すぅはぁ…♥」
「あぁ…付け根の部分
ペロペロされんの最高お」
ぐい


あっ♥
「んんじゅぷ♥
れろれろ…んんぁ♥」
「いいぞ～郁美。
ちんぽ美味しいか～」
ずる
んぷっ
「ひゃい♥ 生臭くてぇ…
クラクラしちゃいますぅ♥
亀頭の先から出てくるお汁がぁ
っちゅぱ♥ おいひいれすぅ…♥」
「いいぞお～！
粘膜気持ち～」
ぐい



「ふんぐぅっ♥
んんっ♥ イくぅ…♥」
郁美は喉奥に亀頭が当たるたびに
お尻をびくっとさせ屁を漏らす。
ぷす～～
あっ♥
「可愛いぞお～郁美。
こっちを見ながら
ディープスロートしろ」
「はいぃ…っぢゅっぷぶっぽ♥」


「亀頭からいっぱい…お汁が出てきてますぅ…う♥」
「ちゅーちゅー吸われるのまじで良いぜぇ」
あっ♥
「…すっごく濃いですぅ…っぢゅっぢゅるるるる♥」
「あぁ～やべ…イきそ」


あっ
「喉の奥に出すぞぉ！口まんこを孕ませてやる」
「…ご主人様のぉ…濃いのきちゃうぅ…んんぁ♥」
ずる
「喉奥に中出しだ…！一気に咥えろよぉ！」
「んんぐ…ふんぐぅぅぅ♥」
んぷっ
ぐい



『…ぶぼお…！
イぐうう…うっ♥』
『あぁ～出る出る』
郁美の身体がびくっと跳ねた。
「…だめ…お尻も…
イっちゃうぅぅぅっ♥」


郁美のケツ穴から
うんちが噴出した。
「まだうんちが残ってたのか笑
喉イキして脱糞しちまうとは笑」
「うんち…あああ
出ちゃううう♥」
「…喉腺がぷるぷる震えて
気持ちいいぞ〜郁美」


「公園が郁美のうんちまみれになっちゃうなぁ笑」
「…んぐうぁあ♥つぢゅぶぶれろ♥勝手に…んんぁ出ちゃうんですぅ♥」
「お外でするフェラ脱糞は気持ちいいかぁ？郁美」
「…ひやい…んんぁ♥興奮して…ドキドキして…すごく感じちゃいますぅ♥」


「…んんぁあ♥」
郁美のお尻から
ずぶずぶと音を立て
うんちが吐き出された。
「あぁ～臭いぞお郁美。
たくさん出したなぁ笑」
「ご主人様…あ…
嗅いじゃだめぇ…ん♥」
「ほら、ちゃんと
ザーメンを舐めとれ」


ぶる
「じゅぶぶぶぶぶるうる♥
亀頭の…残り汁もぉ…
全部飲みます…ね…っぢゅ♥」
「あぁ～これこれ…
これ最高ぉ」
「…っじゅっぢゅじゅ……♥
喉に絡みついて…んんぁ
精液の匂いでいっぱぁい…♥」
「鼻からも精液逆流させて
可愛いな～郁美は」
ぐい



「っごくごくごく…♥
げほっ…っぢゅるるうる♥」
「よーし…ペロペロ舐めて
キレイにするんだぞ」
モワ
ドピ
あっ♥
「…ぺろ…ごく…ごくごく…
れろれろ…っ…おいひいですぅ…♥」
ぷる
郁美は俺の出したザーメンを
綺麗に舌で舐めとり飲み込んだ。



「郁美とのお散歩は楽しいな〜」
「はぁ…はぁ…♥…いっぱい…イっちゃいましたぁ♥」
「郁美…今日は郁美のアナル拡張の成果を見せてもらおうと思うぞ」
「…拡張の…成果…？何を…するんですか？」
「こっちへこーい」
「…ひや…ん♥」
俺は郁美のリードを引っ張り公園の遊歩道に向かった。


「たしかこの辺に…おっ…あったぜ」
「…えと…これって…」
そこには車止めポールがずらずらと並んでいた。
「『公園のアレ』ってやつだ。そそられるフォルムだよな」
「…ご主人様ぁ…もしかして…これを…」
「察しがイイな、郁美。ほら、好きなヤツを選べ」



郁美はポールの前にお尻を突き出した。
「…んん…♥」
モワ
「ディルドオナニーの時みたいに両手は上げろ」
「はぁい……♥ほんとに…これを…挿れるんですかぁ…」
「間近で見ると太いな笑」


「郁美がポールオナニーでケツイキする姿が見たいんだよ」
「ぅう…わ…わかりましたぁ♥んん……はぁはぁ♥」
「一気に奥まで挿入しろよ」
「……入っちゃう……♥太いの…お尻にい……………！」
郁美は腰を一気に下ろした。


太いポールを郁美のアナルはすんなりと呑み込んでいく。
「あがあっ♥太いぃぃぃ♥」
あっ♥
はーっ
はーっ
「すっげ笑 ほんとに奥まで入っちまってるぜ」
モゾ
「…んあああぁ 深いぃぃぃぃ♥」
ぐい
ズポボッ
ぶる


「おっほぉお♥」
郁美は動物のように喘ぎながら腰を振り始める。
モワ
「ポールが腸汁でびちょびちょ笑」
「ふんぐぅう♥おおおおおお♥」
ぶる
ぐい
ブポッ


『…おんぐおおお♥』
「もっと腰を振れ。腸汁撒き散らせ!」
「内蔵が押し上げられて…苦じいのにぃ…いい感じちゃううう♥」
「いいぞおお!」
「…削れるうううう♥
冷たい…ああ…
んんっ太いい深いいいい♥
おかしくなるうううう♥」


『ずぼずぼおっ♥』
「すげえ腰振り！ケツ穴が変形してるぜ笑」
「おっおっおっ♥ケツ穴気持ぢいい♥内臓に響くぅぅぅ♥頭…バカになるぅ♥」
「…素晴らしい…」
ぐい
ぶる



「…ほぐぅ♥ケツぅ…ケツ奥ぅぅぅ♥」
郁美はおっぱいとお尻を激しく振り続ける。
「おらおら！もっとケツで喘げ！イキ狂うんだ！」
「…アナ…ルぅ…ぁイくぅ…ぁぁあん♥おっおぁぁぁぁ！」
「この感覚を一度でも味わったら元の生活には一生戻れないぜ～笑」


「あぁ…きちゃううう…う
すごいアクメくるううう❤」
「いいぞお郁美い！
極太ポールちんぽでイけ！」
「あがぁあ❤
くる…ぐるううう❤
ケツイキ止まんな…
あぁあ…あぁあぁあ❤」
モワ
郁美のピストンは
どんどん加速し…
そして…。
ズポッ
ぐい
ぶる



「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛♥」
郁美は雄たけびをあげながら
アナルから腸汁を撒き散らし
ケツイキ絶頂した。
はーっ
「すげぇ痙攣。
こりゃケツイキで
頭飛んじまうな笑」
「おっおうおっ♥
おほおおおお♥」
モワ
ぐい
ぷる



「…おじりぃぃ…♥
びくびく…止まらにゃぃぃ…ぃ♥」
「すごいぞ郁美…
見てるだけで
射精しちまったよ」
モワ
「…あぁ…んんぁ…
腰抜けちゃ…ぁぁ…
立てましぇん…ん♥」
「しょうがねぇな。
よいしょっと…！」
俺は郁美の腰を掴み
アナルをポールから引き抜いた。


ぶぼっっと音を立て
郁美のぱっくりアナルが曝け出された。
『んぐぅぅぅ♥』
ぐぱぁ
ぶる
「あはは笑
すっげえ拡がってるな。
郁美…最高だぞ！」
「おじりい…イくぅ…♥」
じょろろ


「これだよ…これ…俺が求めていた…最高のアナルだ…」
「嬉しいですぅ…♥ご主人様ぁ…ん♥」
「腰が抜けちまったか笑ハイハイして帰るしかねぇな」
「…そんにゃあ…♥」
郁美は俺に連れられ、アナルからいろんなものを垂れ流しながら帰路についた。


アナル開発
？週目



あれから数ケ月が過ぎた。
俺と郁美は毎日のようにハメまくり
俺は郁美のまんこ…アナル…
あらゆる穴に…
あらゆるものを注ぎ込んだ。
「それもこれも
あんたのおかげだぜ…
尻神様よぉ…笑」
パンパン！
俺は賽銭箱に小銭を投げ入れ
手を叩いた。
「あぁ…腹が減ったな。
スーパーでも寄って
飯でももらってくか～」
俺は近くのスーパーへ向かった。



スーパーに入ると
女性が声をかけてきた。
「あ、こんにちは！」
「こんにちは！」
…そう…ボテ腹になった郁美だ。
マタニティワンピースを着て
ニコニコしながらお腹を撫でている。
「お腹大きくなりましたね～
ご出産はいつなんですか？」
「もうすぐ
出産予定日なんです」


「よいしょっと…
じゃあ私は
これで失礼しますね」
郁美は重たい荷物を
持ち上げた。
「重たそうですね」
「え…？
あぁ…夫が妊娠中でも
身体は動かした方が良いって
言うものですから」
「いやいや無理はだめですよ。
俺アパートまで持ちますよ」
「え…でも…」
俺は郁美から荷物を受け取り
二人で一緒にアパートへ帰った。


俺は郁美の部屋の玄関に着くと
持っていた荷物を下ろした。
「じゃあ…ここに置いておきますね」
「助かりました…あ
ありがとうございます…♥
ほんとはちょっと
大変だったんです…笑」
「……じゃあ俺は
これで失礼します」
「え…もう良いんですか…？」
郁美の身体がびくんとした。
「はい？
どうかしましたか？」
「…あの……」


「…あれ…私…あれ…どうしてだろ…あなたに……」
「俺に…？」
「あなたに…何かを求めてる…？」
「…ほお……」
「……なんでだろ…あなたと私がいつも…イケないこと…してる夢のせい…？」
「……言って欲しいのか」
郁美の身体がさらにびくっと跳ねた。
「あ…あぁあぁあ……」


『服を脱げ！』
「っ…！？…」
「は…はい…♥」
郁美はすぐにマタニティワンピースを脱ぎ捨て卑猥なボディを俺に見せつけた。
「…下品な身体だぜぇ…なぁ…郁美ぃぃ！」
「…はいぃ♥
ご主人様あぁぁ♥
今日も郁美のエッチな穴を好きなだけほじってくださいいい♥」


「おらっ!」
「はんぐぅうううう♥」
俺は間髪入れずに郁美をベッドの上に押し倒し背後からちんぽをまんこへ挿入した。
モミ
「ちんぽ入ってくぞぉ!」
「ご主人様のおちんぽおぉ♥入ってきたぁあっあっ♥」


臨月まんこの奥に
ちんぽを一気に
突っ込んだ。
おっ♡
ぐいっ
「これが好きだろぉ！
おらっおらっ！」
「んぎゃあっ♡
深いよおおおお♡」
ズボッ
ぶるっ
「あぁ～たまんねぇぜ」
「あっあうあっ♡
おまんこ気持ち…
いいですぅぅぅ♡」
ぱんっ


「郁美！もっと！まんこ締めろ！」
「ひゃいいい♥あぁんんあ♥んんっ♥」
どく
「妊娠まんこはあったかいぜぇちんぽ溶けそう笑」
モミ
ぷる
「ご主人様ぁあ♥もっと奥までハメハメぇしてくだしゃいい♥」


ちんぽの亀頭がコリっとした子宮に当たる。
はーっ
はーっ
「おら！子宮にちんぽキスだ！この感触たまんねぇ！」
ぐりぃ
「んぐううううう♡奥しゅごいいいいい♡」
ズボッ
「赤ん坊にちんぽが届いちまうな笑」
「あんんぁ♡…ひやいあいい♡」


「あぁ～気持ちぃ
腰が止まらねぇ」
「…あんんぁ♥
激しっ…んんぁ
いいよおおお♥」
「郁美は激しく
ピストンされると
すぐに絶頂
しちまうからな笑」
「んごおお♥
おっおっんん♥」


あぁ♥
はーっ
「あぁ…そろそろ射精ちまいそうだ」
ぐぃ
「あぁんんぁ♥私もぉ…イくぅ…」
「膣の中に出しちまうぜ？笑」
ズボッ
はーっ
ぶるっ
「ひやいぁいい♥中出しがいいですぅ♥」
ぷ


「赤ん坊にも精液の味を今から教えてやんねぇとな」
「…ああぁ♥気持ぢいっ♥あぁあ♥」
「奥に出すぞぉ！ポルチオ絶頂しろよぉ！おらおらおら！郁美ぃぃぃ！」
「いぐっ…きちゃう♥おまんこいぐぅ♥」


「すげぇアクメ笑
母乳も漏れてるぞ」
「…はぁ…♥
おっぱいもぉ…
イっちゃううう♥」
「びくんびくんって
膣の中が動いて
気持ちいいぞぉ」
モミ
ぶる
「あぁあ…あ♥
あぁ気持ぢいい♥
あぁ…イくぅ♥」



モミ
あっ♥
ぷる
俺は郁美からちんぽを抜くと
おっぱいを強く揉みだした。
「ひゃっ…!?
おっぱいだめぇぇ♥」
「母乳エロお笑
黒ずんだ乳首も
エッチだな～」
「おっぱい…あぁぁ♥」


あっ♥
郁美の乳首からはとろっとした母乳が絞り出されていく。
「あぁ…ぺろ…甘くて美味しいぞ～」
「飲んじゃだめですぅ…♥」
はーーー
モミ
「んんぁっ♥乳首…感じちゃう」
ぷる
「…ああ…可愛いぞお郁美。我慢できねぇ…」


俺は郁美の肩を掴むと
おっぱいの中に
ちんぽを突っ込んだ。
「きゃあん…♥」
「あ～柔らけぇ」
「ご主人様の
おちんぽおお…
熱いですうう♥」



「あぁ～母乳も漏れてぬるぬるで気持ちい」
「あぁんんぁ♥乳首擦れてぇ…イっちゃいますぅ♥」
はーーー
「臨月おっぱい最高お！パンパンに張っててぎゅーぎゅー乳まんこだ」
「あぁんあ…激しっ…ん♥」



俺はさらに激しく腰を動かした。
「郁美の身体はどこを使っても気持ちいいな～笑」
「あんんあぁあぁ♥ご主人…様ぁ…あぁ私もおっぱい気持ちいいですぅ♥」
「いいぞぉ！このまま中に出してやるからな」



「あぁ乳まんこ良いぃ…ちんぽ締め付けろ！」
「ご主人様のおちんぽぉ…どんどん膨らんで…ぇ…いきますぅう♥」
はーー
「乳まんこに出すぞお！郁美のおっぱいぃぃぃぃ！おっぱいおっぱいぃぃぃ！」
「あぁあ…おっぱい…イきますぅううう♥」



「おら！射精るぞ！」
どくどくとちんぽが震え郁美のおっぱいに精液が注がれていく。
「んんあ♥おっぱい熱いいいい♥」


「おっぱいビクビクさせて…郁美もイっちまったのか〜？」
「あんん…ひゃいい……っ♥イっちゃいましたぁ♥」
「乳まんこが温かくて気持ちいいだろお笑」
「ひゃい…んんぁ♥ご主人様の精液で…おっぱい熱くて…感じちゃううう♥」


郁美のおっぱいは精液と母乳で
どろどろになっていた。
「……んぁ…はぁ…
匂いでくらくらしちゃうぅ…♥」
「エッチだぞ～郁美」
もみ
モミ
はー…
たぷん
「ご主人様ぁ…
下半身が……
疼いちゃいますぅ……」
「ったく…郁美は
変態さんだなぁ笑」


郁美のはおっぱいについた精液を
手で掬い取り口で舐めていった。
「うちゅぱ…♥
と…ても…っ
濃いですぅ♥」
「まったく笑
スケベだなぁ郁美は。
俺の精液と自分の母乳は
美味いかぁ？笑」
「…ちゅぱ…はい…
甘くて…とろとろで…
美味しいですぅ…♥」
「あぁ…また勃起してきた。
郁美の身体を見てるだけで
すぐ勃起しちまうぜ」
「もっと可愛がってくだしゃい…♥」
「よし、ベッドの上で四つん這いになれ」


郁美を四つん這いにさせるとアナルから悪臭が漂った。
「さっきから臭いと思ったらケツにこんなに糞を溜めていたのか笑」
「うう…妊娠してから便秘になりやすくなっちゃいましたぁ♥」
「カチカチに詰まってて踏ん張っても排便するのが大変そうだな」
「うう…はい…♥」


「よーし！郁美の大好きなアレやってやるよ笑」
「アレって…あの…もしかして…？」
ぶる
どくん
「決まってんだろ。フィストだよ、フィスト笑
郁美のうんちを掴み出してやるよ」
「あぁぁあぁ♥ドキドキしちゃいますぅ♥」



俺の腕が郁美のアナルへ一気に挿入されていく。
「…挿入！」
ズボッ
「…んぐおっ♥」


「あん…あぁぁ♥ご主人様の腕が入ってくるぅぅぅ♥」
「俺の腕をぎゅーって締め付けてくるなぁ笑」
「はぁ…はぁんぁ…あんあんぁ♥」
「郁美のアナルをほじるのは楽しいな～っくははは笑」


「さーてと…！
うんちはどこかな～」
俺は腕アナルの中で
腕をかき回し
郁美のうんちを
集めていく。
「これぇ好きぃい♥
お腹…ああ
イくっ…っ♥」


「郁美はこれが大好きだもんな〜笑」
「…おっ…おっ…おっ…♥
お腹かき回されて
苦しいけど感じちゃう♥
もっと…もっとお♥」
ブポッ
モワ
「ぬるぬるして
気持ちがいいぞお！
もっとかき回してやるぜ」


「おらよ！」
「…んごお♥」
「糞を掻き出すの楽しいぜぇ～笑」
「…もおお尻い…限界ですぅう♥」


ぶる
「おぢりいいい…ぅ♥
深っ…んぐぅぅ♥
おっおっおっ♥」
「息があがってきたな。
アナルがぎゅーって
収縮しだしたぞ笑」
「…あぁ…んぐぁ♥
お尻イっちゃううう♥」
「ケツイキくるか～」


「すげぇ量だぞぉ！一気に掴み出してやるからなぁ！」
「…お腹ぁ…ぎもぢぃい…っ♥ああああああ♥」
「うんち出るぞお！脱糞アクメしろよお…お！」



郁美のアナルから特大のうんちが掴み出された。
ぶる
「おおら！」
「んごおおお♥うんち出たぁ」
じょろろ


「あはは！こりゃまるで赤ん坊サイズだな」
「…あっ…あぁん♥ご主人様のおかげで立派なうんちが…出せましたぁ♥」
「よーし…ホカホカのケツまんこにちんぽ突っ込んでやる」
「…ひやぁい…♥おちんぽください♥」



俺は郁美を押し倒し片足を持ち上げた。
「あぁんん♥」
「グロまんとガバアナルが開いて興奮する光景だぜ」


「ほら、郁美。ちんぽにおならをかけろ！」
「はい…♥んぐぅう…♥」
郁美の放屁が俺のちんぽを刺激する。
「あぁ臭せぇ笑 郁美のおならはちんぽにくるぜぇ」


「ご主人様のおちんぽぉ
そそり立ってきましたぁ♥」
「おら！ケツに
集中しろよ～！」
「はいぃぃ…♥
お尻…きてぇ♥」
「けつまんこに
ぶち込むぞおお！」


「おらっ！」
「おぢりぃ♥」
アナルにちんぽが挿入されると郁美は乳首から母乳を撒き散らした。


「あぁぁ気持ちぃ！郁美のケツ穴気持ちいいぞお」
「あっぁん♥ケツ穴突かれてイってますぅ♥」
「おらおらおら！腰が勝手に動いちまうぜぇ！」
「そこぅ…あぁ♥入口のとこぅ…っ気持ぢいいぃ♥」


「気持ちいいな～
郁美との変態セックス！」
「私もご主人様との
変態セックス…っ
気持ちいですぅ♥」
郁美のアナルからは
イキ屁が漏れ出し
下品な音が響く。
「あんあんあぁ♥
アナル好きぃいいい
けつまんこ好きぃ♥」
「あぁ～やべぇ
ちんぽに響くぜ笑」


「ああ…イぐっ…あ
すごいのきちゃううう♥」
「ああ郁美いい！
俺もイくぞお！
一緒に絶頂だ！」
「あぁんぁあ♥
中出しして…え
くだしゃいい♥」
「ボテ腹妊婦の
けつまんこにぃ！
中出しするぞおお！」


「郁美いいい！」
「んっぐぁ♥」
郁美の身体がびくんと跳ねあがり
孔内に俺の精液が
満たされていく。


「ご主人様のぉ…あったかい精液がいっぱあい♥」
「あぁ～出る…たっぷりと出たぞぉ…」
「…んぐう…♥お尻刺激されてぇ…奥のうんちが…下りてきちゃいましたぁ」
「うたく仕方ねぇな笑このまま脱糞アクメしろ！」


郁美のアナルから
ちんぽを抜くと
糞便がどばどばと
噴き出した。
「うんちぃいい♥
あぁあ…あぁ
脱糞るぅう♥」
「つくはは笑
脱糞アクメ
可愛いぞお〜」



「イっぐう♥」
郁美はうんちを漏らし身体を痙攣させた。
「郁美ぃ…お前は本当に素晴らしい肉便器だ」
「ひゃあい…♥ご主人…様ぁ…♥」


アナル開発
?週目


REC
00:37:12
……俺は設置したカメラの録画ボタンを押した。その画面には変わり果てた人妻・郁美の姿があった。
「ほら郁美、ちゃんと笑顔でピースしろ」
「はい、ご主人様ぁ♥」
「可愛く撮れてるぞお。郁美のアナルは素晴らしいガバ穴だな!」



あっ
「ありがとうございます♪ご主人様に毎日毎日ほぐほじしてもらって閉じない穴になっちゃいましたぁ♥」
「こんな黒ずんでエグい穴…旦那が見たら気絶するな笑」
「そんな…あの人には内緒ですぅ……」


「郁美のアナルを愛せるのは俺だけだよ。さぁ下品に歌ってもらおうか」
「はい♥聞いてください、ご主人様♥」
そう言うと郁美は括約筋に力を入れ、アナルをくぱくぱと動かし始めた。
「アナルビーズの隙間から臭っさい匂いが漏れてるぞぉ」



俺は我慢できずに
アナルビーズの取っ手を
一気に引っ張った。
「んあああ♥」
「うおお…っはは笑
肛門がすげぇ開いてるな」


ずぼずぼと卑猥な音を鳴らし
規格外のアナルビーズが
引き抜かれていく。
「おおんぐおおお♡
アナルううう
イぐイぐうう♡」
「ケツが捲れあがってんな～
腸液漏らして気持ちいいか～」
「気持ちぃいい…♡
ああ…ケツ…ああ♡」


アナルビーズが引き抜かれ…黒ずんだガバ穴が姿を現した。
「あぁ…太いの出たぁあ♥
あぁ…おなら出ますぅ…！
ふんっ！ふんぐうう♥」
ぶる
モワ
ぷす～
「すぅ～はぁ～
あぁ～臭いぞお笑」
「いやん…そんな
くんくんしないでくださいい…♥」


「放屁の音も普通じゃ聞けない音になったな。ほら、もっとケツで歌ってもらおうか」
「はいぃ…ふんんんっ♥」
「あはは笑 呼吸してるみたいだな笑 奥まで丸見えだぞお」
「んんぁ…すぅすぅしますぅ…♥」


「ひやっ…ん♥」
郁美の腸内に茶色い塊が顔を出した。
「おっと…この匂いは笑」
ぷる
「ご主人様ぁ…うんち…うんちを排泄したいですぅ♥」
「すげぇ太そうなうんちだな。よーし…ばっちり撮影してやるぞ」
モワ


「ふんぐううう♥」
郁美の肛門が盛り上がっていく。
「おら！もっと踏ん張れ！おならも！うんちも！すべてを垂れ流せ！」
「お尻が疼いちゃう…おならもうんちも我慢できない…」
「ケツイキしろ！」
「ケツイキくるッ♥」


「脱糞イぐうう♥」
ダムが決壊するように
郁美のケツ穴から
糞便がもりもりと噴出していく。
「すごいぞお郁美」



ベッドの上に糞の山ができていく。
「うんちぃい…気持ぢぃいい♥
ご主人様ぁ…見てぇ…
うんちでイってますぅう♥」
「あぁバッチリ見てるぞお笑」
「郁美のお…
臭っさいガバアナルぅ
もっと見てぇえ♥」
「こんなに太いうんちができるのは
郁美だけだぞ〜笑」



「また…イぐうう♥」
「くくく…もっともっと拡げてやるからな～郁美…笑」
ぶる
じょろろろ
「ひやい…ご主人様ぁ…♥」
俺と郁美の拡張記はこれからも続きそうだ。


この作品はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。
CGノベル
人妻洗脳
アナル拡張記






いつでも、あな





















































































































































































































































































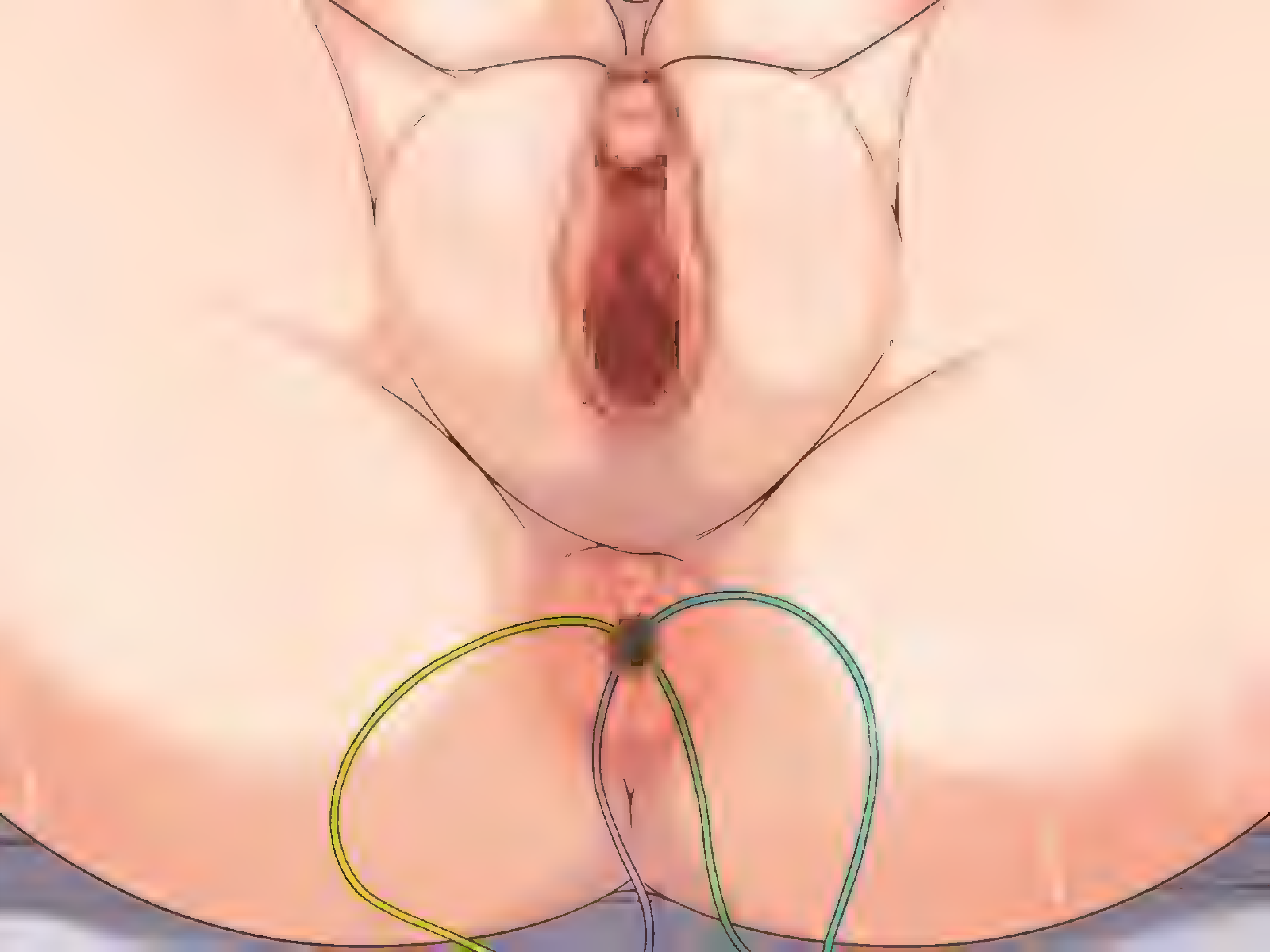






























































































































































































































































































































































































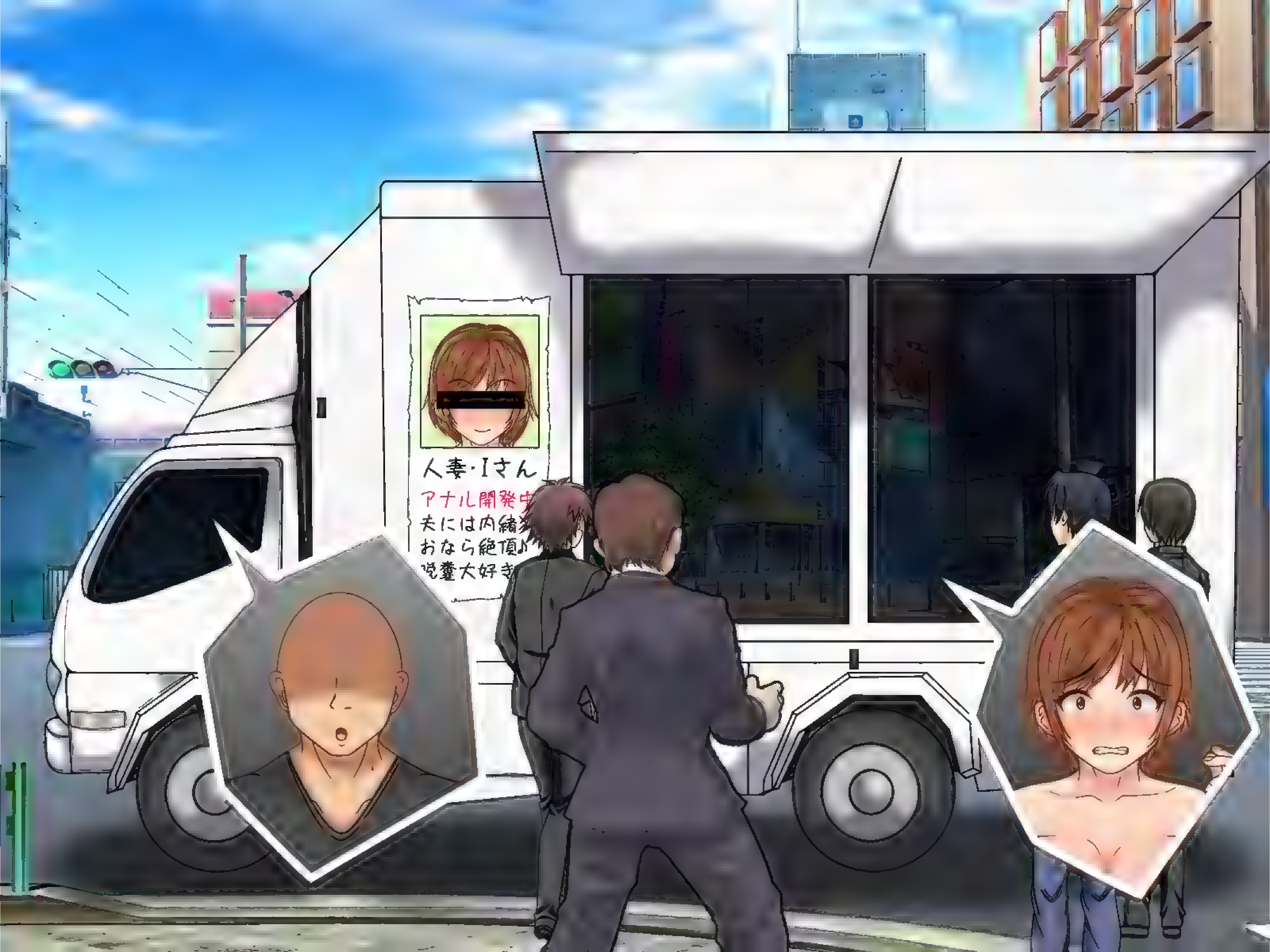









人妻・Iさん
アナル開発中
夫には内緒
おなら絶頂
脱糞大好き


人妻・Iさん
アナル開発中
夫には内緒
おなら絶頂♪
腸大好き



人妻・Iさん
アナル開発中
夫には内緒
おなら絶頂♪
浣腸大好き




人妻・Iさん
アナル開発
夫には内緒
おなら絶頂♪
大好


人妻·Iさん
アナル開発
夫には内緒
おなら絶頂♪
脱糞大好き


























中華麺
陽差屋


中華麺









































































































































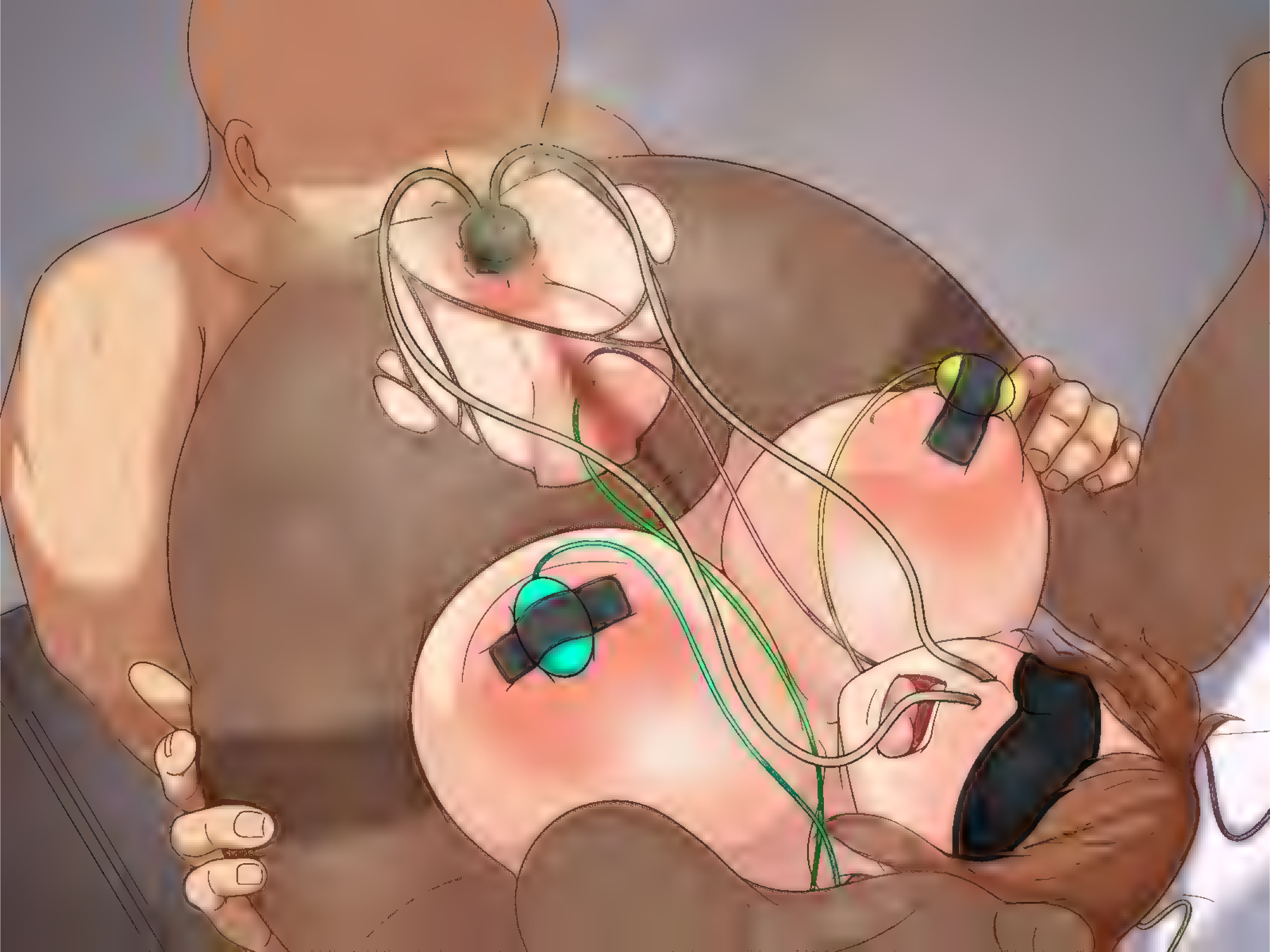




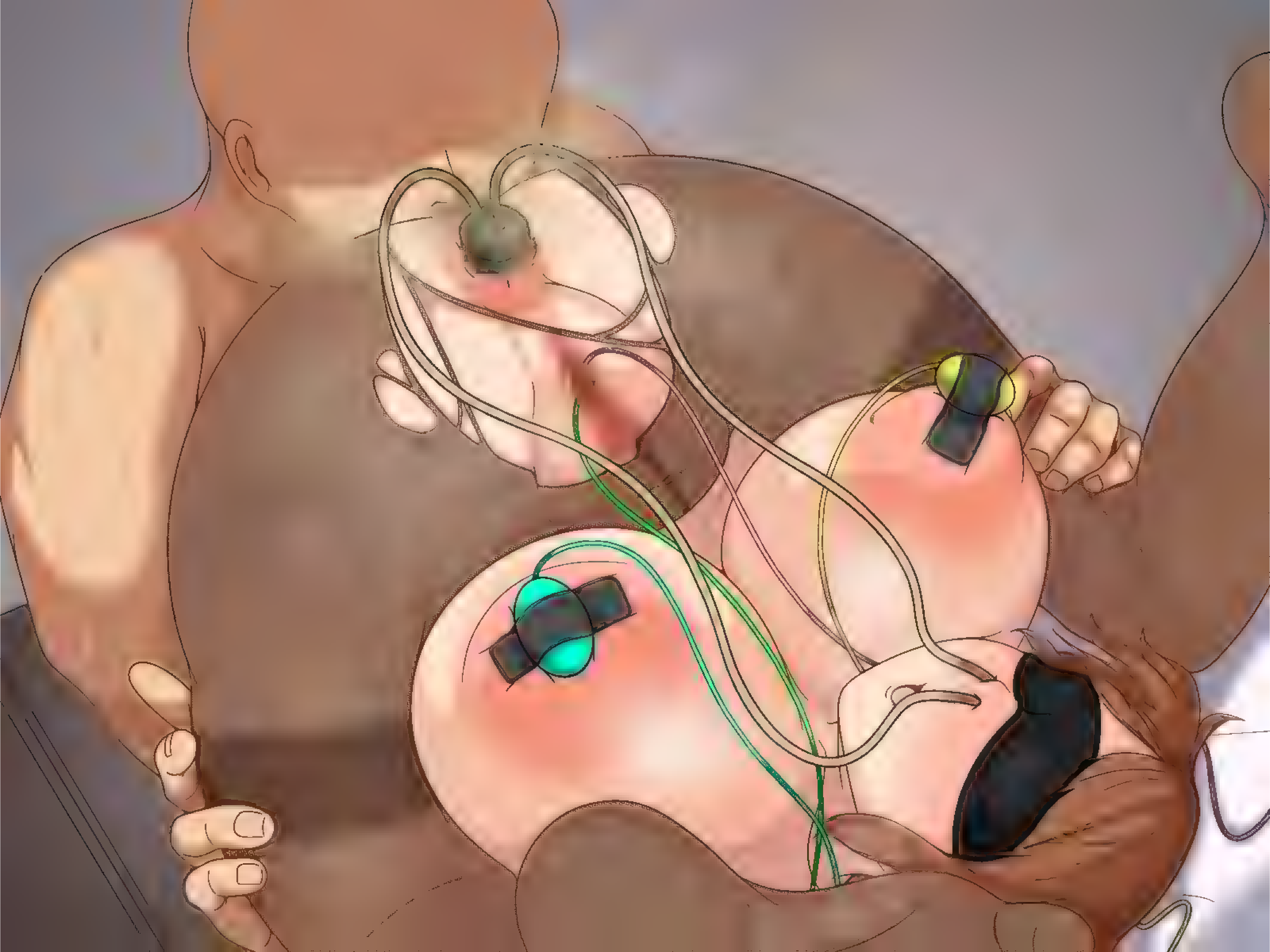




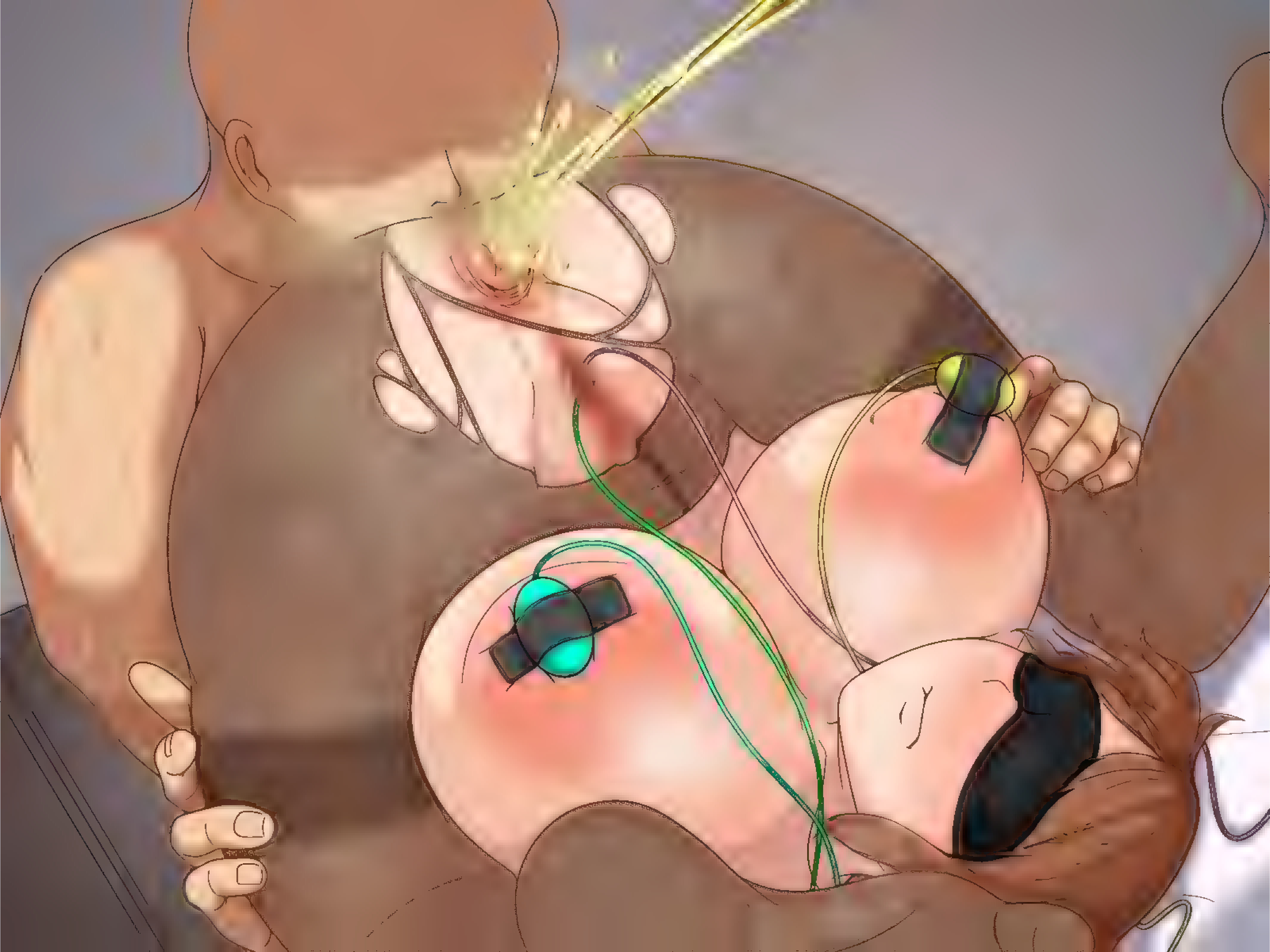








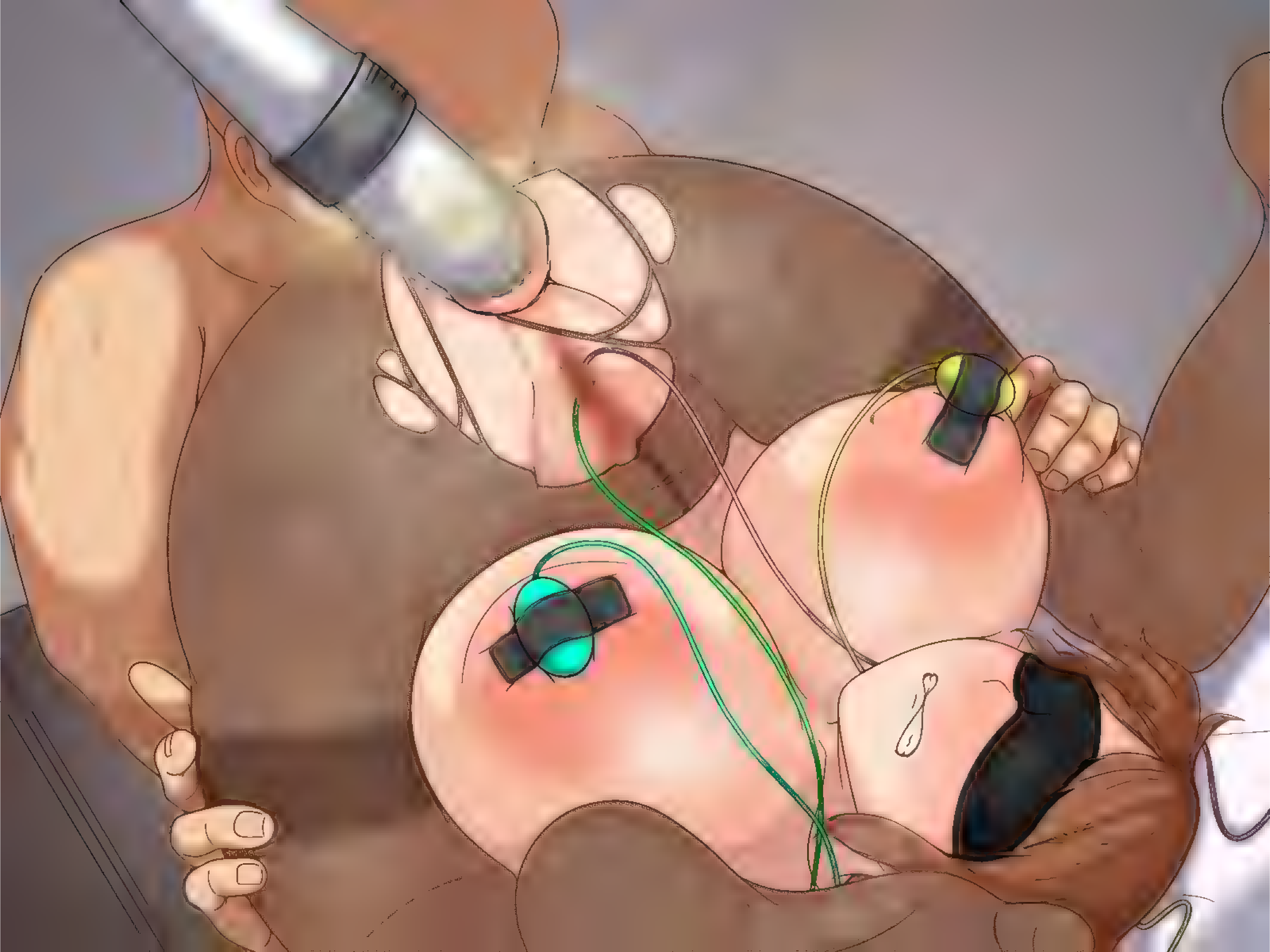




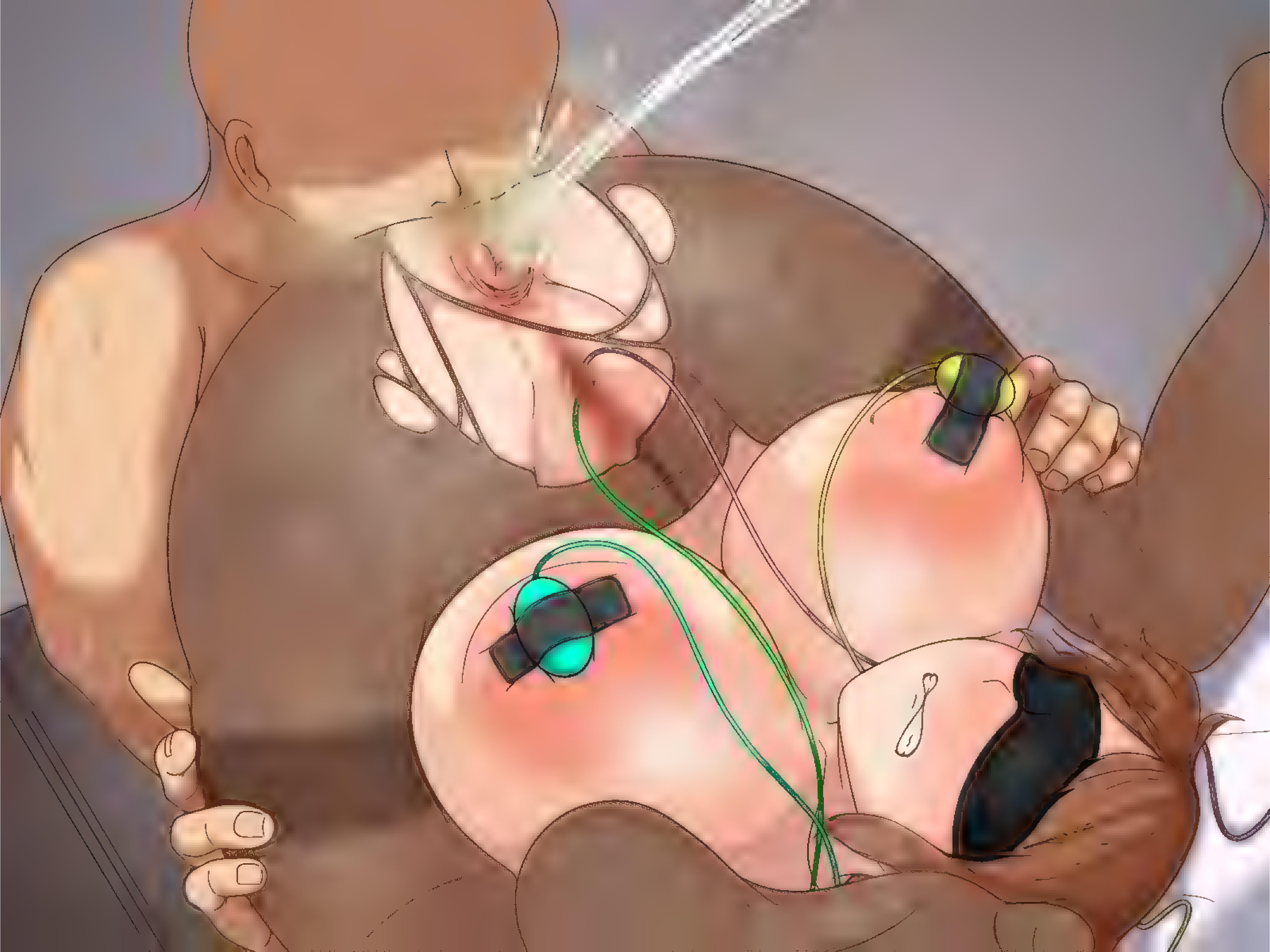






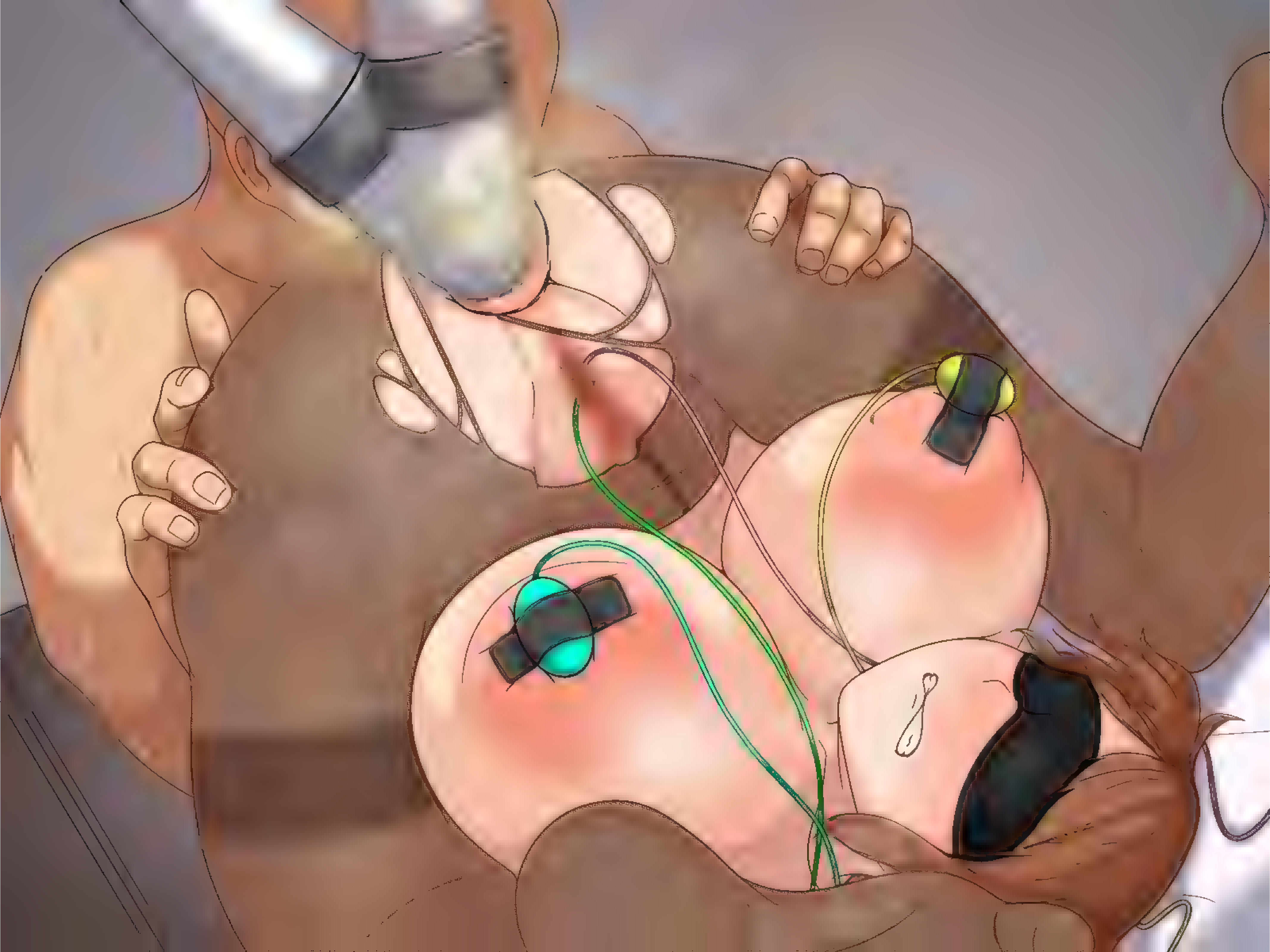


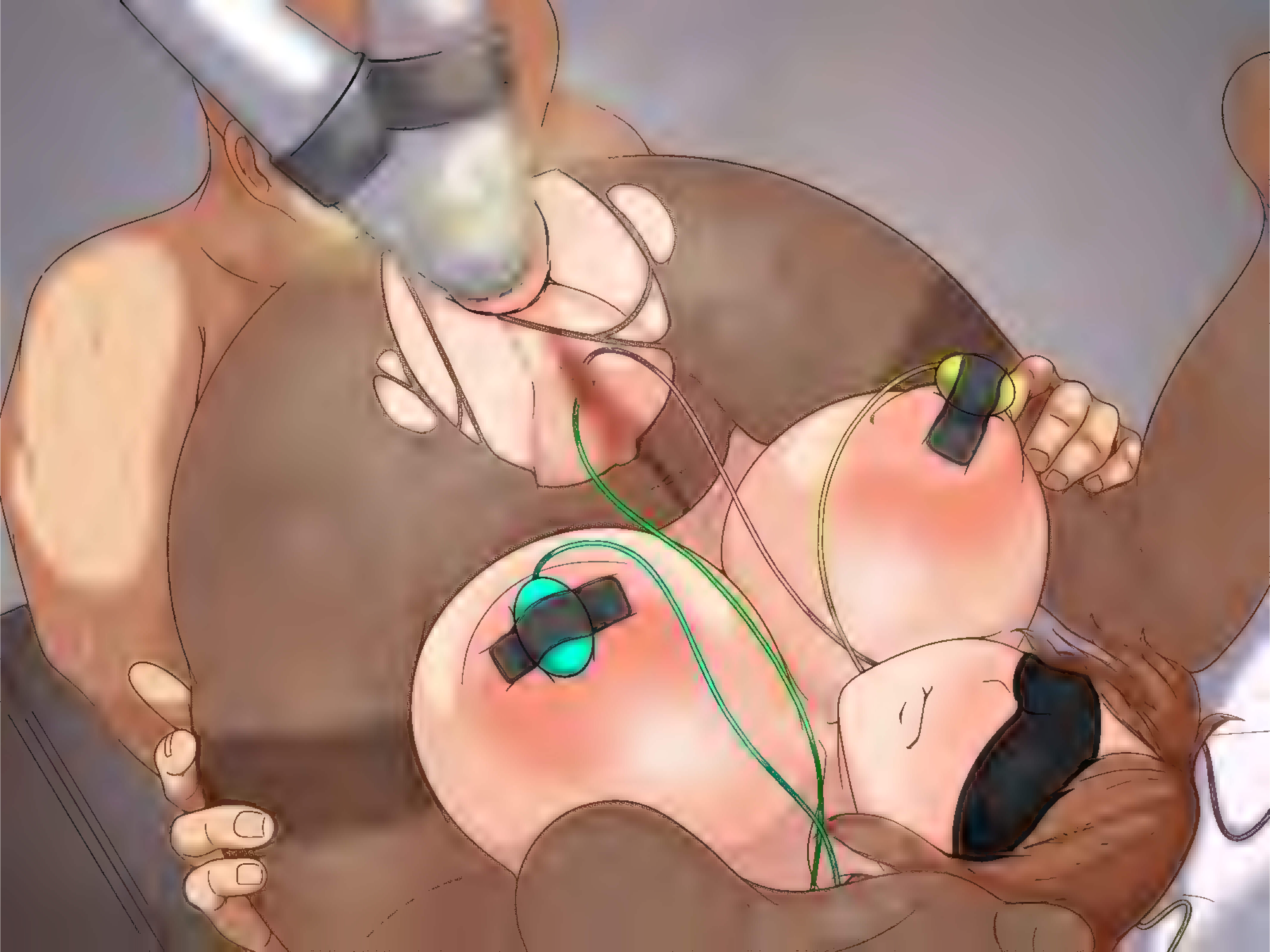




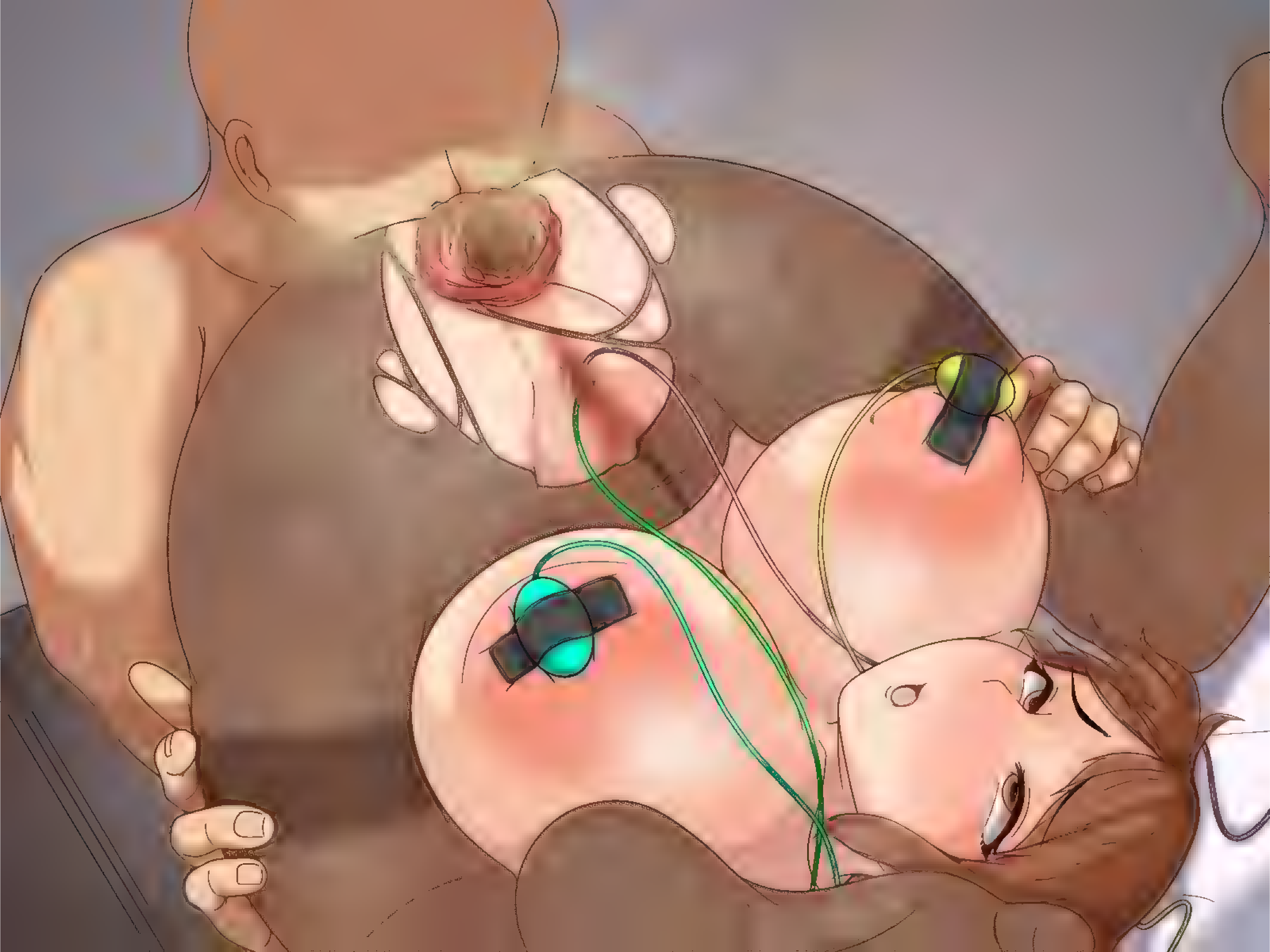

















いつでも、あな


いつでも、あな


でも、あなた


でも、あなた


STORE


STORE


STORE


STORE


STORE


STORE


STORE


STORE


STORE


STORE


STORE


でも、あなた


















































































































































































































































































いつでも、


いつでも、あな




























































































REC
00:37:12

















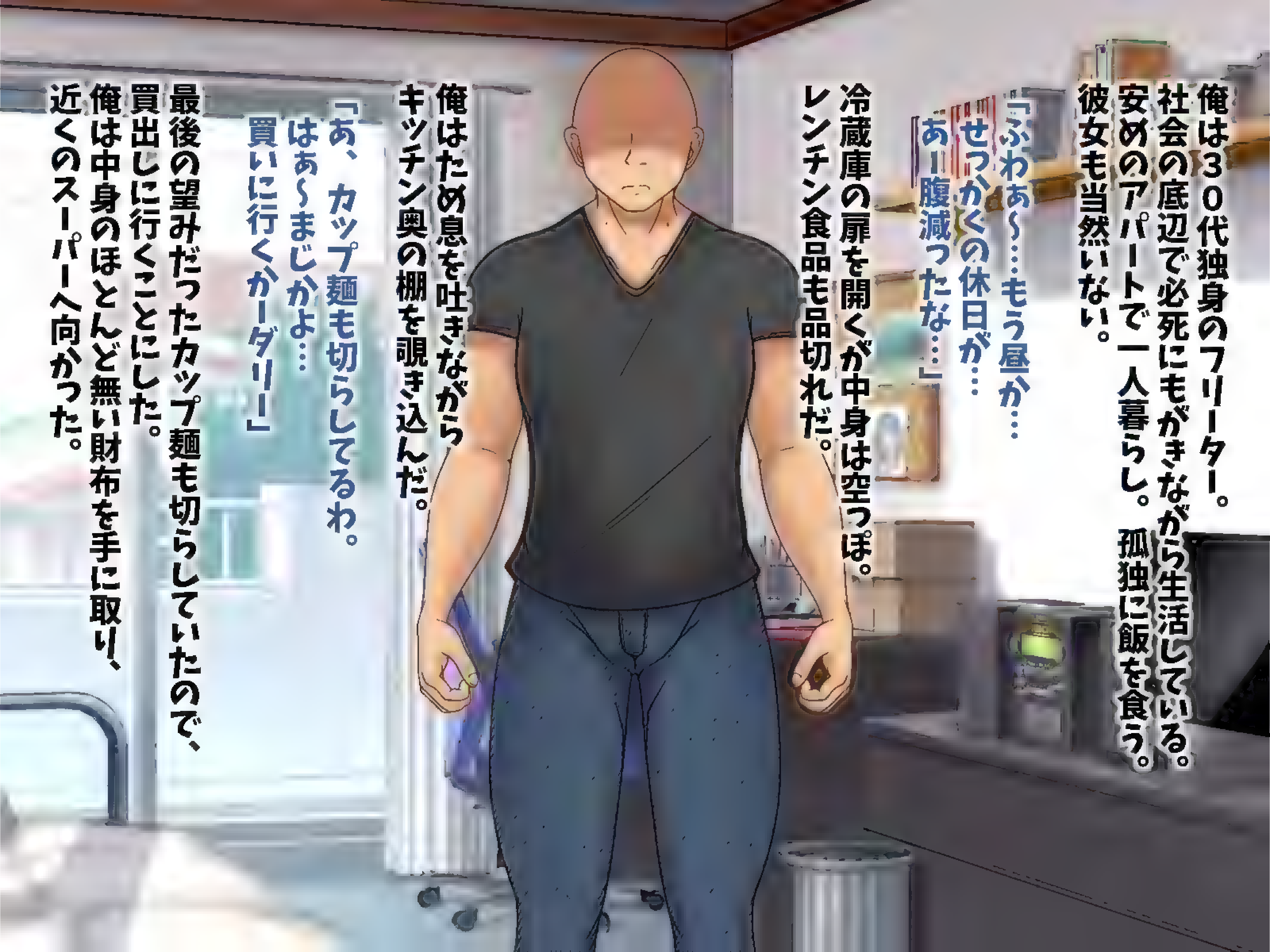









CG
ノベル
人妻洗脳
アナル拡張記
〜彼女の肛門が閉じなくなるまで〜


俺は３０代独身のフリーター。
社会の底辺で必死にもがきながら生活している。
安めのアパートで一人暮らし。孤独に飯を食う。
彼女も当然いない。
『ふわぁ～…もう昼か…
せっかくの休日が…
あー腹減ったな…』
冷蔵庫の扉を開くが中身は空っぽ。
レンチン食品も品切れだ。
俺はため息を吐きながら
キッチン奥の棚を覗き込んだ。
「あ、カップ麺も切らしてるわ。
はぁ～まじかよ…
買いに行くかーダリー」
最後の望みだったカップ麺も切らしていたので、
買出しに行くことにした。
俺は中身のほとんど無い財布を手に取り、
近くのスーパーへ向かった。



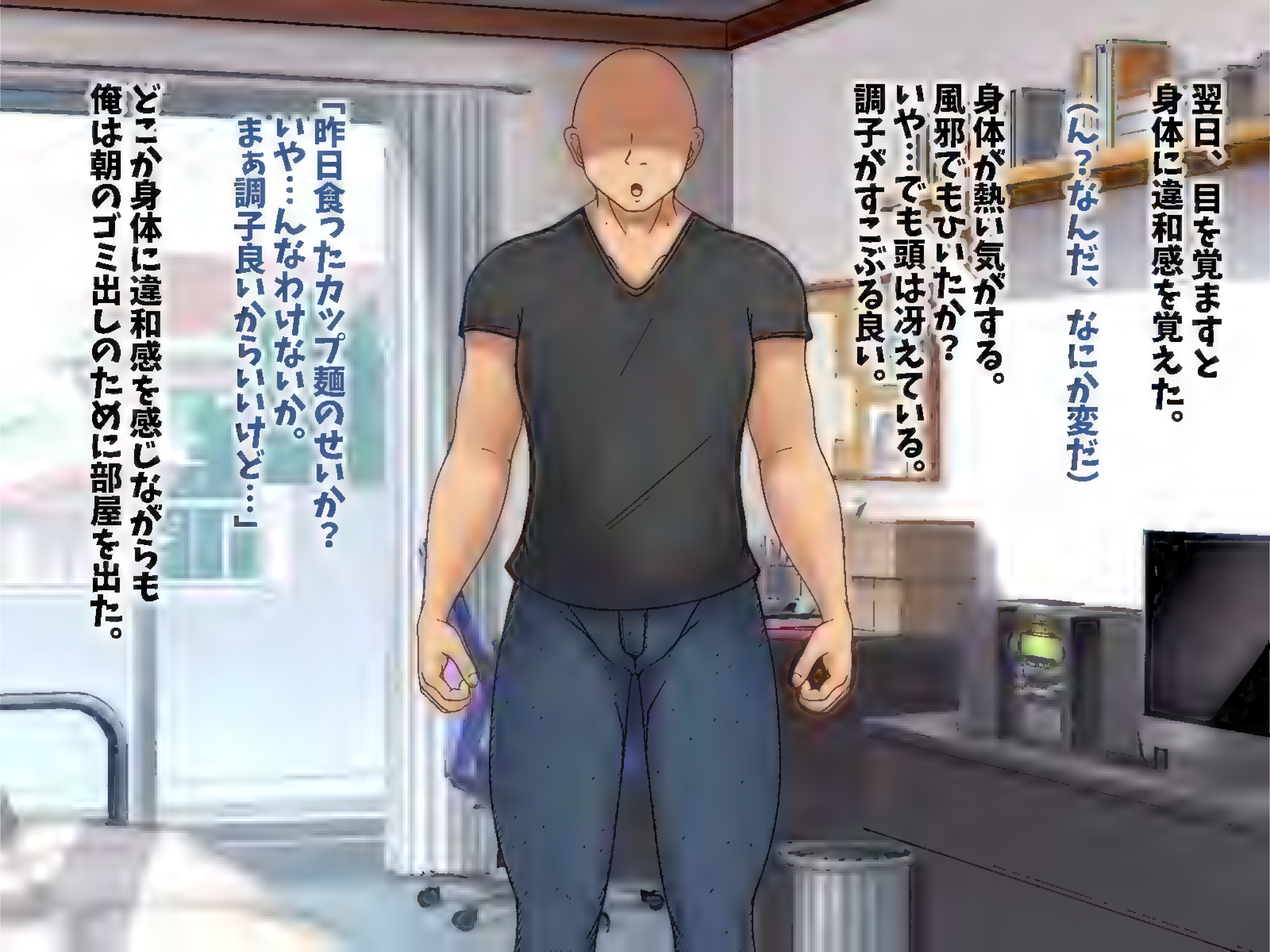
スーパーに入ると
俺に気づいたひとりの女性が
声をかけてきた。
「あ、こんにちは！」
「え、あ、こんにちは」
女性は俺に一言挨拶すると
買い物に戻っていった。
俺はその後ろ姿をしばらく眺めていた。
「……」


同じアパートに住む新婚夫婦の奥さんだ。
名前はたしか…郁美さんだったか。
将来の子育て費用を考えて
安いアパートに引っ越してきたんだそうだ。
(しっかし、あの奥さん…
エロい身体してるよな)
(服の上からでもわかる巨乳だし…
あの身体を良いようにできる
旦那が羨ましいぜ)
俺はカップ麺と缶ビールをカゴに突っ込み、
会計を済ませ帰路についた。


帰り道。
ふと帰路の途中にある
神社の前で足を止めた。
いつもは気にも留めずに
通り過ぎるのだが、
今日は不思議と立ち寄りたくなった。
井浚神社（いざらいじんじゃ）。
尻神様を祀った神社らしく、
痔や便秘を治したい人が
参拝に来るようだ。
「なんか気になるんだよな。
ま、たまにはいいか」



パンパン！
俺は賽銭箱に小銭を投げ入れ手を叩くと
小声で尻神様に願望を伝えた。
「郁美さんのような
エロエロボディの彼女ができて、
夜通しアナルセックス
できますように！」
我ながらセンスのある祈願だ。
誰かに聞かれたら
ドン引きものだろう。
俺は満足してそのまま帰宅した。


翌日、目を覚ますと
身体に違和感を覚えた。
（ん？なんだ、なにか変だ）
身体が熱い気がする。
風邪でもひいたか？
いや…でも頭は冴えている。
調子がすこぶる良い。
「昨日食ったカップ麺のせいか？
いや…んなわけないか。
まぁ調子良いからいいけど…」
どこか身体に違和感を感じながらも
俺は朝のゴミ出しのために部屋を出た。


「おはようございます」
「あ、おはよう…ございます」
郁美さんだ。
二日連続で会えるなんてラッキーだな。
今日も朝から妄想が捗るぜ。
「あー郁美さんのでか尻に顔埋めてぇ」
「…え？今なんて…？」
「え…あ！い、いえ！な、なんでもないです！」


やべぇぇ！願望が口に出ちまった！
絶対聞かれたよな…？
あー終わったわ…
人生終了だ。
俺は恐る恐る
郁美さんの顔色を伺った。
しかし、そこには想定外の光景があった。
「あの…
埋めたいんですよね…」
「…？」
郁美さんの様子がおかしい。
額に汗をかき、
どこか蕩けた表情をしている。


「どうかされたんですか？」
「え…だってあなたが…お尻に顔を埋めたいと言うから…」
「…え？」
「いますぐ…ですよね？」
「いますぐ……は？」
郁美さんは何を言っているんだ？
俺が言ったことを本気にしてる？
いやいやいや…まさか。
「私の部屋でも良いですか？さすがに路上の真ん中では…」
「……は、はぁ…」
俺は混乱したまま郁美さんについていった。


俺は郁美さんの部屋にあがった。
絶賛混乱中だ。一体どうなってるんだ。
「あの……
旦那さんは？」
「夫はさきほど
仕事へ行きました……
今は私だけです」
「あの…さっき言ってたのって……
マジで言ってます？
俺の言ったこと……」
「え？…だって……
あなたの言ったことは…絶対ですから……」
「俺の言ったことが…絶対……？
それって…俺の言うこと……
なんでも聞くってことですか？」
「はい……」


俺はなんとなく状況が掴めてきた。
なんだか知らないが…
郁美さんは俺の命令を聞いてくれるらしい。
ならば…。
「本当に俺の言うこと
なんでも聞いてくれますか?」
「え、はい…」
「じゃあ…
まずは服を脱いで
俺におっぱい見せてくれます?」
「え、おっぱいですか…
は…はい……」


郁美さんは服を脱ぎ、ブラジャーを外して
たわわに実ったおっぱいを曝け出した。
『…はい…』
「…おいおい…まじかよ……」
半信半疑だったことが事実に変わった。
これはマジだ。マジもんのサプライズだ。
人妻が他所の男の前で
おっぱい丸出しにしやがった。
「想像以上の爆乳っすね。
乳首もビンビンじゃないか…
やべぇ…見てるだけで勃起しちまう」
「うう…恥ずかしいです…
じろじろ見ないでください…」


「寝室に案内しろ…」
「え…はい…こちらです」
新婚夫妻の寝室。
俺の妄想が掻き立てられる。
「郁美さんは旦那とどのくらいエッチしてるの？」
「え…それは…」
「…月に二回くらい…です…」
郁美さんはもぞもぞと恥ずかしそうに腰を振りながら小声で答えた。


「え～こんなエロエロボディを
月1でしか楽しまないの？
何考えてんだ」
「うう…」
「俺なら毎日
郁美さんとエッチできるよ。
見てよ、郁美さん」
俺は服を脱いで
郁美さんに裸体を見せつけた。
「あ…あ…おちんちん…おっきい…」
「今から郁美さんを…いや郁美を…
俺のちんぽで犯してやるよ」
俺は我慢できずに郁美を押し倒した。



俺は郁美の腰を掴むとぐるんと上に持ち上げた。
「ひゃっ…！」
「良い眺めだぞぉ。ストッキングの肌ざわりも最高だな…笑」
ぐいっ
「は、恥ずかしいです…離してください…」
「くんくん…おぉ…蒸れた汗の匂いだ…濃いメスの匂いがするぞ」
ぷる


「くんくんしないで…
汗かいてるんです…」
「だから良いんだよ？
ストッキングに染みついた
熟れた匂い！」
俺は鼻を鳴らしながら
郁美の股間を
遠慮なく嗅ぎ続ける。
「はぁ…んんぁ…
太ももスリスリだめぇ…」
「この感触が好きなんでね。
す～くんくん…あぁ～
エロすぎだろ…」
ぷる
ぐい


「お尻に顔埋めていいって言ってたよね？」
「え…は、はい……でも恥ずかしいですう…」
命令には従うが羞恥心は残るのか。なかなかセンスあるサプライズだな。
「んんぁ…はぁ…鼻ぐりぐりだめぇ…」
「夢みたいだよ。郁美の股間を遠慮なく嗅げるなんて。あぁ～すう～はぁ～」


「眼福とはこのことだな。でか尻最高すぎる」
「はぁん…んんぁ」
「すぅ～はぁ～すぅうううう」
俺は郁美の太ももをすりすりしながら尻に鼻の先を押し当て息を吸い続けた。
モフ
ぶる
「さーて、生パンティーも見せてもらおうかな…」
「ふえ…？」


俺はストッキングを両手で掴むと
左右にビリビリと引き裂いた。
「んんあっ…！
破っちゃだめ…」
「おおお…
生パンティーの
お目見えだぞお～」
「パンツ見ないでぇ…」
「白パンティーか！
俺の大好物だよ。
汚しがいがあるよな～」
ぷる


「んんぁ…うう…」
「太ももマッサージいいだろう？
そろそろ
来るんじゃないか？笑」
郁美が腰を
もぞもぞし始めた。
ぷる
「マッサージ…止めて…
お願い…出ちゃいます……」
「何が出るか言ってよ」
「…うう…お、おならですぅ…」


「そのためのマッサージだよ。おら！おならしてみろ！」
「いやっだめぇ…出ちゃううう…っ」
郁美のお尻からぷすぅ～と音が出た。そして、俺の鼻孔を強烈な匂いが襲う。
「だめぇ…聞かないで…」
「うぉ…これが郁美のおならの匂いか～くんくん…あぁ～臭いぞぉ！」


「嗅がないでぇ…うう…」
「郁美のおならは臭いな～
あぁ～くんくん…あぁ～
やべぇ…興奮する」
女の屁の匂いを
自由に嗅げるなんて
臭いフェチの俺には
夢のようだ。
ぷる
「素晴らしいな…笑」
「マッサージ…だめ…
力抜けちゃうう…」


「くんくん…ん？なんだかツンとした匂いもするぞ」
「えっ…うう…」
郁美の白パンティーに黄色い染みが薄っすらでき始めた。
あっ
「おいおい…マッサージ気持ちよくておしっこ漏れたのか？笑」
「ち、違います…これは…その…」


「しょうがねぇなぁ〜
汚ったないパンティー
脱がしてやるよ笑」
俺は郁美から
ストッキングと
白パンティーを剥いだ。
「あっ…いやぁ…
恥ずかしいぃ…」
モワ
ぷる
「おお…これが…
夢にまで見た…郁美さんの
…生まんこと生アナル!」


「おお…そしてこれが生おなら…おっおお」
郁美のお尻から俺の顔に熱風が飛んでくる。
「う…だめぇ…恥ずか…しいですう…」
「あ〜なんて卑猥なんだ。前戯だけでちんぽイっちまいそうだよ笑」


「あぁ～すぅ～くんくん。
いつまでも嗅いでられるな」
「んんっ…はぁ…」
俺は郁美のケツ穴に
鼻を擦り付けながら
漏れ出たおならを
吸い切った。
「次は郁美のおっぱいを
楽しませてもらおうか」
「…おっぱい…ですか…？」


郁美は俺の言ったとおりに
俺の足元にしゃがんだ。
「うひょお～！
やっぱ乳でかすぎだろ」
「そんな…
で、でかい…
のでしょうか…」
「…いやいや
規格外でしょ…
巨乳てか超乳レベル笑」
「うう……」
はーー


モミ
あ
ぷる
「さてと…感触は…っと♪」
俺はたわわに実った郁美の乳房を両の手で鷲掴んだ。
「ひやっ…!?急にっ…い」
「やっぱ!超柔らけぇえ笑それにすげぇ弾力」
「いやっ…んぁ」


俺の手が喜んでいる。
まさに天国のような感覚。
「乳輪もでけぇ…
俺の手くらいあるよ」
「う、強いです…
んんっ…」
はー
「…っはは
こんな胸揉んだことないからさ。
加減がわかんねぇわ笑」
「乱暴にしないで…」
ぷる


「じゃあそろそろ楽しませてもらおうか」
郁美の巨大な胸の谷間に俺の勃起ちんぽが狙いを定めた。
「え…何するんですか？」
「そりゃ～パイズリでしょ」
「パイ…ズリ…？それなんですか…？」


「パイズリはこうするんだよっ！」
俺は郁美の肩を掴むと
ちんぽを谷間に突っ込んだ。
「ひやっ！？」
「うおおおおおおお！
やべぇぇ…なんだこの感触！」
「おっぱい…あああああ」


「あ〜勝手に腰が動いちまうぜ」
俺はあまりの気持ちよさに腰を動かしはじめた。
「んんっ…！擦れて…熱いです…」
あっ♡
「まさに乳まんこだ…ちんぽ包み込まれて最高お」
「乳…まん…？あの…よくわからないです…」


「郁美のおっぱいがまんこみたいってことさ笑」
俺はさらに腰を振った。
「…っ！激しっ…あっ！」
「すっげぇぇ…遠慮なくおっぱいを楽しめるなんて夢みたいだぜ」
「あっ…あぁあぁ…ひぃ」


モワ
「汗で蒸れた谷間がぬるぬるして最高だ」
「あっ…熱い…い…もう…止まってぇ…」
「んん…っ!」
「こんな気持ちいいの途中でやめられねぇよ」
俺は腰をパンパンと郁美の胸に打ち付けていく。


はー
「あ～そろそろ出るっ」
「…え？え？」
俺のちんぽが
郁美の谷間で膨れていく。
「乳まんこに中出しだ笑
うおおおおおおお！」
「え？え？…ふえ！？」



「ああ射精るっ！」
「おっぱい…んんんっああああ」
郁美のおっぱいに俺の精液が吐き出されていく。


「ふぅ〜出ちまった」
「…熱いっ…これって……精液？」
はーー
「そうだよ。郁美のおっぱいが気持ちよすぎて射精しちゃったんだ〜♪」
「おっぱいに…射精…？」


「あれっ？もしかしてパイズリ初めてなの？」
「こ、こんなの初めてです…夫はこんなことしません！」
「え～もったいねぇ！俺ならいつでも突っ込んでたいのに笑」
「おっぱいがどろどろして…気持ち悪い…」


俺は郁美の乳まんこから
ちんぽを引き抜いた。
「……うう……」
「すっげぇ…郁美のおっぱいが
俺の精液でどろどろだ」
はー…
「べたべたして…いやぁ…」
「やべぇ…こんなの見たら
まじで勃起おさまんねぇわ」


「さてと…そろそろ本番といくか」
「本…番？」
「セックスだ！郁美のまんこを俺のちんぽで犯す！」
その言葉に郁美はそわそわし始めた。
「え…あの…私には夫がいるんです…」
「知ってるよ。でも俺の言うことならなんでも聞いてくれるんでしょ？ほら、ベッドの上で自分でまんこを拡げろ」
「……えと……は、はい」


郁美は俺の指示通り、自ら股間を曝け出した。
「いいぞお～郁美のまんこもケツ穴も丸見えだ」
「恥ずかしいから……見ないでぇ…」
「あ～ポーズエロっ…オスを待つ発情したメスって感じ笑」
「んんっうう…」


「あ～わくわくするぜ」
俺はちんぽを
郁美のまんこにロックオンした。
「あの…えと…
ゴムはつけてください…」
「ゴム？
持ってないよ？」
「付けないと…妊娠しちゃう…」
ぐい


俺は躊躇いもせず一気に腰を下ろした。
「やっぱ！生っしょっ！」
「だめぇぇぇ！」


「うぉおお…これが…郁美のまんこー！」
「だめっ…！生はいやぁ…抜いて…っ！」
「俺は生ちんぽで郁美を犯したいんだ！いいよね？いくぞ！」
「うう…でもぉ…あぁあぁ！」
俺は本能のままに腰を振りはじめた。
ぐい


「うおお…おらおら！すげぇ…ちんぽ溶けちまいそうだ」
「だめぇえぇ…深っ…んんんああああ！」
「この体位すげぇな…まんこの奥までちんぽが挿るぜ」
「動かない…でぇえ…」


「はぁ！はぁ！郁美いいい！郁美いいいい！」
「あぁんっ！だめぇえ…激しっ…！」
「ちんぽにヒダヒダが絡みついて腰止まんねぇええ！」
「あぁあっ…あぁああ！」
夫婦の寝室に卑猥な音と喘ぎ声が響く。


俺はさらにピストンを加速させせた。
「うりゃうりゃ！うおお…気持ち〜」
「あぁんんぁ！そんなっ…激しすぎるぅう」
「旦那はこんな激しいセックスしてくれないだろう？」
「夫とは…こんなのしません…っ…」
あっ♡
ズボッ



「あ～そろそろ限界かも…中に出すぞ～郁美！」
「ふぇっ…な、中！え、でも、中って…え…」
「俺の子種汁を郁美の子宮に注いであげるよ」
「ま、待って…あああ…あああああ！」
俺のちんぽは限界に達した。

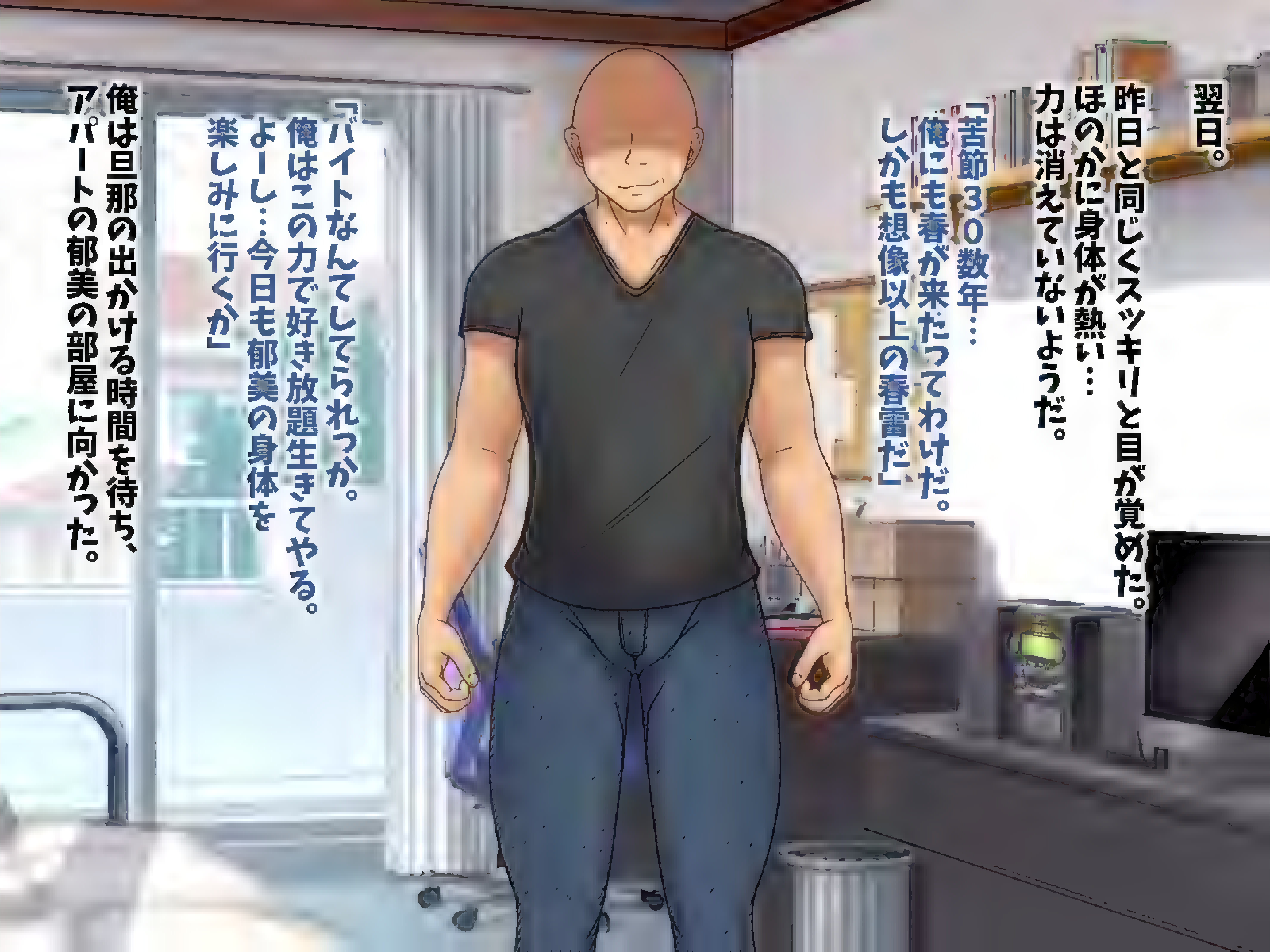

「射精るぞお！」
あっ
『んぐあああああ！』


「ふぅ～奥にいっぱい出た」
「あっ…あぁ…お腹が熱いぃ…」
「中出しなんて初めてだ…マジで気持ちいいんだな笑」
「あぁあ…うう…」
俺は精液で満たされたまんこからちんぽをゆっくりと引き抜いた。


ちんぽの引き抜かれたまんこから
ぶぽっと精液が逆流した。
「うは～我ながらすげぇ出たな。
まんこからめっちゃ逆流してる笑」
「はぁ…はぁ…垂れちゃうう…」
「すっげぇ…ほら、
もっとまんこに力入れてみてよ」
「え…は、はい…ふんぐううう」
ぶる
ドロ
びくっ


郁美のケツ穴からぶぶぶっと音がした。
「やっ…やだぁ…力むと…おならが…」
「やべぇ…下品すぎだろ笑
この絵面だけで
10発はイケそうだわ」
「もう…だめ……
力…入らないよぉ…」
「くくく…
こりゃあ…良いぜぇ」


「ふぅ～旦那はいつも
いつ帰ってくるの？」
「え…夫ですか？
いつも夕方には
帰宅します」
「夕方？早いな～
これから毎日
朝から夜まで
郁美を犯したかったのに」
「ま、毎日……！？」
「まぁいっか。
とりあえず今日は夕方まで
セックスするよ？いいよね？」
「……え…は、はい」
そうして俺は夕方まで郁美を犯し続けた。


翌日。
昨日と同じくスッキリと目が覚めた。
ほのかに身体が熱い…
力は消えていないようだ。
「苦節30数年…
俺にも春が来たってわけだ。
しかも想像以上の春雷だ」
「バイトなんてしてられっか。
俺はこの力で好き放題生きてやる。
よーし…今日も郁美の身体を
楽しみに行くか」
俺は旦那の出かける時間を待ち、
アパートの郁美の部屋に向かった。


インターホンを押すと郁美が出てきた。
「お、いたいた」
「こんにちは…何かご用でしょうか？」
「旦那はもう仕事行ったか？じゃあ上がらせてもらうわ」
「はい？あの…失礼ですけど何言ってるんですか？」
「え…？いや…昨日のこと忘れたの？」
「……昨日？何のことですか？」


「はぁ？俺とセックスしたじゃん」
「セッ…！？な…あなた何なんですか！」
（どういうことだ？まさか…記憶がないのか？）
「出てってください…出ていかないと通報しますよ」
「そんな…郁美…」
「ひっ…なんで…呼び捨てなのよ…近づかないで…いやっ…」
俺は動揺しつつも、脳に浮かんだ言葉を発した。


「郁美とセックスがしたい！」
「え…したい…？
セックスが…したいんですか…」
俺が願望を言葉にすると
郁美の様子が変化した。
「…そうだ…俺のちんぽで
郁美を犯しまくりたいんだ」
「いま…ですよね？」
「そうだ、いいだろ？」
「…は、はい…
したいと言うなら……」
「…よーし…ふぅ…」
洗脳が成功したようだ。
俺は安堵のため息を吐いた。


寝室に入ると俺と郁美は裸になった。
「ビビったぜぇ…まさか洗脳中の記憶が無くなっているとは」
「今日も…中出しですか…？」
「ん？なんだ…覚えてんじゃん」
（洗脳中とは意識が違うのか？よくわかんねぇな…でも…これって遊べそうじゃね？）
「俺は中出しの気持ちよさを知っちまったからな。郁美のまんこには俺の精液を注ぎまくってやるよ」
「……うう…そ、そんな…」


俺は郁美の尻に
ちんぽを押し付けた。
あっ♡
はーっ
はーっ
「まずはバックから
犯してやるよ！
おら、腋も見せろ！」
「やっ…恥ずかしい…っ」
「腋からメスの匂いが
ぷんぷん漂ってくるな笑」
「嗅がないで…ぇ…」


「挿れるぞ！後ろから突っ込むぞ！」
「あぁあ…んんんっ…！」
俺は尻に押し付けたちんぽをするりと下に下ろし、そのまままんこへ挿入した。
「あぁあ～入口良い～」
「はぁあんぐぅう…きて…るぅ…」


俺は亀頭がまんこに包まれると一気に竿を奥まで突っ込んだ。
「おおらっ！」
「きゃっっ…！んああ…深いいい！」
「あぁ～一気に奥まで挿れるのまじで癖になる気持ちよさ」
「あぁ…あぁあ…」


「おらおら！まんこ締めろ！！」
「ひゃい…あぁっ…熱いよお…」
びくっ
「デカケツと腋を拝みながらセックスするのは最高だな」
モワ
「恥ずかしいこと…言わないでぇ…あぁんあぁ」


郁美の尻に
俺の腰が当たり
パンパンと
卑猥な音を立てる。
「奥まで挿れると
亀頭が子宮に当たるな～
この刺激たまんねぇ」
「それだめぇえぇ」
「気を抜くと
すぐイっちまいそうだ」
「はぁ…はぁ……」


「よーし…もっと激しくだ！」
「…あっ！あああ…早いっ…よぉ」
どく
「すっげぇ…俺のピストンで郁美のデカ乳がぶるんぶるん揺れてるわ笑」
ぶるん
ぶるん
ぶる
「んぁあっはぁ…あぁあ！」


あっ♡
はーっ
「はぁ…はぁ…そろそろ限界だ」
はーっ
「んんぁ…はぁ…あんっ…あぁぁ!」
ぐいっ
「郁美もイキそうか?」
ズボッ
ぱんっ
「えと…な、なんかきそうです…」



「じゃあ一緒にイくぞ！」
「…一緒に…イく……は、はい…っ」
「子宮にたっぷり精液注いでやるからな！俺の子種をしっかり感じろ！」
「あぁあんっ！はいっ…んんんっ！」



「イくっ!」
「あああっ♥」
射精と同時に郁美の身体がびくんと跳ねた。


「ふぅ～　まずは一発目」
「…はぁ…はぁ……お腹いっぱい……」
どく
「やっぱ中出しは最高だな！よーし…今日はどんどんいくぞ！」
ぶる
「そ、そんな……は、はい……」


俺は郁美を立たせると片足を掴み持ち上げた。
「やっ……なにするの……」
「夢にまで見た立ちかなえだ。こんな体位はスケベな女しかしてくれねぇからな」
「は、恥ずかしいです…片足上げるんですか…」
「キスしながら挿入するんだよ！舌出せ」


「旦那以外の男とのキスの味はどうだぁ？」
「こんなの…だめです…」
「ぷはぁ～郁美の唾液うめぇ笑 おら、もっと舌出せ」
「はぁ…はぁ…はぁ…はい…」


俺は郁美とキスをしながら
まんこにちんぽをぶち込んだ。
「あぁぁん…っ……！」
「うおお！また違った感覚だな～笑」
「ひゃっ……倒れちゃう…」
「しっかり俺に抱きつけ！密着するほど気持ちいいぜ～」


「おらおら！腰動かすぜぇ！」
「んんあっ…！あっ…んん…♥」
「気持ちいいだろう？この体位はちんぽがクリトリスを擦って刺激するんだ」
「んんあぁ…っあああ！」


「おちんちん…っ 深い…っああ…!」
「いいぞお～ もっと感じろ! キスも休むなよ～」
「うちゅ…あ… …ぷはぁ… あんっ…ああ…」
「レロレロレロレロぉ ぶちゅちゅゆううう～ ぷはぁ～こういう下品なキス してみたかったんだよな～笑」


「あ～イきそう！」
「はぁ…はぁ…また…出すんですか…」
ぴく
「もちろん♪ほら、キスしながら中に出してあげるよ。舌出せ」
「ひゃいっ…っちゅぢゅんんんっ…あぁ」
ぶる


「うおおおっ～」
「んんぐっ　うう…っ！」
郁美のまんこからどばどばと精液が零れ落ちた。


「すっげ笑
出した瞬間
舌がびくびくして
気持ちよかったぜぇ」
「あ…ああ…熱いぃ…」
ぶる
「どうだぁ？
中出しの感覚は！」
「あ…はぁ……
こんなに…出したら
妊娠きちゃう…よぉ…」



「ひゃっ…！」
「おっと…！」
郁美と俺はベッドの上に抱き合いながら倒れ込んだ。
「はぁ…はぁ…あの…今日はこのくらいで…」
ぶる
「だめだめ～旦那が帰ってくるまでセックスする予定だからね」
（…そうだ…試してみるか…）


「ほら、挿るよ！今度は郁美が上になる番だぞ」
「んぁあっ！や、休ませて…」
あっ
「ほら、休んでないで郁美が腰を振らなきゃ笑」
「私が…腰を振る……」


「んんぐっ…あぁあん！」
郁美は俺の命令通り
自分から腰を下ろし、
ちんぽを呑み込んだ。
「いいぞ～郁美い♪
気持ちいいぜぇ」
ぶる
「はぁ…はぁ…
深い…よぉお…」
「そのまま腰を振るんだ。
ちんぽをシゴくようにな」


「んんぐ…はっ…んんぁ！」
郁美が腰を上下に動かし始めた。
「おぉおお！これは良い♪」
「気持ちいいぞ～郁美。緩急を付けて動くんだ」
「…ひやい…あぁあ…腰が…抜けちゃう…う…」


郁美は吐息を漏らしながらピストンを続けた。
「…あぁあ…！んんあぁあ」
(よーし…アレを試してみるか)
「郁美…催眠を解いてくれ」
「…え？…」
「催眠を解いてくれ」
(どうだ…？)



「……解いて……ほしい……」
俺の命令を聞いて
郁美の様子が変わった。
（さて……どうなる？）
「……え……え……」
「どうだ～郁美ぃ笑」


「へ……？なに……え？……？」
郁美の動きが止まった。辺りを見回してはてなマークを浮かべている。
「おはよ、郁美…笑」
あっ
「……あなた…同じアパートの……え…」
「腰を下ろしてみてください」
「腰を…下ろす…？」


混乱している郁美は
なんだかわからず腰を下ろした。
「…え…きゃっ！？
なに…え？嘘…！？
なによこれぇぇぇ！」
「なにって…
セックスだよ？」
ぶる
「…どういうこと…？
ここどこ…え…私の家…？」
「郁美の家の寝室だよ～
旦那との愛の巣さ…笑」


「ほら、腰止まってるよ？しょうがないな～俺が動かしてあげるよ…笑」
「んぐっ…！？やめ…動かないで…警察…警察呼ぶわよ！」
あっ
「あぁ～気持ちいいな～郁美の穴は何度挿れても最高だなぁ～」
「…何度…挿れ…何言ってるのあなた…」
ぐい
ぶる
モミ
パン
パン


「あ～興奮する…こんなの出るって笑」
「…出るって…やめて…離して…出さないで！」
俺は郁美の腰を激しく上下させた。
ぶる
「イくよ…郁美い～♪中に出すぞおおお」
「…いやぁあああああ！」


抵抗する郁美の膣内へ
大量の精液が注がれていく。
「うおおお！射精るぅ」
「あああ…いやあああああ！」


「よーし…中出し3発目♪」
「…3…発目……？
そんな…こんなの…
意味わかんない……」
（なかなか楽しめたな。
よーし…元に戻すか）
「……あ…ああ……」
俺は放心状態の郁美に
再度暗示をかけた。
ぶる
ぐちゃ


「郁美…催眠状態に戻れ」
「戻る…はい…」
郁美は抵抗をやめ
従順な状態に戻った。
（俺の想定通り…やはり…
洗脳時とは記憶を共有していないようだ…
そして…簡単に切り替えが可能っ…！）
「こんな簡単に
寝取りレイプが体験できるとは…
マジで興奮したぜぇ…笑」
「あの……そろそろ…
夫が帰ってきます…」


「もうそんな時間か～
あ、夫も洗脳すれば関係無いのか？
いや…でもそれはつまんないな～」
『あの……』
「しょうがない…
じゃあ郁美…
最後にお掃除フェラしてよ」
『お掃除…フェラ……？』
「郁美のまん汁と
俺の精液でちんぽどろどろなの笑
郁美のお口で綺麗にして」
俺はベッドに座り、
郁美を足元に誘導した。


郁美はまんこから精液を垂らしながら俺のちんぽに顔を近づけた。
「郁美はフェラってしたことあるの？」
「え…あまり…詳しくはないです…」
「じゃあ俺が教えてやるよ。まずは亀頭に顔を近づけて」
「…え…は、はい…」


郁美は俺の言う通り、顔を亀頭に近づけた。
「まずは匂いを楽しむんだ。亀頭の先を嗅いでよ」
「は、はい……くんくん……げほっ……！」
「どうだい？亀頭の匂いは」
「あの……生臭いです……あと……精液の匂いがします……」


「今度はタマタマに顔を埋めて息をするんだ」
「タマタマ…ですか…はい…ふんぐぅ…」
あっ♡
「そこそこ…そこの匂いをしっかり嗅ぐんだ」
「…すぅーげほっ…酸っぱい匂いがします…ぅ」


ぷる
「いいぞ～そのまま
タマタマをマッサージしながら
裏筋を舐めるんだ」
「はい…こ、こうですか……？」
あむ
「あ～良い…
そうそう…これこれ…
すっげえ良いな」
「…っぢゅ…れろ…ぅ
はぁ…んあ…はぁ…」
ぐい


「えらいぞ、郁美。俺のタマタマの匂いを覚えるんだぞ」
ずる
「…ひゃい…れろ…げほっ…んんっ」
俺は郁美にオスの匂いが一番濃いであろう場所を念入りに嗅がせた。
「よーし…それじゃあ郁美のお口まんこでちんぽを掃除してもらおうか」
「…お口…まんこ…？」


「まずは口の中にたっぷりと唾液を貯めるんだ」
「は、はい…つじゅる…んんぁ…はぁ…」
「そのまま亀頭を咥えろ」
「おちんちん……咥える……」
「そうだ……」
モワ
ずる



「はむっ…っぢゅぶぶうぶぶう
んんんっ…！」
「うおお…亀頭が
包み込まれて気持ちい～」
あっ♡
「いいぞお…
そのまま奥まで
咥えていくんだ」
「…ひやい……っ
んんぐう…っぢゅりゅ」


ぉっ♡
はー
「うぉおおお…やべぇ…口まんこやべぇわ…腰抜けそ…笑」
「うぢゅぶぶぶじゅるぅぅぅ！」
ずる
はー
「こっち向いて！そうそう、いやぁ～最高の眺めだわ」
「うぢゅるっちゅぱ…レロレ…っぢゅぅぅぅ」
んぷっ
ぐぃ


「一気に奥まで入れろ!」
「んぐううっ!」
郁美は俺のちんぽを
一気に喉奥まで呑み込んだ。
モゾ
「うおお…っ…
喉奥やばぁあ…
こんなのまんこじゃん笑」
あっ♡
「…げほっ…うげぇ…っぢゅぼ」
ズボボ…


あっ♡
「いいぞ～郁美。気持ちいいぞ～♪」
「ひゃい…っじゅぶ…れろれろ…っぢゅるる」
ずる
んぷっ
「あ～良い…その苦しそうな表情…まじでそそるわ…可愛いぞ、郁美～」
「げほっ…っぢゅる
っちゅっぢゅっぢゅる…」


モワ
「あぁ～そろそろ出ちまいそうだ…」
「づじゅぶぶ…じゅるるるううう」
「亀頭の先とかタマタマとかもっと弄ってくれ！」
「…んぐ…ひゃい…」
ズポッ


「んんぁ…はぁ…つじゅぶぶつぢゅうつううる」
「あぁ～脳が蕩けるぜぇ…亀頭舐めまじで良いな。上手いぞお郁美！」
「…んんぁ…はぁ…れろ…つじゅぶるるる」
「あぁ～イきそう…喉奥に出すぞ！」



おっ♡
「奥に出すぞぉ…一気に咥えろよ」
「んんぐ…うう…っじゅっぢゅぼぼ」
ずる
んぷっ
「あ～出る…口まんこに出すぞ！しっかり飲めよぉ！」
「げほっ…んんんんぐ！」
ぐいっ


『うおおおおおお！』
郁美の口内に
俺の精液が充満していく。
『…ぐほおはあっ！
げほおっ…！』


郁美の鼻からは口内の精液が逆流している。
「あぁ〜すげぇ出たわ」
「げほっ…うっぷふぅ…」
「逆流するほど出ちまったか笑
全部飲んでね、郁美」
「…飲むんですか…ごほっ……」



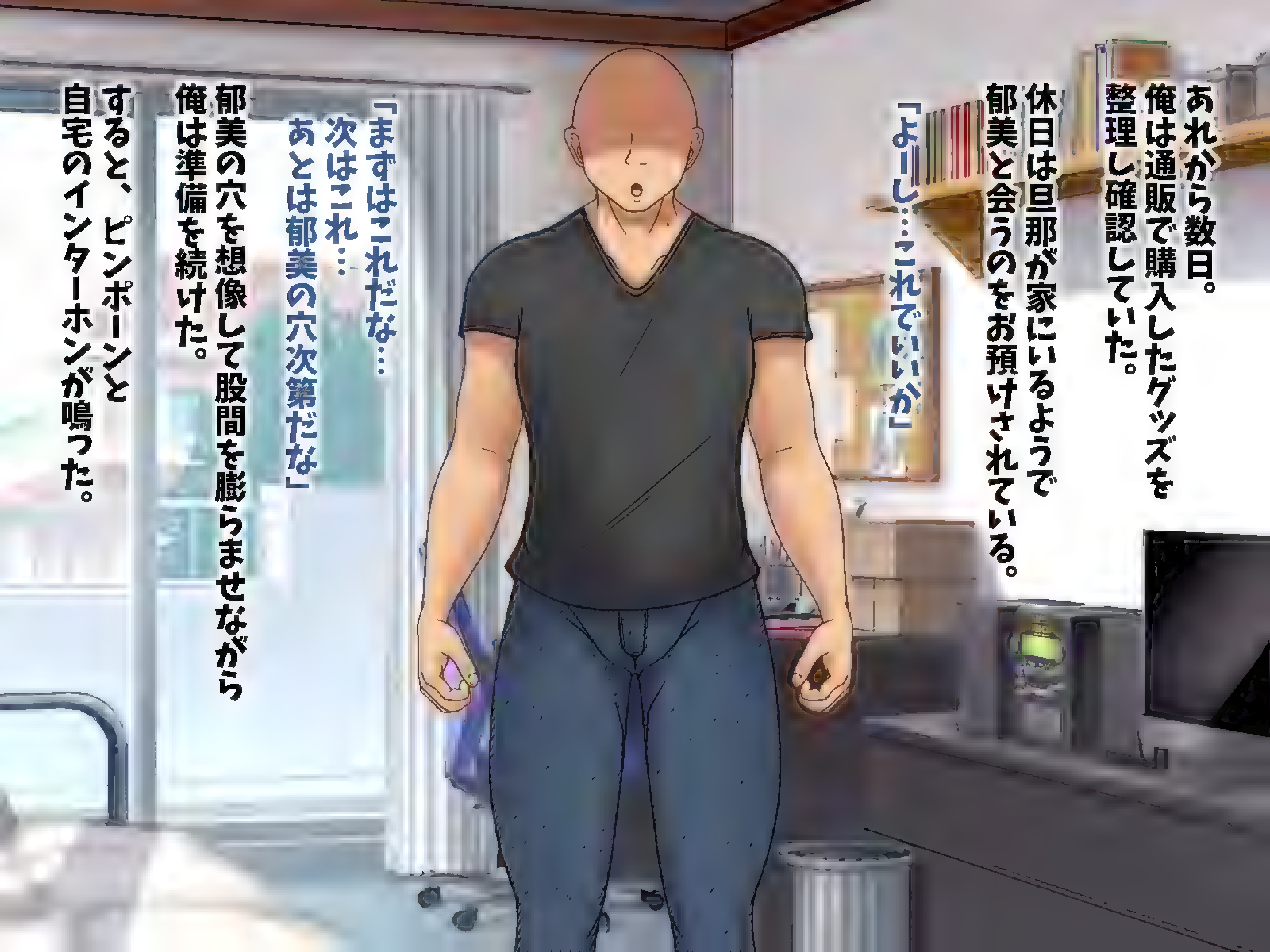
「うじゅ…じゅるるるぅ…ん…ごく…ごほっ…んんぁ」
「可愛いな～郁美は。お掃除フェラなんだからちゃんと綺麗にしてね」
あっ♡
「…んん…ぺろ…っぢゅっちゅ…ごく…ごくごく…」
「早くしないと旦那帰ってきちゃうよ～笑」


郁美に精液を舐めとらせながら
俺は思索に耽っていた。
(この能力を使えば
諦めていた願望も…
すべて思うがままか)
(俺のやりたいこと…
そうだ…俺が一番…
やりたかったこと…)
「…そうだ…
俺が一番やりたかったこと…
『アナル開発』…！」
「……？
どうしたんですか？」


「郁美…これから俺は
郁美のアナルを
素晴らしい名器へ開発する」
「…アナル？」
郁美は何のことか
わかっていないようだ。
「それから
これからは俺のことは
『ご主人様』と呼ぶんだ。
わかったかい？」
「…え…？」


「わかったら
おしっこをしろ」
「…おしっこ…？」
「はやく！」
「わかりました…
ご、ご主人様…あ」
郁美はじょろじょろと
おしっこをしながら
俺の命令に従った。
（この女を…郁美のケツ穴を…
俺好みのガバ穴になるまで
調教してやるぞ…！）
そうして…俺と郁美の
ド下品アナルライフが始まった。


アナル開発
1週目


あれから数日。
俺は通販で購入したグッズを
整理し確認していた。
休日は旦那が家にいるようで
郁美と会うのをお預けされている。
「よーし…これでいいか」
「まずはこれだな…
次はこれ…
あとは郁美の穴次第だな」
郁美の穴を想像して股間を膨らませながら
俺は準備を続けた。
すると、ピンポーンと
自宅のインターホンが鳴った。


ドアを開けると郁美が立っていた。
「きたか」
「ご、ご主人様…あの…はやく中に…」
「ん？あ〜言いつけ通りノーパンできたか。偉いぞ、郁美」
「誰かに見られたら…っ、通報されちゃいます…」
「馬鹿、郁美の生まんこなら喜んで視姦するだろうぜ？ま、いいや、あがれ」
「……は、はい……」


「…洗脳は解けていないようだな。俺の思った通りだ…」
「は、はぁ…」
どうやら郁美と俺が一定距離離れてしまうと洗脳が解けてしまうようだ。
俺はこの数日間、家から出ずに郁美にも外出をしないように命令していた。
「なかなか癖のある能力みたいだが、まぁ仕様がわかればこっちのもんだな…！郁美、服を脱いでこっちへこい！」
「…うう…はい……」


郁美は俺の部屋で服を脱ぎ、
全裸になった。
「よーし…」
「これから俺が
郁美に何をするか
わかるか?」
「お尻の…穴…を
…何かするんですよね…」
「…そうだ…
郁美のケツ穴を…
立派なケツまんこにするために
今から開発を始める」
「あの…なんだか怖いです…」


俺は郁美をベッドに押し倒した。
「きゃっ……」
「尻を突き出せ。まずは…味見をしてやろう」
あっ♡
「味見…あの……」
「あ〜いつ見ても素晴らしいデカ尻だな」


「くんくん…すーはー…
あ〜メスの匂いだ。
嗅いでるだけで
ちんぽが反応しちまう」
「そんな…
嗅がないで…」
郁美は恥ずかしそうに
腰を左右に振った。
「ケツの穴も
よーく見えるぞ…
とても…美味そうだ」
「ご主人…様…？」


俺は郁美のケツの穴に
口を近づけ、舐め始めた。
「ふぇえぇ！？
な、なにしてるんですか！？」
「味見だよ。
郁美のケツ穴の。
つじゅるるる」
んぷっ
「あの…そんな……
き、汚いです…！」
「あ～じゅるるる
うめぇ…最高だ…！」


「ケツのしわを舌でなぞるの楽しいぜぇ」
「…恥ずかし…いです…お尻舐めちゃだめ…ぇ」
ぷる
あぁ
「腸内はどうかな？郁美のケツ穴の味…全部味わうぞ～」
ぞく
「そんな…あぁぁあ…」


俺は舌を伸ばすと、郁美のアナルの中へ突っ込んだ。
「きゃっ…！お尻の中に…何かきてますぅぅ！」
「うぉおお…これが郁美のケツの味か笑」
んぷっ
あっ
「だめぇ…！変な感覚…ぅ…」
「すげぇ…興奮する味だ…」


ケツ穴から舌を引き抜くと、その勢いでおならが漏れ出た。
「…ひゃっ……！嘘…だめ…んんっ…」
「おっとぉ…すーはー…あ〜良い…郁美のおなら最高だ」
「もっと舐めまわしてやるからな〜」
「お尻……ふやけちゃう…ぅ」


「あ～臭いぞお郁美！
メスの匂いと
腸内ガスの匂いで
頭がバカになりそうだ笑」
「んんっ…ぁ！
お尻…舐めちゃ…
だめ…ぇ…ぇ」
「こりゃ…
たまんねぇな…
あ～最高お」
「んんぁぁ…！」


「……んんあう……！
ひぎっ……」
郁美はケツから舌が引き抜かれると同時に身体をびくんとさせた。
「どうだ〜郁美。ケツ穴を舐められて気持ちいいだろう」
「ああ……あぁぁあ……」
「くくく…ケツ穴の新感覚に戸惑ってるようだな笑」


モワ
「今度は俺のを舐めてもらおうか」
俺は郁美の上に跨った。
「ご主人様の…お尻を…？」
どきっ
ぷる
「いいか…しっかり舌で綺麗にするんだぞ」
あっ♡



俺は腰を下ろし
郁美の口もとに
ケツ穴を押し付けた。
「んんんぐ…！？」
「うおおおぉ！
女にケツ穴を
舐めさせる日が
くるとは…笑」
ずる
モフ
「んんぐうう……
げほっ…あぁ…あ」


「ほら、郁美。舌で舐めるんだよ」
「は…はい……っちゅう…れろ」
郁美はゆっくりと舌を動かし始めた。
「あ〜いいぞ！気持ちいいぜぇ」
ぷる
あっ


「よーし…そのまま舌でケツ穴の中も舐めてみろ！」
「な…中も…ひゃい…っぢゅ！」
郁美の舌が俺のケツ穴をこじ開けて入ってくる。
「げほっ…んぐっはぁ…はぁ…っぢゅる」


郁美は舌を動かし
俺の腸内を刺激する。
「うぉおおっ！
こりゃすすげぇ…」
「げほっ…うう…
じゅる…るう！」
「ウォシュレット
以上の気持ちよさ笑」
あ♡


「…おっと…屁こいちまったぜ笑」
「んんんん!?げほっ…けほ…げほっ…」
顔面に屁をぶっかけられて郁美は噎せた。
プス～
「おなら…だめぇ…息が…できないですぅ…」


「どうだ～？俺のケツ穴は…臭いかぁ？笑」
「はい…げほっ…く、臭いです…男の人の匂いが…口に拡がります…」
「この匂いもしっかり覚えろよ～笑」


ぶる
「…よーし…良かったぜ～郁美♪」
「ぷはぁ…げほっ……ひやい…あ…くらくらします…ぅ」
ケツ舐めをした郁美の口には俺のケツ毛がこびり付いていた。
「うへぇ～美人の口元が便器みたいになってんな笑ぞくぞくするぜ…～」


「郁美のアナルは未開拓か…
この様子じゃアナルオナニーも
してないようだな」
「そ、そんなの
してないです……」
「ま、その方が
開発のしがいがあるぜ…
わくわくするな」
「…いきなりぶっ壊すのも一興だが…
まぁゆっくりほぐしてやるさ。
よし…ベッドの上で四つん這いになれ」
「…は、はい……」


郁美はベッドにのぼり
四つん這いでお尻を突き出した。
「よーし…いい子だ」
「……うう…緊張します…」
「緊張してると入るもんも入らねぇぞ！力抜けよ～」
「…は、はい…」


「まずは小ぶりなもんでほぐしてやるよ」
「は、はぁ…」
「くくく…」
俺は左手で郁美の腰を掴み、右手の人差し指をアナルに伸ばした。


「…ひやっ…！？」
俺の指が郁美のアナルにずるると挿っていく。
「おおお…いい締め付けだ」
ズポッ
「…んんあぁっ…！」
「舐めただけじゃまだまだほぐしきれてねぇな笑
締め付けすげぇ」


「俺の指の感触はどうだぁ？」
「んんっ…なんだか…変な感覚…です…」
「力が入ってるぞ、郁美。俺の指を締め付け過ぎだ笑もっと力を抜け！」
「ご、ごめんなさい…」



「いい具合だぞぉ…
さーて…次は…」
俺は準備していたローターを手に取った。
「…な…なんですか…それ……」
ぶる
「あ？ ピンクローターも知らないのか？ 本来はまんこに入れて自慰するもんだが…笑」



「今日はこっちだ笑」
「きゃっ!?」
郁美のケツ穴にローターがするりと呑み込まれた。
「おお、すんなりだな。どうだ？指より異物感が増しただろう笑」
「…うう…はい…」


「どんどん挿れるぜ」
俺は色の違うローターを手に取った。
「…え…まだ挿れ…る…んですか…」
ぶる
「1個じゃ楽しめないっしょ～まだまだあるぞお笑」
「…んんっ…ぐ！」


「おらよっと！丸いからつるっと入るな」
「んあっ…！」
「楽しくなってきたぞ！どんどん挿れてやるぜ！」
「…待っ…ああああ！」


郁美のアナルから
ローターのケーブルが
たらんと垂れさがっていく。
「…はぁ……はぁ…んんっ」
「カラフルで可愛いぞお～笑」
ぶる
「…お尻…く、苦しいです…」
「しょうがねぇな～ラスト1個だ」



「4つ目っと！おお…挿ったぜ～」
「はぐぅっ…！はぁ…はぁ…」
「どうだぁ郁美～ローターの感触は」
「…その…えっと…」
「はっきり言え！」


「…う、うんちが残ってるみたいな感覚です……」
「くはは笑 アナルからローターの配線が伸びてる光景はめちゃエロいな」
ぞくっ
ぶる
ビクッ♥
「…ご主人様…苦しいです…抜いてください…」
「だめだ、ローターを挿れたまま俺のちんぽを奉仕してもらう」


俺は郁美をベッドに仰向けに押し倒すと、ちんぽを口に突っ込んだ。
「んぐううう…っ！？」
「あ～数日ぶりの郁美の口は最高だぜぇ」
ぶる
「ごほっ……
…ご主人様ぁ…
お尻…苦し…い…です」
「ローターを挿れながら口で奉仕するんだぞ」


「おらっ！」
「うごおおっ！？げほっ…じゅぶっ！」
俺は腰を落とし、ちんぽを郁美の喉奥に突っ込んだ。
「つぶぼおお！…げほっ…奥…は…だめぇ…っぢゅぶ」
「あ〜…気持ちいい〜」


「ちんぽを舐めながら尻のローターも意識するんだぞ！」
「ひゃい…うぶお…じゅるう…ぢゅぢゅ」
「おっとそうだった！電源を入れるのを忘れてたぜ～」
「うぢゅぶ……ふえ？」
俺は4つのローターの電源をすべてオンにした。


ぶるるるる…っ！
と、大きな振動音が響いた。
「ひやっ…なに…
んぁあああああ！」
「すげぇ音してんな笑」
ぶる
郁美のアナルの中で
振動するローター同士が
ぶつかり合っている。
「振動…んんぁあ強いいいい
あぁんんぁ…あああ！」


「どうだぁ？振動が癖になるだろう」
「んぐごほっ…だめ…ああぁああ」
「おら、口も休むな！ちんぽもしっかり舐めろ」
「うげぇ…つぢゅぼぼぼ」



俺は激しく腰を上下に振った。
「あ〜口まんこいいぜぇ…もう出ちまいそうだ」
「つぢゅぶぶおおぼぉ ああ…つじゅぶるるる」
「ケツと口に集中しろよ〜」
「おひりぃ…つじゅぼぼ おかしくなるぅぅ…ぅ！」


「あぁ～気持ちよすぎて屁が出ちまうぜ～郁美も気持ちいいかぁ？」
「んぐぅうっ…げほっ…んんぁっ…はぁあん…」
「気持ちいいなら屁をこいてみろ！笑」
「んぐぅっ…んんんん！」


郁美はローターのつまった
ケツの穴から屁を漏らした。
「あははっ郁美も
気持ちいいか〜いいぞお！」
「ちがっ…んんぐぅ
勝手に漏れちゃ…んん！」
「あぁ〜もう出るぞお！
口まんこで受け止めろよお！」
「あぁ…じゅぼっぢゅぶぶぶ！」
あぁ
ぶる
モワ


「あぁ～出る出る！」
お♥
ブしゃッッ!
「っぢゅぼぼおっほ！」



「いいぞぉ…郁美。どんどん飲めよぉ～今日は口にたくさん飲ませてやるからな」
「げほっ…精液…い逆流うぇぇ…しちゃう…」
郁美のアナルからは振動音に混ざっておならがぶぶぶっと漏れ続けている。
「くくく…ケツ穴ローターも気に入ったようだな笑アナルは正直…ってな」


「ひや…ご主人様…
な、なにを…」
俺は郁美の身体を
１８０度回転させ、
顔を仰け反らせた。
「これこれ…一度
やってみたかったんだよな」
あっ♡
「何を…するんですか…？」
「郁美の喉を犯すのさ。
ケツのローター抜くなよ～」
「…そ…そんなぁ…」


俺は郁美の口にちんぽをロックオンした。
「口を開けろ！そのまま動くなよ～」
「ご主人様…あの……この体勢キツいです…」
「この体勢でお口を犯してやるからな～」
「…ああ……ああ」


「おらっっ！」
「んんぐっ！？」
俺は郁美の喉奥に一気にちんぽを挿入した。
「あ〜…すっげ！新感覚だわ笑」
「んんぐっぐるじいぃ…っ！」



「コリコリした喉に亀頭が当たって超気持ちいいぜ～笑」
「ごほっ…うぅっげぇ…吐いちゃ…うぅ…っぢゅぶ」
「我慢しろ、郁美。俺のちんぽで喉でイケるようにしてやるからな！」
「…っげほっ…んんん！」



ぶる
「おらおらおら！仰け反りイラマピストンだ！」
俺は郁美の口元に腰を打ち付けるように激しくピストンした。
「うごっ…ごぼお…
…げほじゅぶぼおお」
「こきゅこきゅ音がして奥に突っ込むの楽しいぜ～」
「…んんっ…息っ…ぐるじい…ぢんじゃ…うぁあ！」
びくっ


郁美の限界を見定めて
ちんぽを喉奥から
一気に引き抜いた。
「ぷはぁ…はぁはぁ…
…はぁ…げほっ……あ…」
「どうだ～
喉奥の性感帯に
ガツンとくるだろ」
「あがっ…頭…
おかしくなる…う…」
「ちゃんとケツのローターも
意識しろよ～？
おら、続けるぞ」
あっ♡


「キンタマの匂いも嗅がせてやるぜ～どうだ～？」
郁美の鼻の上にタマタマを覆いかぶせた。
「…んん…んんぅ臭い…ですぅ…」
「ちんぽの匂いがとれなくなるまで擦りつけてやるよ笑」
「んんげほっ…くらくら…しますぅ…」
モワ
ぶる


「おら、口開けろ！また奥に挿れるぞ」
「うう…んんっ ひや…ひやい…っ」
「一気に挿れてやるからな～」
モっ
あっ♡
ぷる
びく
「んぐっ…あぁ…はぁ…はぁ…」


俺のちんぽが
郁美の口内をこじ開けて
一気に奥に突っ込まれた。
「…んんぐっ!?
がはっ…じゅぼ」
「あ～最高お」
「じゅぼお……んんぅ
そこ…だめぇえ…っ」
「おっ? ここが
郁美の弱点か笑」


「パラタイン喉腺だな。念入りにゴリゴリ刺激してやるよ！」
「んんぶぼぉ…んんんんっあぁ！」
郁美の喉を掴み喉腺でちんぽをシゴき始めた。
ぶる
「…だめっぇ…んんじゅぶぢゅ！」


「…ごほっ…んん！深っ…だめ…あぁ」
「おらおらおら！あぁ〜温っけぇ〜」
「ぶほっ…っぢゅぶっじゅぶぶぶ！」
喉を突くたびに郁美の口から唾液がどばどばと飛び出してくる。


「舌も伸ばせ！
ちんぽを舐め回すように
迎え入れろ！」
「…ひゃいぃ…あぁ
おおっおおぐお！」
郁美の口から
ジュバジュバと
天然ローションが
噴き出す。
「すっげぇ…
まじでまんこじゃん笑」



「うんがぁ…うじゅぼ喉お…おぇえ…おお」
ぶる
「コリコリやばすぎ…ちんぽ溶けるわ～」
「うじゅぶ…んぐっ…うんぐぁ…ごほっ！」
モワ
「やっべ…もう出そう」


「郁美もイくんだぞ！喉腺とケツ穴ローターで絶頂するんだ」
「ふぇ…！？んんっつじゅぶおお！？」
「ケツでも口でもどこでも感じるように改造してやるからな！」
「…あぁ…うんぐぅ！」
あっ♡


「はぁ…はぁ…
おらおらおら！
唾液噴き出せ！」
「…ぶほっ…！
うげぇ…っ！」
ぐぽっ
びくん
「喉の奥に
種付けしてやる！」
「あがっっぢゅぼ！」
モワ
ぶる


「あぁ～イくっ…脳イキさせてやるからな～郁美ぃ！」
「…あがっじゅぼんぐぅっっ！」
俺はピストンを加速させていく。
「いくぞ～出るぞお！喉でイけ！うおおお！」



ぶる
「喉奥出るっ！」
俺と郁美の身体がびくんと跳ねた。
どく
「んぐじゅぼぉ！」



射精と同時に郁美のまんこから
ぷしゃーと愛液が漏れ出た。
「おぉ…郁美もイったか笑
脳に響いただろう～」
プシャ～～
そしてアナルからは
ローターの振動音に負けないほどの
イキ屁がブブっと噴き出した。
「あぁ……んんぐぅ…
おぉ…っおおお…お」


「最高だぜ～郁美。
ほら、精液は全部
飲み込むんだぞ！」
「ごほっ…がはぁ…
ひやい……っんじゅ！」
「あ～射精したら
なんか催してきたな」
「…うごく……ふぇ…？」
あっ♡


『んんんん!?』
「あぁ～出る出る…
…あぁ～気持ち～」
「…おぢうごおお!?」
ぶる
じょろろろ
びく
モワ
俺は郁美の口内にちんぽを挿れたまま小便をし始めた。


「ごほっ！？」
許容量を超えた郁美の口から俺の出したものがどばっと吐き出された。
「うおっお！おいおい！郁美！ちゃんと飲め！」
プシャ～～
「…げほっ…げほ…ご…ごめんなひゃい…い…」
「うへぇ～笑
まるで便器だな笑」
じょろろ
あっ♡



「ほら、まだ出してる途中だ。
全部飲むんだぞ～笑」
「…ひゃい…がらがらがらがら
つじゅっぢゅごく…んんごっ…！」
郁美は喉を鳴らしながら
俺の小便をごくごく飲んだ。
「えらいぞお郁美い…笑」
「ごほっ…っ！」
俺はその後も
郁美のケツにローターを
挿入させたままプレイを続けた。
プシャ～～
じょろろ
ごく
モワ


アナル開発
2週目


郁美のアナルを
ほじり始めてから数日。
俺は新たなグッズを調達していた。
「専門店に出向いたかいがあったぜ。
俺の知らない下品なアイテムが
わんさか売ってたな笑
ぼったくり価格で売りやがって」
もちろんグッズはすべてタダだ。
店員を洗脳すれば何の問題もない。
「さーて…今日は
何をしてやろうか」
妄想と股間を膨らませながら
俺はアパートへ戻っていった。


郁美の部屋に向かい、インターホンを押した。
「はい……あ……こんにちは……」
「ん？こんにちは……？」
ドアを開け、俺の顔を見た郁美は何やらそわそわし始めた。
「あの……な、なにか……？」
（……あ！そうか…また洗脳が解けたのか。それにしても…なんか…いつもと様子が違うような？）
「……あのぉ……」



（…そうだ…）
「あの～俺の部屋のトイレが今使えなくて、貸していただけないかと」
「あ…そ、それは大変ですね…ど、どうぞ～」
適当な嘘をついてみたが、郁美は俺を部屋の中へ招き入れてくれた。
「あの……この前私に……いえ…なんでもないです…」
「……？」
（この前……？）


「いやぁ…漏れそうだったんで助かります」
（嘘だけど…笑）
「そ、そうなんですね…」
「えと…お手洗いはそこのドアです」
「ありがとうございます…」
（……よーし…）
俺は郁美に一言告げ、こっそりと寝室を見に行った。


寝室に入るとすぐに
ベッドの上に散乱したものが
目に入った。
「なるほどな……笑」
俺が郁美に命令して
常にアナルに挿入させていた
小型ローターが散乱していた。
（俺の洗脳が解けて違和感に気付き、
自分のケツ穴に入ったローターを
頑張って引っこ抜いてたってわけか）
「想像しただけ興奮するぜぇ…
す～は～…おぉ…
まだ郁美のケツ穴の匂いが残ってんな笑」
俺はローターを手に取ると、
郁美のいる部屋に戻った。


「奥さん、すみません。
こんなの見つけたんですが笑」
俺は郁美に
ローターを見せつけた。
「…っ!?
ちょ…ちょっと…
あなた何勝手に…」
「いや～部屋
間違っちゃって笑
すみません」
「いやぁ～これ奥さんのですか?」
「し、知らないですよ!
夫のだと思います!
も、もういいでしょ…
用は済みましたよね!」


俺は郁美に見せつけるようにローターを鼻に押し当てた。
「くんくん…あぁ～なんか変な匂いがするんですよね～笑」
「…ちょ…あなた…何してるの…？」
「これって～なんか…うんこの匂いみたいじゃないですか？それに…まだ人肌が…」
「い、いい加減にしてください！そんなわけないでしょ!!」
「そんなわけあるんだよな～服を脱げ、郁美」


「……！？
はい…
…ご主人様…」
俺が命令すると
郁美は態度を変え、
躊躇うことなく
服を脱いで裸になった。
「楽しくなってきたなぁ～郁美。
やりがいが出てきたぜ」
「……？」
（洗脳してない時でも…
常時アナルでイけるように
開発してやるぜ…笑）


俺は郁美を連れて便所に向かった。
「郁美、便器の上に乗れ」
「え…は、はい……」
「そうだ、ケツをこっちに向けてしゃがむんだ」


「言いつけ通りローターを挿れたまま過ごしたかぁ？」
「は、はい……お尻にずっと挿れてましたぁ……」
「おいおい…嘘はだめだぞ？抜けてるじゃないか！笑」
「え……そんな……ご主人様…ご、ごめんなさい…」


「お仕置きが必要だな！」
俺は持ってきたバルーンプラグを郁美のアナルに突っ込んだ。
「んぐっ…っ！？」
「おお～入るもんだな」


「デフォルトでもまぁまぁ拡がるな」
「ご主人様ぁ……ふ……太いですぅ……」
「シリコンの感触がいいだろ～？ゆっくり膨らませてやるぜ」
「ふ、膨らむんですか…！？」
モワ



俺は手に持ったポンプ部を
じゅぽじゅぽと押し始めた。
「ほ〜ら、空気が
どんどん入っていくぞぉ〜」
「ひやっ…あああ！」
プス〜
プス〜
「膨らんでいくのが
わかるだろう」
「わ、わかります…う…」


「この様子だとまだまだ行けるな」
「んぐっ…く、苦しいですぅ…」
「アナルは案外拡がるもんだぜ～よーし一気に行くぞ！」
「い、一気は…だめですぅ…！？」


俺はポンプで一気に空気を送り込んだ。
「うおおおっ笑」
『んぐうううお！』
プス～
プス～
「すっげぇえ…こんなでかくなるのか笑」
「…ご主人…様ぁ…お尻裂けちゃう…ぅ」


「すっげぇ…うへ～
これがMAXか」
「お尻…が…
すごい拡がってますぅ…」
プス～～
「空気抜くのも面倒だな。
よーし、このまま
抜いてやろう」
「ふぇ…！？　このまま！？」



俺はポンピングされたアナルプラグを掴み、そのまま引っ張った。
「おおおらっ！…結構キツいな！」
「おっおっんごっんんんんああ！」
「おら！　力抜かねぇとケツ穴壊れちまうぜ〜？」


「おらよっと！」
「ひぎゃああ！？」
アナルプラグがずぼっと抜け
郁美のケツ穴から空気が漏れ出た。
「おおおおお！
いい具合に拡がったな笑」
「んんはぁ…はぁ…
で、出たぁ…ぁ……」


「あぁ…おしっこ…出ちゃうぅ…ぅ…」
「くくく…人妻の小便シーンも拝めるとは最高だな」
「み、見ないでぇ…」
「エロい光景だぜ…え…よーし…次だ…」


場所を寝室に移し、郁美を四つん這いの体勢にした。
「はぁ…はぁ…」
「おいおい、もうケツ穴閉じてるぞお？やっぱすぐに閉じちまうか」
「ううう……ご、ごめんなさい…」

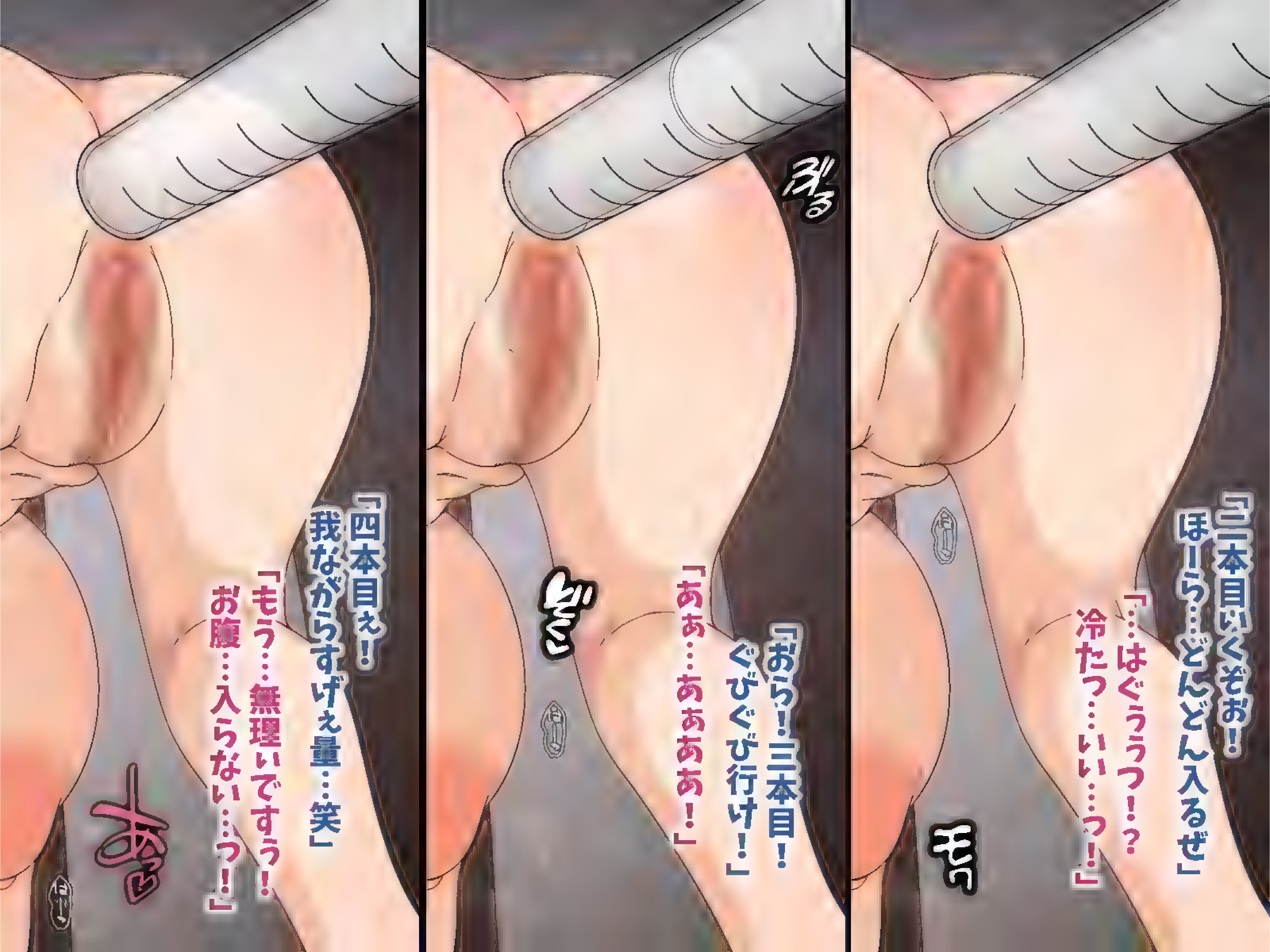

「じゃーん！今日のメインはこれだぜ～」
俺は持ってきた浣腸器を手に持った。
「…注射…器…？」
「これは浣腸器だ。…ケツ穴の中のもんを排泄するために使うのさ」


「…浣腸…！？いやですぅ…！」
「ま、ただの浣腸だとおもしろくねぇからよ。浣腸液と俺の精液が混ざった特製カクテルを用意したぜ笑」
「浣腸液と…せ、精液…！？」
「おら！郁美！ケツ上げろ！たっぷり用意したからな！」


「おらっ！」
浣腸器の先が
郁美のアナルに挿っていく。
ズポッ
「…ひやっ…！？」
「特製カクテルだぞ～
郁美のために作ったたんだ、
しっかり味わえよぉ！」


「おおお…入っていくぞお！」
「…ひやっう…！あああ…あああ！」
「冷たくて気持ちいいだろぉ？」
「お腹に…入って…きますう…んんっ！」
ぶる

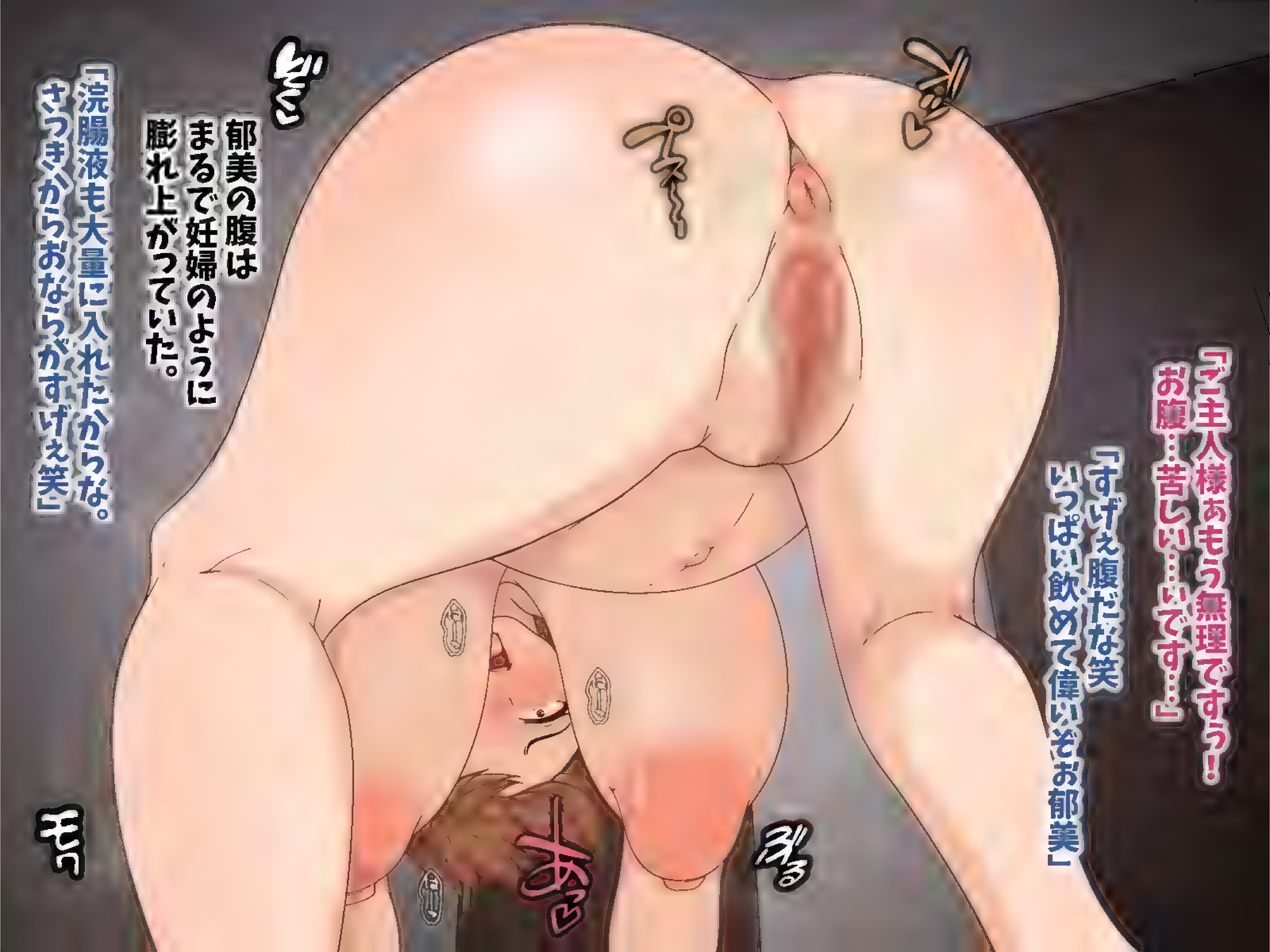

浣腸器に入れたカクテルを
郁美のアナルは
どんどん飲み込んでいく。
「よーし…！良い飲みっぷりだぞ～」
「…んんっ…あ！お腹…苦し…い…です…」
「おいおい、特製カクテルはまだまだあるからな～」


「二本目いくぞぉ！ほーら…どんどん入るぜ」
「…はぐぅうっ！？冷たっ…いい…っ！」
「おら！三本目！ぐびぐび行け！」
「あぁ…あぁああぁ！」
「四本目ぇ！我ながらすげぇ量…笑」
「もう…無理いですう！お腹…入らない…っ！」


「いやいや…まだまだ入るだろ。次はこれだ」
俺は浣腸器に黄色く濁った液体を入れた。
ぶる
「な…なんですか…それぇ…んんっ…」
「なんだかわかるか、郁美〜 さっき郁美が出したもんだ」


「…お…おしっこ!?」
「正解だぞお郁美！お前の小便だ！笑」
「そんな…いやっぁあ
お尻におしっこやだぁ！」
「出したてのおしっこだからな！
人肌でいいだろお？笑」


「おぉお…腹がどんどん膨れていくな笑」
「もう出ちゃいますぅ！お腹…痛い…ううぐ…！」
あぁ
「ついでに俺の小便も追加してやるぜぇ！」
「あがっ…もぉ…無理です！お腹…いっぱ…あああ！」
ビクン
「どうだぁ～さっきとは違う感覚だろぉ！」
「…んぐぅう…っ…これ…っだめぇえ！」
モワ


「ご主人様ぁもう無理ですぅ！
お腹…苦しい…いです…」
「すげぇ腹だな笑
いっぱい飲めて偉いぞお郁美」
郁美の腹は
まるで妊婦のように
膨れ上がっていた。
「浣腸液も大量に入れたからな。
さっきからおならがすげぇ笑」


「お手洗いに行かせてください……」
「いいやだめだ。これを付けてやろう」
俺は手作りの蛇口プラグを郁美のアナルにずぼっとはめた。
ズポッ
「……んんっ……！出したいよぉ…お腹苦じいです……」
「蛇口をひねらねぇと排泄できないぞお笑」
「…そんなっ…もう…限界ですぅ……！」


「おらよっと！」
俺は郁美を抱き寄せるとまんこにちんぽを突っ込んだ。
「待って…今…は…あ」
あっ
「浣腸我慢しながらのセックスは最高だぞお～郁美い笑」
「待って…だめですっ！」


「んんあああ！」
俺は一気にちんぽをまんこの奥まで挿入した。
「うぉおお…たぷたぷ音がするぜぇ笑」
「ぎゃあぁ…っ…お腹…だめぇええ！」
「あはは！この体勢だと腹が押されるな笑」


「ぁあぁあぁ！
あぐっぁあ！
おおおおお！」
郁美は今までに
聞いたことのない
声で喘ぎだした。
「すっげ笑
苦しいか、
郁美！」
「…ぐるじいいですぅ…
んんぐぅう…ぅうう！」
「それが気持ちよく
なってくるんだぞ～」



俺は郁美の腰を激しく上下に動かした。
「うりゃうりゃ！いつもよりまんこの締まりがいいぜぇ」
「んがぁあああ！激しっいいいいいい！」
ぶる
「蛇口の隙間から屁が漏れてるぜ～」
「…お腹…痛いよぉ…んんぐっ…出したいよぉ！」
プス～


「くくく…さすがに限界か？排泄したいか、郁美」
「ひゃ…ひゃい！出したい…ですぅ！」
「何が出したいかちゃんと言うんだ！」
「…え…お腹…んんぐお腹のもの全部ですぅ…」
「ご主人様の精液と自分のおしっこだろ！ぶりぶり排泄したいんだろ！ちゃんと言え！」


「…ご、ご主人…様の…せ、精液とお…おお私の…おしっこおおおぶ…ぶりぶり…出したいですぅぅぅ！」
その言葉に俺のちんぽがびくんと反応した。
「エロすぎ…郁美…俺も出るぞお！」
「…んぐぅあああああ！」



「あぁ〜射精る！」
俺は射精と同時に郁美を強く抱きしめた。
「イぐうぅ！うぐおおおっ！」


郁美のお腹がぎゅるぎゅると大きな音を立てた。
「…お願い…します…もう…限界…ですぅ…」
「わかったわかった」
「……お手洗いに……行かせてぇ……」
「おいおい、何言ってるんだ。ここで出すんだよ笑」
ぐちゃ


俺はジョッキを手に取ると
蛇口の下に掲げた。
「…な、なんですか…
それ…え……」
「せっかく蛇口があるんだからさ。
ジョッキに注いでやるぜぇ！
排泄したものをよーく見てやるよ」
「…そんなぁ…
は、恥ずかしいですぅ……！」


「出したいんだろ？
俺が出させてやるよ。
よーし…笑」
俺は蛇口に手をかけた。
「…んんぁ…っ！
あぁっ…もうぉ…
出ちゃいますう！」
「思いっきり出せよ～
いくぞぉ…！」


蛇口をひねるとどばどばと黄色い液体が零れだした。
プシャ～～
「うおおっ笑」
「んぐっおお！？」
「おいおいおい笑、すげえ勢いだな！」



「ケツから小便してるよ笑
うへぇ…小便臭ぇ笑」
「あぁ…あぁあ…」
「どんどん出るなぁ笑
ジョッキが追い付かないぜ」
「…はぁ…はぁ…
出ちゃうう…はぁ…ぁ！」
ぶる
モワ



「おお…イカ臭っさ！特製カクテルも出てきたな笑」
ズッ♥
「…おっおっんんぐぅ！」
ぎく
「うわぁ…げほっ…！やべぇ匂いだな笑」
「おひぃ…ぬるぬる…んんぁ止まらないよぉおお…お！」
ぷる
あ♥
モワ


俺の足元には満たされたジョッキがどんどん貯まっていく。
ズポッ
「排泄気持ちいいか～郁美ぃ！」
「…んぁ…まだ…お腹苦しいですぅ……」
あっ


持っているジョッキが
いっぱいになると
俺は蛇口を捻り排泄を止めた。
「とりあえず
こんなもんか」
「え…ご主人…様ぁ…
まだお腹痛いですっ！」
「もうジョッキねぇよ笑
空のジョッキ作らねぇとな～」


「…お腹がぎゅるぎゅるして…
う、うんちが…
出ちゃうんですぅ！」
「くくく…笑
あれだけ下剤を
混ぜたからな笑」
「ジョッキ…の…中身…
…流してきますから……
出させてくださいぃ…！」
「流す？
何言ってんだ」


俺は郁美に浣腸汁で満たされたジョッキを持たせた。
「……え……？」
「美味しそうだろ？……一気に飲むんだぞぉ」
「……の、飲む！？こ、これを…ですか……！？」


「す、すごい匂いが…してます…う…げほっ…」
「飲んでも問題ないぜ。まぁ下剤だから腹は痛くなるがな笑」
「…おしっこも…飲むんですかぁ……？」
「当たり前だろ。俺と郁美の小便ブレンドだ。ごくごく行け！」



「…はぁ…はぁ…
げほっ……
…う…うう…」
「どうした郁美。
おいおい…まさか
飲めないのかぁ？」
「…い、いえ……
飲み…ますぅ…！」
郁美は手を震わせながら
浣腸汁のジョッキを
口元に近づけた。


「ごく…うげっ…ごく…
んんげぇ…っごく…ん」
「おぉ～えらいぞ郁美。
いい飲みっぷりだな」
モワ
あっ♡
郁美はどろどろした
精液カクテルを
ごくごくと飲んでいく。
「…げほっ…
口の中が…うぇ…っぷ…
精液の匂いで…
充満してますぅ…！」
ぶる


精液カクテルを飲み干した郁美は小便ジョッキも続けて飲んでいく。
「……んぐっ……！おしっこの匂いっ……がほっ……濃いよぉ……」
「おおお…笑 しっかり口の中で味わってからごっくんするんだぞ」
「…ふえぇ…味わう……！？」



「どうだ～どろどろしておいしいかぁ～～？笑」
「んんっ…んっ！吐…きそお…おぉ…」
モワ
「吐くなよ～ちゃんとごっくんしろ！」
「…ひゃ…ひゃい……ごっくん…んんぐっ」
ぶる


「…ぷはぁ……飲みましたぁ…ぁ」
「よーし…おかわりだ笑」
俺は郁美の空ジョッキに精液と小便を追加した。
「…え………ぜ、全部…飲むんですか…？」
「当たり前だろ」



あっ♡
「は…はいぃ……ごく…ごくっ…うぐ」
「いいぞ～そうだ！一気だ！一気飲みだ！」
「うぐっ…喉を……通らないですぅ…」
「郁美の大好きな飲み物にしてやるからな～ほら！どんどん飲め！」


「……ごく……んん！
ぬるぬるして…喉に…絡まりますぅ……！」
「うへぇ……それにしても匂いが強烈だ笑
鼻が曲がるわ」
「…っごっくん……
ぢゅぢゅるる…うぇ…」
「ほら、郁美！
もうちょっとだぞ～
残さず飲めよ！」



モワ
「んんはぁ……んんぷ…うう…」
「くはは！えらいぞ郁美。下品な飲みっぷりだ」
ごく
あっ♡
「…うぐうう…ごく…ごくうう！」
「最後まで全部飲めよ～」
ぷる


「んげええ…っ！」
郁美は女性が出したとは思えない特大のザーメンゲップを放った。
「うおお！すげぇゲップだな笑 おいしかったか～郁美」
モワ
ぶる


「ごめんな…さいぃ……ゲップ…でちゃいました…恥ずかしい…よお…」
「エッチだぞ～郁美。俺は郁美のはしたない音が大好きだからな！」
郁美のお腹からぎゅるぎゅるぎゅると音が聞こえてきた。
「…んんっ…お腹が…もう…限界ですぅう！」
「あんだけ下剤飲んだからな笑」


「しっかり飲めたからな。排泄を許可してやろう」
俺は蛇口に手をかけた。
「…はぁ…はぁ…ご、ご主人様ぁ…もう出ちゃう!」
「気張れよぉ～腹のもん全部出してみろ!」



「んずおおう！」
プシャ〜〜
「うおおっ笑」
プス〜〜
蛇口プラグから
どばどばと勢いよく
郁美の下痢便が噴出した。
ビク
「うっひぇえ〜下剤の効果やば笑
すげえ量の下痢便だな笑」
モワ〜〜ン
ぶる
モワ


「郁美、見てみろ！すげぇ出てるぞ～笑」
「ふぇ…！？い、いやぁあ！」
「うへぇ～さすがに臭せぇな笑 これが郁美の糞の匂いか～」
「…か、嗅いじゃやだめぇえ！お願いですぅ…！見ないでくださいっ…！」



ぶる
「よーし…出し切ったか」
「あぁ…あ…あぁあ…」
モワ〜〜
プシャ〜〜
郁美は腰をがくがく震わせながらその場に倒れ込んだ。
「さすがに今日は限界か笑
浣腸が癖になるまで
何回も挿れてやるからなぁ〜郁美♪」
モワ


アナル開発
3週目



アナルを開発し始めて数週間。
少しずつ郁美のアナルは
拡がっていた。
「…今日は
アレやるぞ」
「…アレ…
ですか…？
なんでしょうか……」
「郁美もアナルに挿入されるのに
慣れてきたからな。
今日はエグいやつだ笑」
「エグい…やつ……
あの…ご主人様ぁ…
お尻…もう…拡がらないですぅ…」
「それは俺が決めるんだよ。
さーて…作るの大変だったんだぜ～」


俺はずっしりとした極太のディルドを手に持った。
「……よいしょっと……高級ディルドだからな。重量感あるぜぇ……」
「ひぃっ……!? ななな…なんですか…それ…」
「郁美のために作った特注アナルディルドさ笑 わくわくするだろう? 郁美」
俺はアナルディルドを床に設置した。


「ほら、腰を落とすんだ」
「……はい……」
「両手は頭の後ろだ。腋が見えるようにしろ」
モワ
郁美は両手を上げ腋を見せながら腰を落とした。
「うう……この格好…恥ずかしい……い…」
ぶる


郁美は足をがくがく震わせた。
「…ご、怖いです…ご主人様……」
「だめだ。自分で腰を下ろして挿入するんだ」
「…うう…で、でかすぎるよお…」
「しょうがねぇな。俺が手伝ってやるよ笑」
俺は郁美の肩を掴むと後ろに軽く押した。



郁美はバランスを崩すと、そのまま腰を落とし、ディルドをアナルで呑み込んだ。
「きゃっ!?…んぐっ!?」
あっ♡
モワ
「くはは！なんだ、入るじゃないか笑」
「え…え……あ」
ぐい
ぶる


「…あぁ……太すぎ…るぅ…ぅ」
「まさかこんなすんなりとはな。よーし…腰を振ってみろ」
「…ごごご…ご主人様…動け…ないですぅ……」
「しっかりと足を踏ん張れ！ケツの力を抜いてゆーっくり引き抜くんだ」
「…ひや…ひやい……」
郁美は下半身をぷるぷるさせながらゆっくりと腰を上げていく。


「おっ…おおゔ…！？」
郁美は雄たけびを上げながら
ディルドをアナルから引き抜いていく。
「おおお…笑
すげえ声だな」
「お腹…えぐれ…
ちゃう…ううう！」
ブポッ
ぐい
ぶる


郁美はアナルとディルドの隙間から
ぷすぷすと空気を漏らした。
「……はぁ……はぁ……
腰が抜けちゃうう……」
「大丈夫そうだな。
よし、郁美。
ディルドオナニーをしろ」
「……ディルド……
オナニー……んんっ」
「腰を激しく
上下させるんだ。
ほら、早くするんだ！」
「……は……はいい……
や、やりますぅ！」


「…はぐぅう…！」
『…んぎゃあぁ！？』
「いいぞぉ～郁美。そのまま動き続けろ」
「…ぐるじいいですぅ…お腹押されるぅう…」
「ハメ応えがあるだろうぉ？笑
もっと激しく
腰を振るんだ！」
「…ひゃいいい…！」
郁美は徐々に
腰を動かす速度を上げていく。



「おっ…んぐおおおお♥」
「すごいぞお郁美！こんなの普通の女はできないぞ笑」
「あんっ…あがっ…はぁ…はぁ…お尻いいいい…あぁ深…んぐ…おおおおお！」
「腸壁をゴリゴリ刺激して気持ちいいだろぉ！」
ブポポッ
ぐい


『…あああ♥
おぢりいい…うぐっ!』
「郁美はアナルで感じる変態だ!
変態女なんだぞ!」
ぞく
ぶる
あ
「…アナ…ルう…あ
感じる…変態…い…
私は…変態…いい」
「そうだ!
お前はアナルを
犯されて感じる
変態女だ!」
「…あぁあ…♥
おかしく…
なりゅうう!
バカになっちゃうううう!」
モワ


「だめ…ああ…きちゃう…きちゃううう！」
「ついにケツイキがくるか。よーし…郁美、ケツイキしろ！」
「ケツイキ…い…ああ…きちゃう…頭溶けちゃう…！」
郁美はさらに腰を激しく振った。
「おら、郁美！アナルディルドでケツイキしろ！」


『イぐううう♥』
郁美はディルドを奥まで咥え込むと身体を大きくびくんとさせた。
「うおぉお笑
ケツから腸汁が
噴き出したな笑」
「あぁ…ああ♥」


「…おぢっごお…漏れちゃううう…♥」
「ケツイキは気持ちがいいだろう？」
「…は…い……♥」
「おら！立て郁美！もっとケツイキさせてやるよ！」
俺は郁美の身体を持ち上げ抱き合った。
「…ふぇ……？んぐおおおお！おひり抜けりゅううう♥」



「ご主人様ぁ…これ以上やったら…お尻おかしくなりますぅ…」
「あ？おかしくなっていいんだよ。郁美はアナル狂いになるんだからな」
ぶる
「そ、そんな…あ」
「今のでアナルもだいぶ拡がったな。今度はこいつで楽しませてやるよ」



俺は電マを手に取ると
郁美のアナルに当てがった。
「ひや…！？
…それ…って…」
「電マだよ、電マ。
これを挿れてやるぜ」
「ふ、太いですぅ…！」
「何言ってんだ笑
さっきのディルドより
小ぶりだろうが笑
挿れるぞ！」


あっ♡
俺は郁美のアナルへ
電マをずぼっと突っ込んだ。
「ひやぁあ…！」
「どんどん入るぜ～
奥まで挿れて
やるからな！」
「あぁ…あぁ♡
太い…いい！」
ズポッ


「よーし…奥まで入ったな」
「あぁ…ゴツゴツしたの…入ってますう…♥」
「うへぇ～めっちゃエロ…ただ挿れただけじゃ満足できないだろぉ？笑」
「……ふぇ？」
俺は電マのスイッチをオンにした。


郁美の腸内から
激しい振動音が鳴りだした。
「んぎゃあっ♥」
「おおっ……！振動すげ！」
「んぎゃっ！おぢりいいい！振動お…だめぇ！」
「うおおっ！刺激されて小便漏れてるぜぇ」
郁美の漏らした小便が
俺のちんぽにぶっかかる。
ぶる
じょろろろ


「振動音に混じって
おならも出てるぞぉ」
「イってますぅ…！
お尻イってるんですぅ！」
郁美は身体を
びくんとさせた。
「やっべぇ…郁美
お前エロすぎ…
俺ももう我慢できねぇ
このままちんぽ突っ込むぞ！」
「…待っ……！
今挿れちゃだめぇぇ！」


俺はとろとろになった郁美のまんこにちんぽを挿入した。
「あ～ぬるぬるまんこ良い～」
「ああああああ♥」
「おぉおぉお！こりゃすげぇえ…！アナルの肉越しに電マの振動が伝わるぜ！」
「あぁあ…あぁああ！」


「すっげ…こりゃ電動オナホールだな」
「あひゃあ…♥おまん…こお…おじりぃいい…♥」
「いいぞお郁美！もっと感じろ！もっと喘げ！もっとイキ狂え！」
「……あぁ♥あぁ…はぁ…はぁ…おちんちん…ああ気持ち…いいですぅう！」
俺は激しくまんこを突いていく。


「あぁ〜やっべぇぇ
こんなのすぐ
イっちまうって…笑」
「おちんちん…っ
あぁ…イぐ…！」
「よーし…
中にたっぷりと
注いでやるからなぁ！」
「あぁんんぁ…
激し…っ…ああ
中…きちゃう…うう！」


「絶頂と同時に電マを引き抜いてやるからな〜」
「あぁあ…だめぇえ…今…抜いちゃや…あっ♥」
「あ〜イク…！郁美のエロエロ電動オナホまんこにたっぷり出すぜぇ！」
「おっ…おっ…んんぁんおおおぉおおお♥」


「んぐおおお♥」
「あぁ～…イくっ！」
射精と同時に電マを引く抜くと
郁美のケツ穴から
イキ屁がぶぶっと漏れ出た。


「おお…すっげ笑
郁美～アナルがぱっくり開いてるぜぇ」
「んんぇ…お尻ぃ…すうすうしますうう…♥」
「はぁ…はぁ…」
「俺好みのガバ穴になってきたなぁ笑」
「よし、郁美ぃ！壁に手をつけ！」


郁美は壁に手をつき、お尻をこちらに向けた。
「だいぶほぐれてきたなぁー。よーし、俺のちんぽで味見してやろう」
「お、おちんちん…挿れるんですか？」
ぬる
ぐい
「何言ってるんだ？そのために開発してるんだぞ？」



「え…そ、そうですよね…」
「ほかほかしてて美味そうなアナルだな〜笑」
「うう…んんっ…」
「じゃあ、郁美。おねだりしてごらん」


「え…えと……
お尻に……
挿れてください…」
「おいおい、心が
こもってないぞお笑」
ぬる
モワ
「まずはちんぽに
おならをかけて挨拶しろ!」
「お…おなら…!?」


郁美のおならが俺のちんぽを刺激した。
「うおおおお笑 あ～ちんぽが喜んでるぜぇ」
「んんっ…はぁ… おちんちんが… どんどん大きくなってるぅ…」


俺は郁美の耳元でそっと囁いた。
「え……恥ずかしいですぅ……」
「さぁはやく言うんだ！」
ぷる
ズポッ
あっ♡
モミ
「は、はい……！
郁美のがばがばアナルに
ご主人様の極太ちんぽ
ぶち込んでください♡」



俺は郁美のアナルへ一気にちんぽを突っ込んだ。
「うひょおおお！」
ズポッ
「んんああ♥」



「あぁ～とろとろだ～郁美のアナル…最高だぞぉ！」
「あぁ…熱い…おちんちん熱いですぅぅ！」
俺は本能のままに腰を振り始めた。
「う、動いちゃ…だめぇえ♡」


「あ～締め付けいいぞお！おらおらおらおら！腰止まんねぇ！」
「あぁん…ぁあ♥おひりぃい…擦れっ…あぁあああ♥」
あっ♥
ズンッ
ぷる
「もっとこねくり回してガバガバにしてやるからなぁ！」


「お…そうだ…いいこと思いついたぜ～郁美……催眠を解け！」
「え……はい……」
ズポッ
郁美の目が虚ろになり、いつもの人格に戻っていく。
「最高だぜぇ郁美ぃ…っ笑」



「……え……なに……なんなの？」
「おっはよ～郁美い♪」
あ♡
ぶる
ズポッ
「え……は……？」
モワ
洗脳を解かれ混乱状態の郁美を尻目に
俺は容赦なくケツにちんぽをぶち込んだ。


「きゃああ!?」
郁美はアナルの刺激で
身体をびくんと飛び跳ねさせた。
ズポッ
あっ♡
「なになになに!?
お尻…なにか…
え…なに…え?」
「混乱してんねぇ笑
郁美のお尻は~
ケツまんこになったのさ」
モミ
ぶる


「郁美のケツ最高お笑
あ～ほじるの楽し～♪」
「ちょ…ちょっと…んん！
あなたいったい何して…っ！」
「郁美も気持ちいいだろぉ？
ほら、素直になりなよ」
「ふざけないで…で…あぁあぁあ！」


「なんで…どうして…私のお尻…ひゃん…どうなって…！」
「郁美はお尻でイけるようになったんだよ～」
「俺が毎日解してあげたからね」
「ま、毎日…あぁあんんっ！嘘…何を言ってるの…！？」



「あぁ～もう出そう！郁美のケツまんこに中出しするよ～」
「なっ…は、離して！やめて…っ！」
あっ♡
ズポッ
ぬる
「あぁ～イク…郁美ぃ…！イくぞおお！」
「だめ…っ…やめっ…！」


俺はちんぽを奥まで一気に押し込み、
ケツ穴の奥の奥で射精した。
「んぐぅう♥」
あ♥
「ああ出る出る!
出るぞおお!」


「うぉお…アナルの中がびくびく痙攣してるぜぇ…めっちゃイってんな〜気持ちぃいい〜笑」
「あぁんあっ…あっ♥どう…してぇえ…あああ♥」
あっ♥
「郁美はケツ穴を掘られて絶頂しちゃう変態だからさ」


アナルからちんぽを抜くと、ぶぼっと卑猥な音を立ててザーメンが逆流してきた。
「うへぇ～エロお笑」
「あ…あぁあ……」
「やっぱアナルは最高だな。もっともっとハメてやるぜぇ」


郁美のアナルからは
俺の出した精液が
泡を立てながら漏れ出ていく。
「あっ…んんっ♥
いやぁ…聞かないで！
見ないでぇえ！」
「アナル中出し記念に
一枚写真撮っとこ笑」
「ま、待って…嘘お！？」
俺はスマホで郁美のアナルを
ばっちりと写真におさめた。


（反抗的な女を犯すのも楽しいな笑 洗脳して従順なだけじゃ味わえない感覚だぜぇ）
「…これは…夢よ…」
「夢だと思うか？お前がそう思うなら思っとけばいいさ笑」
「さっきの写真…消して…お願い…っ」
「消してほしいか？……なら今夜また俺とここでセックスするんだ」
「夜…ここで！？ 無理です！お、夫にバレます…！」


「じゃあ旦那に教えてやろうかな～
郁美が俺と毎日アナルで遊んでること笑」
「…デタラメ言わないで…
何が毎日よ…っ！」
「ま、さっきの写真を
見せてやるのが早いな。
いいのか？」
「いいわけないでしょ…っ！」
「夫には睡眠薬でも盛るんだな。
このことがバレたくなかったらな笑
じゃあな、夜にまたくるぜ～」
「……最っ低……」
俺は郁美にそう告げると部屋を後にした。


その日の夜。
「洗脳を解いたまま
郁美を部屋に置いてきちまったが…
大丈夫だったかな？」
（旦那や警察にチクったりしてたら
面倒なことになるからなぁ～）
「ま、その時はそいつらも全員
洗脳すればいいわけだけど笑
さーて…楽しい楽しい夜の時間だ♪」
俺はわくわくしながら
郁美の部屋のドアにてをかけた。


「おーい…郁美いるか～？」
俺が玄関で声を発すると
郁美が冷や汗を垂らしながら
走ってきた。
「…ば、馬鹿なの！？
夫に気付かれちゃうでしょ！」
「旦那はどうした？
寝たのか？」
「……え…ええ…」
「まさか、ほんとに睡眠薬盛ったのか？
ひでぇ女だな笑」
「も、盛ってないわよ…！
夫にそんなこと
するわけないでしょ……」


「……でも……どうやって入ってきて……」
「ここの合鍵を頼んだらお前が用意してくれたんだよ笑」
「……もう……わけがわからないわ……」
「さーて……寝室に行こうぜ〜」
「……写真は……消してくれるんでしょ?」
「……あ……もちろん。今夜郁美が俺とセックスしたらこの写真は消してやるよ」
戸惑いが隠しきれいない郁美を横目に俺はずかずかと部屋に押し入った。


寝室に入ると電気の消えた部屋の中に
小さな寝息が響いていた。
ベッドの上で男が寝ている。
「いつも見る旦那だぜ。すやすや寝ちまってよぉ」
「……し、静かに……してよ……」
「さーて……セックスだ」
「……あの……せめて……リビングで……」
「……あ？チッ……めんどうだな……郁美……服を脱げ！」
「……え……っ」


郁美はパジャマを脱ぐとぷるんとした肌を曝け出した。
「……ううう……」
「ご主人様ぁ……」
「命令するとすぐにこーなっちまうような笑めんどうな能力だぜ」
「……あの………夫が起きる前に…お、お願いしますう……」
「よーし郁美。ベッドの上でまんぐりポーズだ。ケツ穴をこっちへ向けろ！」
「……は、はい……」


郁美は寝ている旦那の横で
股間が丸見えになるポーズで
寝転がった。
「くくく…全部丸見えだぞお笑」
「恥ずかしい…よぉ…」
「アナルもぷっくりしてて
昼間の拡張の成果だな笑」
「うう……ちょっと
ヒリヒリしますう…」


「じゃ～ん♪
今日はまだだったからな。
浣腸が恋しいだろう」
「え……!?
あの…でも……」
「毎日毎日挿れてたからな。
浣腸無しでは1日が
終われないよなぁ…郁美」
「えと…あの……
は、はい……うぅ…」


俺は浣腸器の先を
郁美のアナルにぶっ挿した。
「俺の小便だぞ～
気持ちいいか～？」
「ご主人様のお…
おしっこ…っ！」
「温かいだろ～
さっき出したばかりの
新鮮なおしっこだぞお笑」
「ひゃ…ひゃいい……
お腹…入ってきますぅ…」


「旦那の寝ている横で最愛の妻のケツ穴に他人の男の小便が注がれてるとはな…笑」
「ううう……！」
たぷっ
「どうだ郁美ぃ！気持ちいいだろう！」
「…浣腸お…良いですぅ…苦しいけど…気持ち……いい…♥」


郁美は浣腸で感じるようになっていた。
俺の浣腸調教の成果だ。
「よーし…いい飲みっぷりだ」
「ん…はぁ…はぁ……はぁ…」
「そうだ、空気も入れてやるからな」
「んぐっ……！そ、それだめぇ…っ…おなら出ちゃうんですぅ…」


「ほら、おかわりだ。まだまだ挿いるぞお！」
「んぐっ…！はぁ…はあぁ…」
「寝ている旦那にも郁美の下品な音を聞かせてやらないとな笑」
「…そ…そんなぁ…んんっ…はぁ…あぁ…」


「どんどん挿るぞぉ！2本目！3本目！」
郁美のアナルにどんどん浣腸汁が注ぎ込まれていく。
「お腹…んんぐいっぱい…い……！」
「浣腸は飽きねぇな笑最高に興奮するぜ」
「お腹痛いですぅ……もう…出したいよぉ…」


「よーし……これで全部だぞ」
「ご、ご主人様ぁ……は……はやく……あの……出したいですぅ……」
「……だめだ。郁美、我慢しろ」
「……が、我慢……！？
うう……お腹……痛いよぉ……」


郁美はアナルからおならを漏らしながら
お腹をぎゅるぎゅると鳴らしている。
「はぁ…はぁ……漏れちゃい…ますぅ…」
「我慢だ、郁美。このままお前と浮気セックスしてやるからな笑」
「……ふぇ…？」
「そのまま股を開いておけよ〜」


俺はちんぽを勃起させ
郁美の股に
ちんぽを当てがった。
「ご主人様ぁ…
こんなの…
バレちゃいますぅ…」
「郁美が喘がなきゃ
バレねぇよ笑」
「そ…そんなぁ…
うぅ…ゆっくり…
お願いしますぅ…」
「……ふっ笑」


「よーし…一気に奥まで挿れてやるぜ」
「だめっ…そんな…あぁ…」
俺のちんぽが郁美のまんこにずるっと入っていく。
「あぁ～…やべぇいつもと違うここの感覚。すっげぇ興奮する」


ちんぽがずぽっと挿入され
その刺激で郁美は
びくんと身体を反応させた。
「あんっ……んんん！」
「おらおらおら！
まんこ締めろ！
郁美いい！」
「いきなり…
は…激しいい…ん！」
「…うおおお…！」



「浣腸のカエル腹がそそるぜぇ…エロすぎっ笑」
「んんぁ…だめぇ…ぇ…お腹…揺らさないでぇ…」
俺がピストンする度に郁美の腹がたぷたぷ音を立てる。
「はぁ…声でちゃ…ぅ…気づかれちゃうぅ…」


「あぁ～気持ちぃ～
浮気セックス
最高お～笑」
「あぁんっ…
んぐっ…あぁ…！」
「…郁美の弱いところ
責めてやるぞお！」
「だめぇ…え！
今は…だ…めぇぇ…！」


「ここをカリ首で擦ってやると…おらっ！」
「ひにゃぁあ♥だめぇええ…気持ちいいところ責めないでぇえ！」
「きもち……いいっ……ご主人様ぁ…だめぇえ！」
すると…隣でごそごそと物音がした。



『…んん…
郁美……？』
『え…!?』
（おっと…!？
びっくりして
ちんぽが
抜けちまったよ）
旦那が郁美の声で
起きてしまったようだ。
「あ、あなた……
ど、どうしたの……？」


「…もう…朝……か……?」
「ま、まだよ…起こしてごめんなさい…」
「…んん…わかった…むにゃむにゃ…」
ぷる
俺はそんなやり取りにさらに興奮を覚えた。
「……笑」
「え…待……って」


俺はさっきよりも激しく郁美のまんこをピストンし始めた。
「んんんっ…！？」
「ドキドキしたか？郁美ぃいい！」
ズポッ
あっ♡
「やめっ……また起きちゃう…ぅ」
「…次起きたらさすがにバレるかもな笑」


「あぁ～やべ…射精そう…！」
「はぁ…はぁ…バレちゃう…う…バレちゃうよぉ…！」
ぷる
「郁美の大好きな中出ししてやるぞぉ！おらおらおらおら！」
「だめ…だめぇ…あぁあ…あぁああ！…」


「おらっ！種付けだっ！」
郁美のおまんこに精液が注がれていく。
「んぐっ♥」


「あぁ〜出る出る」
「あぁ…♥はぁ…はぁ…起きないでぇ…」
「寝ちまったか笑良かったな〜郁美」
「あぁ…はぁ……んぐぅ…ぅ…」


俺はまんこから
ちんぽを引き抜くと
郁美の口元へ
ちんぽを押し付けた。
「んんんぐ…!?」
「ほら、郁美。
ちんぽ舐めろ」
「んんんっ!?
はむぅ…ううう!」


「んん…はむぅ…ぺろ…ぶっちゅぅ」
「射精後のタマ舐めは気持ちいいな～」
郁美は舌を動かし俺のタマタマを舐めていく。
「いいぞお郁美。亀頭の先もくんくんしろ」


「げほっ…っじゅる…タマタマの匂い…くらくらしますぅ…」
「あぁ〜気持ちぃ〜ぞくぞくする」
郁美はお腹を押さえ、苦しそうな顔で舌を動かした。
「ご主人様ぁ…お腹…が…限界ですぅ……！」



「仕方ねぇな～
ほら、最後に
亀頭の先も
ちゃんと舐めろ」
「ひゃい…んんぐ…
れろ…っぢゅっちゅ♥」
どくっ
「あぁ～亀頭ペロペロ
気持ち～ふ～」
「んんっぢゅ…
はぁ…はぁ…
おぉぉ…んんっ…
げほっ…」
あ♥


郁美は足をがくがくさせながら
ベッドの上でうんこ座りになった。
「はぁ…はぁ……
お腹…苦しい…いですぅ…」
はーっ
はーっ
はーっ
「すげぇ屁の量だな笑」
「ご主人様ぁ…
はやく…トイレに…
行かせてください…い」
「……いいや…
ここでするんだ」


「こ……ここで……!?
でも…夫が……」
「あ? じゃぁ夫の顔に
浣腸かけてもいいんだぜ?笑」
「……うう……
わかりましたぁ……
出しますぅ……う!」
「おぉ……
ケツの穴が
ヒクヒクしてきたぞぉ」



郁美は身体をびくっとさせながら
尿道からおしっこを漏らし始めた。
「あぁぁ…だめぇ…っ…
おしっこも漏れちゃうぅぅ…♥」
はーっ
はーっ
「あ～あ笑
ベッドが小便塗れ笑
郁美の小便臭が
染みついちまうなぁ」
「あぁ…んんぐ
きちゃ…うぅ…あぁ…
出ちゃううぅ…う♥」


『うぐううう…♥』
郁美のアナルから
水鉄砲のように
小便浣腸汁が噴出した。
モワ
あぁ
「がはは…すげえ勢い笑」
「…あぁ…出ちゃううう♥」
ぷる
ブシャ～～
ぷす～～
ぷっ
じょろろろ


「うう…お腹ぎゅるぎゅる…おさまんないよぉ…んんっ」
「うへぇ～すげぇ屁の匂い…こりゃ奥のもんが出てきそうだな笑」
おっ
はーっ
はーっ
はーっ
ぎゅる
「…やだ…ぁ うんち…だめぇ… いやなのぉ…お！」
「うんちしたいんだろぉ? ぶりぶりうんちしてみろ！郁美！」
びくっ
じょろろろ
モワ
ぷしゃ～～


郁美のアナルがめくれ上がり、そこから太いうんちが飛び出した。
『…あぐうぅっ！』
「うおおっ～！郁美ぃ！うんちが出てるぞぉ！」
「…だめぇ…ぇ…み、見ないでぇえ…ぇ」


「あぁあ…うんち…ぁ
しちゃ…てるぅ…！」
「おしっこにおならにうんちで
ひってぇ匂いだな笑」
はーっ
はーっ
はーっ
ぶる
「あぁあ…
うんち…太いの…
出ちゃうぅ…ぅ！」
「あ～あ笑
まーた小便漏らして。
ベッドがびちょびちょだ笑」
ぷしゃ～



ベッドの上にぼたっと音を立て
太いうんちが山になった。
『…ひぐう♥』
はーっ
モワ
「うへぇ～
ベッドの上が
糞尿まみれだわ笑」
「…あぁあ……
もう…だめぇえ…」
郁美は排泄し終えると
ベッドの上に倒れ込んだ。


郁美はそのまま失禁してしまった。
（せっかくの新婚ベッドが糞塗れ…笑こりゃひでぇぜ）
（にしても…羞恥プレイは興奮するな。もっとおもしろいことができないもんか…）
（…お、そうだ…映像制作会社のやつを洗脳して……アレを借りてくるか…笑くくく…わくわくしてきたぜ）
俺は思いついたプレイを妄想しちんぽを勃起させながら糞尿まみれの寝室を後にした。


アナル開発
4週目


翌日。
俺は朝からあるものを調達して
アパートの前に戻ってきた。
（案外簡単にゲットできたな笑
まぁどんな理由だろうが洗脳すれば
ほいほい貸してくれるのは
ありがたいこった）
「……行ってくる。
……ちゃんと片しておけよ」
「ぐす……はい……」
「……ん？」
（郁美と旦那の声だ）
アパートからしかめ顔の旦那が出てきて
仕事へと向かっていった。


「…あ……」
郁美は俺の姿を見つけると
鬼の形相で向かってきた。
（なんだ…？）
「……あなた…
昨日私に何をしたの？
あなたが訪問してきてから
記憶がないし…
それに…目が覚めたら……」
（しらばっくれとくか笑）
「あの～……
なんのことでしょうか？」
「……はあ？……
と、とぼけないで！
あなたのせいで…その……」



「俺何かしましたか？」
「……え…あの……何も覚えてないんですか？」
「……えー……？」
「……夢？……いいえ……だって実際ベッドが……」
「ベッドがどうかしたんですか？」
「……え……いや……ど、どうなってるの……？」
郁美の戸惑った顔を楽しんだ俺は
郁美に命令を告げた。
「ほら、郁美。こっちへこい！」
「……！？……はい……」


郁美は虚ろな目になり俺のそばに寄ってきた。
「よーし郁美。今日は俺とドライブだぞぉ」
「…ご主人様ぁ…今日はその…掃除の予定が…」
「掃除？　あぁ笑　旦那が寝ている横で大便ひり出すのは気持ちよかったかぁ？」
「…うう……」
「盛大にぶちまけたからな。ベッドが小便と糞まみれでベットベトだろうなぁーあはははは！」

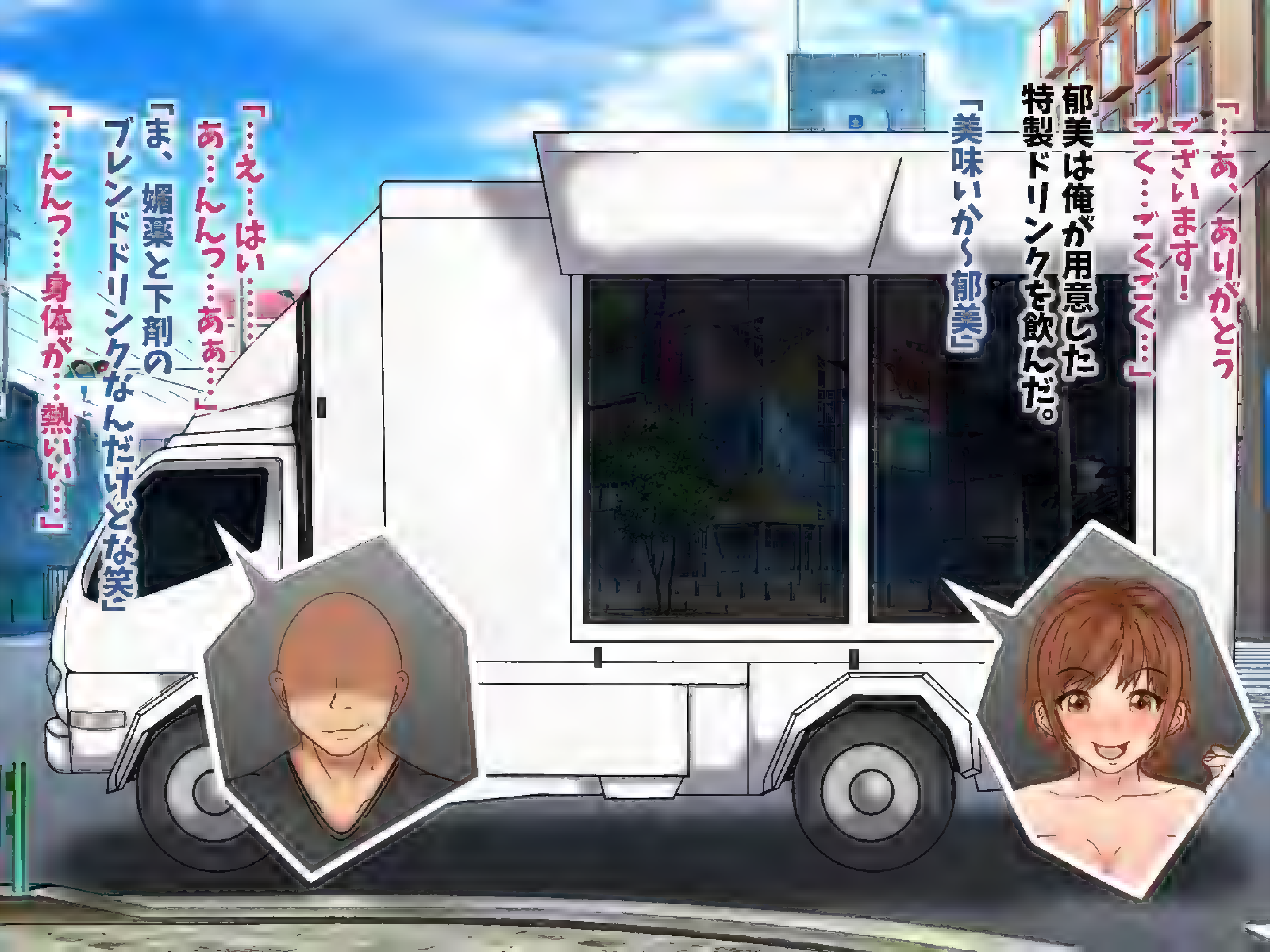

「夫に叱られてしまいました…いい歳しておもらし…しかも寝小便ならまだしも寝糞はちょっとって…引いてました…」
「懐の狭い男だな～。俺は郁美のおもらし姿が大好きだから、何度でもゆるしてあげるよ。今日もたっぷり可愛がってやるからな笑」
「…は…はい……」
「さーて、掃除なんかより俺とのドライブを楽しもうぜ。郁美のために調達してきたんだからな」
「あの…なんなんでしょう…？トラック…？」


「郁美、お前は裸になって後ろに乗れ」
「…は、裸……!?」
「トラックの荷台が部屋みたいになってるんだぜ」
「……そ…そうなんですか…?」
郁美は階段を登り荷台の入口から中へ入った。
「中もなかなか広いだろう笑」


中に入った郁美は
すぐにトラックの仕様に気が付いた。
「…え…あの…ご主人様ぁ…
そ、外が見えます…！」
「そうだぞ～
さぁ服を脱げ」
「…でも…
みんなに見えちゃいます…う…」
「安心しろ、郁美。
これはマジックミラーだ。
お前の姿は俺からは見えていない。
中で裸になってても
他の奴らには見えないぜ」
「…マジック…ミラー……
な、なるほど…です……
でも恥ずかしいよぉ…」
「ほら、はやく脱げ。
出発するぞ」


俺も車に乗り込み、エンジンをかけた。
「…うう……お外で裸になってる…みたいですぅ……」
「解放感あるだろぉ？笑」
「よーし…出発だ。このまま街中をぐるぐる回っていくぞ～」
「…ええぇ…ま、街中…！？は、恥ずかしい…い…」
「マジックミラーだから問題ないだろ笑」

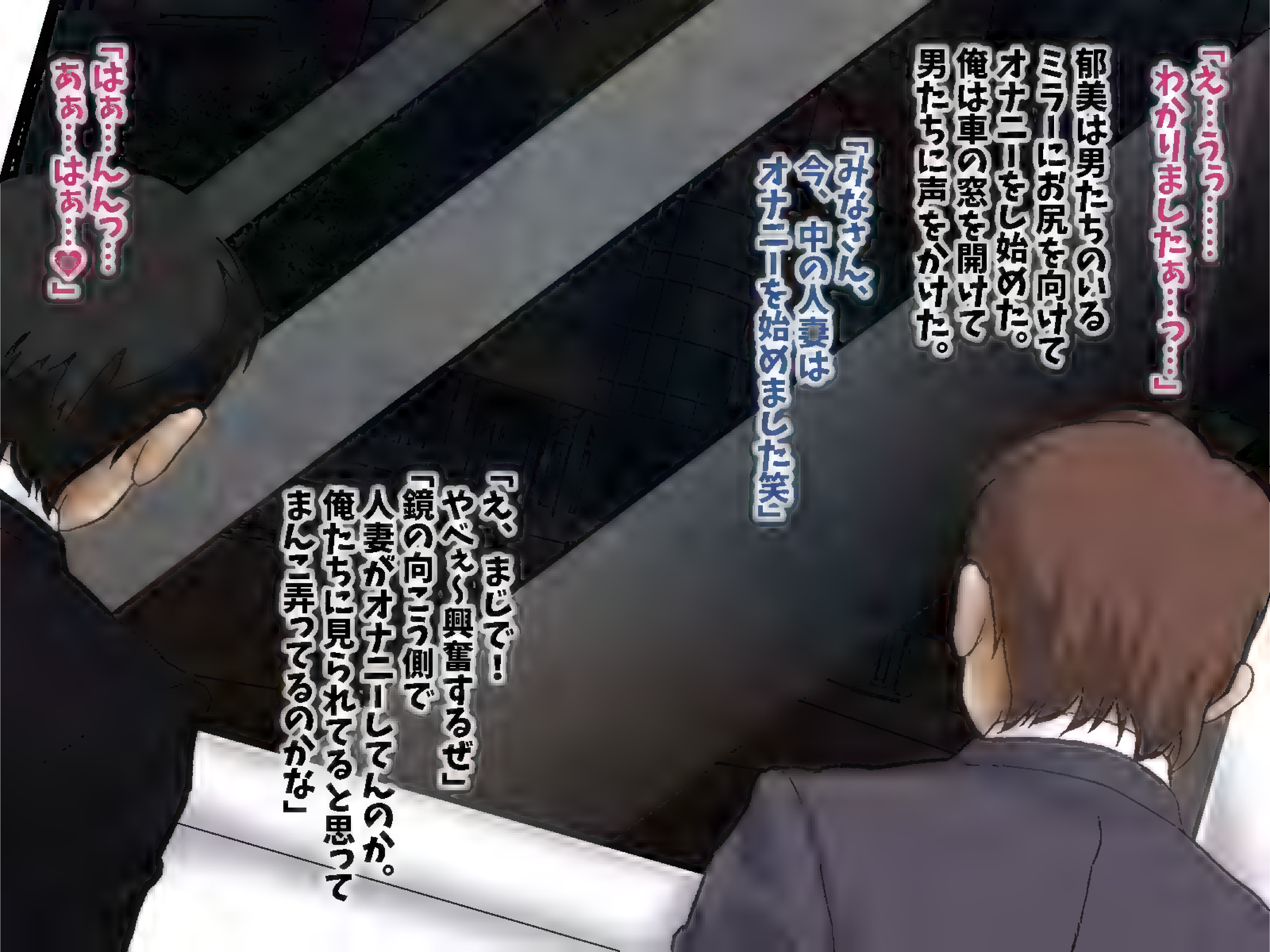

俺は車を走らせ、街中を進んでいく。
住宅街、交差点、商店街…
そして駅のロータリーで
車を停めた。
「…うう…なんか……
じろじろ見られてる…
感じがします…う」
「なんだ、郁美。
興奮してるのか？笑」
「…うう…ん…
恥ずかしいです……」
「まぁ落ち着けよ。
そこに置いてあるドリンクで
気分でも落ち着かせろ」


「…あ、ありがとうございます！ごく…ごくごく…」
郁美は俺が用意した特製ドリンクを飲んだ。
「美味いか～郁美」
「…え…はい……あ…んんっ…ああ…」
「ま、媚薬と下剤のブレンドドリンクなんだけどな笑」
「…んんっ…身体が…熱いい…」


俺は車を降りると、トラックの車体に紙を張り付けた。
「…ご主人様ぁ…お腹…痛いですぅ…」
「まだ我慢しろ。これからお前の脱糞をみんなに見てもらうんだ」
「…ふぇ…！？…」
人妻・Iさん
アナル開発中
夫には内緒
おなら絶頂
脱糞大好き
「ご通行中の男性諸君～男の夢が詰まった車が来てるぞ～」
俺はロータリーにいる男共に大声で通知した。


俺の声掛けで
男共がぞろぞろと
車の前に群がってきた。
「…ご主人様…！
人がいっぱい…
近寄ってきてますぅ！」
「この車は珍しいからな笑」
男共は車を見ると、
興奮した声で話始めた。
「これってあのAVで
よく見るやつだよな！？」
「おおお！すげぇ！」
「この中にこの写真の子がいるの？」
「やっべ…想像しただけで
勃起してきたわ」
人妻・Iさん
アナル開発中
おなら絶頂♪


「…うぅ……みなさん中の様子を張り付くように見てきてますぅ…本当に…み、見えてないんですよね…？」
「あぁ…見えてねぇよ。見られてると思ってるのはお前だけだ」
人妻・Iさん
アナル開発中
夫には内緒
おなら絶頂♪
脱糞大好き
「脱糞大好き、だとよ笑」
「変態女じゃん」
「あ～この子が脱糞するとこ生で見てぇえ～」
「よーし…郁美。身体が火照るだろう？ミラーにケツを向けてオナニーしろ」


「え…うう……わかりましたぁ…っ…」
郁美は男たちのいるミラーにお尻を向けてオナニーをし始めた。俺は車の窓を開けて男たちに声をかけた。
「みなさん、今、中の人妻はオナニーを始めました笑」
「え、まじで！やべぇ～興奮するぜ」
「鏡の向こう側で人妻がオナニーしてんのか。俺たちに見られてると思ってまんこ弄ってるのかな」
「はぁ…んんっ…あぁ…はぁ…♥」


「…視線を感じますぅ…
心臓がドキドキして
…身体が熱いぃ…♥」
「郁美には露出狂の
才能がありそうだな笑
そのままオナニーを続けろ！」
「…ひゃいぃ…♥」
「あぁ～見てぇ」
「人妻の調教アナル
拝んでみたいぜ～」
「さてと…そろそろ…」
俺は頃合いを見定めると、
運転席にあるスイッチを
ぽちっと押した。
人妻・Iさん
アナル開発中
おなら絶頂♪


マジックミラーが下の方から
徐々に薄くなっていく。
「きたきた笑」
「……？」
「おい…これって…」
「…んんあ……♥
ああ…はあ…んん♥」
郁美はその変化に気付かず
俺の指示通り
オナニーを続けている。
「…くはは笑」
人妻・Iさん
アナル開発中
夫には内緒
おなら絶頂♪
脱糞大好き


マジックミラーが消え、男たちの目の前には郁美のデカケツがどどんと姿を現した。
「うぉおお！すげぇえ…生まんこ！」
「てかケツでけぇ笑
うつわ、丸見えじゃん」
「んあっ…はあ……♡」
あっ♡
「マジでオナニーしてるよ」
「こりゃ本物だな。
変態人妻エロお笑」


「はぁ…うぅ……お腹ぎゅるぎゅる…きてるぅ…はぁ…」
「お腹苦しいか？苦しくて気持ちいいだろ？そのままオナニーを続けるんだ」
「そんなぁ…んんっ♥」
「あ、ケツ穴がヒクヒクしたっ！」
「やべ…勃起してきた」
男たちは涎を垂らしながら郁美のケツを眺めている。


「お腹…痛いよぉ…お…おなら出ちゃうう♥」
郁美は下剤の効果でアナルから放屁を漏らしていく。
「みなさん、中の人妻はおならを連発しています」
「え…おなら!」
「この女…俺たちの方に向かって屁こいてるのか笑」
「まじかよ…あぁ～嗅いでみてぇ」


「ぐうぅ…んんっ！聞かれてないよね…？おなら止まんないよぉ…」
「でも気持ちいいだろう？みんなに見られながらの放屁オナニーは笑」
「んんぁ…っ♥もうお腹が…限界い…ですぅ…」
「あ～このデカケツにちんぽ押し付けてぇ～」
「柔らかそお～」
男たちは己の股間をズボンの上から弄りながら郁美のケツ穴を視姦していく。


「あぁ…だめっ…おしっこ…んんっ♥」
男たちは郁美の尿道から小便が零れる瞬間をしっかりと目撃した。
「おい、見たか！」
「女のおしっことかはじめて見たわ」
「飲みてぇえ！」
「スケベな女だな笑」
（よーし…そろそろフィニッシュか）
ぶる
はー
はー
はー


「もぉ……はぁ……お腹よじれちゃうう……」
「しょうがねぇな～いいぞ、郁美。ぶりぶり排泄しろ。ちゃんとイくんだぞ」
「ひや…ひやぃぃ……♥」
「おおおお！」
「人妻の生脱糞だと！」
「みなさん、脱糞ショーが始まりますよお！」



男たちはさらにミラーに顔を寄せていく。
「あぁ…うんち…うんち出ちゃうぅぅ…うみんなが見てるところにぶちまけちゃうよぉお」
「うおおおお！」
「脱糞しろ！」
「変態女ぁ！」
「屁コキ女！」
「露出狂！」
「糞見せろ！」
「おら！イけ！郁美！」
「はうううう…！」


「出りゅうう…♥」
「うおおお！」
「すげええ！」
郁美のケツ穴から大量の下痢便が噴出し、ミラーを汚していく。


「すげぇ量の糞汁だな笑」
「こうちにまで臭ってきそう」
「あぁ…はぁてんんっ…うんち…出ちゃ…ん♥」
「身体ビクビクさせてんな」
「脱糞でイったのか？」
「下品すぎて最高…笑」
「こりゃまた…盛大にぶちまけたな笑」
「はぁ…はぁ…♥」


「実はな〜郁美。マジックミラーは上半分だけなんだ」
「え……何……言ってるんですか…？」
「男共のにやけ顔を見てみろ。お前の下痢便絶頂は丸見えだったのさ笑」
「嘘……！？いやあああ！」
郁美は下痢便を漏らしながらその場に倒れ込んだ。



俺はその後、車を発進させ、失禁した郁美を乗せたままアパートへと戻ってきた。
「着いたぜ」
「ご主人様ぁ…
…ひ、ひどいですぅ…
みんなに見えてたなんて…」
「顔は見せてねぇから安心しろよ。
公開脱糞は興奮しただろ？」
「うう……
…心臓に悪いですぅ……」
「今日のドライブ楽しかったな〜
明日はデートに行くぞ。
さてと…糞塗れの車を返しに行くか笑」


俺と別れた郁美は
自室に戻ると
寝室から匂う悪臭に顔をしかめた。
「うう…げほっ……
臭っさ…げほ…」
寝室のベッドの上には
自分の小便と糞便が溢れ、
鼻の曲がるような
匂いを発していた。
「…あれ……
私…今日1日何して…
た、大変…もうこんな時間！
げほっ…そ、掃除しなきゃ」
郁美は正気に戻ると
すぐに掃除を始めた。
「……ん…何…また
お尻がひりひりしてる…
ここのところずっと……
私…どうしちゃったの…？」


翌日。
俺と郁美は
2人でデートにでかけた。
「ご主人様ぁ…」
「どうした郁美？
俺とのデートは
楽しいか～？」
「パ、パンツ…
…返してくださいぃ…」
「ノーパンデートは
ドキドキするな～笑
郁美のスカートが
短いせいだぞ～」
「…お尻も…苦しいですぅ……」


郁美のアナルには極太アナルプラグが挿入されていた。
「極太だからな笑」
「はぁ……お尻に力…入れないとぉ…抜けちゃう…」
「デート中に抜け落とすなよ～ノーパンアナル中毒女なのが近所にバレちまうぜ？笑」
「…ひぃ……そんな…ふんぐぅ…」
「そうそうアナル締めろよ～その方がプラグの感触も楽しめるだろ？笑」



郁美は腰をぷるぷるさせながら俺と一緒に歩き続けた。
「んんはぁ…はぁ…♥」
「吐息が漏れてるぞ郁美い〜笑」
「…はぁ……お尻が…苦しいですぅ…」
「お前はそれが気持ちいいんだろ？笑」
「…お尻が……閉じなくなっちゃいますぅ…」
「そうするつもりだから安心していいぞ笑」


郁美はケツから腸汁を垂らし
股を閉じながら歩いている。
「はぁはぁ…♥
んあぁ…」
「どうした郁美。
もう限界か？」
「…はぁ……いい………
お尻…から…おならが
漏れちゃうんですぅ…」
「ったく…せっかくのデートで
屁ばっかりしやがって」
「…ご、ごめんなさいい……」
「くくっ笑
ま、俺にはそっちの方が
楽しいけどな」
プス〜



「あぁぁぁあぁ♥」
ブッブリリッ♥ブッブップスゥウ♥
郁美はアナルプラグの隙間から
卑猥な音を立てながら中腰になった。
「…もお限界ぃ…
太すぎて…
刺激耐えられないぃ…」
「しょうがねぇな～
デートの途中だってのに
ケツイキか～？笑」
「…ご、ごめん…なさい…
ご主人様…お…お願いします…
抜いてくださいぃ…」
「……郁美。
自分で抜いてみろ」


「じ、自分で…ですか…」
「手を使うなよ。ケツだけで出すんだ」
郁美はその場にしゃがみこんだ。
「…ふんぐぅう…ふ、太すぎて…抜けないですぅ…!」
「じゃあ…ずっとそのままだな笑」
「…そ、そんなぁ…!」




郁美は下半身に力をいれ気張った声でプラグを押し出していく。
「あぁぁ…ふんぐっ…♥おじりぃ…拡がるううう！」
「小便も漏らしてるぜ～おいおい…もっと踏ん張れ！」
「ふんぐぅう♥ふんっふんっんんん！おおおおおおっおお！」


『はにゃあ…♥』
郁美のアナルからプラグが飛び出し、気の抜けた声を発した。
モリ
「お、出てきた出てきた笑
可愛い声が出てたぞ～郁美」
「…太いの…出るぅぅ
あぁあ…出てるぅ♥」





郁美のアナルからアナルプラグがごろんと飛び出した。
『…んぐうあ♥』
「えらいぞ郁美～こんな太いの普通踏ん張っても出せないぜ～」
「…おひりぃ…スースーするぅ…♥」



「綺麗なアナルローズだぞ笑
ケツ穴がバカになっちまうな～笑」
「はぁ…はぁ……
んんぐう…っ…んん♥」
ぶる
モワ
「よーし…
すっきりしたか？
ほらデートの続きだ」
「はぁ…い……
んん…あぁ…ん」


俺は郁美にパンツを渡した。
「おらよ、郁美。パンツ返してやるよ笑」
「え…はい……」
「……どうした？嬉しくないのか？」
「……いえ…あの…ちょっとトイレに行ってきてもいいですか？」
「あ？今たくさん小便しただろ？」
「……いえ……う、うんちですぅ……踏ん張ったせいで…おりてきちゃやったんですぅ…」
「うんちか……そうだな……」



「うんちもココでしろ」
「ふぇ……!?　こ、ココで…あの…野糞ですか…?」
「…いいや…パンツを履いたままうんちするんだ」
「…履いたまま…!?　そ、そんなことしたらうんちまみれになっちゃいますぅ…」
「そうだぜ?　郁美の純白パンティーの中にぶりぶり排泄するんだ」
「…そ…そんなぁ…」
「ほら、はやくしろ!」


「うんちしたいんだろ？
我慢せずに
ぶりぶりしていいぞ笑」
「…うぅ…っ
お漏らししみたいですぅ…」
「今更何言ってんだ笑
郁美は何度も
お漏らししてるだろ笑」
「……うぅ…
出しますぅ……」
ぶる


郁美はお尻を踏ん張り始めた。
「…ふんぐっ…♥
あぁ…すぐ出ちゃいますぅ…」
「あぁ～くんくん…
郁美のおならは
いつ嗅いでも臭いな～笑
興奮するぜ」
「だめぇ…んんぐっ♥
太いのが…きちゃう…
あぁあ…んんぐ♥」



「うんちぃ…♥」
郁美のパンツが茶色く染まっていく。
モリ
「うっわ…笑 パンツの中がどんどん膨れていくぞ」
「…出ちゃう…♥ パンツの中に…い… いっぱい出ちゃうううう♥」
ぶる



「あぁ…ぬるぬるして…気持ち悪いよぉ…んんぐぅ♥」
おぉ
「すげぇ量だな。パンティーがうんちでずり落ちてやがる笑」
ずる
「……ふんんぐ♥まだ…出ちゃう…うんちきちゃうぅ♥」
郁美のパンティーの中で大便が吐き出る音がぶちぶちぶちと聞こえてくる。
モリ


郁美のパンティーの隙間から収まりきらない糞が漏れ出ていく。
「…出ちゃうぅぅ♥いっぱい…いい♥」
モリ
「うぉおお！うんちがいっぱい零れ落ちてるぞお笑」
「…漏れちゃう…♥あぁあ…うんち…出ちゃう…んんぅう♥」
ぶる


「盛大に出したなぁ笑」
「…んん…♥お尻…重いぃ…はぁ…はぁ…」
「くはは…郁美はうんこたれオナニーの上級者だな笑」
「うう…うんこたれなんて…ひどいですぅ……」



郁美は立ち上がり
うんちまみれのパンツを脱ごうとした。
「おい、郁美。
勝手に脱ぐな」
「え……
でも…お尻が
気持ち悪いですぅ…」
「…デートは
まだ終わってないだろ。
履いたまま我慢しろ」
「…そ…そんな…
こんなの…バレちゃうぅ…」
「糞垂らすなよ~笑」
俺と郁美はその後もデートを続けた。
郁美のパンティーから汚物臭をまき散らしながら。
モワ~~~ン
モワ


アナル開発
5週目


調教をはじめて数週間。
郁美もだんだんとアナル弄り無しでは
満足できない身体になっていた。
「あ…ご主人様ぁ…待ってましたぁ…」
「パンツ一丁でお出迎えかよ笑 まさかオナニーしてたのか？」
「うう…はい…い…お尻を…指で弄ってましたぁ…♥ 弄ってないと…落ち着かないんですぅ…」
「郁美は変態さんだな～ でも自分の指じゃ満足できないだろ？ 俺が弄ってやるよ、嬉しいか？」
「は、はい…♥ ご主人様に弄って欲しいですぅ！」



俺は郁美からパンツをはぎ取ると
ベッドの上に押し倒した。
「あぁんっ…♥」
「ケツをこっちに突き出すんだ！」
「はいぃ……♥」
「おいおい笑
おならが漏れてるぞ？
まったく郁美のケツ穴は
ガバガバだな～」


「くんくん…すーはー…げほっ！臭っさ笑
言いつけ通り…たっぷり溜めているな笑」
郁美のアナルからはエぐい匂いが放出されていた。
「…嗅いじゃだめぇ…♥」
「排泄を我慢してから何日だ？」
「もう…5日ですぅ……」


「便秘5日目のケツ穴か〜
あ〜美味そ…いただくとしよう笑
ぺろ…っぢゅぢゅぢゅぢゅ！」
「んぎゃあああ♥
おひりぃ…あぁあ」
「あ〜じゅるるるる
臭くて下品な味だぞお」
びく
モワ
んぷっ
ずる
あっ♥
「あああ…んんっ…
き、気持ちいですぅう♥」


「じゅるるるるぅ！あ～郁美の味だぁ！れろれろれろ」
「んんぅ…うぅ…♥お腹に…響いちゃううぅ♥」
「臭い…臭いぞお郁美！臭くてたまらねぇ…笑っぢゅるるる！」
「あぁあ…あぁあん…♥」


郁美の腸内では肛門を刺激され
ぜんどう運動が活発化していく。
「んにゃぁああ♥ うんちおりてきてますぅ…♥」
「うぉ…さっきよりもおならの匂いが強烈だ笑」
モリ
「おひり…いい…♥ おかしくなるぅぅ♥」
「郁美のうんちとキスできそうだな笑」


「…んん…あぁ…あれ…ご主人様ぁ…うんちが固くて止まっちゃいましたぁ…」
「あぁ？5日分の糞だからな。量もすげぇだろ」
ぶる
あぁ
「お腹…苦しいぃ……」
「しょうがねぇな〜俺がうんち出すの手伝ってやるよ笑」
ぐい
びく



俺は郁美を四つん這いにさせた。
「ご主人様ぁ…浣腸ですかぁ？」
「なんだ郁美。浣腸がいいのか？」
「浣腸…好きですぅ…♥」
「くく…だが残念だな。今日は浣腸じゃない」


俺は指を伸ばすと
郁美のアナルに
ずぼっと挿入した。
「…んんぅ♥」
「ほかほかだぞ～
もわんとした
空気が当たるぜ」
「…指入れちゃ…
だめぇ…ぇ…♥」
「あぁ～臭っせぇ笑
たまんねぇな」



「今の郁美なら腕もすんなり入っちまいそうだな」
「え…！？」
俺は握り拳を作ると郁美の肛門に押し当てた。
「前々からアナルフィストがしたかったんだよな～」
「アナル…フィスト……！？」


「郁美のケツの中に俺の腕を突っ込むのさ」
「ご主人様の腕が…んんっ…」
「ご主人様ぁ…こ、怖いですぅ…」
「けつまんこの力抜けよ〜郁美。挿れるぜぇえぇ！」


「おらっ!」
俺の腕が郁美のアナルへ
ずぼっと入っていく。
「…んぎぃぃぃぃぃ♥」


「あ〜すげぇ締め付け笑
これが郁美の
アナルの中か〜笑」
「…あぁ…あ♥
ご主人様の腕ぇ
太すぎますぅ…!」
「腕の先に
大便が当たってるのが
わかるぞ〜」
「…いやぁあ…あ♥」


「もっとだ！」
俺は右腕をぐぐっと
肩まで突っ込んだ。
「…はがぎやあああ♥」
「すっげえ…
郁美のケツの中
あったけええ～笑」


「あ～ぬるぬるして最高だぞ～郁美」
「ふ…深いいいい…♥おしりぃ…壊れちゃうう…」
「よーし…郁美のうんち発見♪掴み取ったぞ～」
「…ひやぁん♥…な、なにして…」



「俺が郁美の便秘うんちを掻きだしてやるからな～」
俺は腸内に溜まったうんちを掴むとそのまま腕をゆっくり引き抜いていく。
ブポッ
「…おっ…おっ…♥んおおおっ♥」
「すげぇ声だな笑 気持ちいいのか～郁美ぃ！」


次の瞬間、郁美のアナルから
俺の腕が引き抜かれた。
「…あぎゃ♥」
ぶる
「うっへ～笑
郁美～出たぞ～
ほかほかのうんち笑」
「…おじりぃ…
…あぁ…あああ♥」
郁美は足をガクガクさせ
小便を漏らした。


郁美のアナルはぱっくりと開き、もわんとした空気をまき散らしている。
「ははは笑 郁美の腸内が丸見えだぞ～」
「…恥ずかしいですぅ… 見ないでくださいい…♥」
「郁美ぃ… うんちを掴み出されて お前イったな？」
「…うう…ごめんなさいいい… イっちゃいましたぁ…♥」
モワ
じょろろ



「…まだまだ奥に溜まってそうだな」
「…んんっ…♥」
「もっといっぱいぶりぶりしたいだろ？今出したうんちも戻してやろう笑」
「…も…戻す？」
俺は手に持った大便を握ると郁美のアナルへ腕を突っ込んだ。


「おおらっ!」
俺は郁美のアナルに再度腕を突っ込んだ。
「…はんっ♥」
ズポッ
「どうだぁ～？笑
大便がアナルに
戻される感覚はぁ!」


「おおお…んんごぉ♥
頭…真っ白に…
なりゅううう…う♥」
「さーて…郁美の
臭っさい便秘うんちは
どこかな〜？笑」
「…掻きまわしちゃぁ
だめぇえ…イくっ…♥
お尻イっちゃううう♥」
「さっきより奥まで
探してやるからな〜」


「おっ…すごいのあるぞ！
こりゃ掴み出しがいがある
大きさだぞ笑」
腸内に詰まったうんちを
俺は鷲掴みした。
「…あぁぁあ…♥
お腹あ…ぎもぢいい♥
ああ…いい…い♥」
「郁美ぃ！肛門緩めろ！
でかいの出るぞ～…おら！」



郁美のアナルから
ずっしりとした大量の大便が
俺の腕で掴み出された。
「…イグぅ♥」
「うぉおおお笑
うんち重っ笑」
ずる
俺の右手には
郁美の糞が山のように
握られていた。



「奥のうんちまで掻き出したからな。便色が薄いのも混じってるな笑」
「…うんち見ないでぇ恥ずかしいですぅ…あぁんん…んん♡」
「こんな大きな塊を一気にひり出したんだぞ～気持ちよかったろ～？笑」
「…はぁ…はぁ…うんちで…んんっ♡感じちゃいましたぁ…♡」
じょろろ


俺は郁美の腸内を覗き込んだ。
「…なんだ、これで5日分全部か～案外少ないな」
「…うう…多いですぅ…お腹苦しかったです…」
じょろろ
「これじゃあまだまだ満足できないだろ？笑しょうがねぇ…使い回すか」


「おらっ!」
俺は手に持った大便を一気に郁美のアナルへ詰め戻した。
「んぎいいっ♥もうだめぇぇえ♥」
「一気にひり出して一気に詰め戻す笑 こりゃ爽快だな」



郁美のアナルへ大便を戻すと俺は腕を引き抜いた。
「…んぎゃっ♥」
「あはは笑 郁美のアナルにうんち戻っちゃったな～」
「…ひどいですぅ…♥ お腹…苦しい…っ♥」
「よーし…このままハメてやるぜ」
ぶる
じょろろ


「郁美、まんぐりポーズだ」
「んんっ…ひゃいぃ…♥
お腹…苦しいですう…」
「ガバガバアナルから
戻したうんちが丸見えだな笑」
「だめぇ…うんち……
見ないでぇ…んん♥」



「おらっ…！
郁美のまんこに
ちんぽが入るぞぉ！」
「ご主人様のおちんちん…
きちゃう…う…♥」
お
ぐい
「愛液と小便で
びしょびしょだな笑
一気に突っ込んでやるよ」
プッ


俺のちんぽが郁美のまんこに
ずぼっと挿入され、
郁美はアナルからぶぶっと屁をこいた。
「あああんんん♥」
ズポッ
ブッ♥
ブッ
「おら！
ちんぽだぞ！」


「おらおらおら！郁美ぃ！まんこ締めろよぉ！」
「あぁんあ♥激しっ…あぁ♥」
「子宮にちんぽでキスしてやるからなぁ！」
「奥…だめぇえ♥気持ち…いいよおおおお♥」


俺は激しくピストンする。
「おらっおらっおらっ！
まんこ突くたびに
おならが漏れてるぞお～」
「お腹に…い…響いちゃうううう♥」
「あぁ～臭っせ～笑
こんな下品なセックス
郁美以外できねぇぞ～笑」
「あぁんぁ♥
ご主人…様ぁ…ぁあ♥」
プス～


「あぁ…だめ……イく…う、うんちきちゃうう…♥」
「俺もそろそろ限界だ。郁美のまんこにたーっぷり出してやるからな！」
「中出しされながら脱糞アクメしろ！おらおらおらおら！」
「おまんこイっちゃう♥おじりぃ…出ちゃうううう♥」


「おら！イケ！」
「うんごおおお♥」


「うおお…膣内がビクビク痙攣して
ちんぽ気持ちいいぞ～郁美」
「おっ…んんおおお♥
イぐ…ああ…んん♥」
「脱糞アクメ顔見せろ！
おお～エッチな顔だ」
「恥ずかしい…ですう…♥」
郁美のアナルからぶりぶりぶりと
悪臭うんちが放出されていく。


「あぁ～郁美のうんち
とっても臭いぞぉ！
うおお…ちんぽおさまんねぇ」
「はぁ…んはぁ…♥
嗅いじゃ…だめぇぇ…♥」
「郁美～ 腹の中の
大便は全部出たか？」
「うう…まだですぅ…♥」
プス～


「奥に詰め込みすぎたか？笑
もっと踏ん張れ」
「うぅ…んんっ…
ふんぐううう…♥
はぁ…はぁ…」
「おしりぃに…力が
入らないですぅ…ぅ…♥」
「ったく…笑
じゃあ俺が掻き出してやるよ」


「おら！立って
ケツを向けろ！」
「も…もう…
お尻…だめぇ…」
「まだまだ
糞便が詰まって
そうだな笑」
「はぁ…んんぁ……♥
お腹痛いですぅ…」


「俺のちんぽで糞の詰まったアナルをほぐしてやるかな～」
「え…挿れるんですか…!?」
ぬる
あっ♡
モワ
「糞塗れのアナルにちんぽぶちこむぞぉ!」
「んぁあああああ♡」


俺のちんぽが郁美のうんちを
アナルの奥へ押し戻していく。
「あ～亀頭にうんちが当たるぜ～気持ちいい～」
「うんちがぁ…あぁ…お腹に…戻って…ぇ♡あぁあぁ…奥だめぇ♡」


「ああ～最高お笑」
ブポッ
ズッ
あっ♥
「奥うう♥」
郁美は下半身をびくんと揺らした。



「あ～郁美の糞が亀頭をシゴいてるぞお」
「そんなっ…あぁん♥だめですぅ…んんん♥」
あ♥
ズポッ
プス～
ぷる
モミ
今までにないアナルの感触に俺は腰を動かし続ける。


「あぁ～たまんねぇ…最高のアナルだぜぇ」
ズポッ
「おじりいいい♥気持ぢ…いいい♥あぁあぁあぁ♥」
「奥がイイだろぉ？もっとぐりぐり責めてやるぜ」


「おらおら！ケツ穴踏ん張れ！うんちとちんぽの押し合いっこだ笑」
ブポッ
ぷる
「ひぎゃぁあ♥あぁんんあ♥お尻ぃ…壊れ…るぅう♥」
「あぁ〜やば…出るわ笑」

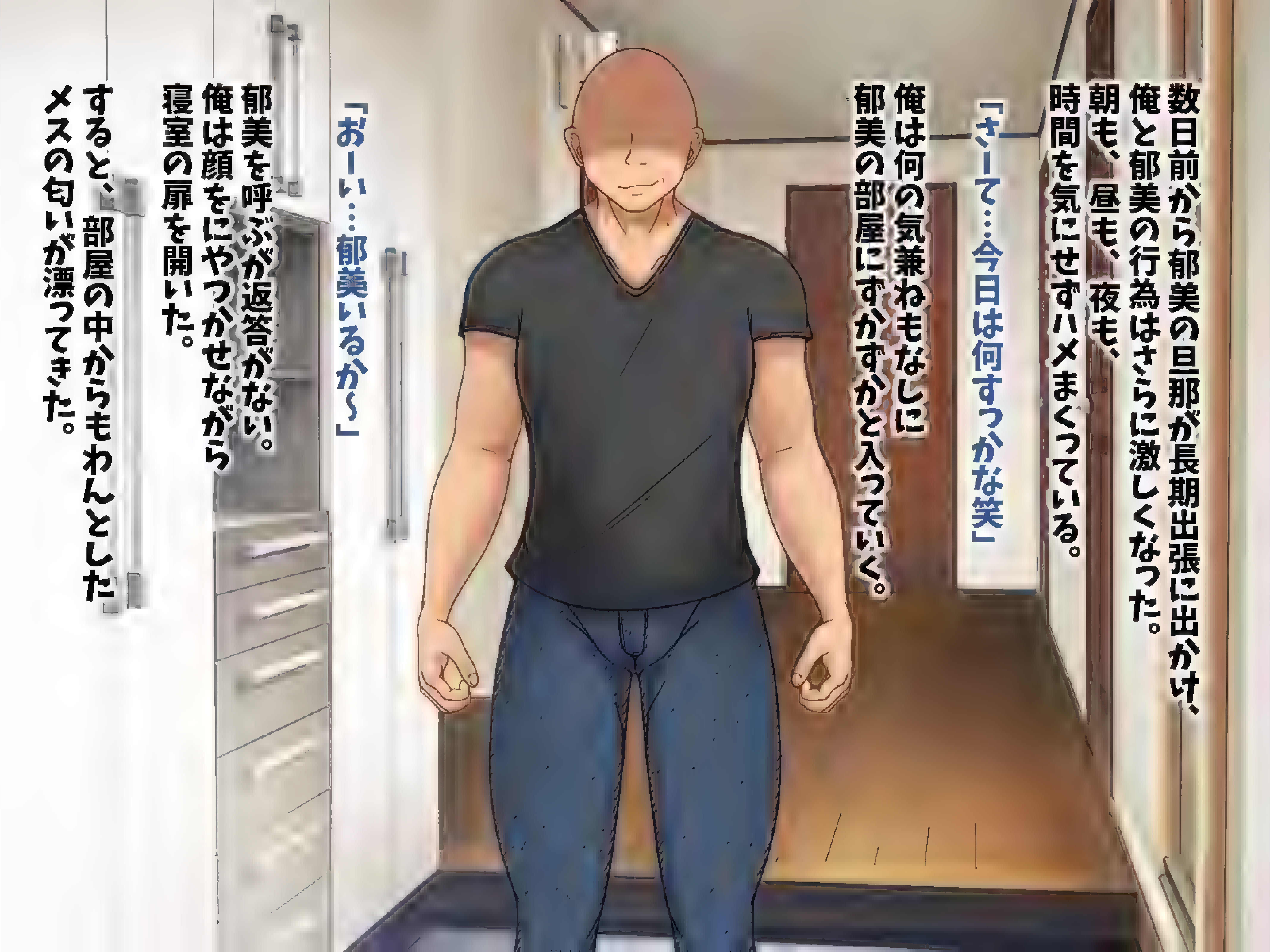

「郁美のうんちに着床だぜ！」
あっ♥
俺は郁美のけつまんこの奥に精液をぶちまけた。
「あぎゃあぁ♥」


郁美のうんちの匂いと俺の精液の匂いが混ざり部屋の中に悪臭が漂う。
「うはぁ…すげぇっ…たっぷり出たぜ」
「熱いぃ…♡……もうだめぇ♡」
「ケツの穴で精液とうんちがミックスされてんな笑」


「うんちっ…出ちゃううう♥」
「うおおお!」
「あぁ…だめ…勝手に…漏れちゃううう♥」
郁美のアナルからどぼどぼと糞が零れ落ちていく。

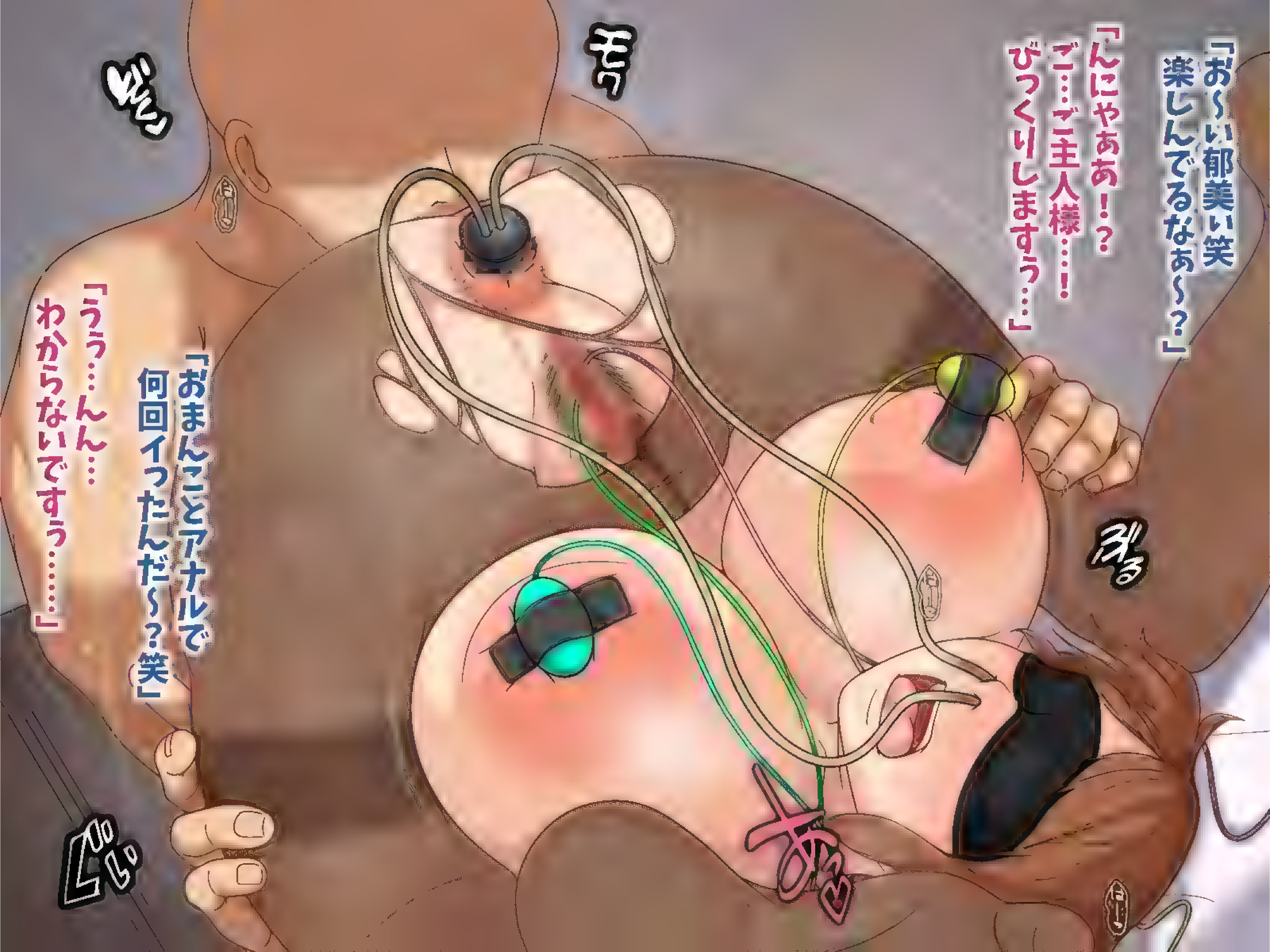

「うんち止まんないぃ…♥
…あぁんんぁ♥」
「こりゃあ括約筋が
バカになっちまったか？笑
うんこ垂れ流しに
なっちまうな～」
「垂れ流し…
いやぁあ…♥」
「っくはは笑
あとでおむつを
付けような、郁美…笑」
郁美は糞を垂れながしながら
力尽きて気を失った。


アナル開発
6週目



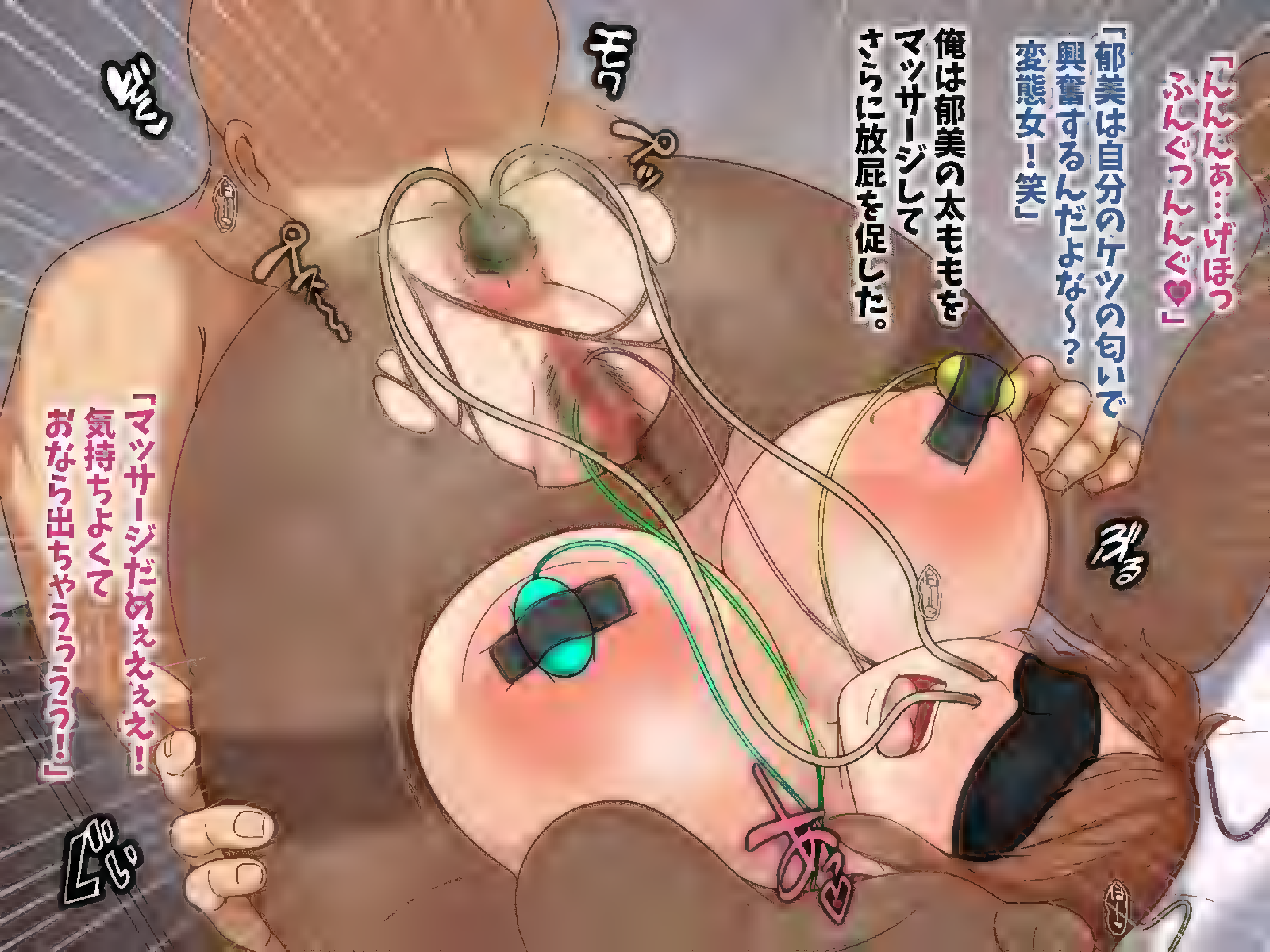
数日前から郁美の旦那が長期出張に出かけ、
俺と郁美の行為はさらに激しくなった。
朝も、昼も、夜も、
時間を気にせずハメまくっている。
「さーて…今日は何すっかな笑」
俺は何の気兼ねもなしに
郁美の部屋にずかずかと入っていく。
「おーい…郁美いるか～」
郁美を呼ぶが返答がない。
俺は顔をにやつかせながら
寝室の扉を開いた。
すると、部屋の中からもわんとした
メスの匂いが漂ってきた。

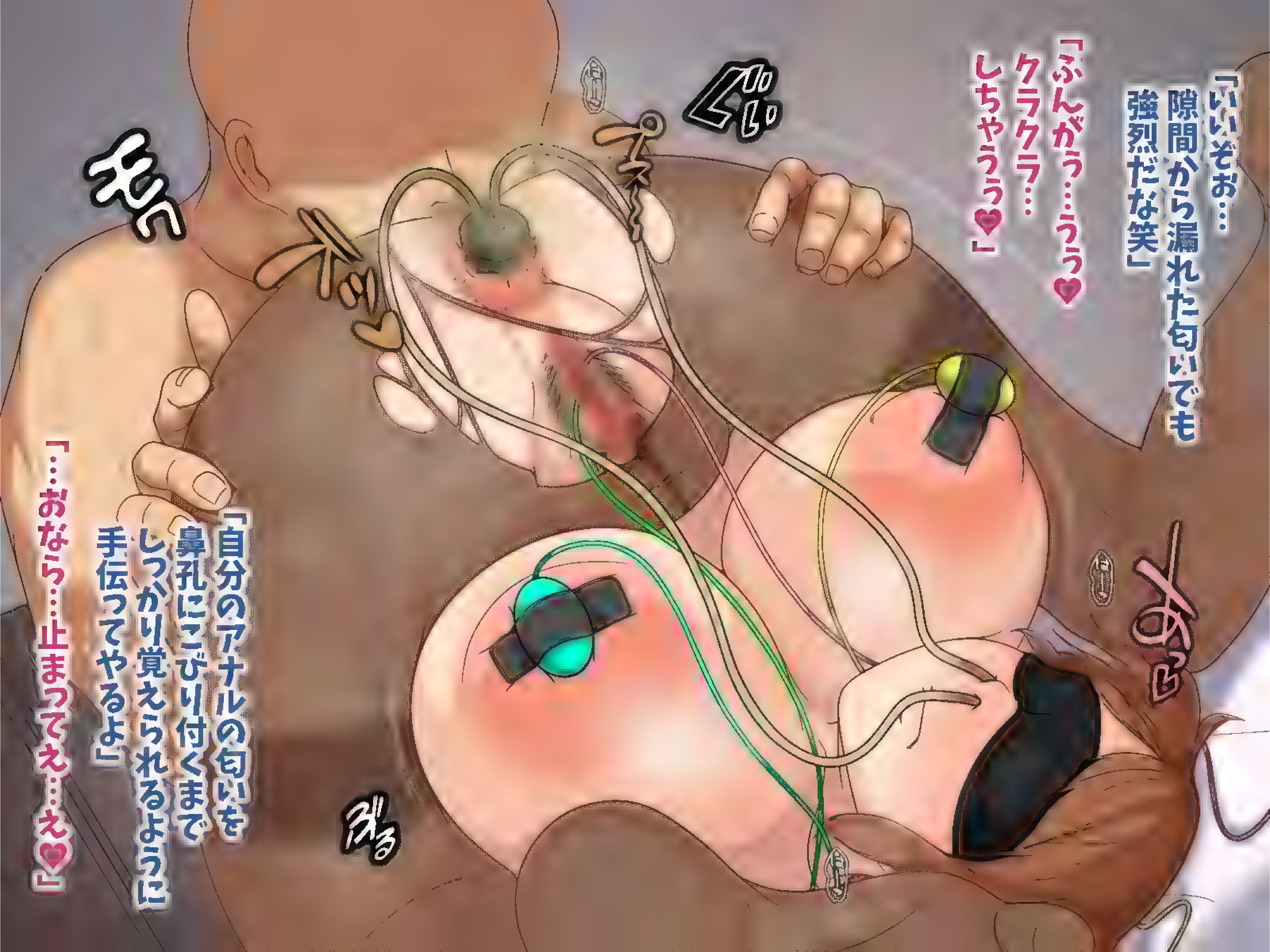

「ふんごぅ…んんごッ♥
イくぅ…んんぁ♥」
ローターまみれの郁美が
目隠しされベッドの上で
身体をびくびくと
痙攣させていた。
（うっわ…
すげぇメス臭せぇ笑）
「んんぁ…♥
ローターでまた…
イっちゃう…うう♥」

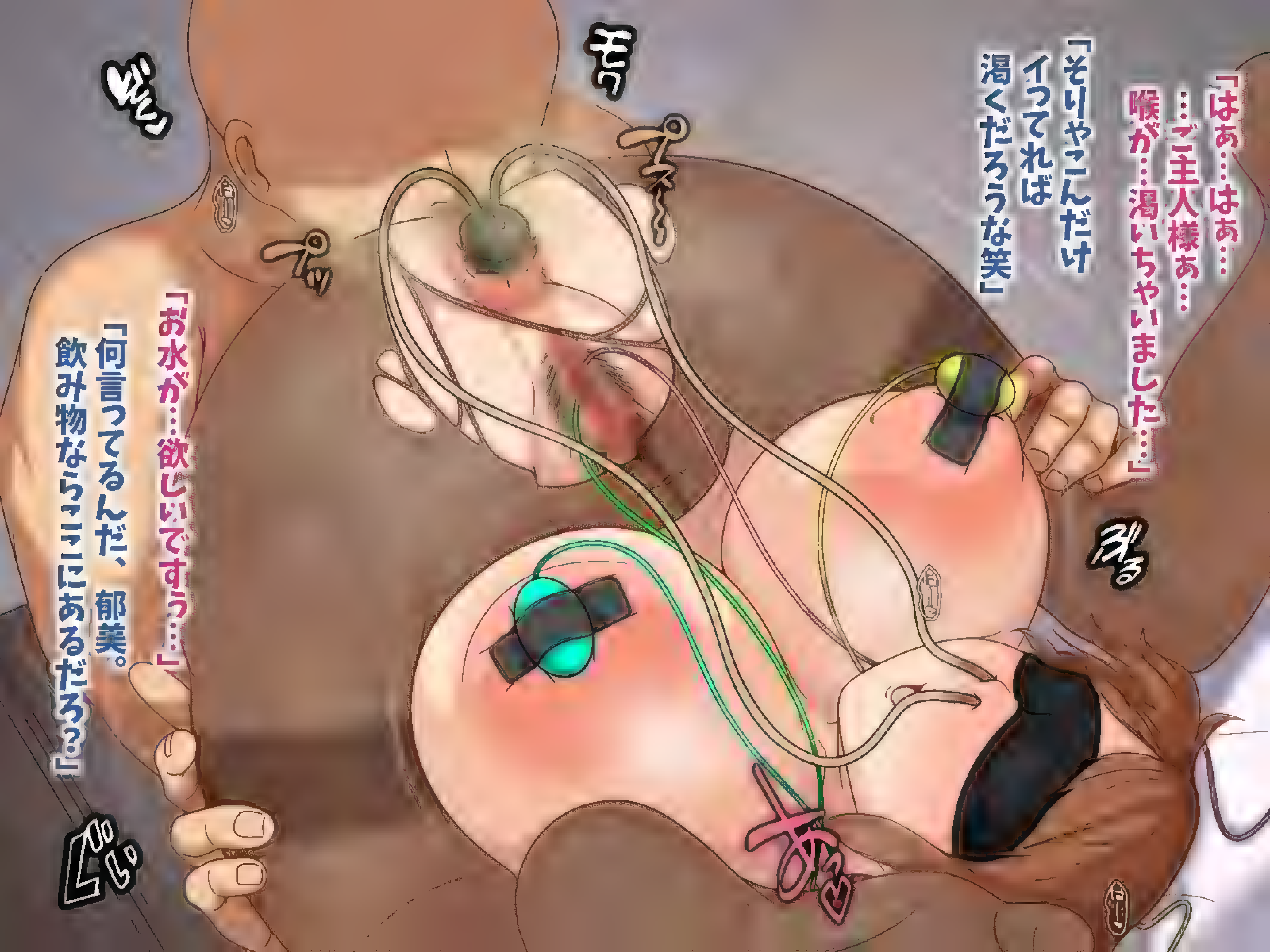

「お～い郁美ぃ笑 楽しんでるなぁ～？」
「んにゃぁあ！？ ご…ご主人様…！ びっくりしますぅ…」
「おまんことアナルで 何回イったんだ～？笑」
「うぅ…んん… わからないですぅ……」



「濃いメス臭まき散らしやがって。ローター責めで放置されてずっとイってたんだろう？笑」
「ううう…はいぃ…♥」
ぐぃ
アナルから延びた管は郁美の鼻の穴に繋がれていた。
「自分のケツの匂いもしっかり味わってるかぁ？おら！屁をこいてみろ！」
あっ♥
ぶる


「んんんぁ…げほっ
ふんぐっんんぐ♥」
「郁美は自分のケツの匂いで
興奮するんだよな～？
変態女！笑」
俺は郁美の太ももを
マッサージして
さらに放屁を促した。
「マッサージだめぇぇぇえ！
気持ちよくて
おなら出ちゃうぅぅぅう！」

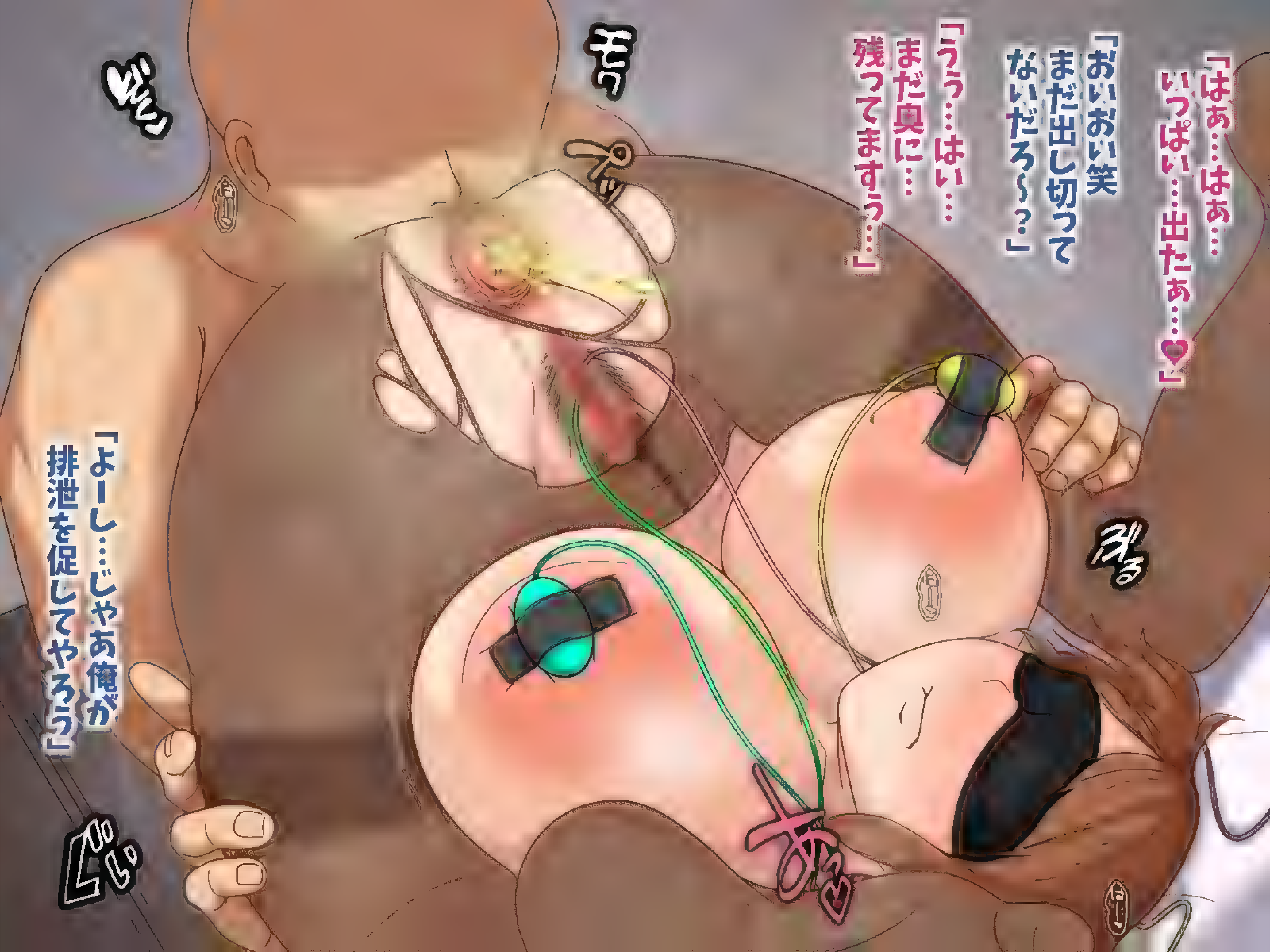

「いいぞぉ…隙間から漏れた匂いでも強烈だな笑」
「ふんがぅ…うぅっ♥クラクラ…しちゃううぅ♥」
「自分のアナルの匂いを鼻孔にこびり付くまでしっかり覚えられるように手伝ってやるよ」
「…おなら…止まってえ…え♥」


「はぁ…はぁ…ご主人様ぁ…喉が…渇いちゃいました…」
「そりゃこんだけイってれば渇くだろうな笑」
モワ
ぶる
「お水が…欲しいですぅ…」
「何言ってるんだ、郁美。飲み物ならここにあるだろ？」

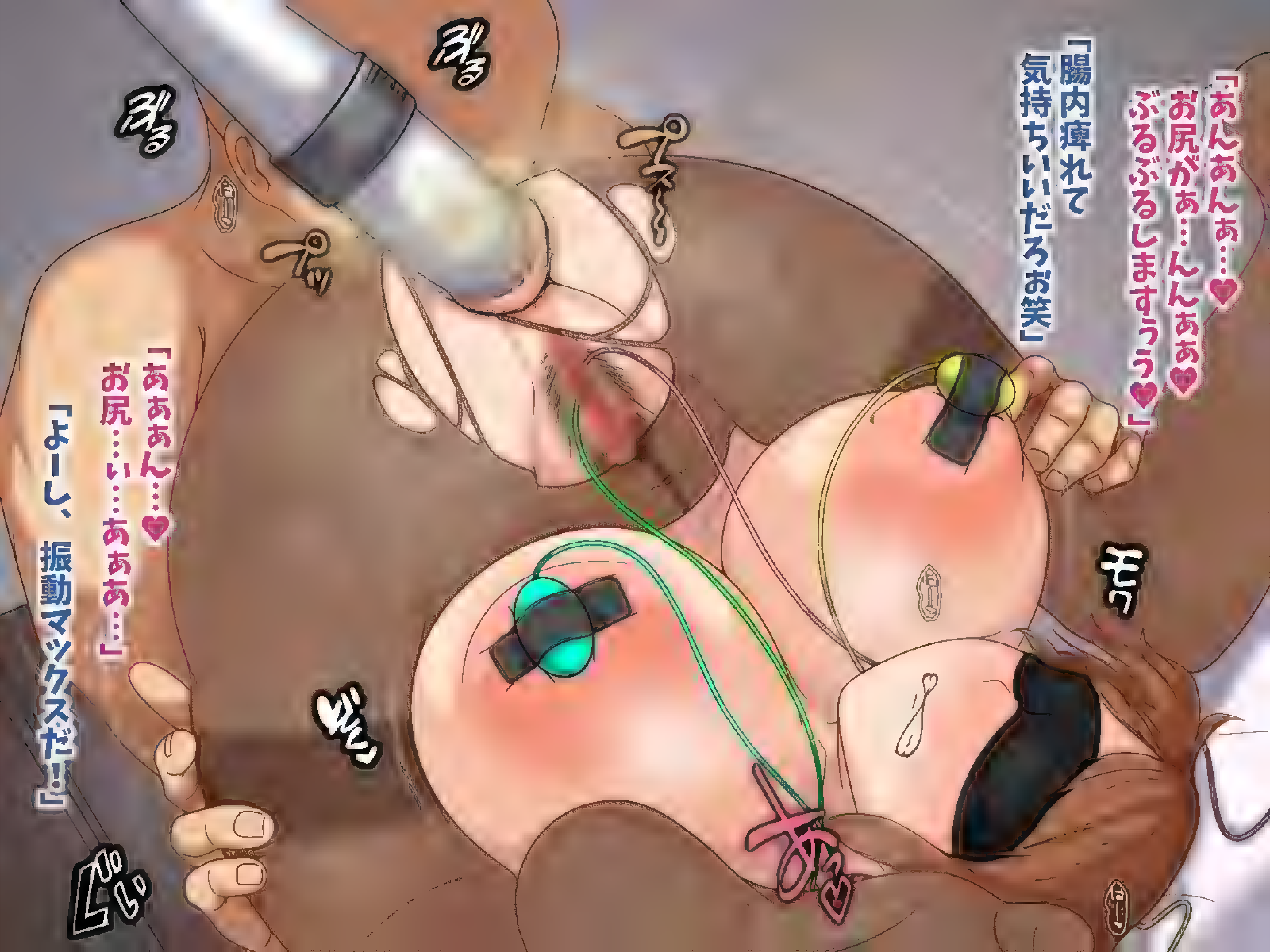

俺は郁美のアナルに嵌っていたプラグを引き抜いた。
「あぁんっ♥」
「ほら、郁美。喉渇いたんだろ？自分で出して飲むんだよ笑」
「はいぃ…渇きましたぁ…うう…の、飲みますう…♥」
「郁美のアナルで熟成された特製ドリンクを排泄しろ！」


「お尻い…！出ちゃうううう♥」
「うおお…！出てきたぞ～郁美」
プシャ～～
郁美のアナルから勢いよく黄色い液体が排泄されていく。
「あ～臭いぞお！鼻が馬鹿になりそうだ笑」


「おい、勢いが強い過ぎるぜ～
ケツ穴締めて調整しないと
飲めないぞ！」
「ひゃ…ひゃいぃ…♥
…あぶぶぶぼぼ♥」
噴出した液体は
綺麗な弧を描き、
郁美の口元へ
向かっていく。
じょろろ
「すっげぇ笑
アナルで熟成された
小便は美味いか～郁美ぃ」
「あぶびぼおお…ごく…♥
濃いでうぅ…うっぷうっごく♥」


「はぁ…はぁ…いっぱい…出たぁ…♥」
「おいおい笑 まだ出し切ってないだろ～？」
「うぅ…はい…まだ奥に…残ってますぅ…」
ぶる
「よーし…じゃあ俺が排泄を促してやろう」

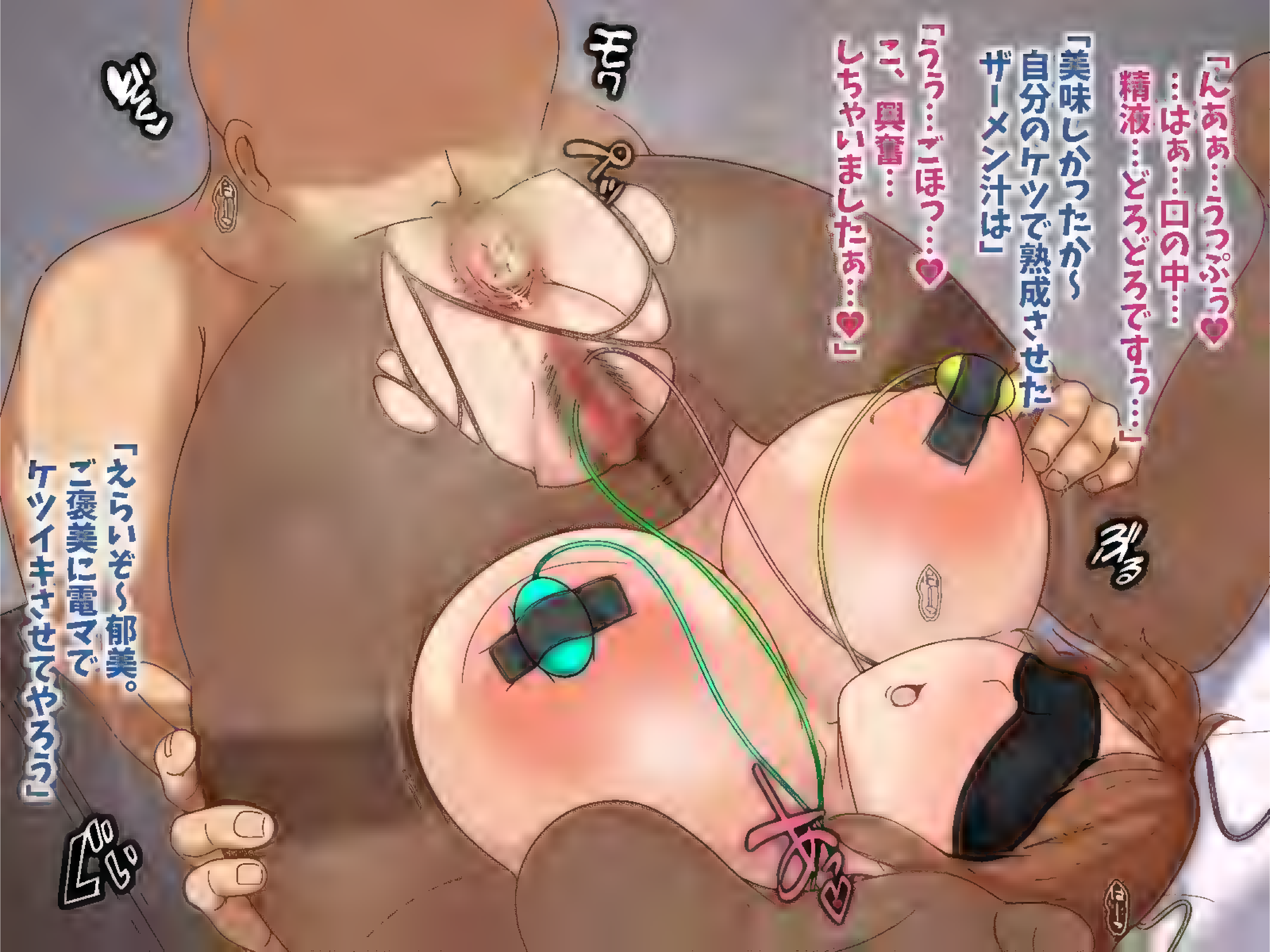

俺は置いてあった電マを手に取ると
郁美のアナルに突っ込んだ。
「はにゃあぁ♥
お尻に…太いの
きたぁあぁ♥」
「郁美の大好きな
電マちんぽだぞ～」
ぐぃ
「…電マぁ…んんぁ♥
太いよおお…んんおお♥」
「ほら、スイッチ
入れてやるよ」
ぶる

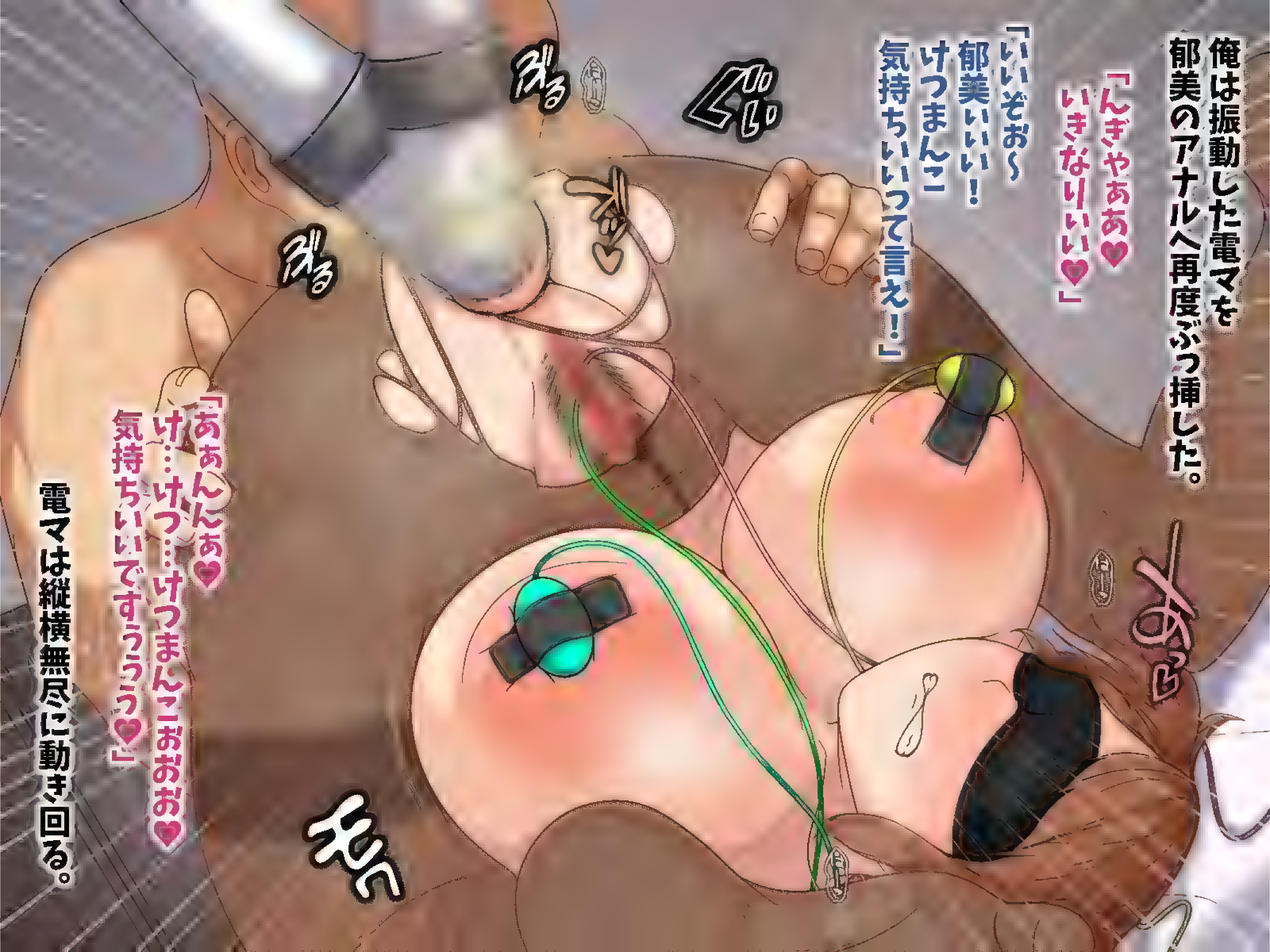

「あんあんぁ…♥お尻がぁ…んんぁあ♥ぶるぶるしますぅう♥」
「腸内痺れて気持ちいいだろお笑」
ぶる
ぶる
ピッ
ピッ
モワ
「ぁぁあん…♥お尻…い…ぁぁあ…」
「よーし、振動マックスだ!!」

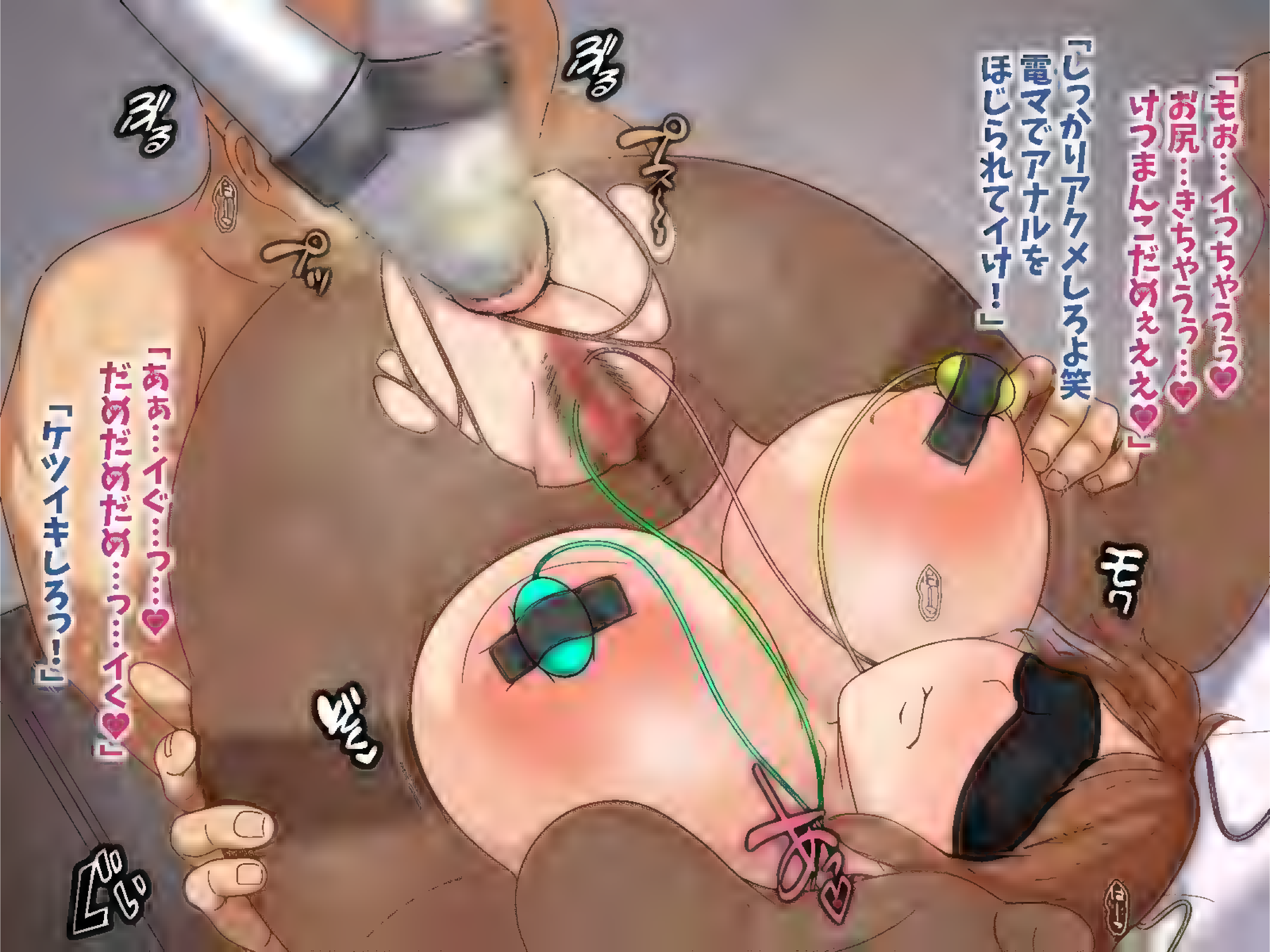

大きな音を立てて電マが激しく振動し始める。
「おぉ…笑
電マが踊ってるぞ笑」
「振動お♥
激しっ…いい♥
んんあぁあぁ♥」
「おらおらおら！
頭ん中アナルで満たせ!!」
「あぁあ…イぎぃ…あぁあ♥」
俺は電マを掴むと一気に引き抜いた。


「今抜いちゃだめぇええええ♥」
「ほ～ら郁美。どろどろザーメンが出てきたぞ～」
プシャ～～
ぶる
郁美のアナルからぶぶっと卑猥な音を立てザーメン浣腸が噴き出した。
「おい、郁美。これも零さず飲むんだ」


「ご主人様のぉ…ごほ…
精液い…濃くてぇ…
飲みきれないい…ですぅ…♥」
「あぁ～イカ臭せ笑
喉鳴らしながら
ごくごく飲め！」
「あぶびっ♥じゅぼぼぼ♥
ごく…っごくごく…んぐぅ♥」
「あぁ…スケベだぞ～郁美。
見てるだけでイっちまいそうだ笑」
ぶる

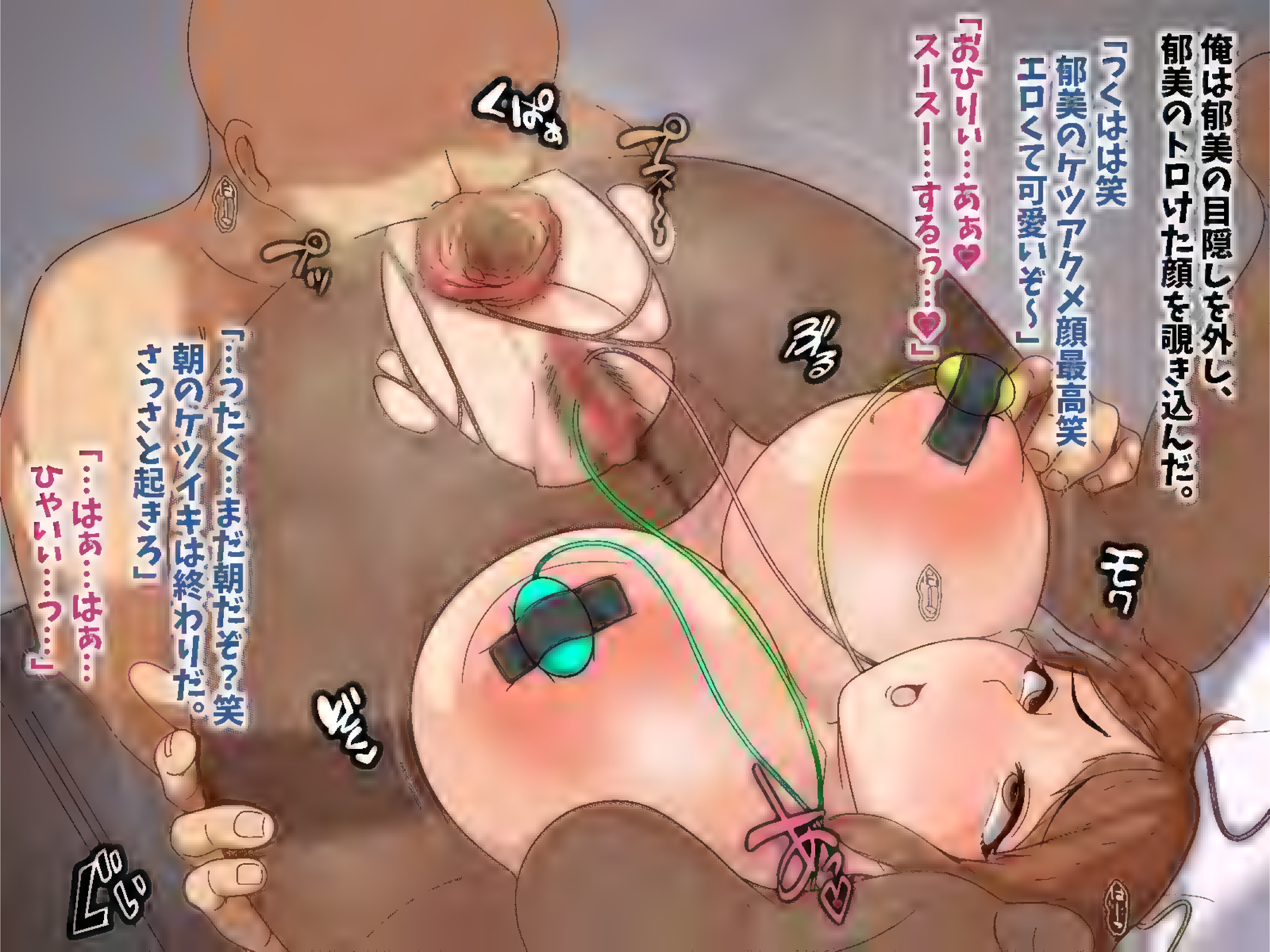

「んぁ…うっぷぅ♥
…はぁ…口の中…
精液…どろどろですぅ…」
「美味しかったか～
自分のケツで熟成させた
ザーメン汁は」
「うぅ…ごほっ…♥
こ、興奮…
しちゃいましたぁ…♥」
「えらいぞ～郁美。
ご褒美に電マで
ケツイキさせてやろう」
モワ
ぷる


俺は振動した電マを郁美のアナルへ再度ぶっ挿した。
「んぎゃぁああ♥いきなりいいい♥」
「いいぞぉ〜郁美いいい！けつまんこ気持ちいいって言え！」
「あぁんんあ♥け…けつ…けつまんこおおお♥気持ちいいですぅううう♥」
電マは縦横無尽に動き回る。


「もぉ…イっちゃうぅ♥
お尻…きちゃうぅ…♥
けつまんこだめぇええ♥」
「しっかりアクメしろよ笑
電マでアナルを
ほじられてイけ！」
ぶる
ぶる
「あぁ…イぐ…っ…♥
だめだめだめ…っ…イく♥」
「ケツイキしろっ！」



郁美のアナルから
電マがずぼっと抜け、
見事なアナルローズが
咲いた。
『イぐううう♥』
「うおお…！
こりゃすげえ…笑」
ぷる



俺は郁美の目隠しを外し、
郁美のトロけた顔を覗き込んだ。
「っくはは笑
郁美のケツアクメ顔最高笑
エロくて可愛いぞ～」
「おひりぃ…あぁ♥
スースー…するぅ…♥」
「…ったく…まだ朝だぞ？笑
朝のケツイキは終わりだ。
さっさと起きろ」
「…はぁ…はぁ…
ひゃいぃ…っ…」
くぱぁ


郁美と俺はしばらく休憩すると
キッチンへと向かった。
「腹減ったな～」
「…そ、そうですね」
「あ、そうだ♪
郁美の手作りが食べたいな」
「ご飯ですか？ いいですよ。
あ、でも、買出ししてこなくちゃ」
「ま、買出しに行く暇もないほど
毎日ハメまくってるもんな笑」
「す、すぐに材料買ってきますね」
「待て…俺も一緒に行こう」


「ありがとうございます♪えーっと…パンツ履かなきゃ」
「何言ってるんだ。ノーパンで行くんだよ」
「ま、またですかぁ…恥ずかしいですぅ…うう…あとは…エコバッグと…」
「バッグもいらないぞ。郁美がいれば問題無しだ笑」
「は、はぁ……そうなんです…か？」
「よーし…お買い物デートだ笑」


俺と郁美は近くのスーパーに足を運んだ。
郁美はまんこが見えないように
俺の後ろに隠れながらついてきている。
「う…うう…」
「これと…これ…
あとこれも買うか」
「野菜が…多いですね…？」
「郁美の好きそうな
野菜を選んでるんだぞ」
「え…そうなんですか？
あ、ありがとうございますう…♥」
「あとはゆで卵と…うはは笑
まぁこんなところか」


俺は手から零れるほどの野菜を抱えてレジに並んだ。
「あの…やっぱり…バッグ持ってきた方が良かったですね」
「あん？…郁美が持てる量を計算して選んでるんだぞ笑」
「え…こ、こんなにたくさんひとりじゃ手で持てないですぅ…」
「手で持つだなんて誰が言った」
俺は郁美の耳元で命令を囁いた。
「…そ、そんな…！？む、無理ですぅ！」
「おら、レジの番だぞ。ちゃんと自分で言え」


レジのバイト店員はすぐに郁美の生まんこに目がいった。
（うっわ…この女まんこ見えてる！？
…っていつも来る人妻じゃん！）
（身体だけじゃなくて
マジもんの痴女かよ。
あれ…でも隣にいる男
…旦那じゃないな？）
「あのお…お会計いいですか…？」
「え、あぁ…はい。
大根２本とニンジン２本…
キュウリ３本、ナス１本ですね…」



「すごい量……」
「……？　こちらは袋にお入れしてもよろしいでしょうか？」
「……？」
「えっと……その……入れるのは……袋じゃなくて……」
「おい、郁美。バイトの子が困ってるだろ。ちゃんとお願いするんだ」
「はい……この野菜全部……」


「ここに……挿れてください♥」
「……は？」
郁美は店員に手でケツを拡げ突き出した。
ぐいっ
あっ
ぶるっ
「バ…バッグ…忘れちゃったんですぅ…こ、この穴なら…全部入る…のでぇ…ん♥」


「……え？これってドッキリですか？何かの撮影とか……？」
「ドッキリじゃないですぅ……あの……他のお客さんが来る前に……はやく……お願いしますぅ……」
ぶる
「……いや……でも……ええ……？」
「この女のアナルは何度もフィストを経験したガバ穴だから心配すんな笑」


「あぁんんんあ♥
おなら出ちゃうぅ♥」
「は？……うぇ臭っさ！」
（なんだよ、この女！
清楚だと思ってたのに
変態女じゃねぇか！）
ぐぃ
プス～
あっ
ぶる
ブッ♥
「ご、ごめんなさいぃ……
勝手におならが…
漏れちゃうんですぅ…うぅ…」
「あーもうよくかんねぇけど
ぶち込めばいいんすよね？」


「ほんとに挿れますから…ねっ！」
「ふんぐぅぅっ…♥」
店員は大根を手に持つと
ヤケクソ気味に
郁美のアナルへ
その大根を突っ込んだ。
「いきなり太いのいったな～笑」


「え…マジで入った？
こんなすんなり？」
「大根んんっ…
太くて…長くて…
お尻…苦しいよぉ…♥」
あっ
ずる
「おい、坊主！
遠慮なくぶち込んでやれ」
「いいんすね！？」
（やべ…勃起してきた）



「二本目！」
「んぎゃあ♥」
ズボッ
2本目の大根が挿入され、郁美のアナルが左右に大きく拡がった。
「うぉおぉ…ん♥
お尻…い…拡がるぅぅ」



「マジかよ…AVでもこんな拡がってんの見たことねぇ…」
「はぁ…んんぁ……♥」
ぐぃ
「まだまだ挿いるよなぁ？郁美」
「うぅ…たぶん入ると思いますぅ……」
「マジかよ…すっげぇ……」
ずる
あっ


店員はニンジンを2本掴むと
同時にアナルの隙間に押し込んだ。
「ここ…かなっ！」
「はにゃあぁ♥」
「いいぞ～坊主…笑
なかなかセンスあるな」


あっ♥
ぐぃ
「楽しくなってきた…笑」
「はぁはぁ…もぉ…限界かもぉ…♥」
「限界って言ってますけど?」
「んなわけねぇだろ笑
ったく、俺も手伝ってやる笑」
ずる
「待って…んぎゃあ♥」


「こうやんだよ笑」
「はいっ!」
俺と店員は郁美のアナルにキュウリをぶすぶすぶすと突きさしていく。
「ああああ♥」


「…ほんとに全部入った…すっげぇ……」
「あぁあ……おじりぃ…苦し…いい♥」
「よーし…ちゃんと抜けないようにしろよ、郁美。帰るぞ笑」
「…ひゃ…ひゃい……♥」
あっ♥
ぐぃ
ぶる
ズボ
じょろろ


「ほら、郁美。ちゃんとバイトの子にお礼しろ」
「えっと…あの…野菜詰めていただき……ありが…んんっ…とう…ございましたぁ…♥」
「は…はい……」
（…早く帰ってオナニーして…え…）
「行くぞ、郁美」
郁美は下半身をガクガクと揺らし俺に抱きつきながら、スーパーを後にした。


俺は郁美に抱きつかれながらどうにか部屋のキッチンまでたどり着いた。
「ったく…郁美ぃ足ガクガクさせすぎだぞ？笑」
「はぁ…はぁ……腰が…抜けて…歩けないんですぅ…♥」
「スカートのお尻から野菜が飛び出してるからな。歩行者みんなドン引きしてたな笑」
「うう…ぐすっ…もうあのスーパー行けないよぉ…」
「なぁに…俺が付いてってやるさ。ほら、野菜抜いてやるから服を脱いでケツ向けろ」


郁美は生まれたての小鹿のように足をぶるぶるさせながら全裸になりケツを向けた。
「おいおい…笑 もうすでに野菜が屁と腸汁まみれだな」
「…うう…ごめんなさい…♥」
「よーし…全部一気に抜いてやろう」
あっ♥


俺は詰め込まれた野菜の外側をしっかり掴むと力を入れて一気に引っ張った。
「おらっ！」
「んぎぃぃ♡」
「ケツの力抜けよ〜笑」



「腸汁が噴出してるぞ～
郁美のエキスが
野菜に染み込んでいくな～笑」
「…あがっ…
だめぇ…んんぁ♥」
「おら…っ!」


ずぼぼ！と大きな音を出し、郁美のアナルから野菜が抜け出た。
「イぐううう♥」
「おお、抜けたな～一気に笑」
「あぁぁ…んあぁ♥」
ぶる
ズッ
くぱぁ
じょろろ


「うへぇ～笑
腸内が丸見えだぞ、郁美」
「あぁあ…お尻ぃ…
閉じないよぉ…んん♥」
「でも一気に引き抜かれて
気持ちよかっただろぉ?笑」
「うう…ぐすっ…
はい…お尻で…
イきましたぁ…♥」


俺は引き抜いた野菜をキッチンのトレイに置いた。
「野菜はこれでよしっとあとはゆで卵だな♪」
「え…ゆで卵はそのままでも良いと思います」
「何言ってんだ。俺は郁美のエキスの染み込んだ下品な料理が食いたいんだよ」
「ええ…ど…どうすれば…いいんですか…？」
「キッチン台の上にうんこ座りするんだ。
ケツをこっちに向けてな」


郁美はキッチンの台に上り、ケツをこちらに向けた。
「よーし、えらいぞぉ」
「うう…んん…♥」
「ゆで卵を郁美のアナルの中にたーっぷり漬けてやるからな笑」
ぷる
モワ


「そ…そんな……♥
だめですぅ…今…
お尻敏感なんですぅ…」
「そうだぞぉ？
だから挿れるんだ笑」
「あっぁあ…入口に…
当たってますぅぅ…♥」
「肛門緩めろよ～
ぐぐっと挿れるぞぉ！」



「ほら、入った笑」
「んんあっ♥」
ズポッ
ずる
郁美のアナルはゆで卵を吸い込むようにつるんと呑み込んだ。
「まずは1つ」


「おら！どんどん挿れていくぞぉ！」
「はぐぅうう…♥ゴロゴロしたのがぁ…入ってきてますぅうう♥」
ビクンッ
ぶるっ
「ケツに力を入れて中のゆで卵を潰すんじゃねぇぞ～笑」
モワ
「ひぃ…ひぃ…ふぅう…う…あ♥」
びくっ


「肛門から中のゆで卵も丸見えだな笑」
「あぁあ…お腹…んんっ…中で動いて…刺激…があ♥」
「郁美のおならがまるで硫黄の香りに感じるぜ～温泉卵ならぬアナル卵か笑」
「あぁあ…うう…♥」


「よーし…どんどん追加するぜ」
「く、苦しいですぅ…あぁ…お腹がぁ……♥」
「ちゃんとゆで卵に郁美のエキスを染み込ませるんだぞ～」
「んぐぅ…ひやぃ…ぃ♥」


俺は郁美の右尻を叩いた。
「はぐぅぅ♥」
「なんだ、郁美。ケツ叩かれて嬉しいのかぁ？笑」
「…ご主人…様ぁ…お尻…感じちゃうんですぅ…ぅ♥」


「よーし…ご褒美にゆで卵を追加だ」
「はうう…♥もぉ…お腹…いっぱいですう…ぅ」
「とか言いながら郁美のアナルはどんどん呑み込んでいくぞ～笑」
「あぁんんぁ♥お腹の中でゴロゴロしてますう…」


俺はゆで卵を入れ終わると郁美のケツをスパンキングし始めた。
「よーし…あとはケツイキで郁美のアクメ汁をトッピングだ！」
パン
「んぎゃあぁ♥おひりぃ…叩いちゃらめぇええ♥」
「おらおら！叩かれて気持ちいいんだろ！郁美の変態アナル産卵見せてみろ！」


『卵出りゅう♥』
郁美のアナルから
ゆで卵が次々に飛び出してきた。
ブッ♥
ブリュッ！
ビクン
「うおお…
すげえ勢いだな笑」



ぶぽぶぽっとリズミカルに
ゆで卵がアナルから
産まれるように排泄されていく。
「んごぅ…んほぉ…♥
あぁあ…でりゅ…♥」
「まじで産卵みたいだな笑
アナル開きっぱなしだぜ」
「止まんにゃいいいい…♥」
ぶる


大量のゆで卵を排泄し
郁美のケツ穴からは
ネバっとした腸汁が垂れ落ちた。
「うおお…見事な
とろとろアナルだぞお郁美！」
くぱぁ
「あ…あぁあ……イく…ッ♥」
「おいおい…失禁か？笑
飯どうすんだよ笑」
郁美はアナルを
くぱくぱさせながら気絶した。


それから数日後。
今夜旦那が主張から
戻ってくる日だ。
なんだか少し
寂しい気分だ。
郁美の部屋の
扉を開くと
廊下を駆けてくる
音が聞こえた。
「あ、ご主人様…♥
おはようございますぅ…」
郁美は俺がプレゼントしたおむつを
赤ちゃんのように履いていた。
「似合ってるぞ、郁美♪
郁美のおむつ姿は
かわいいな～笑」
「うぅ…おむつが無いと…
お尻からいろんなものが
垂れちゃうんですぅ…」


「ちゃんと言いつけ通り
我慢してるのか～？」
「は…はいぃ…
ご主人様の前以外では
う…うんちしてません…♥」
「よーし…笑」
「ご主人様のこと待ってたんだすう…
も…もう…うんちしたいですう…
お腹がゴロゴロしてるんですう…」
「おいおい、来て早々
排泄懇願かよ笑」


「だが…そうだな…郁美が惨めにお漏らしする姿が見てぇな～笑」
「…たまには洗脳を解いてやるか…笑」
「え…えと…」
「郁美…催眠を解け」
「…っ…!…
は、はい…い…」
郁美の瞳が虚ろになる。


郁美の人格がハッと切り替わった。
「…へ……？
あれ…私……」
「おっひさ～郁美」
「あれ…え……
私…夫を見送って
それで…あれ…」
「あー…そういえば
旦那がでかけてから
ずっと洗脳してたわ笑
わりぃわりぃ」
「ひぃ……あなた…
また私に何か変なことして…」



「何のことだろうな？笑」
「と、とぼけないで…！きっとひどいことしてるんでしょ！」
「ひどいな～毎日毎日ケツイキアクメで気持ちよくしてやってんのになぁ笑」
「……って…これ…何……え…おむつ履いてる…？」
「俺がプレゼントしたおむつだ。とっても似合ってるぜ？笑」
「…なんで私……おむつなんて…履いて…んんんぐっ…！」


郁美のお腹がぎゅるぎゅるぎゅると鳴り始めた。
「はんぐぅ…！お…お腹…痛い……い…」
「くくく笑」
「なんで…！？こんなお腹張ってるのお…お…」
「お前には3日以上排泄を我慢させてるからな」
「はぁ！？わ、私が…そんなのに従うわけ……んんっ！ど、どいて…トイレ行かなきゃ」
「おっと…トイレなんて行く必要ないだろ笑」


俺は部屋から出ようとする郁美を
ベッドの上に押し倒した。
「きゃっ…！？」
「お前の便所はここだろ笑」
俺は郁美のおむつを
指さした。
「は…はぁ？
何言ってるの…やめてよ…！」


「郁美はおむつが無いと糞垂れ流す変態さんだもんな」
「変なこと言わないで…お願い…はやくトイレに…」
「赤ん坊みたいで可愛いぞ～さーて郁美の脱糞姿をばっちり観察してやろう笑」
「いやぁ…だめ…漏らしたくないの！お願い！はやく！ねぇえ！」


郁美のお尻からおならの音が漏れ始める。
「おっおならが出たぞ～笑
臭っせ～すげぇ匂い」
モワ
プス～
「…嗅がないで…！
も、もうほんとに…
限界なの…！」
俺は抵抗する郁美を
しっかりと押さえつける。
「我慢は良くないぜ～
ぶりぶりしてすっきり
したいんだろ？笑」


「漏らすのいやぁあ…！
トイレに…はやくぅ…！」
「あ～臭いぞぉ！
たまらん匂いだ笑」
郁美のお尻から
さらに濃い臭気が
放出されていく。
「だめぇ…お尻に力が…
入らない…い…あぁ
もう…でちゃうぅ！」
モリ


ぶりぶりりりぃ！
おむつの向こうで大きな音が鳴った。
「いやああああぁ！」
ブッ
「おお〜きたきた笑」
おむつがどんどん膨らんでいく。


「いやぁ…だめぇえ！出ちゃう…気持ち悪い…」
「うっわ…外から見てもすっげぇ量だな笑 それに匂いも強烈だわ」
「…はぁ…はぁ…あなた…最低…っ」
「さーてお楽しみの排泄物チェックだ」
「…は！？ま、待って…嘘でしょ！うんち見ちゃやだめぇえ！」
モリ



おむつのテープを外すと郁美の股間が丸見えになった。
「いやあああ！」
「あはは…糞塗れだ笑」
「おっきなうんちが出たな～郁美～笑 げほっ…臭っせ笑」
「お願い…見ないでぇ… げほっ…けほぉ」
モリ


「ずっしりしてるな～
おっ…これ一昨日食べたやつかな」
「や…やめてっ！
な、なに観察して…」
「おならも止まんねぇな笑
こりゃまだ出るだろ」
俺は郁美の腹をぐいぐい押した。
「…ちょっ…今だめぇ…！」



「脱糞ちゃううう!」
郁美のアナルからぶりゅりゅりゅっと糞が飛び出した。
モリ
「おお出た出た笑
可愛いぞ〜郁美」
「だ…だめぇええ!
…出したくないのにいい!」


「どんどん出るぞ～」
「なんでぇ…お尻がうまく閉じないぃ…止まらないぃ…」
「郁美のアナルは毎日拡げてるからなぁ～閉じなくなってきたな笑」
「…な…何言ってるの…？そんなわけ…んんっ」


飛び出した糞はおむつの上の糞に重なり
大きなうんちの山を築いた。
「はぁ…はぁ………
全部…出ちゃった…
んっ♥」
モリ
郁美の腰がびくんと跳ねた。
「お、郁美〜
もしかして脱糞で
イったのか？笑」
「……っ!? そ…
そんなわけないでしょ!」


「素直じゃねぇな〜笑
じゃあプレゼントだ」
俺は浣腸器の先を郁美のアナルにぶっ挿した。
「ひやあ…っ
な、なに!?」
「郁美の大好きな浣腸だぞ笑」
「か、浣腸…!?」


「ほーら…どんどん入ってくぞ～
気持ちいいだろぉ？笑」
「やめ…んんん！
お尻…もういやぁ！」
「ちなみにこれは
俺とお前のおしっこだぞ？」
「…おしっこ…！？
嘘…やめて…汚い…
入れないで…抜いてよ！」
ずる
モリ


俺は郁美の抵抗を無視して
どんどん浣腸を入れていく。
「楽しいぜ～郁美」
「んん…はぁ…はぁ……はぁ…」
「よーし…全部飲み込んだな」
「お腹…苦しい……い…」
郁美の腹は大量の浣腸で
カエル腹になっていた。



「あぁあ…も、漏れちゃう…もう満足でしょ！はやくトイレに…」
「あん？笑」
びく
「浣腸も我慢できないのか？笑」
「…お尻が閉じないのよ！あ、あなたのせいなんでしょ！」
モリ


俺はおむつをどけると
郁美の身体を横に倒した。
「きゃっ…！」
「すげぇ腹だな笑
まるで妊婦だ」
「う…動けない……
お腹…限界…い……！」


「ちょ…な、なにして…」
「よいしょっと」
俺は郁美の隣に寝転ぶと
ちんぽをケツに近づけた。
「妊婦みたいで興奮してきたぜぇ」
「な、なによ…」


「俺は妊婦も大好物なんでな」
「し、知らないわよ！は、離れて！触らないで！」
「あぁ勃起してきた。あぁ～まんこがぬるぬるしてんぜ」
「待つ……！？嘘…やめて！」


「きゃああ！」
郁美のまんこへ
俺のちんぽが
捻じ込まれた。
「やめてぇえ…！
セックスやだぁ！
抜いてぇえ!!」
「あぁ～気持ちぃ！
ぬるぬるしてて
最高だぞ～郁美」


俺は腰を激しく動かし始める。
「郁美の弱いところは全部知ってるぜ！」
「そこ…だめぇえ！突かないでぇ！」
「ここだろ～ここも！亀頭でゴリゴリされるのが大好きだよなぁ！笑」
「いやっあぁ♥な、なんでっ…そんな…んんっ♥」


「おらおらっ！」
「やめっ…んん♥」
（どうして…なんでこんな気持ちいいの…）
「吐息が漏れてるぜぇ！毎日毎日浮気セックスしたもんなぁ!!」
「…んぐっ……♥変なこと…言わないで!」


「まんこもいいが…」
俺はまんこからちんぽを引き抜いた。郁美のアナルからは屁が漏れ出している。
「んんぁ…っ…！はぁ…はぁ…も…もう…終わりよね…？」
「んなわけねぇだろ…笑」


「やっぱ…ケツだな！」
ちんぽをズラすとアナルにずぼっと突き刺した。
「あああっ！」
「あぁ～これこれ笑 やっぱ郁美のケツは最高だな！」
「やめ…って…ぁいやぁああ！」


「腹の中が小便でタプタプだ笑まんこ以上にびちょびちょ笑」
「ひやっ…！」
ぐい
「んぐぅお♥」
（お尻…い…なんで…苦しいのにいいい！）
「気持ちいいだろう？笑郁美はこうやって激しく突かれるの好きだよなぁ！」


「そんなわけ…っ…
んんあああ♥
あなたみたいな…
変態じゃ…ない…っ」
「じゃあ…
ここはどうだ…
おおらっ！」
ちんぽが腸の奥まで
一気に挿入され、
ポルチオに刺激が
ガツンと送られる。
「んぎゃああ…♥」
「アナル越しの
感覚は最高だろ？笑
郁美はこれで
何回もアクメしてるからな」


「もう…やめ…てぇ♥お尻が…壊れちゃう！」
「もうとっくに壊れてるだろ笑」
「あぁ～イきそ…！郁美のけつまんこに射精…くるぞおお！」
「いやぁ…だめぇ…♥イきたくないいいい！」


「ケツで孕めっ！」
「イっくぅ♥」
俺のちんぽがどくどくと躍動し郁美のアナルの奥へ女を孕ませる子種汁を注ぎ込んでいく。


「あぁ…あぁぁ…」
「ふぅ〜出た出た。
ん？ これは…
うんちがまだ
残ってたようだな」
俺のちんぽが
郁美の糞便に
押し返されていく。
「もう…だめ…
何も考えられない…
はぁ…はぁ…♥」
「あぁ〜この感触…
これ最高だよな〜笑」


ちんぽが抜けたアナルは
精液と糞カス塗れで
下品に呼吸していた。
「お尻ぃ…あ…
熱いぃ…んん」
（だめ…こんな…
こんなの…）
「おしっこも漏らして…
こりゃ盛大に
ケツイキしちまったな
郁美〜笑」
「お尻…力…
入らにゃいぃ…い♥」


「あぁあぁ♥」
郁美は身体をびくびく痙攣させながらうんちをどばどばと漏らしだした。
「うおお笑 まだこんなに溜まってたのか笑」
「あぁっ♥…あぁ♥」
（うんち…出るの…ああ…気持ち…いい…ああ…こんなのだめぇ…）



「否定しても無駄だぜ？笑
郁美は立派な変態だ」
「いやぁ…もう…
イきたくないのに…♥
あ…ああ…あ」
郁美は糞と腸汁を
漏らしながら気を失った。
「気絶しちまったか。
今日はこんなもんか笑
今夜旦那が帰ってきて
この光景を見たら
どう思うんだろうな笑」


アナル開発
7週目


郁美の調教をはじめて数週間。今日も俺と郁美は変態セックスの最中だ。
「じゅぼじゅぼじゅぼぼお♡」
「あぁちんぽ気持ちぃ～ 郁美のフェラチオはちんぽを熟知してるなぁ笑」
「…ご主人様ぁ…にぃ…教えていただき…んましたぁ…♡」
「舌のザラザラが裏筋を刺激するぜぇ…」


「っおら！郁美の大好きな
喉奥ピストンだぞ！」
「んんぐぉ♥
深いぃぃいん…っあぁ♥」
郁美は唾液を垂らしながら
アナルから屁をこいた。
「あぁんんぁ♥
おならでちゃううう♥」
「おいおい笑
ケツのディルドは
まだ出すんじゃねぇぞ～」


「おら！舌を使って全体を舐めまわせ」
「ひゃいい…ぢゅぢゅ♥じゅぶぼぼっぢゅ♥」
「あぁ～気持ちいいぜぇ！尿道もペロペロしろ」
「んんっぢゅぶぶぶ♥ひゃい…んんぁ…♥」


「郁美の口まんこを犯すのは楽しいなぁ～っおら！」
「っぢゅぼぼっぶぅう♥んうぇ…っぢゅぶ♥」
「タマタマも舐めろ！うひょ～最高お」
「んんっぢゅぶぼ♥おちんちん…お汁がいっぱい出てますぅ♥」



あぁ♥
ぶる
モワ
ブッ♥
ぷす～
「あぁ～腰が止まらねぇぜ。
そろそろ出ちまいそうだ」
「んぢゅ…激しっ…
おなら出ちゃうぅ…ん♥
お口もお尻も気持ちいい♥」
郁美のお尻から
おならがどんどん漏れていく。
「よーし…郁美も一緒に
絶頂するんだぞ～」
「ひやあい…あぁ…イきますぅ♥」


「あぁ～イクイく♪」
おっ♥
ずるる
「いぐううう♥」
郁美のアナルから
ずるるると超長ディルドが飛び出した。


「精液い…いっぱいぃぁ♥
おじりぃ…気持ちいい♥」
「びくびく痙攣して
気持ちいいぞ～郁美。
小便も漏らして
エッチだな～」
「おじりぃ…長いいい♥
イくの止まらにゃいいい♥」
「ディルドが腸液で
ベトベトになってんな笑」


「んぐっ…はぐぅ♥」
ディルドが抜けきったアナルは
腸内が丸見えになるほど
ぱっくりと開いていた。
「ふぅ～出した出した笑
ちゃんと全部飲めよ～」
「ごく…ぢゅるん♥
おいひぃ…れす…ぅ…♥」
ぷる


郁美にアフターフェラをさせ
満足した俺はベッドの上から降りた。
「よーし…今日は
こんなもんか」
「え……」
「もう夕方だぜ？
旦那が出張から帰ってきてから
セックスする時間が
短くなっちまったな～笑」
「…そうですね……」
「どうした郁美。
何か言いたいことでもあるのか？」
「…えと…その……」
郁美は腰をふりふりしながら
恥ずかしそうに答えた。


「私…満足できないんですぅ…♥
もっと…もっとご主人様に
お尻を弄って欲しいんです…っ！」
「ほぉ…笑」
「…そのためなら……
私…なんでもしますぅ♥」
「っふはは笑
郁美が頼んでくるなら
俺が断る理由は無いな笑」
「…お願いします、ご主人様ぁ♥」
「旦那はいいのか？」
「夫はアナルセックスには
全然興味ないみたいなんですぅ…」
「てか、もうすぐ帰ってくるだろ？」


「夫は最近すぐ寝ちゃうんです。
だから…そのあとは
いつでも行けます♥」
「まったく…笑
悪い女だぜ」
「…オナニーじゃ
もう満足が…
できないんですぅ…♥」
「仕方ねぇな。
じゃあ後で俺の部屋に来い。
とびっきりのやつを
用意しといてやるよ」
「あ…ありがとうございますぅ♥
ご主人様…あ…♥」
「くくく…笑」
俺は自宅に戻り、準備を始めた。


その日の夜。
俺は浴室で
ある用意をしていた。
「今夜は俺が…
一番やりたかったことを
実行してやるぜぇ…笑」
「あぁ…臭っせ…笑
我ながら
エぐい光景だな」
準備をしていると
ピンポーンと
インターホンの音がした。


ドアを開けると郁美が笑顔で入ってきた。
「ご、ご主人様ぁ…お、お待たせ…しましたぁ♥」
「おいおい笑 なんだよその格好」
「あ…す、すみません…！あの…わくわくして…その…いろいろ着てくるの忘れちゃいました…ぁ」
「焦りすぎだろ笑 可愛いぞ～郁美。今日はとびっきりの調教をしてやるからな」
「……は、はい……♥」


俺は郁美を裸にすると浴室へと招き入れた。
「よーし…こっちへこい」
「お邪魔しま…んん…げほっ♥」
「そこに座れ。これからお前に浣腸をしてやるからな」
「…は、はい……♥」
「今までのより強烈だからな。覚悟しろよ笑」
「い…いままで以上…ですか…んん…それって…この…器具を使うんですか…？」



郁美の周りには大量のイリゲーターが設置されていた。
「これはイリゲーターだ。浣腸を大量に注ぎ込める器具だぜ」
「…た、大量……!?なんだか…ちょっと怖くなってきましたぁ…」
「なぁに…今の郁美ならすんなりだろうよ」
ぷる


俺は郁美のアナルにカテーテルを繋ぎイリゲーターに液体を注ぎ込んでいく。
「んん！？あぁ…なんか…すごい勢いで…入ってきてますぅ…」
「シリンダーと違ってするする止めどなく入っていくからな」
「あの…んんぁ♥すごいペースで…アナルに…入ってきますぅ！」
たぷん


「郁美の大好きな精液浣腸液と小便カクテルだぞ～どんどん飲め」
「んぁあ…♥はぁ…はぁ…♥」
イリゲーターの液体がカテーテルを通り郁美のアナルの中へ注ぎ込まれていく。
「よーし…もっと追加してやろう」


俺は周りのイリゲーターにも
液体を注ぎ込んでいく。
「はにゃあ…！？
さっきより…あぁ♥
勢いが…あああ♥」
「どんどん入ってくな笑
すげぇ光景だ笑」
「んああああ♥
はぁ…はぁ…んん♥」


郁美のお腹がだんだんと膨らんでいく。
「はぁ…はぁ…♥どんどんお腹に入ってきますぅ♥」
「くく笑まだまだ入るだろ。今日はこいつを注いでやるぜぇ笑」
俺は悪臭のする液体をイリゲーターへ投入した。


「ぺ…げほっ♥ く、臭い…ですぅ… なんですか…それぇ…」
「何ってわかるだろ？ 郁美の下痢便だよ笑」
「えええええ！？」
俺はイリゲーターにどんどんと郁美の下痢便を注ぎ込んでいく。
たぷん


「あぁ…あぁあ♥
下痢うんちがぁあ
戻ってきますうう♥」
「今日、郁美が出した
新鮮な下痢便だから
安心しろ笑」
浴室は悪臭に包まれ
鼻の曲がるような空間に変貌した。
「んぁああ♥
これ…っ…苦し…
あぁあ…お腹…ぁ♥」



空になったイリゲーターに
俺は液体を追加していく。
「どんどん味わえ笑
まだまだおかわりが
あるからなぁ～」
「あぁぁぁぁ♥」
「気持ちぃだろぉ～
郁美ぃ～笑」
「んぐぅう♥」


郁美の腹はさらに膨れ、妊婦のようなボテ腹になった。
「お腹あ…!?限界い♥」
「すげぇ腹だな笑 今ある分は残さず飲みなさい」
「あっ…あぁあ♥ お尻…あぁ苦しいけど…感じちゃううう♥」


『イっぐぅ♥』
郁美は浣腸されながら身体をガタガタと痙攣させた。
「んぐぅぅ♥」
「浣腸でケツイキか笑
郁美は本当に変態さんだな～」
たぷん



イリゲーターの中身が郁美のアナルへすべて注がれた。
「ほんとに全部入ったな～笑えらいぞ～郁美」
「はぁ…はぁ…♥はやくぶりぶり排泄したいですぅ…」
「よーし…準備もできたし。散歩にでかけるぞ」
「へ…？」


「前から郁美とお散歩に行きたいと思ってたんだ」
「えと…♥デートじゃなくて…お散歩ですか…？」
「そうだ…郁美がワンちゃんみたいで可愛くてな~ペットにしたいんだ」
「ううう…ご主人様ぁ…♥」
「そうそう笑 俺は郁美のご主人様だからな。お前には良いものを付けてやろう」



俺は郁美の首に首輪とリードを装着させた。
「きゃっ♥」
「おおおお！似合うぞ郁美。さらにエッチで下品に見えるぞお笑」
「そ、そうですかぁ…♥ありがとうございますぅ…」
「よーし…準備もできたし、出かけるぞお」
俺は郁美のリードを引っ張り玄関へと向かっていった。



「ご、ご主人様ぁ…♥
裸で…外に行くんですかぁ！？」
「そうだが？」
「だ、誰かに
見られたら…
通報されちゃいますぅ…！
せめて…ローブを…」
「だめだ…
全裸でいくぞ」
「うう……♥」
「ま、お前だけってのもあれだし
俺も全裸で行ってやるよ。
興奮するぜぇ笑」


「でも…お腹が…苦しくて…ぇ♥
これじゃあ歩けないですぅぅ…
漏れちゃう…」
「これを付けて
やるよ…！」
俺は郁美のケツに
器具を取りつけ、
極太のディルドを
一気に挿入した。
「んぐあああ♥
深いーいいい♥」
「可愛いだろう？
尻尾が付いてるんだぜ？」
「…はぁ…はぁ…♥
このディルド…あぁ…
ゴツゴツしてますぅ…♥」


俺はドアを開けると
郁美のリードを引っ張った。
「きゃん…♥」
「おら行くぞ！
あぁ〜すっげ
わくわくするぜ」
「…はぁ…はぁ…♥
ご主人様ぁ…
足が震えますぅ…」
「気持ちがいいな〜郁美。
まるで生まれたてのような
清々しい気分だろう？笑」
「…心臓がドキドキして…
身体が熱いですぅ…♥」


郁美は俺にリードを引かれながら
身体を縮こませて歩いている。
「うぅ…♥ 恥ずかしくて 死んじゃいそうぉ…」
「つくく笑 股間を隠すな 全部曝け出して 歩くんだ、郁美〜」
「…うぅ…… はい……い…♥ んんっ♥」
「あぁ…やっぱ 郁美のカエル腹エロすぎ… 下品すぎて勃起してきた…」
「…お腹…たぷたぷして… 辛いんですぅ…んんぁ♥」


俺と郁美は近くの公園にたどり着いた。
「誰もいねぇな。つまんねぇがまぁいいか」
「はぁ…はぁ…♥ご主人様ぁ…もう限界です…っ」
「さっきからお尻をふりふりしやがってよぉ…可愛いやつだ笑」
「…ディルドが…お尻の中で擦れて…ずっと…イってるんですぅ…♥」
「最高だな笑」
「…あぁ…もうだめぇ…♥」


郁美はお腹を押さえながらその場にしゃがみこんだ。
「もぉお腹痛いよぉ…ぎゅるぎゅるって鳴ってますぅ…♥」
「俺にも聞こえるぜぇ笑
たっぷりと注ぎ込んだからな」
「んあっ…はあ……♥」


「出したいよぉ…ふんぐぅう♥抜けにゃいぃい♥」
「器具で固定してるからな。どんなに踏ん張っても抜けない仕組みだぜ？笑」
「そんなぁ…んんっ♥」
郁美のお腹はぎゅるぎゅると音を大きくする。


「ふんぐぅうううう♥
あぁ…おしっこ出りゅぅ♥」
郁美の尿道から
おしっこが漏れていく。
「公園でおしっことは…
郁美は本当に
ワンちゃんみたいだなぁ笑」
じょろろ
ぶる
「あぁ…んはぁ…
お尻…出ないぃい…
出したいのに…ぃ♥」
「どうした？抜いてほしいか？
ならちゃんとお願いするんだ」


「い…郁美はぁ…んん…♥
公園でワンちゃんみたいに
ぶりぶりうんちを…
排泄したいですぅう♥」
「郁美は本当に
スケベなメス犬だなぁ笑
俺にうんち見られたいのか！」
「ひゃあいい…♥
ご主人様ああ！
郁美のうんち…
見てくだしゃいいいい♥」
俺はしっぽを掴むと
一気にディルドを引き抜いた。



「ひぐうう♥」
郁美のアナルからネジ型スクリューディルドがずぼっと抜けていく。
ぶる
「うっわ笑
すっげええ笑」


「イグ…あぁあ…おじりぃ…イぐぅ…♥」
「スクリューだからな。腸壁をゴリゴリえぐって快感が止まらねえだろ笑」
「しゅごいぃい…だめ…あぁあぁ♥」
「腸汁でびちゃびちゃや笑
すげぇ匂いだわ」
「あぁあ…出る♥
お尻…い…くるぅ♥」


ディルドが引き抜かれると
ダムが決壊したかのように
勢いよく小便浣腸が噴出した。
「んぐあああ♥」
「うははは笑
やべぇ勢いだな」
「勝手に…い
出ちゃうぅう♥」


「あああ…♥」
排泄の勢いはさらに増し
精液カクテルが零れていく。
「排泄気持ちいいか、郁美ぃ！」
「んんがぁ♥
イくのがぁ
止まらにゃい♥」



あっ
はーっ
はーっ
ビクン
はーっ
そして郁美のアナルからは
茶色く濁った液体が飛び散っていく。
「あぁあぁ♥んんぁ♥
臭いですぅぅ♥あぁあ！
臭いの出てますぅぅぅ♥」
「下痢便すげえ音だな笑
ドスケベすぎるぜ」
ぶる
「はぁ…はぁ♥
おじりいい
壊れるぅぅ♥」


「んはぁ…はぁ…全部ぅ…出たぁ…♥」
浣腸を一気に吐き出し郁美のアナルはひくひくと卑猥に痙攣した。
ぶる
「アクメ中のアナルがウネウネ動いてエッチだぞ～郁美」
「いやぁ…♥イってる時のアナル見ちゃやだめぇ…」


「おぉ？笑
奥から何かきたぞぉ？」
「ひやぁっ♥
おっきいうんちが…
おりてきましたぁ…」
郁美はアナルに
力を込めるが…。
「あぁあ…！
肛門閉じないいい♥
勝手に…出ちゃううう♥」


『太いの脱糞るぅ♥』
器具で開かれたアナルから
ぶっ太いうんちが飛び出した。
「野糞しちゃったな～郁美
とっても臭いぞお！」
ぶる
「ひや…あ♥
うんち…あぁ
うんち気持ちいい♥」


「うんちぶりぶりぃぃ♥
公園でうんちするのぉぉ
気持ちいいですぅぅ♥」
「えらいぞ郁美ぃ笑
もっと下品に
もっとスケベに
脱糞アクメしろ！」
「うんちいい…♥
排泄イぐっ…んぁ
頭真っ白になりゅう♥」
はーっ
はーっ
はーっ


郁美のアナルから見事な一本糞がぼたっと抜け落ちた。
「んにゃあ…♥ ふ、太いのぉ…ぉ…出ましたぁ♥」
「すっきりしたか? 郁美ぃ…笑」
はーっ
はーっ
ぎこ
ぷる
「うう…♥ …はい…♥」
「今度は俺のちんぽをすっきりさせてもらおうか」


俺は郁美のケツの器具を外すと
ベンチにどさっと腰を下ろした。
ぶる
「アナルがぱっくりで
エッチだぞ〜郁美。
ほら、ちんぽを
ご奉仕するんだ」
「は…はい……♥
ご主人様ぁ…」
郁美のアナルが
腸内丸出しで
ひくひく動いている。
「じゅるぅう♥
あぁ…ぢゅぶる♥」


「公園で全裸でフェラされるとかすげぇ興奮するぜ笑」
「んん…れろ…んんぁご主人様のお亀頭…ペロ…ペロペロお♥」
「あぁそこ良い。尿道の入口舐めるの最高だぞ〜」
「ひゃいい……♥」


「カリにこびり付いたチンカスも
舌で舐めとるんだぞ」
「…ひゃいい…つぢゅぶる♥
つぢゅつぢゅつぢゅるぅ♥」
「すげぇしゃぶりつき笑
郁美はちんぽが
大好きだなぁ笑」
「…ご主人様のお…じゅぼ♥
おちんちん大好きですぅ♥」
んぷっ
ずる
ぐい


「舌だけじゃなくて喉奥でもちんぽをシゴけ！」
「ひゃい…んぐぅう♥」
郁美は口をすぼめると一気に喉の奥までちんぽを咥え込んだ。
あっ♥
『んぐううっ♥』
「おお～気持ちいいぞお」


郁美の喉奥がぶるるっと震え、同時にアナルからおならが漏れた。
「おいおい笑 喉の奥でイっちまったのか？」
「…ひやい…れろ… 喉奥がぁ…んんぁ♥ 気持ちいいんですぅ…」
「最高の口まんこだな笑 ほら、もっと舐めなさい」
「…はいい…れろれろ♥」



「ご主人様のタマタマもぉ
いっぱい舐めますぅ…れろ…♥」
「おぉ…いいぞぉ郁美。
鼻を押し付けて
くんくんしながら舐めろ」
あっ♥
「…すぅ～はぁ～…ん♥
汗臭くて…男の人のぉ♥
濃い匂いがしますぅ…♥」
「マッサージもするんだ」



ぷる
「…っぢゅぶぶ…れろ♥
ご主人様の…匂い…
大好きですぅ…うんぐ♥」
「たっぷり嗅がせたからな笑」
モワ
「…っぢゅ…♥
くんくん…すぅはぁ…♥」
「あぁ…付け根の部分
ペロペロされんの最高お」
ぐい


「んんじゅぷ♥れろれろ…んんぁ♥」
あっ♥
はー
「いいぞ〜郁美。ちんぽ美味しいか〜」
ずる
はー
んぷっ
はー
「ひゃい♥ 生臭くてぇ…クラクラしちゃいますぅ♥亀頭の先から出てくるお汁がぁ
つちゅぱ♥ おいひいれすぅ…♥」
「いいぞお〜！粘膜気持ち〜」
ぐいい



「ふんぐぅっ♥
んんっ♥
イくぅ…♥」
郁美は喉奥に亀頭が当たるたびに
お尻をびくっとさせ屁を漏らす。
「可愛いぞお～郁美。
こっちを見ながら
ディープスロートしろ」
「はいい…うぢゅっぶっぼ♥」


「亀頭からいっぱい…お汁が出てきてますぅ…ぅ♥」
「ちゅーちゅー吸われるのまじで良いぜぇ」
あっ♥
「…すっごく濃いですぅ…っぢゅっぢゅるるる♥」
「あぁ～やべ…イきそ」


あっ♥
「喉の奥に出すぞぉ！口まんこを孕ませてやる」
「…ご主人様のぉ…濃いのきちゃうぅ…んんぁ♥」
ぢゅる
んぷっ
「喉奥に中出しだ…！一気に咥えろよぉ！」
「んんぐ…ふんぐぅぅぅ♥」
ぐいっ


『…ぶぼお…！イぐううっ…ぅ♥』
『ああ～出る出る』
郁美の身体がびくっと跳ねた。
「…だめ…お尻も…イっちゃうぅぅぅぅ♥」


郁美のケツ穴から
うんちが噴出した。
「まだうんちが残ってたのか笑 喉イキして脱糞しちまうとは笑」
「うんち…あああ出ちゃうううう♥」
「…喉腺がぷるぷる震えて気持ちいいぞ～郁美」



「公園が郁美のうんちまみれになっちゃうなぁ笑」
「…んぐうあぁ♥つぢゅぶぶれろ♥勝手に…んんぁ出ちゃうんですぅ♥」
「お外でするフェラ脱糞は気持ちいいかぁ？郁美」
「…ひやい…んんぁ♥興奮して…ドキドキして…すごく感じちゃいますぅ♥」


「…んんあぁ♥」
郁美のお尻から
ずぶずぶと音を立て
うんちが吐き出された。
「あぁ~臭いぞお郁美。
たくさん出したなぁ笑」
「ご主人様…あ…
嗅いじゃだめぇ…ん♥」
「ほら、ちゃんと
ザーメンを舐めとれ」


ぶる
「じゅぶぶぶぶぶるうる♥
亀頭の…残り汁もぉ…
全部飲みます…ね…っぢゅ♥」
「あぁ～これこれ…
これ最高ぉ」
「…つじゅっぢゅじゅ……♥
喉に絡みついて…んんぁ
精液の匂いでいっぱあい…♥」
「鼻からも精液逆流させて
可愛いな～郁美は」
ぐい


「ごくごくごく…♥
げほっ…っぢゅるるうる♥」
「よーし…ペロペロ舐めて
キレイにするんだぞ」
あっ♥
「…ぺろ…ごく…ごくごく…
れろれろ…っ…おいひいですぅ…♥」
ぷる
郁美は俺の出したザーメンを
綺麗に舌で舐めとり飲み込んだ。



「郁美とのお散歩は楽しいな～」
「はぁ…はぁ…♥…いっぱい…イっちゃいましたぁ♥」
「郁美…今日は郁美のアナル拡張の成果を見せてもらおうと思うぞ」
「…拡張の…成果…？何を…するんですか？」
「こっちへこーい」
「…ひや…んん♥」
俺は郁美のリードを引っ張り公園の遊歩道に向かった。


「たしかこの辺に…
おっ…あったぜ」
「…えと…
これって…」
そこには
車止めポールが
ずらずらと並んでいた。
「『公園のアレ』ってやつだ。
そそられるフォルムだよな」
「…ご主人様ぁ…
もしかして…これを…」
「察しがイイな、郁美。
ほら、好きなヤツを選べ」


郁美はポールの前にお尻を突き出した。
「…んん…♥」
「ディルドオナニーの時みたいに両手は上げろ」
「はぁい……♥ほんとに…これを…挿れるんですかぁ…」
「間近で見ると太いな笑」


「郁美がポールオナニーでケツイキする姿が見たいんだよ」
「…うう…わ…わかりましたぁ♥んん……はぁはぁ♥」
「一気に奥まで挿入しろよ」
「……入っちゃう……♥太いの…お尻にぃ……！」
郁美は腰を一気に下ろした。


太いポールを郁美のアナルはすんなりと呑み込んでいく。
「あがあっ♥太いいいい♥」
あっ♥
「すっげ笑 ほんとに奥まで入っちまってるぜ」
「…んあああ♥ 深いいいい♥」
ぐい
ぶる


「おっほお♥」
郁美は動物のように喘ぎながら腰を振り始める。
はー
はー
「ポールが腸汁でびちょびちょ笑」
「ふんぐぅぅ♥おぉおおおお♥」
モワ
ズポッ
ぐい
ぶる


『…おんぐおおお♥』
「もっと腰を振れ。腸汁撒き散らせ！」
「内蔵が押し上げられて…苦じいのにい…いい感じちゃううう♥」
「いいぞおお！」
「…削れるうう♥冷たい…ああ…んんっ太いい深いいい♥おかしくなるううう♥」



「すぼすぼおっ♥」
「すげぇ腰振り！ケツ穴が変形してるぜ笑」
「おっおっおっ♥ケツ穴気持ぢいい♥内臓に響くううう♥頭…バカになるぅ♥」
「…素晴らしい…」
ズポッ
ぐい
ぶるっ


『…はぐう♥ケツう…ケツ奥ううう♥』
郁美はおっぱいとお尻を激しく振り続ける。
「おらおら！もっとケツで喘げ！イキ狂うんだ！」
「…アナ…ルぅ…あイくぅ…あぁあん♥おっおあぁあぁ！」
「この感覚を一度でも味わったら元の生活には一生戻れないぜ～笑」



「あぁ…きちゃううう…ぅ
すごいアクメくるうううう♥♥」
「いいぞお郁美ぃ！
極太ポールちんぽでイけ！」
「あぁがぁあぁ♥
くる…ぐるううう♥
ケツイキ止まんな…
あぁあ…あぁああぁ♥」
モワ
郁美のピストンは
どんどん加速し…
そして…。
ブポッ
ぐい
ぶる


「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛♥」
郁美は雄たけびをあげながら
アナルから腸汁を撒き散らし
ケツイキ絶頂した。
「すげぇ痙攣。
こりゃケツイキで
頭飛んじまうな笑」
「おっおうおっ♥
おほぉおぉおぉ♥」


「…おじりぃぃ…♥
びくびく…止まらにゃいぃぃ……ぃ♥」
「すごいぞ郁美…
見てるだけで
射精しちまったよ」
モワ
はー
ぶる
じょろろろ
あ♥
びく
「…あぁ…んんあ…
腰抜けちゃ…ああ…
立てましぇえん…ん♥」
「しょうがねぇな。
よいしょっと…!」
俺は郁美の腰を掴み
アナルをポールから引き抜いた。


ぶぽっと音を立て郁美のぱっくりアナルが曝け出された。
『んぐううう♥』
「あはは笑
すっげえ拡がってるな。
郁美…最高だぞ！」
「おじりい…イくう…♥」
ぶる
じょろろ


「これだよ…これ…
俺が求めていた…
最高のアナルだ…」
「嬉しいですぅ…♥
ご主人様ぁ…ん♥」
「腰が抜けちまったか笑
ハイハイして帰るしかねぇな」
「…そんにゃあ…♥」
郁美は俺に連れられ、
アナルからいろんなものを
垂れ流しながら帰路についた。


アナル開発
?週目


あれから数ヶ月が過ぎた。
俺と郁美は毎日のようにハメまくり
俺は郁美のまんこ…アナル…
あらゆる穴に…
あらゆるものを注ぎ込んだ。
「それもこれも
あんたのおかげだぜ…
尻神様よぉ…笑」
パンパン！
俺は賽銭箱に小銭を投げ入れ
手を叩いた。
「あぁ…腹が減ったな。
スーパーでも寄って
飯でももらってくか～」
俺は近くのスーパーへ向かった。


スーパーに入ると
女性が声をかけてきた。
「あ、こんにちは！」
「こんにちは！」
…そう…ボテ腹になった郁美だ。
マタニティワンピースを着て
ニコニコしながらお腹を撫でている。
「お腹大きくなりましたね～
ご出産はいつなんですか？」
「もうすぐ
出産予定日なんです」


「よいしょっと…じゃあ私はこれで失礼しますね」
郁美は重たい荷物を持ち上げた。
「重たそうですね」
「え…?ああ…夫が妊娠中でも身体は動かした方が良いって言うものですから」
「いやいや無理はだめですよ。俺アパートまで持ちますよ」
「え…でも…」
俺は郁美から荷物を受け取り二人で一緒にアパートへ帰った。


俺は郁美の部屋の玄関に着くと持っていた荷物を下ろした。
「じゃあ…ここに置いておきますね」
「助かりました…あありがとうございます…♥ほんとはちょっと大変だったんです…笑」
「……じゃあ俺はこれで失礼します」
「え…もう良いんですか…？」
郁美の身体がびくんとした。
「はい？どうかしましたか？」
「…あの……」


「……あれ……私……あれ……
どうしてだろ……
あなたに……」
「俺に……？」
「あなたに……
何かを求めて……る……？」
「……ほお……」
「……なんでだろ……
あなたと私が……いつも……
イケないこと……してる夢のせい……？」
「……言って欲しいのか」
郁美の身体がさらに
びくっと跳ねた。
「……あ……あぁああ……」


「服を脱げ！」
「っ…！？…」
「は…はい…♥」
郁美はすぐにマタニティワンピースを脱ぎ捨て卑猥なボディを俺に見せつけた。
「…下品な身体だぜぇ…なぁ…郁美ぃぃ！」
「…はいぃ♥ご主人様あああ♥今日も郁美のエッチな穴を好きなだけほじってくださいいいい♥」



「おらっ！」
「はんぐぅううう♥」
俺は間髪入れずに郁美をベッドの上に押し倒し背後からちんぽをまんこへ挿入した。
「ちんぽ入ってくぞぉ！」
「ご主人様のおちんぽぉお♥入ってきたぁあっあっ♥」


臨月まんこの奥にちんぽを一気に突っ込んだ。
「これが好きだろぉ！おらっおらっ！」
「んぎゃあっ♡深いよおおおお♡」
ズポッ
「あぁ～たまんねぇぜ」
「あっあうあっ♡おまんこ気持ち…いいですぅぅぅ♡」
ぱんっ
ぶるっ


「郁美！もっと！まんこ締めろ！」
「ひゃいいい♥あぁんんあ♥んんっ♥」
「妊娠まんこはあったかいぜぇちんぽ溶けそう笑」
ぶる
「ご主人様ぁあ♥もっと奥までハメハメぇしてくだしゃいい♥」




「あぁ～気持ちぃ
腰が止まらねぇ」
「…あんんぁ♥
激しっ…んんぁ
いいよおおお♥」
「郁美は激しく
ピストンされると
すぐに絶頂
しちまうからな笑」
「んごおお♥
おっおっんん♥」


俺は郁美からちんぽを抜くと
おっぱいを強く揉みだした。
「ひやっ…！？
おっぱいだめぇぇ♥
「母乳エロお笑
黒ずんだ乳首も
エッチだな～」
「おっぱい…あぁあ♥」


郁美の乳首からはとろっとした母乳が絞り出されていく。
「あぁ…ぺろ…甘くて美味しいぞ～」
「飲んじゃだめですぅ…♥」
はーーー
「んんぁっ♥乳首…感じちゃう」
ぷる
「…ああ…可愛いぞお郁美。我慢できねぇ…」


俺は郁美の肩を掴むと
おっぱいの中に
ちんぽを突っ込んだ。
「きゃあん…♥」
「あ〜柔らけぇ」
「ご主人様のおちんぽおお…熱いですぅう♥」



「あぁ～母乳も漏れてぬるぬるで気持ちぃ」
「あぁんんぁ♥乳首擦れてぇ…イっちゃいますぅ♥」
はーー
「臨月おっぱい最高お！パンパンに張っててぎゅーぎゅー乳まんこだ」
「あぁんあ…激しっ…ん♥」
パン


俺はさらに激しく腰を動かした。
「郁美の身体はどこを使っても気持ちいいな～笑」
「あんんぁあぁ♡ご主人…様ぁ…あぁ私もおっぱい気持ちいいですぅ♡」
「いいぞお！このまま中に出してやるからな」


「あぁ乳まんこ良いぃ…ちんぽ締め付けろ！」
「ご主人様のおちんぽぉ…どんどん膨らんで…え…いきますぅう♥」
はーー
「乳まんこに出すぞぉ！郁美のおっぱいぃぃぃぃ！おっぱいおっぱいぃぃぃぃ！」
「あぁあ…おっぱい…イきますぅううう♥」


「おら！射精るぞ！」
どくどくとちんぽが震え
郁美のおっぱいに
精液が注がれていく。
「んんあ♥
おっぱい熱いいいい♥」


モミ
「おっぱいビクビクさせて…
郁美もイっちまったのか～？」
「あんん…ひゃいぃ……っ
イっちゃいましたぁ♥」
「乳まんこが温かくて
気持ちいいだろお笑」
「ひゃい…んんぁ♥
ご主人様の精液で…
おっぱい熱くて…感じちゃうぅ♥」
あっ♥
ドぷっ


郁美のおっぱいは精液と母乳でどろどろになっていた。
「……んぁ…はぁ…匂いでくらくらしちゃうう…♥」
「エッチだぞ～郁美」
はー…
たぷっ
「ご主人様ぁ…下半身が……疼いちゃいますぅ…」
「ったく…郁美は変態さんだなぁ笑」


郁美のはおっぱいについた精液を
手で掬い取り口で舐めていった。
「っちゅぱ…♥
と…でも…っ
濃いですぅ♥」
「まったく笑
スケベだなぁ郁美は。
俺の精液と自分の母乳は
美味いかぁ？笑」
「…ちゅぱ…はい…
甘くて…とろとろで…
美味しいですぅ…♥」
「あぁ…また勃起してきた。
郁美の身体を見てるだけで
すぐ勃起しちまうぜ」
「もっと可愛がってくだしゃい…♥」
「よし、ベッドの上で四つん這いになれ」


郁美を四つん這いにさせるとアナルから悪臭が漂った。
「さっきから臭いと思ったらケツにこんなに糞を溜めていたのか笑」
「うぅ…妊娠してから便秘になりやすくなっちゃいましたぁ♥」
「カチカチに詰まってて踏ん張ってても排便するのが大変そうだな」
「うう…はい…♥」


「よーし！郁美の大好きなアレやってやるよ笑」
「アレって…あの…もしかして…？」
ぞくっ
「決まってんだろ。フィストだよ、フィスト笑
郁美のうんちを掴み出してやるよ」
「ああああぁ♥ドキドキしちゃいますぅ♥」



俺の腕が郁美のアナルへ
一気に挿入されていく。
「…挿入！」
ズポッ
「…んぐおおっ♥」



「あん…あぁぁ♥
ご主人様の腕が
入ってくるぅぅぅ♥」
「俺の腕をぎゅーって
締め付けてくるなぁ笑」
ぶる
「はぁ…はぁんぁ…
あんあんぁ♥」
「郁美のアナルをほじるのは
楽しいな〜つくはは笑」


「さーてと…！うんちはどこかな〜」
俺は腕アナルの中で腕をかき回し郁美のうんちを集めていく。
「これえ好ぎいい♥お腹…ああイくっ…っ♥」


「郁美はこれが大好きだもんな〜笑」
「…おっ…おっ…♥お腹かき回されて苦しいけど感じちゃう♥もっと…もっとお♥」
「ぬるぬるして気持ちがいいぞお！もっとかき回してやるぜ」



「おらよ！」
「…んごぉ♥」
「糞を掻き出すの楽しいぜぇ～笑」
「…もぉお尻い…限界ですぅう♥」


「おぢりいい…ぅ♥深っ…んぐぅぅ♥おっおっおっ♥」
「息があがってきたな。アナルがぎゅーって収縮しだしたぞ笑」
「…あぁ…んぐぁ♥お尻イっちゃうぅぅ♥」
「ケツイキくるか～」


「すげぇ量だぞぉ！一気に掴み出してやるからなぁ！」
「…お腹ぁ…ぎもぢいい…っ♥ああああああああ♥」
「うんち出るぞお！脱糞アクメしろよお…お！」



「んごおおお♥
うんち出たぁ」
「おおら！」
ぶる
郁美のアナルから
特大のうんちが
掴み出された。


「あはは！
こりゃまるで
赤ん坊サイズだな」
「…あっ…あぁん♥
ご主人様のおかげで
立派なうんちが…
出せましたぁ♥」
「よーし…
ホカホカのケツまんこに
ちんぽ突っ込んでやる」
「…ひやぁい…♥
おちんぽくださいい♥」


俺は郁美を押し倒し片足を持ち上げた。
「あぁん♥」
「グロまんとガバアナルが開いて興奮する光景だぜ」



「ほら、郁美。ちんぽにおならをかけろ!」
「はい…♥んぐぅう…♥」
郁美の放屁が俺のちんぽを刺激する。
「あぁ臭せぇ笑 郁美のおならはちんぽにくるぜぇ」


「ご主人様のおちんぽぉ
そそり立ってきましたぁ♥」
「おら！ケツに
集中しろよ～！」
「はいぃぃ…
お尻…きてぇ♥」
「けつまんこに
ぶち込むぞおお！」


「おらっ！」
「おぢりぃ♥」
アナルにちんぽが挿入されると郁美は乳首から母乳を撒き散らした。



「あぁぁ気持ちぃ！郁美のケツ穴気持ちいいぞお」
「あっぁん♥ケツ穴突かれてイってますぅ♥」
「おらおらおら！腰が勝手に動いちまうぜぇ！」
「そこぅ…あぁ♥入口のとこぅ…っ気持ぢぃいいぃ♥」


「気持ちいいな～
郁美との変態セックス！」
「私もご主人様との
変態セックス…っ
気持ちいですぅ♥」
郁美のアナルからは
イキ屁が漏れ出し
下品な音が響く。
「あんあんあぁ♥
アナル好きぃいい
けつまんこ好きぃ♥」
「あぁ～やべぇ
ちんぽに響くぜ笑」


「あぁ…イぐっ…あすごいのきちゃううう♥」
「あぁあ郁美いぃ！俺もイくぞお！一緒に絶頂だ！」
「あぁんんぁあ♥中出しして…えくだしゃいい♥」
「ボテ腹妊婦のけつまんこにぃ！中出しするぞおお！」


「郁美いいい！」
「んっぐあ♥」
郁美の身体が
びくんと跳ねあがり
孔内に俺の精液が
満たされていく。


「ご主人様のぉ…あったかい精液がいっぱあい♥」
「あぁ～出る…たっぷりと出たぞお…」
「…んぐう…♥お尻刺激されてぇ…奥のうんちが…下りてきちゃいましたぁ」
「うたく仕方ねぇな笑 このまま脱糞アクメしろ！」


郁美のアナルから
ちんぽを抜くと
糞便がどぼどぼと
噴き出した。
「うんちぃいい♥
あああ…あぁ
脱糞るううう♥」
「つくはは笑
脱糞アクメ
可愛いぞお〜」


「イッぐぅ♥」
郁美はうんちを漏らし身体を痙攣させた。
「郁美ぃ…お前は本当に素晴らしい肉便器だ」
「ひやぁい…♥ご主人…様ぁ…♥」


アナル開発
?週目


REC
00:37:12
……俺は設置したカメラの録画ボタンを押した。その画面には変わり果てた人妻・郁美の姿があった。
「ほら郁美、ちゃんと笑顔でピースしろ」
「はい、ご主人様ぁ♥」
「可愛く撮れてるぞお。郁美のアナルは素晴らしいガバ穴だな！」


「ありがとうございます♪
ご主人様に毎日毎日
ほぐほじしてもらって
閉じない穴に
なっちゃいましたぁ♥」
「こんな黒ずんでエグい穴…
旦那が見たら気絶するな笑」
「そんな…あの人には
内緒ですぅ……」


「郁美のアナルを愛せるのは俺だけだよ。さぁ下品に歌ってもらおうか」
「はい♥聞いてください、ご主人様♥」
そう言うと郁美は括約筋に力を入れ、アナルをくぱくぱと動かし始めた。
「アナルビーズの隙間から臭さい匂いが漏れてるぞぉ」



俺は我慢できずに
アナルビーズの取っ手を
一気に引っ張った。
「んあああ♥」
「うおお…っはは笑
肛門がすげえ開いてるな」
ズポッ



ずぼずぼと卑猥な音を鳴らし
規格外のアナルビーズが
引き抜かれていく。
「おぉんぐぉおお♥
アナルううう
イぐイぐうう♥」
「ケツが捲れあがってんな～
腸液漏らして気持ちいいか～」
「気持ちいい…♥
あぁあ…ケツ…ああ♥」
プス～～



アナルビーズが引き抜かれ…
黒ずんだガバ穴が姿を現した。
「あぁ…太いの出たぁあ♥
あぁ…おなら出ますぅ…！
ふんっ！ふんぐぅう♥」
「すぅ～はぁ～
あぁ～臭いぞぉお笑」
「いやん…そんな
くんくんしないでくださいい…♥」
あっ
ぶる
ぐぐ
モワ
プス～
ブッ♥


「放屁の音も普通じゃ聞けない音になったな。ほら、もっとケツで歌ってもらおうか」
「はいぃ…ふんんっ♥」
「あはは笑 呼吸してるみたいだな笑 奥まで丸見えだぞお」
「んんぁ…すぅすぅしますぅ…♥」



「ひやっ…ん♥」
郁美の腸内に
茶色い塊が顔を出した。
「おっと…この匂いは笑」
「ご主人様ぁ…
うんち…うんちを
排泄したいですぅ♥」
「すげぇ太そうなうんちだな。
よーし…ばっちり撮影してやるぞ」


「ふんぐううう♥」
郁美の肛門が盛り上がっていく。
「おら！もっと踏ん張れ！おならも！うんちも！すべてを垂れ流せ！」
「お尻が疼いちゃう…おならもうんちも我慢できない…」
「ケツイキしろ！」
「ケツイキくるッ♥」


「脱糞イぐうう♥」
ダムが決壊するように
郁美のケツ穴から
糞便がもりもりと噴出していく。
「すごいぞお郁美」


ベッドの上に糞の山ができていく。
「うんちぃぃ…気持ぢぃぃ♥
ご主人様ぁ…見てぇ…
うんちでイってますぅぅ♥」
「あぁバッチリ見てるぞお笑」
「郁美のお…
臭っさいガバアナルぅ
もっと見てぇぇ♥」
「こんなに太いうんちができるのは
郁美だけだぞ~笑」


「また…イぐうう♥」
「くく…もっともっと拡げてやるからな〜郁美…笑」
「ひやい…ご主人様ぁ…♥」
俺と郁美の拡張記はこれからも続きそうだ。


この作品はフィクションです。
実在の人物や団体などとは関係ありません。
CG
ノベル
人妻洗脳
アナル拡張記
～彼女の肛門が閉じなくなるまで～